

(主) 長野荒瀬原線（四ツ屋バイパス）建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

—飯綱町内—

にしよつや
西四ツ屋遺跡

おもてまち
表町遺跡

2009.3

長野県長野建設事務所
長野県埋蔵文化財センター



表町遺跡上空より西方を望む（左が飯綱山、中央戸隠山、右が黒姫山）



表町遺跡 列をなす縄文時代溝状陥し穴



表町遺跡 戦国時代井戸跡より出土した手馬鍬

はじめに

飯綱町は、平成 17 年 10 月 1 日、牟礼村と三水村が合併して生まれた新たな町です。今回発掘調査した西四ツ屋・表町の両遺跡は、その飯綱町のほぼ真ん中にあります。遺跡からは、北信五岳（飯綱山、戸隠山、黒姫山、妙高山、斑尾山）がすべて一望のもとに見渡すことができ、その迫力には圧倒されます。また遺跡の周囲には、リンゴや桃をはじめとする果樹園が広がっており、大地の恵みを間近で感じ取ることができます

飯綱町では、こうした豊かな自然を利用した人々が残した 144 の遺跡が確認されています。

自然がそうであるよう、埋蔵文化財も手をつけずに保存し、後世に伝えられることが理想的です。ただ、開発事業に伴い壊されてしまう埋蔵文化財があることも致し方なく、その際には、最大限の努力を図り、記録保存することが大切となります。

本書は、主要地方道長野荒瀬原線建設事業に伴い、平成 16 年から 19 年まで 4 カ年にわたって実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書です。

調査では、縄文時代、平安時代、さらに戦国時代から近世にかけての遺構・遺物を確認することができました。

特に表町遺跡からは、今から約 500 年前、山城の眼前に広がる戦国時代の集落跡がみつかりました。これは地元で古くから言い伝えられてきたことで、伝承どおりの集落発見は大きな成果となりました。

今回建設される道路は、地元の方々にとって、とても役立つこととなると思います。それとともに、今回の発掘調査で得られた成果も地域史解明の一助となり、同じく役立つものとなれば、この上ない喜びとなります。

最後になりましたが、発掘調査から本報告書の刊行にいたるまで、深いご理解とご協力をいただいた長野県長野建設事務所、飯綱町、飯綱町教育委員会などの関係機関、地元の地権者や関係者の方々、発掘・整理作業にご協力いただいた多くの方々に深甚なる謝意を申し上げます。

例 言

- 1 本報告書は、長野県長野建設事務所による地方道路交付金事業、主要地方道長野荒瀬原線建設に先立って行われた上水内郡飯綱町牟礼に所在する西四ツ屋遺跡・表町遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、長野県長野建設事務所の委託を受けた財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 遺跡の調査概要は、長野県埋蔵文化財センター刊行の『長野県埋蔵文化財センター年報』21・22・23・24で紹介しているが、本書の記述をもって本報告とする。
- 4 本書で使用した地図は、国土交通省国土地理院発行の地形図（1:25,000）、飯綱町都市計画基本図（1:2,500）をもとに作成した。
- 5 発掘調査にあたっては、以下の機関に業務委託もしくは協力を得た。
新日本航業（株）：西四ツ屋遺跡測量業務および航空写真撮影
（株）みすず総合コンサルタント：表町遺跡測量業務および航空写真撮影
パリオ・サーヴェイ（株）：西四ツ屋遺跡放射性炭素年代測定および樹種同定
（株）パレオ・ラボ：表町遺跡放射性炭素年代測定および樹種同定
（株）加速器分析研究所：表町遺跡放射性炭素年代測定
（株）京都科学：表町遺跡鉄製品応急保存処理
長野県立歴史館：西四ツ屋遺跡・表町遺跡金属製品X線撮影および保存処理
（有）アルケリサーチ：遺物写真の撮影、報告書編集
富士印刷（株）：報告書印刷・製本
- 6 本書で報告した遺跡の記録および出土遺物は、報告書刊行後に飯綱町教育委員会へ移管する。
- 7 発掘調査および報告書刊行にあたり、下記の方々、機関にご指導ご協力を頂いた。（敬称略）
飯村 均、板橋正幸、上野修一、内田正英、小野正敏、菅野修広、千葉博俊、小山丈夫、近藤洋一、近藤隆治、笹澤 浩、笹本正治、佐藤宏之、田代 隆、中村由克、原 明芳、藤沢良祐、藤巻正信、宮本長二郎、矢野恒雄、山田昌久、横山かよ子、飯綱町立飯綱病院、飯綱町教育委員会、いづな歴史ふれあい館、川越市教育委員会、財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター、尖石縄文考古館、栃木県立博物館、長野県立歴史館、登別市教育委員会
- 8 本書で使用した主な引用・参考文献は、巻末に一括した。
- 9 本書の執筆・編集・校正は中野亮一が行い、平林 彰調査部長・寺内隆夫調査第2課長が校閲した。

凡 例

- 1 遺跡名は、旧牟礼村教育委員会作成の遺跡一覧表に記載されている「西四ツ屋遺跡」、「表町遺跡」とした。
- 2 遺跡記号は、「西四ツ屋遺跡」を「MNY」、「表町遺跡」を「MOM」とした。1文字目は長野県内を9地区に分けた地区記号で飯綱町が該当する「M」、2・3文字目は遺跡をローマ字表記した「NISHIYOTSUYA」の「NY」と、「OMOTEMACHI」「OM」した。この記号は本遺跡

に関する図面、写真、遺物及びその整理箱等すべての資料で使用している。

3 遺構の記号は以下の通りである。

S B：竪穴住居址、竪穴状遺構 S T：掘立柱建物跡、礎石建物跡 S D：溝跡
S K：土坑、陥し穴、井戸跡 S F：火床 S H：集石 S Q：土器集中遺構
P：竪穴住居跡や掘立柱建物跡などの柱穴

4 遺構番号は、時代等に関わらず種類ごと、検出順に付けた。混乱を避けるため、一旦付けたものは、原則として遺構記号・遺構番号の変更はしていない。このため番号に欠番がある。

5 本書に掲載した遺構図、遺物図の縮尺は、原則として以下の通りである。その他の場合は、図版中のスケールを参照していただきたい。

竪穴住居跡 1：60 掘立柱建物跡 1：60 井戸跡 1：60 竪穴状遺構 1：60
土坑（陥し穴） 1：60 土坑（その他） 1：40 カマド図 1：30
土器・土製品実測図 1：4 縄文土器拓本・実測図 1：2
石器実測図 石鏃 2：3 打製石斧・削器・剥片・石刃 1：2
石製品実測図 石臼・茶臼・石鉢・凹石・五輪塔 1：6 砥石 1：3
木製品実測図 そり・臼 1：6 漆椀・鍬・曲物・杭 1：4
金属製品実測図 釘・キセル 1：2 銭 1：1

6 実測図中のスクリーンは、特に断りのある場合を除いて、以下の事項を表している。

①遺構実測図 火床および被熱痕跡=  焼土堆積または分布範囲=  柱痕跡= 

②遺物実測図 縄文時代石器 磨耗面=  欠損および剥落部= 

古代土器 断面

内黒土器内面=  須恵器=  軟質須恵器=  灰釉陶器= 

7 遺物写真は、おおむね遺物実測図縮尺を基本とする。

8 遺跡の位置や各種平面図の座標は、世界測地系に則っている。

9 基本土層および遺構覆土の色調は、『新版 標準土色帖』による。

10 遺構についての本文および一覧表の記述は、以下のように統一してあり、ここで扱っていないものについては、各文中で説明してある。

ア 竪穴住居跡

① 主軸は、カマドを有する壁の中軸線をあて、それと直交する中軸線を直交軸とした。カマドのみられないものについては、東西方向の中軸線を主軸とした。

② 竪穴住居跡の面積は、床面積を表し、主軸と直交軸方向で住居跡下端線の距離を測り、その積により求めた。

イ 掘立柱建物跡

① 規模は、柱痕跡、掘方の芯々間の距離を基本として推定復元し、面積は両者の積により求めた。

② 柱間数は、柱間寸法とは関係なく、単に柱間の数を表示した。

③ 柱間寸法は、柱痕跡、掘方の芯々間の距離を求め、最大と最小値について表示した。

④ 掘方では、平面形では方形、円形に分類し、「方」「円」と表記し、両者混在するものは「方・円」とした。規模については、長軸の最大値と最小値を表示した。

11 本書付録 CD に、本文 .pdf、遺構全体図、遺構一覧表、遺物観察表、科学分析結果を収録した。

12 本文および表中に示した遺物のNo.は、本報告書掲載にあたり付した図版No.である。

目 次

巻頭カラー

はじめに

例 言

凡 例

目 次

第1章 調査の経過と方法	1
第1節 保護協議から本調査に至る経過	1
1 保護協議	1
2 発掘届と発掘の指示	1
3 受委託契約	2
第2節 調査の経過	3
1 体 制	3
(1) 平成16(2004)年度 (2) 平成17(2005)年度 (3) 平成18(2006)年度 (4) 平成19(2007)年度 (5) 平成20(2008)年度	
2 発掘作業の経過	4
3 整理作業の経過	4
4 調査日誌抄	5
第3節 調査の方法	8
1 発掘作業の方法	8
(1) 遺構検出 (2) 遺構精査 (3) 記 録	
2 整理作業の方法	10
(1) 調査時点および同年度の整理 (2) 報告書作成にかかわる整理	
3 普及公開	12
第2章 遺跡の環境	13
第1節 地理的環境	13
第2節 歴史的環境	15
1 遺跡周辺の歴史的環境	15
(1) 旧石器～縄文時代 (2) 平安時代 (3) 中 世	
2 遺跡内に存在した「オシャゴンジ」	19
第3章 西四ツ屋遺跡	20
第1節 遺跡および調査の概要	20
1 遺跡の概要	20
2 調査の概要	21
3 堆積状況と検出面	24
第2節 遺構と遺物	25
1 概 要	25
2 縄文時代	26
(1) 遺 物 石 器	

3	平安時代～近世	26
(1)	遺構 イ 竪穴住居跡 ロ 掘立柱建物跡 ハ 溝跡 ニ 土坑	
(2)	遺物 イ 土器 ロ 金属製品	
第3節	小結	37
第4章	表町遺跡	38
第1節	遺跡および調査の概要	38
1	遺跡の概要	38
2	調査の概要	39
3	堆積状況と検出面	40
第2節	遺構と遺物	42
1	概要	42
2	縄文時代	42
(1)	遺構	
(2)	遺物 イ 土器 ロ 石器	
3	平安時代	76
(1)	遺構 イ 竪穴住居跡 ロ 掘立柱建物跡 ハ 土器集中遺構 ニ 焼土坑 ホ 土坑	
(2)	遺物 土器・陶器	
4	戦国時代	115
(1)	遺構 イ 掘立柱建物跡 ロ 竪穴状遺構 ハ 井戸跡 ニ 溝跡 ホ 土坑	
(2)	遺物 イ 土器・陶磁器・土製品 ロ 石製品 ハ 木製品 ニ 金属製品 ホ 鍛冶関連遺物	
5	近世	172
(1)	遺構 イ 掘立柱建物跡 ロ 土坑 ハ オシャゴンジ跡の調査	
(2)	遺物 イ 陶磁器 ロ 金属製品	
第3節	小結	177
1	縄文時代の陥し穴について	177
2	平安時代前期の集落について	179
3	戦国時代の集落について	181
第5章	科学分析	183
1	放射性炭素年代（AMS）測定分析	183
2	樹種同定分析	185
第6章	総括	186

引用・参考文献

表町遺跡 遺構全体図

写真図版

報告書抄録

奥付

挿図目次

第 1 図	グリッド設定図	9	第 39 図	陥し穴（縄文）I 群 D	65
第 2 図	遺跡位置図	13	第 40 図	陥し穴（縄文）II 群 E	66
第 3 図	遺跡周辺の地質図	14	第 41 図	陥し穴（縄文）II 群 F	67
第 4 図	周辺遺跡分布図 （縄文・平安・中世関係のみ）	16	第 42 図	陥し穴（縄文）II 群 F・G	68
第 5 図	遺跡周辺図	20	第 43 図	陥し穴（縄文）II 群 G・H	69
第 6 図	調査区設定図	21	第 44 図	陥し穴（縄文）II 群 H・I III 群	70
第 7 図	西四ツ屋遺跡遺構全体図①	22	第 45 図	土器・石器（縄文）	72
第 8 図	西四ツ屋遺跡遺構全体図②	23	第 46 図	石器（縄文）	73
第 9 図	基本土層図	25	第 47 図	表町遺跡 遺構全体図（割図）	77
第 10 図	石器（縄文）	26	第 48 図	表町遺跡 平安時代遺構全体図① （SB・ST）	78
第 11 図	1 号竪穴住居跡	27	第 49 図	表町遺跡 平安時代遺構全体図② （SB・ST・SF・SQ・SK1061）	79
第 12 図	1 号・2 号掘立柱建物跡	29	第 50 図	表町遺跡 平安時代遺構全体図③	80
第 13 図	3 号溝跡・46 号土坑	31	第 51 図	表町遺跡 平安時代遺構全体図④ （SB）	81
第 14 図	1 号竪穴住居跡出土土器（平安）	33	第 52 図	表町遺跡 平安時代遺構全体図⑤	82
第 15 図	1 号竪穴住居跡・S B 以外出土土器・ 銭貨（平安・中世・近世）	35	第 53 図	1 号・3 号竪穴住居跡	83
第 16 図	遺跡周辺図	38	第 54 図	4 号竪穴住居跡・同カマド	85
第 17 図	調査区設定図と基本土層図	39	第 55 図	5 号・6 号竪穴住居跡	87
第 18 図	I 群陥し穴における A～D 分類 規模分布図	42	第 56 図	7 号・8 号・9 号竪穴住居跡	89
第 19 図	表町遺跡 遺構全体図（割図）	44	第 57 図	10 号竪穴住居跡	91
第 20 図	表町遺跡 縄文時代遺構全体図①	45	第 58 図	12 号掘立柱建物跡①	93
第 21 図	表町遺跡 縄文時代遺構全体図②	46	第 59 図	12 号掘立柱建物跡②	94
第 22 図	表町遺跡 縄文時代遺構全体図③	47	第 60 図	18 号掘立柱建物跡	95
第 23 図	表町遺跡 縄文時代遺構全体図④	48	第 61 図	19 号・20 号掘立柱建物跡	96
第 24 図	表町遺跡 縄文時代遺構全体図⑤	49	第 62 図	21 号・22 号・23 号掘立柱建物跡	97
第 25 図	陥し穴（縄文）I 群 A	51	第 63 図	24 号掘立柱建物跡	98
第 26 図	陥し穴（縄文）I 群 A	52	第 64 図	25 号・26 号・28 号掘立柱建物跡	99
第 27 図	陥し穴（縄文）I 群 A	53	第 65 図	27 号掘立柱建物跡	100
第 28 図	陥し穴（縄文）I 群 A	54	第 66 図	29 号掘立柱建物跡	101
第 29 図	陥し穴（縄文）I 群 A・B	55	第 67 図	30 号掘立柱建物跡①	102
第 30 図	陥し穴（縄文）I 群 B	56	第 68 図	30 号②・31 号掘立柱建物跡	103
第 31 図	陥し穴（縄文）I 群 B	57	第 69 図	1 号土器集中遺構	104
第 32 図	陥し穴（縄文）I 群 B・C	58	第 70 図	1 号焼土坑・1061 号土坑	105
第 33 図	陥し穴（縄文）I 群 C	59	第 71 図	表町遺跡 平安時代土器・陶器組成	106
第 34 図	陥し穴（縄文）I 群 C	60	第 72 図	1 号・3 号竪穴住居跡出土土器（平安）	108
第 35 図	陥し穴（縄文）I 群 C	61	第 73 図	4 号・5 号・6 号竪穴住居跡出土土器 （平安）	109
第 36 図	陥し穴（縄文）I 群 D	62	第 74 図	7 号・8 号・9 号竪穴住居跡出土土器 （平安）	111
第 37 図	陥し穴（縄文）I 群 D	63			
第 38 図	陥し穴（縄文）I 群 D	64			

第 75 図	9号・10号竪穴住居跡出土土器(平安) …	112	第 99 図	2号竪穴状遺構 ……………	139
第 76 図	土器集中遺構・掘立柱建物跡・土坑出土 土器(平安) ……………	113	第100図	井戸跡① ……………	143
第 77 図	土坑・溝跡・遺構外出土土器(平安)	114	第101図	井戸跡② ……………	144
第 78 図	表町遺跡 遺構全体図(割図) ……………	116	第102図	井戸跡③ ……………	145
第 79 図	表町遺跡 戦国時代・近世遺構全体図① (ST・SD・井戸跡・竪穴状遺構・ 大型SK・近世SK) ……………	117	第103図	井戸跡④ ……………	146
第 80 図	表町遺跡 戦国時代・近世遺構全体図② (ST・SD・井戸跡・大型SK) ……………	118	第104図	2号・3号溝跡 ……………	147
第 81 図	表町遺跡 戦国時代・近世遺構全体図③ (ST・SD・井戸跡・大型SK・近世SK) …	119	第105図	21号溝跡 ……………	149
第 82 図	表町遺跡 戦国時代・近世遺構全体図④ (ST・SD・井戸跡) ……………	120	第106図	16号土坑 ……………	150
第 83 図	表町遺跡 戦国時代・近世遺構全体図⑤ (ST・SD・井戸跡) ……………	121	第107図	戦国時代大型方形土坑 ……………	151
第 84 図	1号掘立柱建物跡 ……………	122	第108図	戦国時代土器・陶磁器組成 ……………	152
第 85 図	2号・3号掘立柱建物跡 ……………	123	第109図	竪穴状遺構・大型方形土坑・井戸跡 出土土器(戦国) ……………	154
第 86 図	4号・5号掘立柱建物跡 ……………	124	第110図	井戸跡出土土器(戦国) ……………	155
第 87 図	6号・8号掘立柱建物跡 ……………	125	第111図	溝跡出土土器(戦国) ……………	156
第 88 図	7号掘立柱建物跡 ……………	126	第112図	溝跡・土坑出土土器(戦国) ……………	157
第 89 図	9号・10号掘立柱建物跡 ……………	127	第113図	遺構外出土土器(戦国) ……………	158
第 90 図	11号掘立柱建物跡 ……………	128	第114図	石製品①(戦国) ……………	160
第 91 図	15号掘立柱建物跡 ……………	129	第115図	石製品②(戦国) ……………	161
第 92 図	13号掘立柱建物跡 ……………	130	第116図	石製品③(戦国) ……………	162
第 93 図	14号・16号掘立柱建物跡 ……………	131	第117図	石製品④(戦国) ……………	163
第 94 図	32号・33号掘立柱建物跡 ……………	132	第118図	石製品⑤(戦国) ……………	165
第 95 図	34号・37号掘立柱建物跡 ……………	133	第119図	石製品⑥(戦国・時期不明) ……………	166
第 96 図	35号・36号掘立柱建物跡 ……………	134	第120図	木製品①(戦国) ……………	167
第 97 図	38号・41号掘立柱建物跡 ……………	135	第121図	木製品②(戦国) ……………	169
第 98 図	39号・40号掘立柱建物跡 ……………	136	第122図	木製品③(戦国) ……………	171
			第123図	金属製品・羽口(戦国) ……………	173
			第124図	17号・42号掘立柱建物跡 ……………	174
			第125図	1599号土坑 ……………	175
			第126図	金属製品(近世) ……………	176
			第127図	表町遺跡 遺構全体図(割図) ……………	189
			第128～143図	表町遺跡 遺構全体図①～⑯ …	190～205

挿表目次

第 1 表	周辺遺跡一覧表 ……………	17	第 5 表	戦国時代 掘立柱建物跡(ST) 一覧表 …	137
第 2 表	陥し穴一覧表 ……………	74・75	第 6 表	戦国時代 井戸跡一覧表 ……………	140・141
第 3 表	竪穴住居跡(SB) 一覧表 ……………	90	第 7 表	年代測定分析試料と結果 ……………	183
第 4 表	平安時代 掘立柱建物跡(ST) 一覧表 …	100	第 8 表	樹種同定分析試料と結果 ……………	185

写真目次

巻頭 1	遺跡上空より西方を望む	西四ツ屋遺跡 遺構
巻頭 2	表町遺跡 列をなす縄文時代溝状陥し穴 戦国時代井戸跡より出土した手馬鍬	P L 1 遺跡遠景、3区全景 P L 2 竪穴住居跡(平安)、掘立柱建物跡・溝跡・ 土坑(平安～近世)

表町遺跡 遺構	表町遺跡 遺物
P L 3 竪穴住居跡 (平安)	P L 1 9 土器・石器 (縄文)
P L 4 竪穴住居跡 (平安)、掘立柱建物跡 (戦国)	P L 2 0 石器 (縄文・旧石器)
P L 5 2区井戸跡と建物群 (戦国)、掘立柱建物跡 (平安・戦国)、井戸跡 (戦国)	P L 2 1 竪穴住居跡出土土器 (平安)
P L 6 井戸跡 (戦国)	P L 2 2 竪穴住居跡出土土器 (平安)
P L 7 井戸跡 (戦国)	P L 2 3 竪穴住居跡・土器集中遺構・掘立柱建物跡・土坑・溝跡・遺構外出土土器 (平安)
P L 8 井戸跡・竪穴状遺構・大型方形土坑 (戦国)	P L 2 4 竪穴状遺構・大型方形土坑・井戸跡出土土器・陶磁器 (戦国)
P L 9 大型方形土坑 (戦国)・陥し穴 (縄文) I群	P L 2 5 溝跡出土土器・陶磁器・土製品 (戦国)
P L 1 0 陥し穴 (縄文) I群	P L 2 6 溝跡・土坑・遺構外出土土器・陶磁器 (戦国)
P L 1 1 陥し穴 (縄文) I群	P L 2 7 石製品〔石臼〕 (戦国)
P L 1 2 陥し穴 (縄文) I群・II群	P L 2 8 石製品〔石臼・茶臼〕 (戦国)
P L 1 3 陥し穴 (縄文) II群	P L 2 9 石製品〔石鉢・砥石〕 (戦国)
P L 1 4 陥し穴 (縄文) II群	P L 3 0 石製品〔凹石・石錘・五輪塔〕 (戦国)、〔多孔石〕 (時期不明)
P L 1 5 溝跡 (戦国・近世)	P L 3 1 木製品〔漆椀・曲物・手馬鍬・製材・杭〕 (戦国)
P L 1 6 土器集中遺構・焼土坑・土坑 (平安)・土坑 (戦国・近世)	P L 3 2 木製品〔臼・そり〕 (戦国)
西四ツ屋遺跡 遺物	P L 3 3 金属製品・羽口・鍛冶滓 (戦国)
P L 1 7 石器 (縄文)、竪穴住居跡出土土器 (平安)	P L 3 4 陶磁器・金属製品 (近世)
P L 1 8 竪穴住居跡・SB以外出土土器・銭貨 (平安・中世・近世)	

添付 CD 収録データ一覧

- 1 西四ツ屋遺跡・表町遺跡発掘調査報告書 .pdf
- 2 遺構関係フォルダ
 - ・西四ツ屋・表町 竪穴住居跡一覧表 .xls
 - ・西四ツ屋・表町 掘立柱建物跡一覧表 .xls
 - ・西四ツ屋・表町 溝跡一覧表 .xls
 - ・西四ツ屋 土坑一覧表 .xls
 - ・表町 土坑一覧表 .xls
 - ・表町 縄文陥し穴一覧表 .xls
 - ・表町 井戸跡一覧表 .xls
- 3 遺物関係フォルダ
 - ・西四ツ屋・表町 土器観察表 .xls
 - ・西四ツ屋・表町 縄文石器観察表 .xls
 - ・西四ツ屋・表町 金属製品観察表 .xls
 - ・表町 戦国石製品観察表 .xls
 - ・表町 戦国木製品観察表 .xls
 - ・西四ツ屋・表町 竪穴住居跡別出土土器組成表 .xls
- 4 科学分析フォルダ
 - ・平成 16 (2004) 年度 西四ツ屋 年代測定・樹種同定
 - ・平成 17 (2005) 年度 表町 年代測定・樹種同定
 - ・平成 18 (2006) 年度 表町 年代測定その 1
 - ・平成 18 (2006) 年度 表町 年代測定その 2
 - ・平成 19 (2007) 年度 表町 年代測定
- 5 表町遺跡遺構全体図 .pdf

第1章 調査の経過と方法

第1節 保護協議から本調査に至る経過

1 保護協議

平成10年、長野県教育委員会（以下県教委）が長野県長野建設事務所（以下長建）に対して行った公共事業照会に対して、長建は主要地方道長野荒瀬原線建設事業を計画している旨の回答を行った。この回答に対して、旧牟礼村教育委員会（現飯綱町教育委員会）は、当該事業地内に周知の埋蔵文化財包蔵地（西四ツ屋遺跡・表町遺跡・矢筒城館跡）があるため、その保護措置について県教委を交えて協議を希望する旨の意見を寄せてきた。これを受けて、平成10年9月8日、県教委は長建に対して、保護協議の申し入れを行い、同年10月より協議が開始された。

平成15年12月11日、県教委、長建、旧牟礼村教育委員会（以下旧牟礼村教委）、長野県埋蔵文化財センター（以下県埋文センター）の四者による保護協議を行い、次の事項が確認された。

- ・ 事業の公共性から判断して、遺跡の記録保存を行う。
- ・ 西四ツ屋遺跡の発掘調査は、長建が県埋文センターへ委託して行う。
- ・ 西四ツ屋遺跡の調査対象面積は、7,000㎡とする。
- ・ 先線事業地内の表町遺跡等の保護協議については、事業の進捗にあわせて行っていく。

その後、先線部分の事業進捗に伴い、平成16年12月7日・平成17年11月18日に県教委、長建、旧牟礼村教委、県埋文センターの四者による保護協議を行い、次の事項が確認された。

- ・ 表町遺跡の発掘調査は、長建が県埋文センターに委託して行う。
- ・ 表町遺跡の調査対象面積は、本線部分11,400㎡と隣接する土取り場部分4,000㎡をあわせた合計15,400㎡とする。
- ・ 当初保護措置の対象とされた矢筒城館跡については、設計変更により事業地からはずれたため、保護措置の必要はない。
- ・ 発掘調査報告書は、長野荒瀬原線関連をまとめて発刊することとし、発刊年度は先線の事業進捗状況をみながら協議する。

2 発掘届と発掘の指示

西四ツ屋遺跡については、平成16年4月19日付16長建第75号で、文化財保護法第57条の2に基づく周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について、長建所長から県教委教育長あてに通知が送付された。これを受け、県教委教育長は、同年5月11日付16教文第18-9号により、記録作成のための発掘調査を県埋文センターに委託の上実施する旨の通知を長建所長に対して行った。県埋文センターでは平成16年7月16日付16長埋第55号で県教育委員会あてに文化財保護法第92条に基づく発掘届を提出し、同年7月27日付16教文第4-16号により教育長から調査許可を受けた。

表町遺跡については、平成17年6月27日付17長建第165号で、長建所長から県教委教育長職務代理者あてに通知が送付された。これを受け、県教委教育長職務代理者は、同年7月21日付17教文第18-52号により、記録作成のための発掘調査を県埋文センターに委託の上実施する旨の通知を長建所長に対して行った。県埋文センターでは平成17年7月12日付17長埋第12-15号で県教育委員会あてに文化財保護法第92条に基づく発掘届を提出し、同年7月26日付17教文第4-15号により教育長から調査

許可を受けた。

翌年、翌々年についても、下記の内容で県教委あてに文化財保護法第92条に基づく発掘届を提出し、教育長から調査許可を受けた。

- ・平成18年度 発掘届：平成18年3月24日付 17長埋第12-20号
調査許可：平成18年4月6日付 18教文第4-1号
- ・平成19年度 発掘届：平成19年3月14日付 18長埋1-22号
調査許可：平成19年3月27日付 18教文第4-40号

3 受委託契約

長野県長野建設事務所と長野県埋蔵文化財センターとの契約内容は次の通りである。

- | | | |
|--------|---------|--|
| 西四ツ屋遺跡 | ・平成16年度 | 内 容：発掘作業・基礎整理作業
期 間：平成16年8月2日～平成17年3月18日
委託料：21,657,000円 |
| | ・平成17年度 | 内 容：本格整理作業
期 間：平成17年5月2日～平成18年3月20日
委託料：6,085,000円 |
| 表町遺跡 | ・平成17年度 | 内 容：発掘作業・基礎整理作業
期 間：平成17年8月1日～平成18年3月18日
委託料：22,047,000円 |
| | ・平成18年度 | 内 容：発掘作業・基礎整理作業
期 間：平成18年3月2日～平成19年3月20日
委託料：41,224,000円 |
| | ・平成19年度 | 内 容：発掘作業・基礎整理作業・本格整理作業
期 間：平成19年3月20日～平成20年3月19日
委託料：23,486,000円 |
| | ・平成20年度 | 内 容：本格整理作業
期 間：平成20年6月1日～平成21年3月27日
委託料：15,041,000円 |

第2節 調査の経過

1 体制

調査の体制と期間、面積は次の通りである。

(1) 平成16(2004)年度

- ・ 調査内容：西四ツ屋遺跡 発掘作業、基礎整理作業
- ・ 体制：所長：小沢将夫 副所長：藤岡俊文 管理部長補佐：上原 貞 調査部長：市澤英利
調査第1課長：廣瀬昭弘 調査研究員：中野亮一、入沢昌基、山崎まゆみ
発掘補助員：寺島尊夫、小林清一、野村善和、田中エツ、岡田孝幸、富岡鹿子、
柳沢まち子、石田ヒデ
整理補助員：加藤周子、黒岩美恵、小林英子、日向富美子、宮本淳江、矢島美雪

- ・ 発掘作業期間：平成16年8月2日～11月30日
- ・ 基礎整理作業期間：平成16年12月1日～平成17年3月18日
- ・ 調査対象面積：西四ツ屋遺跡 7,000 m² (発掘作業・基礎整理作業)

(2) 平成17(2005)年度

- ・ 調査内容：表町遺跡 発掘作業、基礎整理作業
西四ツ屋遺跡 本格整理作業
- ・ 体制：所長：仁科松男 副所長：根岸誠司 管理部長補佐：上原 貞 調査部長：市澤英利
調査第1課長：廣瀬昭弘 調査研究員：中野亮一、入沢昌基
発掘補助員：寺島尊夫、小林清一、野村善和、田中エツ、富岡鹿子、柳沢まち子、
鈴木千秋、松木武、松木たつ子、松木孝拓、野村知美、岡村文雄、堀川善秋
整理補助員：井原真弓、加藤周子、坂田恵美子、矢島美雪、窪田順、白田知子、半田順子、
浅井とし子、石田多美子、市川ちづ子

- ・ 発掘作業期間：平成17年8月1日～12月9日
- ・ 基礎整理作業期間：平成17年12月12日～平成18年3月18日
- ・ 本格整理作業期間：平成17年5月2日～平成18年3月20日
- ・ 調査対象面積：表町遺跡 6,000 m² (発掘作業・基礎整理作業)
西四ツ屋遺跡 7,000 m² (本格整理作業)

(3) 平成18(2006)年度

- ・ 調査内容：表町遺跡 発掘作業、基礎整理作業
- ・ 体制：所長：仁科松男 副所長：根岸誠司 調査部長：市澤英利
調査第2課長：平林彰 調査研究員：中野亮一、山崎まゆみ
発掘補助員：寺島尊夫、小林清一、野村善和、田中エツ、富岡鹿子、柳沢まち子、
鈴木千秋、松木武、松木たつ子、松木孝拓、岡村文雄
整理補助員：田中邦男、坂田恵美子、矢島美雪、日向富美子

- ・ 発掘作業期間：平成18年4月26日～11月30日
- ・ 基礎作業期間：平成18年12月1日～平成19年3月20日
- ・ 調査対象面積：表町遺跡 5,200 m² (発掘作業・基礎整理作業)

(4) 平成19(2007)年度

第1章 調査の経緯と方法

- ・ 調査内容：表町遺跡 発掘作業、基礎整理作業、本格整理作業
- ・ 体制：所長：仁科松男 副所長：根岸誠司 調査部長：平林彰
調査第1課長：上田典男 調査研究員：中野亮一、大澤泰智
発掘補助員：寺島尊夫、小林清一、野村善和、富岡鹿子、柳沢まち子、鈴木千秋、松木武、
松木たつ子、松木孝拓、岡村文雄、金丸真由美
整理補助員：矢島美雪、日向富美子、小林知子、柳原澄子、西村はるみ、窪田順、阿部高子、
中村智恵子、塩野入菜奈美、市川ちず子
- ・ 発掘作業期間：平成19年4月9日～6月29日
- ・ 基礎整理作業期間：平成19年7月2日～平成19年9月21日
- ・ 本格整理作業期間：平成19年9月25日～平成20年3月19日
- ・ 調査対象面積：表町遺跡 4,200 m²(発掘作業・基礎整理作業)
同 15,400 m²(本格整理作業)

(5) 平成20(2008)年度

- ・ 調査内容：西四ツ屋遺跡・表町遺跡 本格整理作業
- ・ 体制：所長：仁科松男 副所長：丑山修一 調査部長：平林彰
調査第2課長：寺内隆夫 調査研究員：中野亮一
整理補助員：中村智恵子、窪田順、阿部高子、山下千幸、市川ちず子、日向富美子
- ・ 本格整理作業期間：平成20年6月1日～平成21年3月27日
- ・ 調査対象面積：西四ツ屋遺跡 7,000 m² (本格整理作業)
表町遺跡 15,400 m² (本格整理作業)

2 発掘作業の経過

発掘作業は、用地買収の終了した場所から着手することとなり、特に表町遺跡は、いくつかの地区に分けての調査を余儀なくされた。そのため、調査期間は平成16(2004)年から19(2007)年まで、4年間継続することになった。

また、平成16(2004)年度には、包蔵地とはなっていないが、地形的に類似する西四ツ屋・表町両遺跡の中間に位置する村道との交差部分について、長建・旧牟礼村教委・県教委と協議の上、確認調査を行った。結果は、遺物・遺構はみつからず、調査の必要なしと判断した。

3章・4章で遺跡ごとの調査状況を述べるが、概要は次の通りである。

平成16年度：西四ツ屋遺跡本調査

西四ツ屋・表町両遺跡中間の村道との交差部分確認調査

平成17年度：表町遺跡1区、2区、3a区、3c区本調査

平成18年度：表町遺跡3b区、4区、5区本調査

平成19年度：表町遺跡6区本調査

3 整理作業の経過

遺物の洗浄は雨天時などを利用して、発掘現場で行った。遺物台帳の作成や遺物の注記、写真アルバムの整理など、基礎的な整理作業は各調査年度の冬期間を利用して行った。報告書に向けた本格的な整理作業は、西四ツ屋遺跡は平成17(2005)年度、表町遺跡は平成19(2007)、20(2008)年度に行い、両遺跡をあわせた報告書の編集刊行は平成20(2008)年度に行った。

4 調査日誌抄

平成 16（2004）年度

《西四ツ屋遺跡》

平成 16 年

- 8 月 11 日 重機を投入し、プレハブ・駐車場用地整地。
- 8 月 17 日 遺跡最南部の 1 区より、重機によるトレンチ調査開始。プレハブ・仮設トイレ設置。
- 8 月 18 日 2 区重機による表土剥ぎ開始。
- 8 月 19 日 発掘開始式。発掘補助員雇用開始。
- 8 月 20 日 1 区トレンチにて遺構確認、部分的な面的調査必要と判断。
- 8 月 26 日 3 区トレンチにて焼土・炭化物検出。この付近で土器片集中出土することから住居跡と判断。
部分的な面的調査が必要と判断。
- 8 月 31 日 1 区重機による表土剥ぎ開始。
- 9 月 13 日 仮設電気・水道設置。
- 9 月 16 日 長建・旧牟礼村教委・県教委と協議。西四ツ屋遺跡先線の村道との交差部分について、県埋文センターで試掘調査実施確認。
- 9 月 21 日 3 区表土剥ぎ開始。
- 10 月 7 日 1 区調査終了、土坑・溝など確認。
- 11 月 1 日 先線の村道との交差部分試掘調査。遺構・遺物なし。調査の必要なしと判断。
- 11 月 13 日 航空写真撮影実施。
- 11 月 16 日 2 区 旧石器確認調査。遺物なし。これまでの状況とあわせ、旧石器時代の遺構・遺物は存在しないと判断。
- 11 月 17 日 2 区・3 区調査終了。平安竪穴住居跡 1 軒、その他掘立柱建物跡・土坑など確認。
- 11 月 19 日 発掘終了式、発掘補助員雇用終了。
- 11 月 25 日 重機による埋め戻し、安全対策実施。
- 11 月 29 日 機材撤収
- 11 月 30 日 プレハブ・仮設トイレ撤去、現場作業終了。
- 12 月～平成 17 年 3 月 平成 16 年度分の基礎整理を行う。



作業風景



先線試掘風景



旧石器確認調査

平成 17（2005）年度

《西四ツ屋遺跡》

平成 17 年

- 5 月～平成 18 年 3 月 本格整理作業。遺物の接合・複元、遺物の実測、遺構図のトレース、報告書原稿執筆など行う。

《表町遺跡》

平成 17 年

- 8 月 17 日 重機を投入し、プレハブ・駐車場用地整地。
- 8 月 18 日 遺跡最南部の 1 区より、重機によるトレンチ調査、表土剥ぎ開始。
- 8 月 19 日 プレハブ・仮設トイレ設置。機材搬入。



重機トレンチ作業

第1章 調査の経緯と方法

- 8月22日 発掘開始式。発掘補助員雇用開始。2区重機による表土剥ぎ開始。
- 9月15日 飯綱中学校生徒発掘体験。
- 9月16日 井戸跡より最初の木製品(鋏)出土。以後、井戸跡から曲物・白・そりなどの木製品みつかると。
- 10月21日 1回目の航空写真撮影実施。
- 10月27日 3区調査開始。
- 10月29日 現地説明会実施。来訪者72名。
- 11月7日 2区調査終了。平安竪穴住居跡1軒、戦国時代井戸跡・土坑多数確認。
- 11月11日 プレハブ移設。2区埋め戻し作業。
- 11月19日 長野県北部高等学校生徒13名・教諭1名、地域授業の一環として見学。
- 11月25日 3区調査終了。戦国時代井戸跡・溝跡・土坑確認。
- 11月29日 2回目の航空写真撮影実施。
- 12月1日 1区調査終了、戦国時代井戸跡・溝跡・土坑確認。
- 12月2日 発掘終了式、発掘補助員雇用終了。
- 12月5日 3区埋め戻し作業。
- 12月6日 1区埋め戻し作業。
- 12月7日 機材撤収
- 12月9日 埋め戻し作業終了。安全対策実施。プレハブ・仮設トイレ撤去、現場作業終了。
- 12月～平成18年3月 平成17年度分の基礎整理を行う。

平成18(2006)年度

《表町遺跡》

平成18年

- 4月27日 重機を投入し、プレハブ・駐車場用地整地。
- 4月28日 5区・6区重機によるトレンチ調査開始。
- 5月2日 機材搬入。
- 5月8日 発掘開始式。発掘補助員雇用開始。5区表土剥ぎ開始。
- 5月16日 プレハブ設置。
- 7月10日 4区表土剥ぎ開始。
- 8月2日 飯綱町より依頼の博物館実習生発掘体験。
- 8月23日 5区調査終了。縄文落とし穴、戦国時代掘立柱建物跡・井戸跡・溝跡・土坑多数確認。
- 8月27日 現地説明会実施。来訪者60名。
- 9月20日 3区表土剥ぎ開始。
- 9月22日 笹本正治氏(信州大学教授)から、中世集落などについて現地指導。
- 9月29日他 北部高等学校生徒見学。
- 10月4日 飯綱町町議会議員視察。
- 10月16日 航空写真撮影実施。
- 10月29日 飯綱町主催歴史ふれあい講座参加者見学。
- 10月30日 5区埋め戻し、整地作業実施。



中学生発掘体験



現地説明会



土器洗浄作業



縄文落とし穴検出状況



現地説明会

- 11月1日 飯綱町文化財調査委員視察。
- 11月17日 3区・4区調査終了。平安竪穴住居跡6軒、縄文落とし穴多数、戦国時代井戸跡・土坑多数確認。
- 11月27日 機材撤収。
- 11月29日 発掘終了式、発掘補助員雇用終了。3区・4区埋め戻し、整地作業。
- 11月30日 埋め戻し作業終了。安全対策実施。プレハブ・仮設トイレ撤去、現場作業終了。
- 12月～平成19年3月 平成18年度分の基礎整理を行う。

平成19年

- 1月17日 飯綱町にて地域調査。村が管理する遺跡周辺古地図や地域の伝承、郷土史研究の内容などについて調査。
- 3月8日・9日 山田昌久氏（首都大学東京准教授）から、表町遺跡戦国時代井戸跡より出土した、木製品約10点について指導。

平成19（2007）年度

《表町遺跡》

平成19年

- 4月13日 重機を投入し、プレハブ・駐車場用地整地。
- 4月18日 6a区重機による表土剥ぎ開始。
- 4月21日 プレハブ設置。
- 4月23日 発掘開始式。発掘補助員雇用開始。機材搬入。
- 5月23日 6b区表土剥ぎ開始。
- 5月29日 農道部分調査のため、迂回路設置工事実施。
- 6月14日 三水第一小学校生徒見学。
- 6月21日 航空写真撮影実施。
- 6月22日他 牟礼東小学校生徒見学。
- 6月26日 宮本長二郎氏（別府大学客員教授）から、古代・中世建築について現地指導。6区北側斜面部トレンチ調査。
- 6月27日 農道復旧工事実施。
- 6月28日 6区埋め戻し、整地作業実施。安全対策実施。
- 6月29日 発掘終了式、発掘補助員雇用終了。
- 7月6日 機材撤収。
- 7月9日 佐藤宏之氏（東京大学教授）から、縄文時代落とし穴について指導。
- 7月11日 プレハブ・仮設トイレ撤去。
- 7月～9月 平成19年度分の基礎整理を行う。
- 9月～平成20年3月 本格整理作業。遺物の接合・複元、遺物の実測・トレースなど行う。
- 11月8日 小野正敏氏（国立歴史民俗博物館教授）、藤沢良祐氏（愛知学院大学教授）から、中世陶磁器について指導。



高校生見学



町議会議員視察



作業風景



小学生見学



現地指導

平成20（2008）年度

《西四ツ屋遺跡・表町遺跡》

平成20年

6月2日 本格整理作業開始。遺構図のトレース、遺物重量計測、表作成、報告書原稿執筆など行う。

7月10日 佐藤宏之氏（東京大学教授）から、縄文時代落とし穴について報告書への記載などについて指導。

7月23・24日 栃木県埋文センター・埼玉県川越市教育委員会に、中世集落・遺物（木白）について資料調査。

8月22日 宮本長二郎氏（別府大学客員教授）から、平安・戦国時代の集落・掘立柱建物跡について指導。

9月16日 編集委託業務開始

平成21年

2月20日 編集委託業務成果品納品

2月23日 印刷製本業務開始

3月27日 報告書刊行



本格整理作業

第3節 調査の方法

1 発掘作業の方法

県埋文センターでは、調査法の共通認識と調査の統一性を図るため、「遺跡調査の方針と手順」を作成し、これに沿って発掘調査を行っている。本調査も基本的にこれに従った。発掘調査における安全面でも、「埋蔵文化財発掘調査に関する安全基準」をセンター独自に設けており、これに則り調査を行った。

また、周囲はリンゴ栽培を中心とした営農地域であり、安全対策・防塵対策など、その都度地元・長建・重機作業委託業者と協議を重ね、措置をとった。

発掘作業に際し、期間内における資料と機材の保管及び休憩施設として、道路用地内にプレハブ現場事務所を設置した。表土剥ぎ、トレンチ掘削、排土移動等では大型機械（重機及びクローラーダンプ）をオペレーターとともに借り上げて用いた。

（1）遺構検出

旧牟礼村教委による分布調査や一部人力による試掘トレンチ調査はなされていたが、西四ツ屋・表町両遺跡ともに本格的な発掘調査は初めてであった。

このため、遺構・遺物の有無や状況、出土層位や検出面を把握する目的で、調査区全面にトレンチを掘削した。その結果、両遺跡とも遺構・遺物が認められ、面的調査の必要性があると判断した。また、耕作土直下が検出面であることが確認できたため、遺構検出面までは重機によって掘削した。その後、人力による遺構の検出を行い、検出後は調査研究員の指示によって遺構の掘り下げ作業を行った。

（2）遺構精査

竪穴住居跡は土層観察用のベルト（十字）を設定し、土層を観察しつつ覆土を床面まで掘り下げる方法をとった。土坑については基本的に覆土を二分割して掘り下げる方法を採用し、状況によっては四分分割を行った。掘立柱建物跡は、検出段階ですでに建物跡として把握できたものもあったが、遺構が密集してい



第1図 グリッド設定図 (1:50,000)

る場所などでは、建物の認定は難しかった。できるだけ現場で建物跡の確認をするため、遺構調査の進行とともに、遺構概略図を作成し、直線的な柱穴列や同間隔の柱穴列の発見に努め、それをもとに建物跡の確認作業を行った。しかし、時間的な制約などもあり、実際に現場段階で把握できた建物跡は少なかった。その後は、整理作業の中で、柱穴列・柱間寸法などを手がかりに、図上における建物跡の確認作業を行った。その際には、埋土の類似性なども参考とした。

井戸跡については、検出面より1.5mほど掘り下げると激しい湧水がみられ、それ以下の人力による掘り下げは、困難かつ危険と判断した。よって、この時点までの覆土を掘りあげた状態で、測量・写真等の記録を行った。その後重機による井戸全体の断ち割り調査を行い、底部の把握と遺物の発見に努めることとした。結果として、深いものは検出面下4mを越すものもあったが、底部を確認することができた。

(3) 記録

記録における遺跡記号・遺構記号については、凡例に記した通りである。

基準点・グリッドの設定 調査対象地に、国土地理院の新測量法による世界測地系・平面直角座標系第8系(X = 0.0000、Y = 0.0000)を基点とする基準点・基準線を設定し、平面図や遺物取り上げの基準とした。地区は、200m × 200mの区画を設定し、これを大々地区とした。大々地区内を25区画(40m × 40m)に分割し大地区とした。(第1図)

さらに大地区を25区画(8m × 8m)に分割し、中地区を設定した。

測量基準杭は中地区のメッシュを基本とし、測量業者(新日本航業(株)、(株)みすず総合コンサルタント)に委託して設定した。

遺物の取り上げ 調査で出土した遺物の取り上げは、遺構の個別名のほかは中地区単位を基本とし、中地区グリッド名を用いた。詳しくは3章1節の3、4章1節の3で後述するが、調査地は、長年の耕作等で表面が大きく削平され、耕土直下が地山のローム層という状況で、遺物包含層はほとんど確認できなかった。このため、検出面およびその上で出土した遺物は、原位置を保っている可能性はひじょうに低いと考えられた。あわせて、遺物量も少なかったことから、取り上げにあたっては、整理段階での遺物の接合において、竪穴住居跡との対照ができる中地区単位の取り上げで良いと判断した。

測量・図面作成 個別遺構の平面図・断面図などの遺構測量は、調査研究員およびその指導のもとに発掘補助員が、上記の測量杭を基準として行う簡易測量を基本とした。遺構測量の縮尺は、個別遺構図と土層図が1 : 20、遺物分布図などは必要に応じて1 : 10とした。一部個別遺構図、トレンチ配置図、土層断面記録地点は、全体図や地形図とともに業者委託の単点測量で作成した。

写真 発掘調査中の遺構等の撮影では、6 × 7判・35mm判カメラを併用し、ともにモノクロフィルム(ネオパン)とカラーリバーサルフィルム(フジクローム)で撮影した。遺物出土状況や遺構の完掘などは基本的に35mmフィルムで撮影し、6 × 7判フィルムは将来引き伸ばすことが予想されるものなどに使用した。また、委託業務の記録写真などにはデジタルカメラも使用した。撮影はすべて調査研究員が行い、現像と焼付は業者委託とした。また、調査区全体を周辺地形とともに把握し、かつ年度ごとの調査状況を記録するため、各調査年度に1～2回の航空写真撮影を業者委託により実施した。

2 整理作業の方法

(1) 調査時点および同年度の整理

調査記録の矛盾や書き漏れを補ったり、遺物注記作業・写真整理などを行う基礎整理作業を各発掘作業年度の冬期間に実施した。

図面類は記載内容を点検・修正しながら、矛盾を検討・修正したり、記録漏れを補った。修正済の遺構

個別図はデジタル・トレースを行った。これと業者の作成した調査範囲・地形測量のデジタル・データを合成して調査範囲図・遺構配置図を作成した。遺構個別図面のデジタル・トレースから遺構配置図作成までの作業は、業者に委託した。

写真類は現像し、35 mm・6×7モノクロネガはベタ焼きプリントを貼付し、35 mmリバーサルはマウントをつけ、6×7リバーサルはマウントを付けずにそれぞれアルバムに収納した。アルバムには撮影日・撮影内容・撮影方向など撮影情報を転記した。

遺物の洗浄は、発掘作業期間中に現地で行った。遺物の注記は、基礎整理作業中に篠ノ井整理棟で整理補助員により行った。

(2) 報告書作成にかかわる整理

報告書作成に向けての整理作業は、平成17年度に西四ツ屋遺跡、平成19年度に表町遺跡、平成20年度に両遺跡をあわせて実施し、刊行のための編集作業を平成20年度に行った。報告書作成にあたっては、遺構図面の構成・編集、遺物図の仮割付、遺構写真の仮割付までを県埋文センターで行い、遺物写真撮影や本割付などの編集は編集委託業者に委託した。印刷は、デジタル入稿の形で実施した。

図面類は、デジタル・トレース化されたものを用いて、遺構個別図や必要に応じて出土した遺物の位置を示す出土状況図などを作成した。写真類は、報告書掲載用フィルムを選択した後、業者委託によってスキヤニング・トリミングを行い、報告書に掲載した。

遺物は、土器、石器・石製品、木製品、金属製品に大別して、整理作業を行った。

土器は、接合作業と同時に分類、図化するものの抽出を行った。抽出にあたっては、出土遺物が少ないため、口縁部が残っているものと器形が推定できるものなど256点を抽出し、そのうち226点に掲載した。中近世陶磁器類は、小破片であっても、産地・器種などが判明したものはすべて抽出し、その数を数えた。実測は手実測により、1:1縮尺で県埋文センターの実測用紙に鉛筆で図化した。縄文土器やすり鉢などは拓本をとった。遺物トレースは全て県埋文センターで、手作業にて実施した。土器の出土量は、個体識別の不可能なものが多いため、遺構別・器種別の重量を計測、掲載した。復元個体については、補強材を入れる前に重量計測を行った。

石器・石製品は、遺物洗浄・注記作業と同時に、分類、図化するものの抽出を行った。石臼などの石製品については、接合作業も行い数点の接合資料が得られた。石器の図化は、遺存度の良好なものを選択した。石器・石製品については、器形が推定できるものなど86点を抽出し、そのうち73点に掲載した。実測は表面と横断面を基本とし、必要に応じて裏面も図化した。実測・トレースの方法は土器と同様である。石器・石製品の出土量は、図化したもの以外も含めて個数で示した。

木製品の図化は、用途がわかる遺存度の良好なものを選択した。いずれも保存状態はよく、未保存処理の状態でも図化・写真撮影を行った。実測・トレースの方法は土器と同様であるが、実測用紙は水に比較的強いマイラーも使用した。

遺物の写真は、デジタルカメラを用いて、業者委託で実施した。図化した遺物全ての写真撮影は実施しておらず、近世陶磁器類の集合写真など図化していないものの写真も掲載している。

報告書の編集については、業者へ委託した。

収納については、発掘作業で作成した実測図や測量図面、整理作業で作成した遺物実測図等はすべて台帳に記録した。写真についても発掘作業中に撮影した写真や整理作業で撮影した遺物写真等についてすべて台帳に記録し、後日の検索ができるようにした。

遺物については、報告書掲載遺物と非掲載遺物に分別し、それらの検索が可能な台帳を作成し収納した。

3 普及公開

遺跡調査を円滑に進めるにあたっては、近隣住民をはじめとする地元住民・市町村の協力が不可欠である。本遺跡の調査においては、地元である旧牟礼村（現飯綱町）住民を対象の中心として、様々な形での普及公開活動を実施した。

実施した主な普及公開活動は次の通りである。

《西四ツ屋遺跡》

平成16年 9月3日 旧牟礼村教委教育長ほか視察

9月28日 旧牟礼村教委総務教育課長ほか視察

《表町遺跡》

平成17年 9月15日 組合立飯綱中学校生2名、職場体験の一環として発掘体験。

10月19日 第1回現地説明会 来訪者72名。

11月19日 長野県北部高等学校生徒13名・教諭1名、地域授業の一環として見学。

平成18年 3月18日 長野県立歴史館信州ふれあい歴史講座にて、『矢筒城と15世紀後半のムラ』と題し、発掘調査報告。聴講者90名。

8月2日 飯綱町より依頼を請け、博物館実習生の発掘体験受け入れ。

8月27日 第2回現地説明会実施。来訪者60名。

9月29日 長野県北部高等学校生徒見学。以後10月3日、5日の3回で1年生全員60名、教諭6名見学。

10月4日 飯綱町町議会議員8名視察。

10月29日 いいつな歴史ふれあい館講座『戦国時代の飯綱町と表町遺跡』見学会。講座参加者10名。

11月1日 飯綱町文化財調査委員8名、事務職員4名視察。

平成19年 6月14日 飯綱町立三水第一小学校生徒70名、学校長、教諭2名見学。

6月22日 飯綱町立牟礼東小学校生徒見学。以後25日の2回で6年生全員70名、教諭3名見学。

8月9日 いいつな歴史ふれあい館特別展『飯綱町の戦国乱世』へ、表町遺跡出土品17点貸出。
(～11月18日)

9月22日 いいつな歴史ふれあい館特別展『飯綱町の戦国乱世』記念シンポジウムにて、発掘調査報告およびパネルディスカッション「飯綱町の戦国を考える」にパネラーとして参加。来場者80名。

平成20年 4月19日 長野県立歴史館信州ふれあい歴史講座にて、『列をなす縄文時代の落とし穴』と題し、発掘調査報告。聴講者88名。

上記以外にも、日常訪れる地元住民の方々に対応、遺跡の状況等を説明した。

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

西四ツ屋遺跡・表町遺跡は、ともに、長野県北部の上水内郡飯綱町大字牟礼に位置する（第2図）。西四ツ屋遺跡は、調査区中央部において、北緯 $36^{\circ} 44' 37''$ 、東経 $138^{\circ} 14' 32''$ 、世界測地系で $X=82160.000$ 、 $Y=-22750.000$ にあたり、表町遺跡は同じく北緯 $36^{\circ} 44' 49''$ 、東経 $138^{\circ} 14' 10''$ 、 $X=82500.000$ 、 $Y=-23300.000$ にあたる。

飯綱町は、日本海に面する高田平野と内陸の長野盆地を結ぶ途上にあり、日本海（新潟県上越市）までは約 50 km、車で約 1 時間の距離である。古くから信濃と越後さらに北陸地方との交流路上に位置しており、そのため、古代官道である東山道から分かれ、信濃国府（松本付近）と越後国府（上越付近）をつなぐ東山道の支道や、江戸時代初期に整備された北国街道が通っていたとされている。

飯綱町は、平成 17（2005）年 10 月 1 日、上水内郡牟礼村と三水村が合併して誕生した。町内は大きく牟礼地区（旧牟礼村）と三水地区（旧三水村）に分けられる。この両地区の間には、戸隠山に源を発する鳥居川が流れている。西四ツ屋・表町両遺跡は、ともに牟礼地区にある。

遺跡の西方には、南から飯縄（綱）山、戸隠山、黒姫山、妙高山と 2,000m 級の山々が並び、北には独立峰である斑尾山がそびえる。いわゆる『北信五岳』がすべて望める位置にある。

遺跡は、これらに囲まれた牟礼盆地のほぼ中央、JR 信越本線牟礼駅から南西へ約 1.2 km にあり、周囲はこの地方特産のリンゴを中心とした果樹園が多く見受けられる。

地形的に両遺跡は、飯綱町と長野市との境界に位置する三登山北麓斜面の先端部に立地する。この斜面は、遺跡北方約 1 km を東流する鳥居川まで続き、鳥居川の支流である滝沢川、それに注ぐ八蛇川やその他の沢水によって浸食され、尾根と谷が入り組んだ地形となっている。

両遺跡の位置関係は、南側に位置する西四ツ屋遺跡が、斜面上部にあり、標高 572 ～ 553m を測る。北側に位置する斜面下部の表町遺跡は、標高 540 ～ 524m を測る。

表町遺跡の北側には、牟礼盆地のほぼ中央に突出した孤山である標高 567m の矢筒山（地元では城山ともいう）がある。矢筒山には中世に矢筒城が築かれ、その南側山麓の飯綱町立飯綱病院となっている場所が、城主の館跡と推定されている。双方をあわせて矢筒城館跡として遺跡指定されている。



第2図 遺跡位置図（1：50,000）

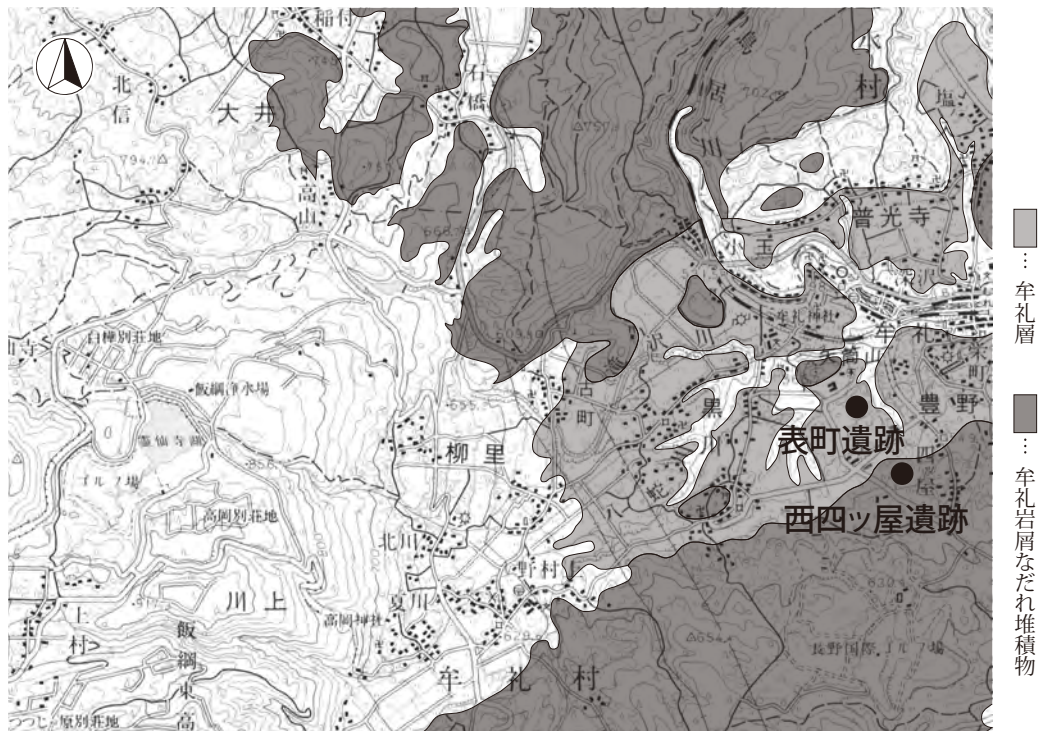
地質的には、両遺跡付近は、飯縄火山の活動に伴う牟礼岩屑なだれ堆積物とそれを覆う形で堆積した牟礼層とよばれる地層上に立地する（第3図）。飯縄火山は約34万年前活動を開始し、途中休止期をはさんで約19万年前頃再び活動が活発化した。最後の噴火は約6万年前とされている（長森英明他2003）。牟礼岩屑なだれ堆積物は、飯縄火山の活動が活発だった時期に堆積したものである。その上に堆積した牟礼層は、同時期に形成されたとされる笹ヶ峰層、古間層、野尻湖層と同様の湖沼堆積物である。牟礼一帯が湖沼となった成因としては、火山噴出物による堰き止めが推定されている（長森他2003）。牟礼盆地は、盆地中央を東へ流れる鳥居川の豊野方面への出口となる釜淵地区が非常に狭い峡谷となっており、一時期火山噴出物によりその峡谷が堰き止められ、牟礼一帯は湖と化した時期があった。その後、鳥居川の浸食作用により、豊野方面へ水が再び抜け、現在のような状況になったとされる。牟礼層はこの時期堆積した。

牟礼層の堆積時期については、同時期形成とされる野尻湖層の¹⁴C年代値として、 $17,460 \pm 340 \sim 49,410 \pm 970$ が報告されている（野尻湖地質グループ・野尻湖火山灰グループ1993）。また、表町遺跡の調査でも、井戸跡の断割り過程で、地表下4mほどで泥炭層（Ⅶ層）が確認され、現地指導を頂いた野尻湖ナウマンゾウ博物館の中村氏・近藤氏の助言に基づき¹⁴Cによる年代測定を実施した。測定は2カ所行い、その結果 $32,230 \pm 180$ 、 $38,350 \pm 280$ との年代値を得た。これらのことから、牟礼層の堆積した時期は後期更新世、約2～4万年前頃が有力と考えている。

本報告書掲載遺跡の調査では、多くの場所で耕作土直下に牟礼層が確認された。牟礼層堆積後は、この地に大きな堆積はなく、同じ地表面で長く人々の生活が営まれてきたことをうかがわせる。

気候的には、善光寺と豪雪地帯で知られる新潟県境の信濃町との中間地帯で、年間平均気温は10.8度、年間平均降水量は916mmである。長野県でも北に位置することから雪も比較的多く、降雪量の年間平均は247cm、昭和59年には観測史上最高の積雪101cmを記録した（牟礼村1997）。表町遺跡では、雪にまつわる遺物として、戦国時代の木製そりが出土している。ただ近年、積雪は減少傾向である。

植生的には、やや冷涼な気候のため、遺跡周辺では、温帯～冷温帯に生育する落葉広葉樹や針葉樹、樹種でいうとナラ、クヌギ、クリ、クルミ、ヤマザクラ、シラカバ、などが見られ、ヤマウルシ、ツタなどの灌木も混じっている（牟礼村1997）。これらの樹種構成は、表町遺跡出土の戦国時代木製品における樹種選択・樹種利用に大きく関連しているが、これについては、4章2節3の（2）を参照されたい。



第3図
遺跡周辺の地質図
(1:50,000)

第2節 歴史的環境

1 遺跡周辺の歴史的環境

今回調査した西四ツ屋・表町両遺跡では、分布調査等で、縄文時代打製石斧、平安時代土師器・須恵器、中近世陶磁器が確認されていた。ここでは、当該期を中心として遺跡周辺の歴史的環境を概観する。

(1) 旧石器～縄文時代

飯綱町内では、飯綱山麓や鳥居川の台地上で、わずかではあるが、旧石器時代の遺跡が確認されている。今回の調査地も台地上で、宅地化などされておらず、古い地形が残っている可能性があった。このため、旧石器時代の遺構・遺物の発見が期待された。

飯綱町の縄文時代遺跡は、牟礼地区 37、三水地区 19 の合計 56 指定されている（牟礼村教委 2000、三水村教委 1992）。このうち発掘調査されたものはごくわずかで、その全容はまだまだ解明されていない。

牟礼地区の縄文時代遺跡のうち、住居跡が確認されたのは 2 遺跡である。

八蛇川上流の丸山遺跡（75）では、縄文時代前期の住居跡 1 軒と早期～前期の土坑 31 基が確認された（高橋桂他 1979）。住居跡には前期関山式土器が伴う。土坑からは、早期絡状体圧痕が施文された尖底深鉢が出土している。この土器は昭和 53 年東京国立博物館特別展に展示されたほか、小学校六年生用社会科資料集にも掲載された（牟礼村 1997）。ほかにも完形の前期諸磯 b 式浅鉢形土器が出土している。

明専寺遺跡（28）も八蛇川に近く、縄文時代後期の住居跡 2 軒と土坑 3 基が確認された。住居跡のうち 1 軒は柄鏡形敷石住居と思われる。住居跡からの遺物は少ないが、包含層遺物では、堀之内式と加曾利 B 式土器が大半を占めていた（森尚登他 1980）。

他にも、鳥居川のほとり現在の牟礼中心部にある橋詰遺跡（19、旧栄町遺跡含む）では、大量の縄文後期～晩期土器がみつかり、近くに集落の存在が考えられる。

住居跡以外の縄文時代遺構で注目されるのが、宮浦遺跡（93）で確認された土坑列である。土坑は、直径 2 m 深さ 2 m の円形で、50 基が一行に並んで発見された。縄文時代早期の陥し穴と推定されている。

三水地区では、縄文前期末葉から中期・後期を中心に縄文時代遺跡が分布している。伊豆ヶ入遺跡（113）からは、諸磯・十三菩提式などの前期末葉土器が多く出土している。小野遺跡（109）では、縄文前期 1 軒、後期 2 軒の住居跡が確認されたほか、他に後期の土坑墓・配石跡などがみられた。この遺跡からは、完形の注口土器のほか土偶、土製円盤、石棒などがみつかり、祭礼・信仰などの面でも注目されている（三水村教委 1992）。

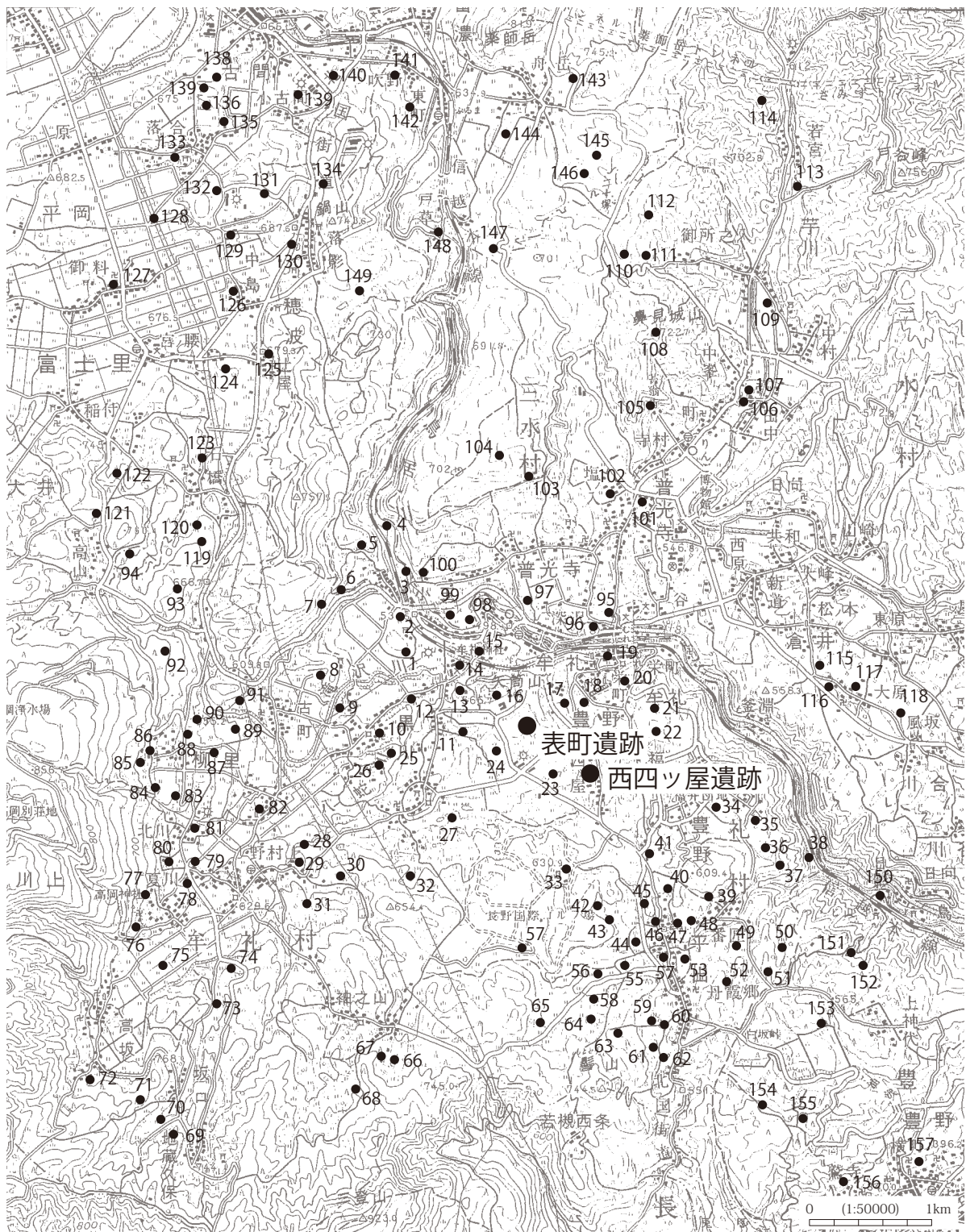
住居跡が確認された遺跡は、いずれも川が近く水利の便が良い。縄文人が好適地を選んで住み着いていた様子がうかがえる。今回の調査遺跡は、川から遠く水利の便がよくない。縄文土器の表面採集もみられなかったことから、集落ではなく、狩猟場など別の生活領域となっていた可能性が高いと考えられた。

(2) 平安時代

飯綱町の平安時代遺跡は、牟礼地区 73、三水地区 11 の合計 84 指定されている（牟礼村教委、三水村教委前掲）。縄文時代遺跡同様、発掘調査されたものは少ない。集落以外に、窯跡や窯業関連遺構なども確認されている。

牟礼地区で、今回の調査までに平安時代住居跡が確認されていたのは 3 遺跡である。

前田遺跡（10）では、9 世紀前半と比定された住居跡 4 軒が確認された（島田恵子他 1981）。丸山遺跡（75、



第4図 周辺遺跡分布図（縄文・平安・中世関係のみ）

前掲)からも住居跡3軒が確認されている。こちらは食膳具構成の違いから9世紀後半と比定されている。

住居跡が確認されたもう一つが牟礼地区南部の平出地区にある上ノ山遺跡(46)である(小柳義男他1992)。平出地区は、焼物に適した粘土があり、北信地方における須恵器生産の一拠点となっていた。確認された窯跡は13遺跡で27基にのぼる。前高山窯址群(33)では、9世紀前半に比定される須恵器窯跡6基が確認された(小林孚他1986)。他にも番匠窯址群(39)3基、吉ノ沢窯址群(42)4基、上ノ山窯址(45)2基などで複数の窯跡が確認されている。窯業関連遺構としては、西浦北遺跡(54)で、原料となった粘土の採掘坑21基がみついている。この遺跡からは、不良品の大量廃棄遺構と推定される土坑もみつかった。土坑内からは、総量178kg、図化した須恵器杯だけでも259点出土している(小柳他1992)。時期は前高山窯址群が9世紀前半、西浦北遺跡が9世紀第Ⅲ四半期に比定されている。

三水地区では、小野遺跡(109、前掲)で平安末～中世初の柱穴群が確認されたことが知られていたが、近年発見された田中下土浮遺跡(106)で9世紀初頭～10世紀にかけての住居跡6軒が確認された(笹澤浩2004)。それまで三水地区での平安時代住居跡確認例は、鳥居川沿いの鐘山遺跡(98)における1軒しかなく、今回の発見は、三水地区における未知の平安時代集落存在の可能性を高めるものとなった。

平安期の集落も依然として水利の便が良い場所にみられる。一方、平安期には小規模な山地居住民の集落が出現することが指摘されている(桐原健1967)。松本平でも9～10世紀にかけて、従来まで集落域とならなかった標高の高い部分に新たな集落が生まれる様子がみられる(原明芳1996)。理由としては、窯業や炭焼き、物資輸送など山での生業(桐原1967)、律令制集落変質の中から、未開地の開墾目的でできたもの(原明芳2007)などがいわれている。今回調査した遺跡は、窯業の拠点となった平出地区にも近く、平安期小集落存在の可能性が十分考えられる地域である。

(3) 中世

今回調査した表町遺跡のすぐ北側には矢筒城館跡(16)がある。

矢筒城館跡は、山城と館跡が接続して存在している貴重な例として注目された。現在この地には飯綱町立飯綱病院が建っており、その建設や増改築にあたり、3度の発掘調査が実施された。調査では、山の裾部に、山上部と平坦部を隔絶させる目的でつくられた横堀が確認された(米山一政他1988)。また、その後踏査による縄張図作成が行われ、山上部の平場や、山腹部の縦堀も確認されている。これら縦堀・横堀は、その構造上の特徴から戦国時代後期に行った防御のための改修との見解がある(三島正之2000)。

山城の存在は確認されたが、接続する館跡については限られた発掘調査のため、中世土器や陶磁器、石製品は確認されたものの、館跡の存在を示すような遺構・遺物は発見されなかった。

矢筒城の主については不明である。「島津権六郎」という伝承が地元には残っているが、この人物の実在は確認されていない。平安後期～中世における荘園制の中で、飯綱町周辺は、三水地区が芋川庄、牟礼地区が太田庄に属していた(牟礼村1997)。

芋川庄は、地元の有力豪族芋川氏の支配下にあり、その屋敷跡は、芋川氏居館址(107)として土塁などが現在まで残っている。平成15(2003)年の第3次発掘調査では、県下初の障子堀が検出され、極めて防御性の強い館の性格が明らかになった(笹澤2004)。

太田庄は、承久3(1221)年地頭となった島津氏が、長沼(現長野市長沼)を拠点に土着し力をつけ、



矢筒城館跡と表町遺跡

その中心を支配した。16世紀前半の武田氏の侵入までは、牟礼周辺は島津氏の支配化にあったと思われる、矢筒城が島津氏の勢力下にあった可能性は高い（牟礼村 1997）。

「表町」の地名は、矢筒城・館の表（南）一帯に広がる集落があったとの伝承に由来している。この付近で他に城館跡と関連する遺跡としては、殿屋敷遺跡（25）、地蔵堂遺跡（23）などがある。殿屋敷遺跡は、城の西方約 1.5 km にあり、以前はここが唯一矢筒城主の屋敷地とされていた（牟礼村教委 2000）。現在は平らな区画がみられるだけの畑地で未発掘である。

地蔵堂遺跡は、表町遺跡のすぐ南側にある。ここでは永正 4（1507）年の銘が刻まれた永正地蔵尊（県宝）がみついている。このあたりに処刑場があり、表町のまちはずれであったとする伝承が残っている。

著名な「川中島の戦い」を繰り広げた武田・上杉両軍の戦いは、16世紀中頃からその激しさを増し、牟礼付近は両軍勢力がぶつかり合う最前線となった。矢筒城にみられた戦国後期の改修は、この戦いの中で行われたものとも考えられる。同様の改修は、三水地区の若宮城址（114）でもみられる（三水村誌編纂委員会 1980）。この激しい戦いの中で、城の眼前に広がっていたとされる表町の集落が、どのような状況であったのかを解明することが、調査の重要な課題となった。

2 遺跡内に存在した「オシャゴンジ」

表町遺跡調査区内 6 区西寄りに、俗称「オシャゴンジ」と呼ばれていた畑地が存在する。

地主や地元郷土史研究者の話では、江戸時代この地には「オシャゴンジ」とよばれた神社があり、その跡地ということであった。神社跡の調査という貴重な機会となった。

オシャゴンジは、民間に伝承されているミシャグジ信仰から生まれたものと考えられている。ミシャグジ信仰の始まりは、かなり古くからとされており、豊作祈願のための、土地の精霊信仰から発したものと説がある（宮坂光昭 1995）。他に「御社宮司」、「佐軍神社」、「社護神」などすべて同じ由来である。

飯綱町内には、表町を含め 7 ヶ所の「オシャゴンジ」が確認されている（矢野恒雄 1998）。うち現存は、牟礼駅近くの佐軍神社のみで、あとは記念の石碑か、地籍名または言い伝えとして残っているだけである。

表町の「オシャゴンジ」は、明治初期の地元古地図には、「三狐（しゃこん）神社」としてかかれている。伝承では、ここには石祠があり、現在牟礼中心部にある牟礼神社裏にうつされたとされている。事実、牟礼神社裏には、表町の「オシャゴンジ」も含め、合祀されたとみられる石祠がならんでいた（右下写真）。地主の話では、「明治末～大正初期にこの土地を先祖が取得し、以来畑として使ってきた。耕作中、江戸中期の寛永通宝を中心に 20 枚以上の古銭がみつかった。」とのことである。

今回の調査では、社殿跡や古銭などが発見され、神社としての存在を確認できるかどうか。また、存在時期に関する情報が得られるかどうかなどが注目された。



発掘調査前のオシャゴンジ跡



牟礼神社裏の石祠群

第3章 西四ツ屋遺跡

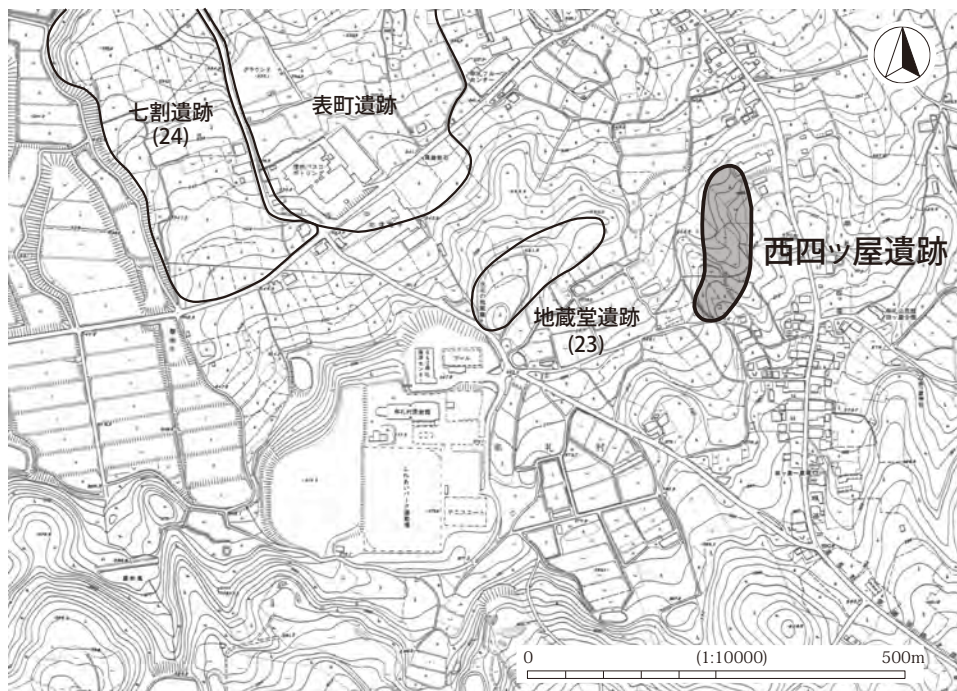
第1節 遺跡および調査の概要

1 遺跡の概要

西四ツ屋遺跡は、中央部を南北に尾根が走り、その両側が沢水によって谷状に削られた、尾根と谷からなる遺跡である。遺跡から谷をはさんだ東側の尾根頂部には、江戸時代初期に整備された旧北国街道が南北に走り、その街道沿いに四ツ屋の集落が形成されている（第5図）。四ツ屋集落は、江戸時代初めの北国街道整備にあたりつくられた集落と伝えられている。現在、集落内は道幅が狭く、古い民家も多く見られることから、江戸時代頃の雰囲気から大きくは変わっていないという印象を受ける。遺跡は、その集落の西側に広がる。

遺跡範囲は、平成10年3月に行なわれた旧牟礼村教委の詳細分布調査によって、小高い尾根とその間の谷の入り組んだ地形を呈する南北約200m、東西約70mの範囲とされた。現在の土地利用状況は、住宅は1軒もなく、畑とリンゴを中心とした果樹園、雑木林がひろがり、水田はみられない。また丘陵部の一部が切り開かれ墓地となっている。その墓地における最も古い墓碑銘は江戸時代中期のものである。分布調査では、土師質土器片4点と唐津・伊万里など近世陶磁器片10点ほどが表面採集され、中世～近世の遺物散布地とされている（牟礼村教委2000）。

現在調査対象となっている畑や果樹園の所有者は、そのほとんどが四ツ屋集落の住民である。おそらく、遺跡付近は、四ツ屋集落住民の耕作地として江戸時代から続いてきたものと考えられる。ただ、畑や果樹園として長く使われているため、削平による平坦化など地形変更がかなり行われていたようである。住民からの聞き取りでもそのことが多く聞かれ、特に昭和20年代～30年代にかけての果樹栽培の広がりとその後の機械化進行の時期に大きな地形変更があったとのことである。



第5図 遺跡周辺図（1：10,000）

2 調査の概要

(主) 長野荒瀬原線建設予定地は遺跡範囲の西側を南北に貫く形となる。調査対象は、本線部分のほか、道路を盛り土するための土取り場として、本線周囲の畑地を削る工事もあわせて行うこととなったため、調査対象地は 7,000 m²に及んだ。

今回の調査対象区は、道路建設に伴うため、幅 20m・長さ 250m の細長い調査区であり、かつ、尾根状部と谷状部に分かれていた。このため、便宜上、最も南側の谷状部を 1 区、その北側に続く尾根状部を 2 区、さらにその北西に続く谷状区を 3 区とした (第 6 図)。

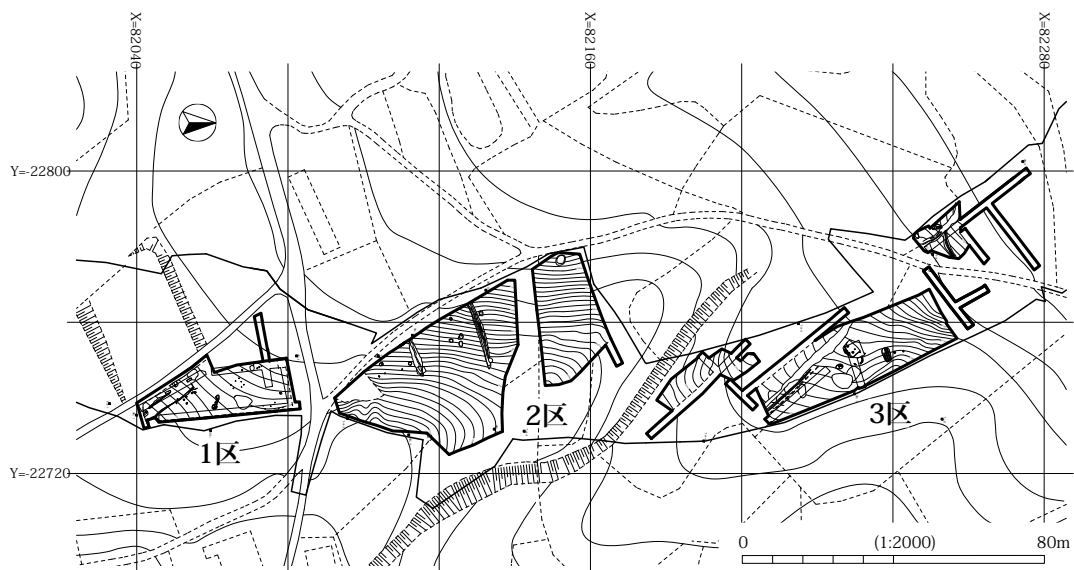
2 区は、小高い尾根であり、調査開始に先立つ現地踏査の中で、古い地形が残っている可能性が想定されたため、当初より全面表土剥ぎによる調査を行うこととした。1・3 区は、谷状部で、部分的にかなりの湧水もあり、生活する上での困難も予想された。このためまずは遺構の存在を確認する目的で、調査区全面に重機でトレンチを掘削し、その結果、住居跡や土坑など遺構の確認された部分について、表土剥ぎを行い、その後面的調査を行った。それ以外の遺構が確認されなかった部分については、トレンチの位置・土層図・土層写真を記録して終了した。結果として、調査対象区 7,000 m²の中で、表土剥ぎ・面的調査を行ったのは、3,300 m²である。

検出された遺構は、竪穴住居跡 1 軒、掘立柱建物跡 2 棟、溝状遺構 3 条、土坑 43 基である。

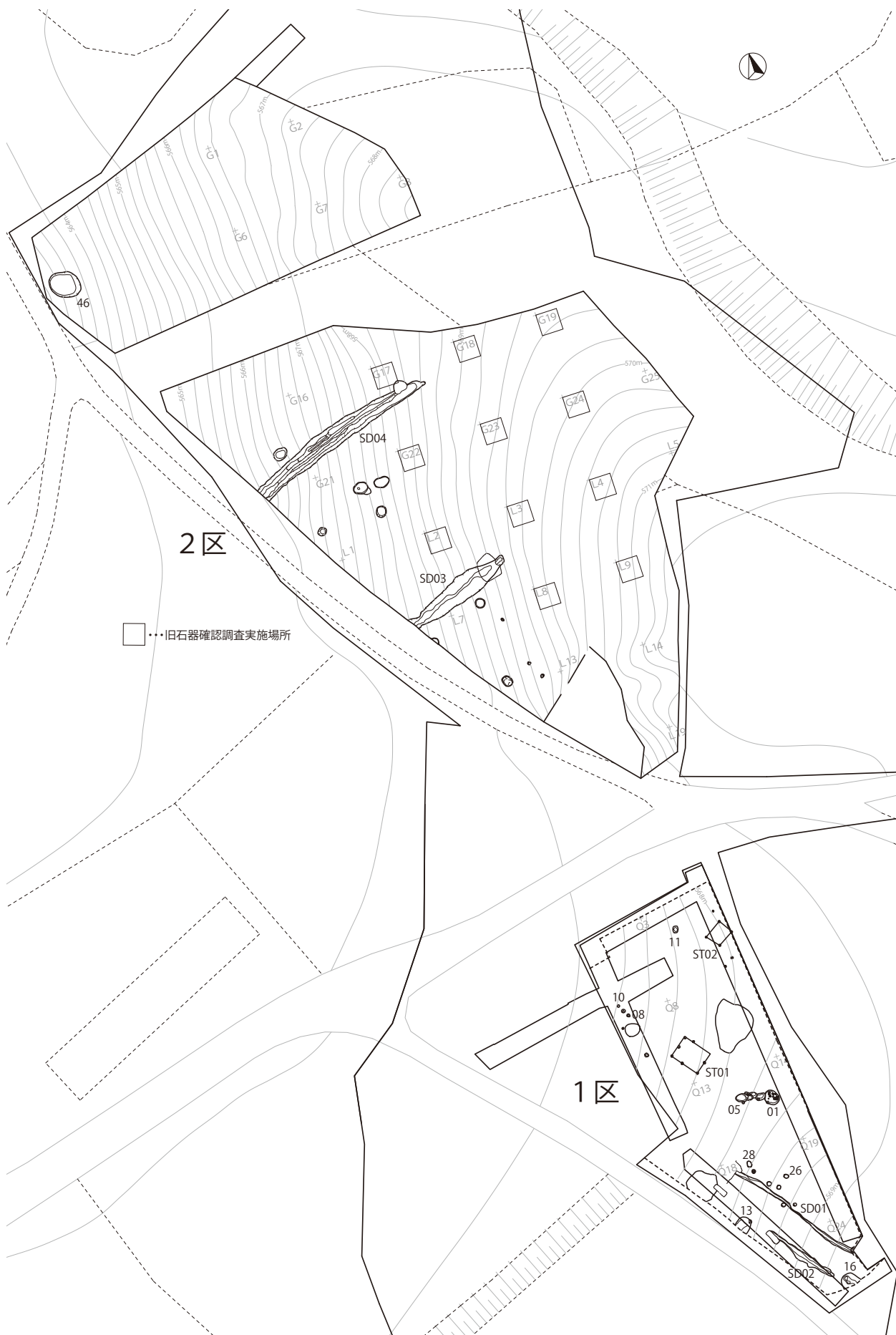
時代は、竪穴住居跡は平安時代前期 (9 世紀初頭～後半) であるが、それ以外の遺構については、時期決定をする要素が乏しく、断定できる遺構は、平安時代の土坑 1 基 (SK46) のみで、その他は平安～近世という時代幅のいずれかとししかいえない。このため、本報告においては、平安～近世という章立てを行い、遺構の時期については、埋土の様子などで、可能な限りの推定を試みた。

なお、耕作土主体の埋土が混入し、現代遺物の出土した攪乱が調査区の随所で確認されたが、本報告書では遺構を破壊しているもののみ表示した。

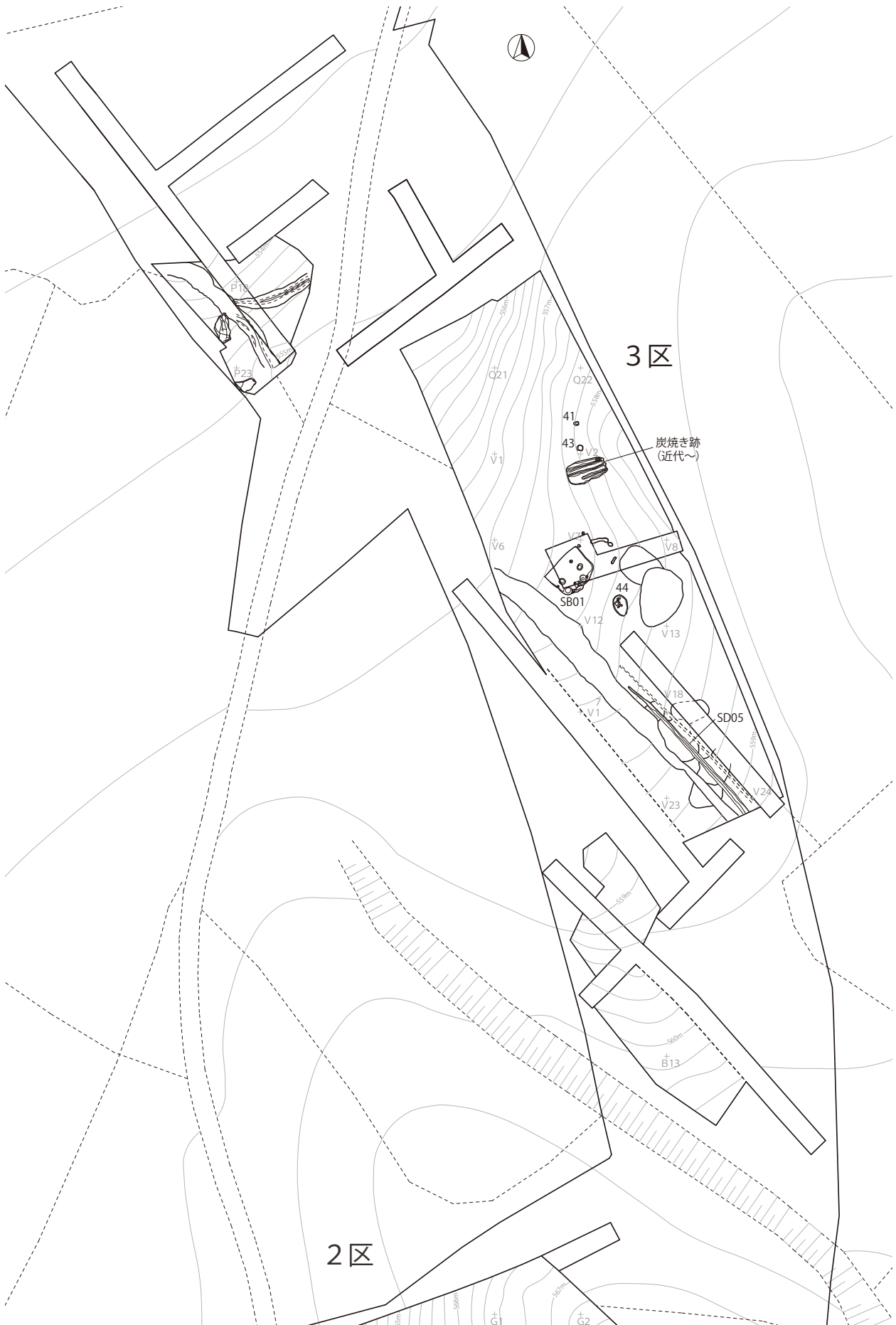
また、飯綱町内ではわずかではあるが、旧石器時代の遺跡が確認されており (牟礼村 1997)、念のため旧石器の確認調査も実施した (第 7 図)。確認調査は、古い地形が残っていると想定された 2 区の丘陵頂部付近で行った。調査方法は、V 層 (ローム層) を掘り下げ、VI 層 (ローム層) が露出する面まで、部分的には VI 層内部までの坪掘りを実施した。その結果、石器の出土は確認されなかった。また、これ以前に行った 2 区の表土剥ぎ後の丘陵全体の人力による検出作業時においても、検出面であるローム層上面において、石器の発見はなかった。これらから、調査区内に旧石器時代の遺構・遺物は存在しないと判断した。



第 6 図 調査区設定図 (1 : 2,000)



第7図 西四ツ屋遺跡遺構全体図① (1:500)



第8図 西四ツ屋遺跡遺構全体図② (1:500)

3 堆積状況と検出面

西四ツ屋遺跡の基本土層は、下記の通りである。なお、この基本土層は、後述の表町遺跡においても踏襲しており、表町遺跡調査中に層序の観察・照合を行い決定した。

I層 表土（盛り土層含む）

I a層 極暗褐色シルト 7.5YR2/3 現耕作土。

I b層 黄褐色土・極暗褐色土混合層 それぞれがブロック状に混入。斜面を整地した際の盛り土。

（I c層・I d層・I e層 旧水田層 表町遺跡にて確認。4章1節の3にて後述。）

II層 旧表土（堆積時期は近世以降）

II a層 暗褐色シルト 10YR3/2 黄褐色土・軽石粒子わずかに混入。しまり非常に良し、粘性なし。

1区東側斜面部のみにみられた。

II b層 黒褐色シルト 10YR2/2 近世遺物を包含する。黄褐色土・軽石粒子わずかに混入。安山岩質礫わずかにみられる。しまり良し、粘性なし。3区東側斜面部のみにみられた。平安時代住居跡を壊しており、縄文～平安の遺物混入がみられる。

III層 旧表土、腐植土層（堆積時期は近世以前）

III a層 黒色シルト 10YR2/1 平安時代遺構の覆土主体。黄褐色土・軽石粒子わずかに混入。しまりやや悪い、粘性なし。

III b層 黒色シルト主体礫層 10YR2/1 III a層と同質だが、安山岩質礫（φ3～20cm程度）を多く含む。

IV層 褐色シルト主体礫層 10YR4/4 谷地形内の2次堆積層。軽石（φ5mm～1cm）多く混入。安山岩質礫（φ1～5cm）多く混入。しまり良し、粘性なし。下部ほど黄味強く、砂質強い。

V層 褐色シルト（ローム主体）10YR4/4 軽石粒子わずかに混入。礫など混入なく淘汰よい。しまり非常によい。粘性なし。2区・3区の丘陵部にみられる。

VI層 黄褐色シルト（ローム主体）10YR5/6 全体に黄褐色を呈し、層内はローム主体部分や砂質の強い部分が薄い互層状にみられる。一部グライ化している様子もみられ、水成層と考えられる。砂の礫化途上の様子もみられ、かなり古い堆積と考えた。2区では、層内に黒色（10YR1.7/1）の有機物を含む縞状の部分もみられた。火砕流の可能性も考えられる。

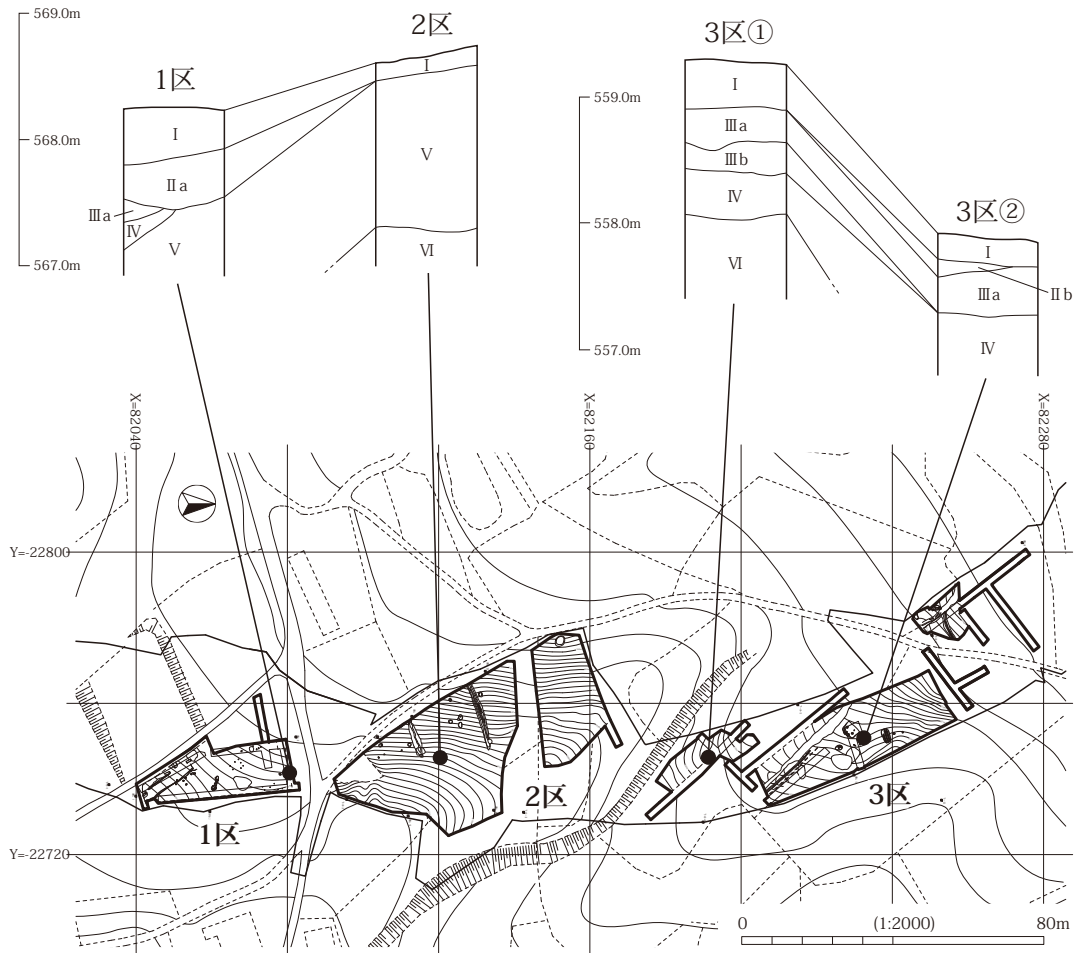
（VII層 泥炭層、VIII層 灰色シルト（ローム主体）は、表町遺跡にて確認。4章1節3にて後述。）

2区は、表土（I層）を剥ぐと、すぐローム層（V層・VI層）となっており、この上面で遺物を包含する落ち込みが確認されたことから、この面を検出面とした。

1・3区は、トレンチ調査による土層観察で、ローム層の上に黒褐色土（II b層）・黒色土（III a・III b層）・2次堆積であるローム主体の礫層（IV層）が谷の中央部ほど厚く堆積していることが確認された。

トレンチ調査により確認された竪穴住居跡は、トレンチ壁面の観察によりIII a層下部においては立ち上がりの線が確認できた。このためIII a層上面から掘り込まれていると考え、住居跡周辺においてIII a層上面を検出面として表土剥ぎ・検出を開始した。しかし、黒色土中に同色の落ち込みのため検出は困難で、遺構のプランを確認するにはIII a層下部まで下げざるを得なかった。この時III a層中から遺物の出土はほとんど無かった。このため、時間的な制約や作業上の効率を考え、III a層下部まで重機による表土剥ぎを実施し、そこを検出面とした。III b層が堆積している部分についても、一部III b層上面にて検出・遺物確認を行ったが、III a層と同様の状況だったため、III b層下部まで重機による表土剥ぎを行った。III層の無い部分については、ローム主体の層であるIV・V・VI層上面を検出面とした。

3区の一部においては、黒褐色土(Ⅱb層)の堆積が部分的にみられ、縄文～近世の遺物を含んでいたため、この部分はⅡb層上面で表土剥ぎをとめ、検出・遺物精査を行った後、下層の調査を行った。Ⅱb層の堆積していた部分は、調査区外となった東側の四ツ屋集落から続く西向き斜面の末端部で、集落方向から崩れてきたものと考えられる。層中からは近世の遺物がみつまっていることから、四ツ屋の集落ができた江戸時代初め以降に堆積したものだが、雨水等自然によるものか開墾などによる人為的なものかは判断できない。



第9図 基本土層図(平面1:2,000、断面1:60)

第2節 遺構と遺物

1 概要

西四ツ屋遺跡では、竪穴住居跡1軒と掘立柱建物跡2棟、溝3条、土坑43基を検出した。遺物では、縄文時代石器、平安時代・中世・近世土器が出土した。現在の耕作土と類似した埋土の落ち込みは、近代以降のものとして判断して、遺構とは扱わなかった。

検出された遺構のうち、時期が確定できたのは、平安時代の竪穴住居跡1軒と土坑1基、近世の溝3条のみである。その他の遺構は、遺構からの遺物出土が全くなかったため、埋土や検出面の遺物などによって平安時代から近世と判断した。ただし、細かい時期決定はできなかった。このため、本報告書の時期区分では、平安時代～近世までを一括して扱った。

以下に主な遺構・遺物について、時代ごとに記述する。記述していない遺構の詳細については、本書付録 CD に遺構一覧表を収録したので参照されたい。

2 縄文時代

遺構は検出されず、磨製石斧と石鏃の石器 2 点が出土したのみである。磨製石斧は平安時代土坑 (SK46) の埋土中より出土した。石鏃は、3 区検出中、斜面上部から崩れた堆積土である II b 層から出土した。

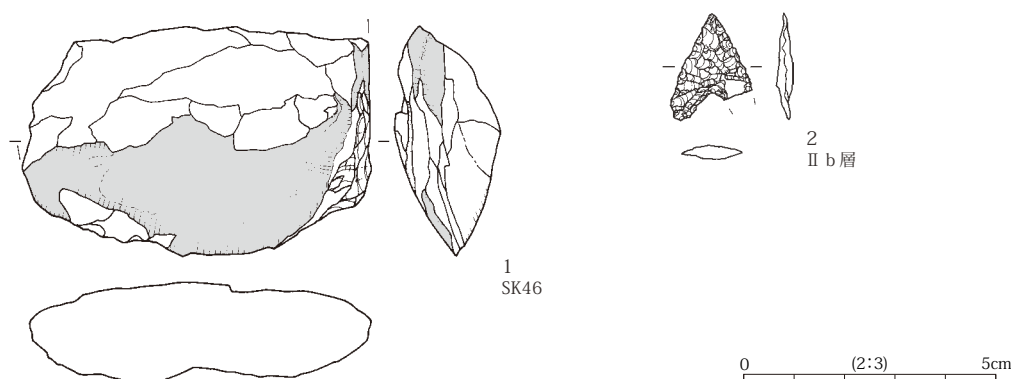
土器は全くみられず、近くに縄文時代集落が存在する可能性は低いと思われる。陥し穴などは検出されなかったが、後述する表町遺跡と同様、狩猟の場などであったと考えている。

(1) 遺物 (第 10 図)

1 の磨製石斧は、平安時代の土坑 SK46 覆土中より出土した。石斧は、定角式磨製石斧と思われる。刃部しか残存していないためその全容はわからないが、残存率は 20%以下と思われる。石質は蛇紋岩系である。

2 は、黒曜石の無茎石鏃で、片方の端部が欠損している。脚部が丸く、えぐりが比較的深いハート型を呈している。

定角式磨製石斧は縄文時代中期以降広くみられるが、石鏃については、縄文時代としかいえず、詳細な時期は比定できない。



第 10 図 石器 (縄文)

3 平安時代～近世

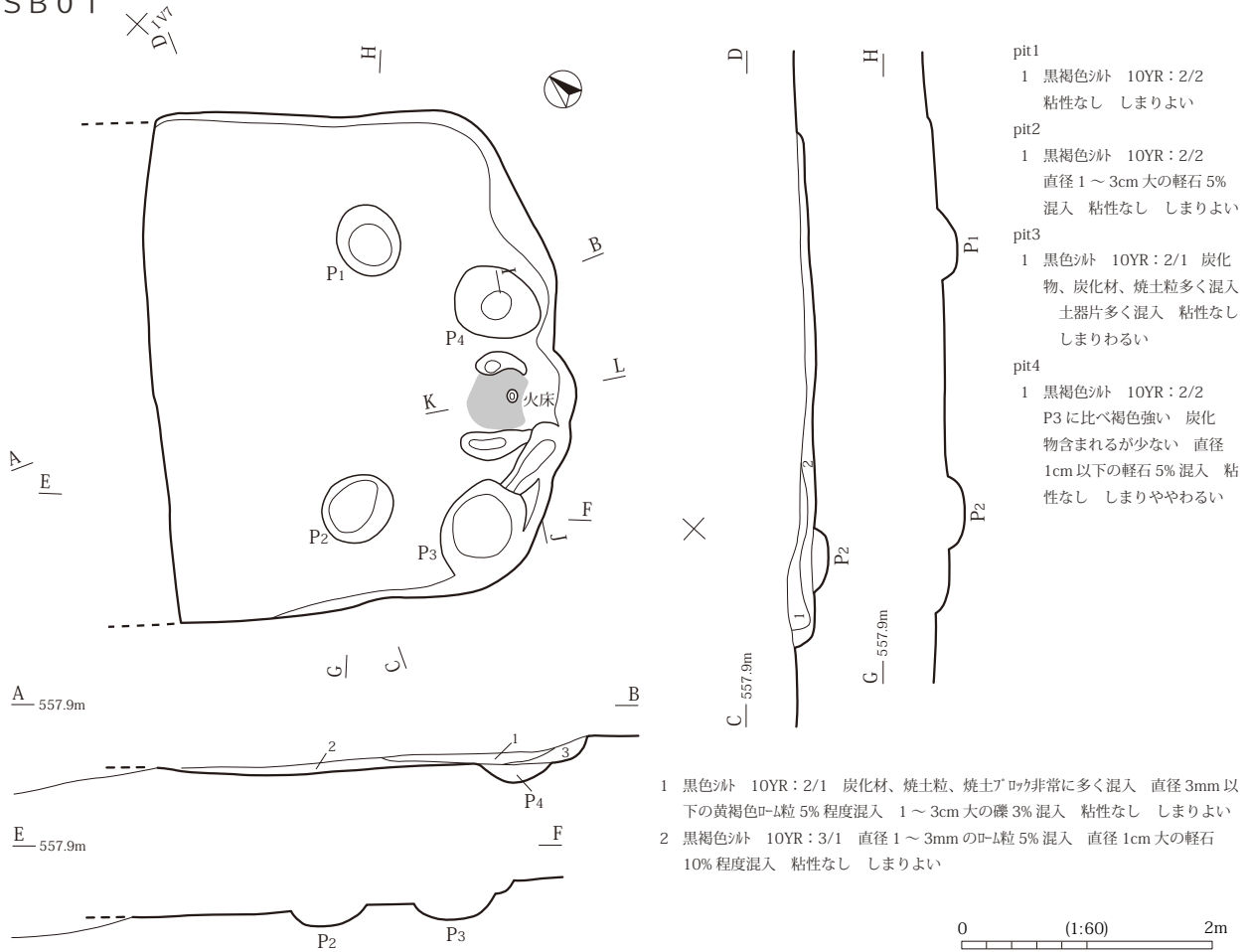
(1) 遺構

イ 竪穴住居跡

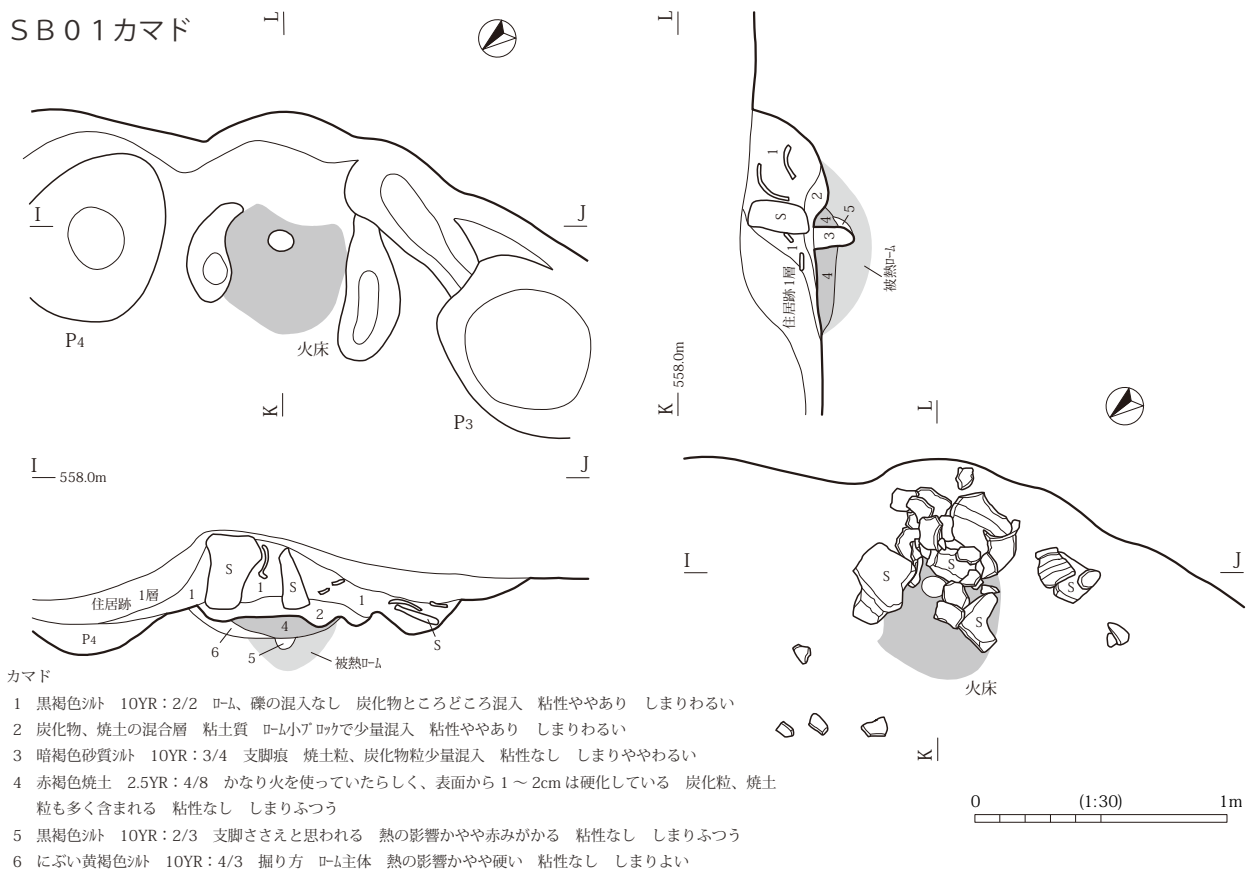
SB01 (第 11・14・15 図 PL 2・17・18) 【3区 I V6・7グリッド】

位置：3 区中央やや東寄りにあり、尾根頂部から谷部へと向かう北西斜面にある。重複：柵列状遺構の可能性をもつ SK49、50、51、52 に切られる。検出：3 区トレンチ調査において、III a 層 (黒色) 下部と IV 層 (褐色) の境界付近で焼土と炭化物の広がりを確認し、その周囲で土師器片の出土がみられた。掘り込み面は、III a 層上部と思われるが、III a 層と住居跡埋土が類似していたため、III a 層下部まで下げてプランを確認した。住居跡北西側 1/4 は、東側斜面より近世以降に押し出された II b 層により壊され残っていない。規模・形状：南北 4.06 m、東西は遺存部分で 3.33 m である。構築時は 1 辺約 4m のほぼ正方形プランであったと推測される。主軸：カマド方向で N 142° E、ほぼ傾斜にそって構築されている。床面・壁：掘りこんだ IV 層上面を叩き締めた堅い面を床面とする。特にカマド前は非常に堅かった。掘方は

SB01



SB01カマド



第11図 1号竪穴住居跡

みられない。壁は、最も遺存していた南東壁で高さ 15～35cm を測る。カマド：南東壁やや南寄りにある。燃焼部付近には人頭大の石が散乱しており、石組みカマドであったと思われるが、原位置を保つ石はない。燃焼部の焼土は径 50cm ほどで、中央奥に径 7cm の支脚の抜き取り痕跡があった。煙道部は残っていなかった。廃絶時に人為的に壊され、石などは持ち去られたものと思われる。ピット：4 基確認された。P1・P2 は支柱穴である。P 1・P 2 ともほぼ円形で、直径は 46～60cm を測る。柱間寸法は 2.11 m、床からの深さは両方とも約 15cm である。底はⅣ層中の礫が多く露出しており堅い。柱痕・礎石は検出されなかった。本来 4 本柱であったと想定される。しかし、残り 2 つの支柱穴は、柱間寸法からあったと想定される付近が、Ⅱ b 層の押し出しで P 1・P 2 の底面標高より下まで削られており、痕跡を含めて確認されなかった。カマド両側に 2 基ピットがある。カマド右側の P 3 は、灰・土器片も多く灰出しピットと思われる。堆積状況：2 層に分層された。1 層はⅢ層基調の黒色土層で、中央部には炭化物・炭化材・焼土ブロックが多く含まれていた。2・3 層はⅢ a 層基調だが、ローム・軽石が少量混入し黒褐色を呈する。埋没過程は、住居廃絶後、2・3 層が堆積し、やや中央が窪んだ状態の上面で火が焚かれ、1 層の炭化物層が生じたと思われる。炭化物層と床面は接しておらず、焼失住居ではない。火が焚かれた時期については、1 層の炭化物層から出土した土器と、2 層以下の住居跡出土土器との間に時代差はみられず、住居廃絶後さほどの時間差はないと思われる。混入していた炭化材は、樹種同定の結果、クヌギ節とコナラ節の 2 種類に同定され、両方とも当該期の住居構築材や燃料材として利用される事例が多くみられることから、本住居跡の炭化材もこれに由来する可能性がある。遺物出土状況：カマド周辺を中心に土師器甕・内黒杯・土師器杯が出土した。甕は口縁の形状から、6 個体は確認できる。特出遺物としては、土師器三足盤が出土した。須恵器・灰釉陶器は全くない。時期：遺物から平安時代前期（9 世紀初頭～9 世紀後半）と比定される。

ロ 掘立柱建物跡

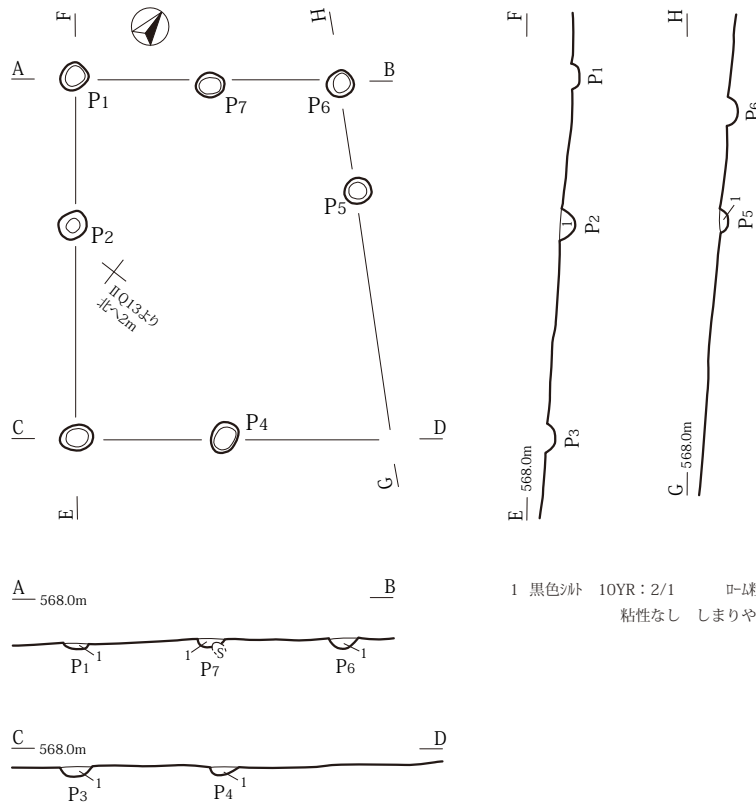
ST01（第12図 PL2）【1区 II Q7・8グリッド】

位置：1 区中央に位置し、谷底部の西斜面にある。重複：なし。検出：Ⅳ層（褐色シルト）上面で検出した。規模・形状：桁行 2.85 m、梁行 2.48 m の 2 間×2 間の側柱建物。柱間寸法は、桁行は 0.87～1.98 m、梁行は、1.03～1.32 m。主軸：N 38° W。床面積：7.07 m²。柱穴：いずれも、直径約 20 cm のほぼ円形を呈し、検出面からの深さは 10 cm 以内である。南東隅の柱穴は検出されなかったが、ここはⅣ層中の礫が検出面まで高く出ており、柱穴はⅣ層上面で止まっていた可能性もある。柱痕・柱材なし。堆積状況：単一層。Ⅲ a 層と同質の黒色土が堆積。遺物出土状況：なし。時期：不明。Ⅲ a 層上面から 18 世紀代の近世陶磁器が数点出土したことから、近世の可能性が高い。

ST02（第12図 PL2）【1区 II Q3グリッド】

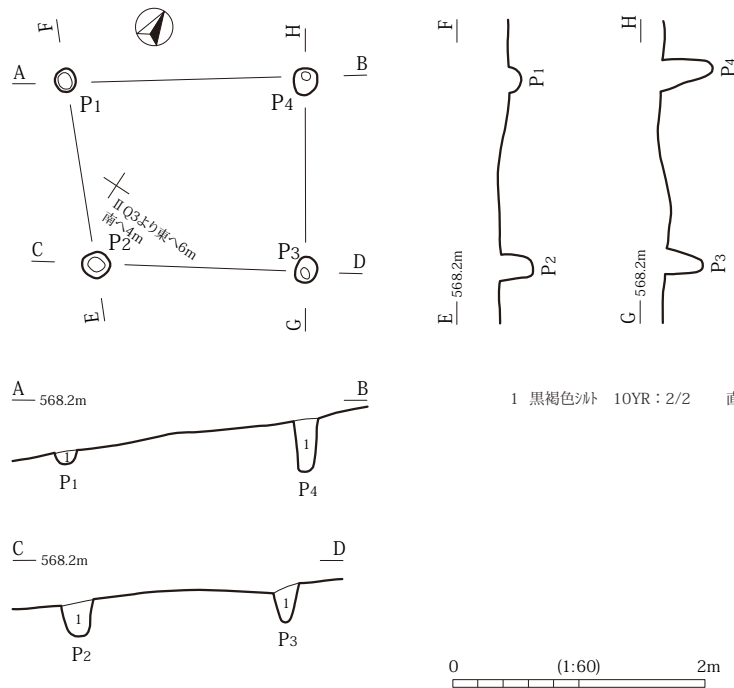
位置：1 区東側に位置し、谷底部へむかう西斜面にある。重複：なし。検出：Ⅳ層（褐色シルト）上面で検出した。規模・形状：桁行、梁行不明の 1 間×1 間の建物。すぐ東側が調査区外で、建物が広がる可能性あり。主軸：N 32° W、ST01 とほぼ同じ。床面積：1 間×1 間建物として 2.88 m²。柱穴：いずれの柱穴も、やや方形を呈し、一辺約 20 cm である。底面レベルはほぼそろそろ。柱間寸法は、東西方向 1.44～1.53 m、南北方向 1.65～1.88 m。柱痕・柱材はなし。堆積状況：単一層。Ⅲ a 層と同質の黒色土が堆積。遺物出土状況：なし。時期：不明。覆土は、Ⅲ a 層基調であること、ST01 と軸方向が同様であることなどから、近世の可能性が高い。

ST01

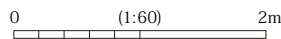


1 黒色シルト 10YR: 2/1 0-4粒を3%混入 まれに直径3cm大の礫があるが混入は少ない
粘性なし しまりややわるい

ST02



1 黒褐色シルト 10YR: 2/2 直径1cm以下の0-4粒ロク10%混入 粘性なし しまりよい



第12図 1号・2号掘立柱建物跡

ハ 溝 跡

検出段階において、溝跡として遺構番号をつけたのは8条あった。その後調査の中で、近代遺物の出土や聞き取り調査で最近まで使われていた道跡と判明するなど遺構として扱わなかったものを除き、近世以前としたのは3条である。

SD02 (1区全体図第7図 PL2) 【1区 II Q18・23グリッド】

位置：1区南側に位置し、谷の底部にある。重複：なし。現代の攪乱により、北端部は壊されている。
検出：IV層上面で検出。規模・形状：幅0.25～0.94mで、南東から北西方向に、傾斜にそってほぼ直線的に流れている。調査区外から続いており、調査区内で長さ7.4m確認された。深さは最深で10cmである。底部に凹凸がみられる。堆積状況：III a層基調の黒褐色土である。遺物出土状況：なし。時期：出土遺物がなく、明確な時期は不明。ただし、検出面の遺物や埋土から近世以前の可能性が高いと考えた。性格：この付近は常時湧水が激しく、斜面下部へ水を逃がす必要があり、その際の溝と思われる。近くに同じく傾斜を意識してつくられたST01、02があり、関係も考えられるが、結びつける要素はみつかっておらず、断定はできない。

SD03 (第13図 PL2) 【2区 II L1・2グリッド】

位置：2区西側に位置し、尾根の西斜面にある。重複：なし。検出：斜面上部はV層上面、下部はVI層上面にて検出。規模・形状：傾斜に沿って、東から西に、直線的である。長さは10.5mであるが、東側の尾根上部は削平されているため、溝はさらに斜面上部まで続いていたと思われる。深さは最大60cmを測る。幅は検出面で2.3～0.5m、底部で0.2～0.3mを測り、底部はかなり狭く、断面はきれいなV字形を呈する。堆積状況：2層に分層された。1層は炭化物を多く含む暗褐色土で、2層は砂質が強く、細礫の混入が多い。遺物出土状況：平安時代の土師器杯底部、中世内耳土器片、近世(17世紀後半～18世紀前半)の唐津産すり鉢底部が出土した。時期：近世の可能性が高い。地元での聞き取り調査で、この尾根は昭和になってから造成され、もっと高かった中央部を削り、裾の部分にその土を盛り土して、現在のようならかな斜面になったことが判明した。ただしその際の盛り土は、暗褐色土と黄褐色ロームのブロック状混合で、溝跡の埋土の上にかぶっていることがトレンチで確認されている。このため、この溝は削平以前には埋没していたことは確実であり、出土した最新の遺物から、近世後半に埋没したものと考えた。性格：底部付近は砂質が特に強く、水が流れた様子がみられる。この尾根部では常時水の湧く状況はみられず、降雨時などに尾根頂部からの水を逃がすための溝と思われる。自然流路の可能性もある。

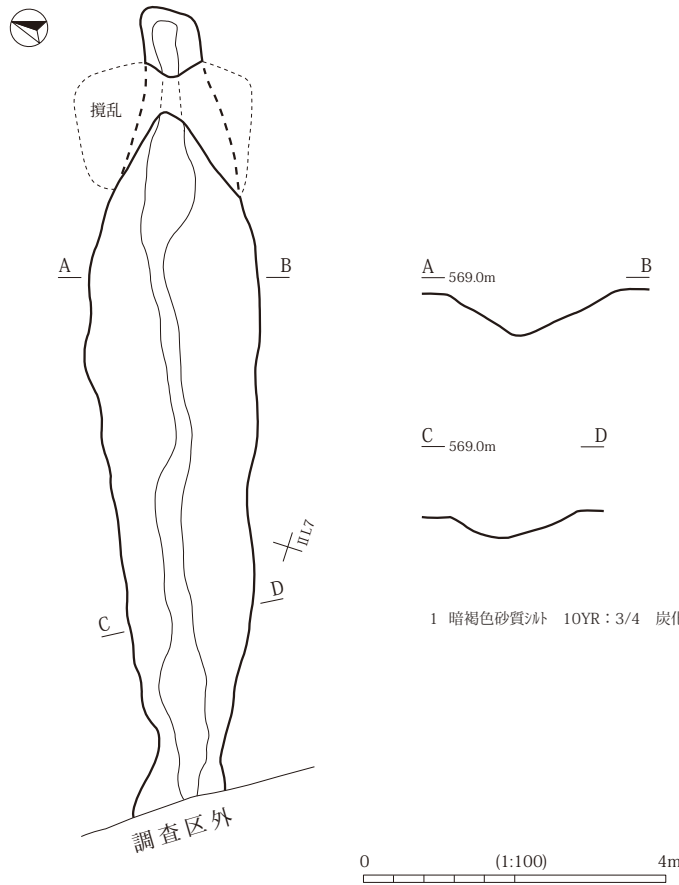
SD05 (3区全体図第8図 PL2) 【3区 I V12・17・18・23グリッド】

位置：3区南側に位置し、谷の底部にある。重複：3つのロームマウント(風倒木痕)を切るが、遺構との切り合いはない。検出：IV層上面で検出。規模・形状：幅最大60cm、南東から北西方向に、傾斜にそってほぼ直線的に流れている。調査区外から続いており、調査区内で長さ16.2m確認された。深さは最深で20cmである。堆積状況：II b層基調の黒褐色土である。遺物出土状況：なし。時期：出土遺物がなく、明確な時期は不明である。埋土の基調となっているII b層は、縄文～近世に至る遺物包含層であり、それに覆われていることから、近世に埋没したものと判断した。

ニ 土 坑

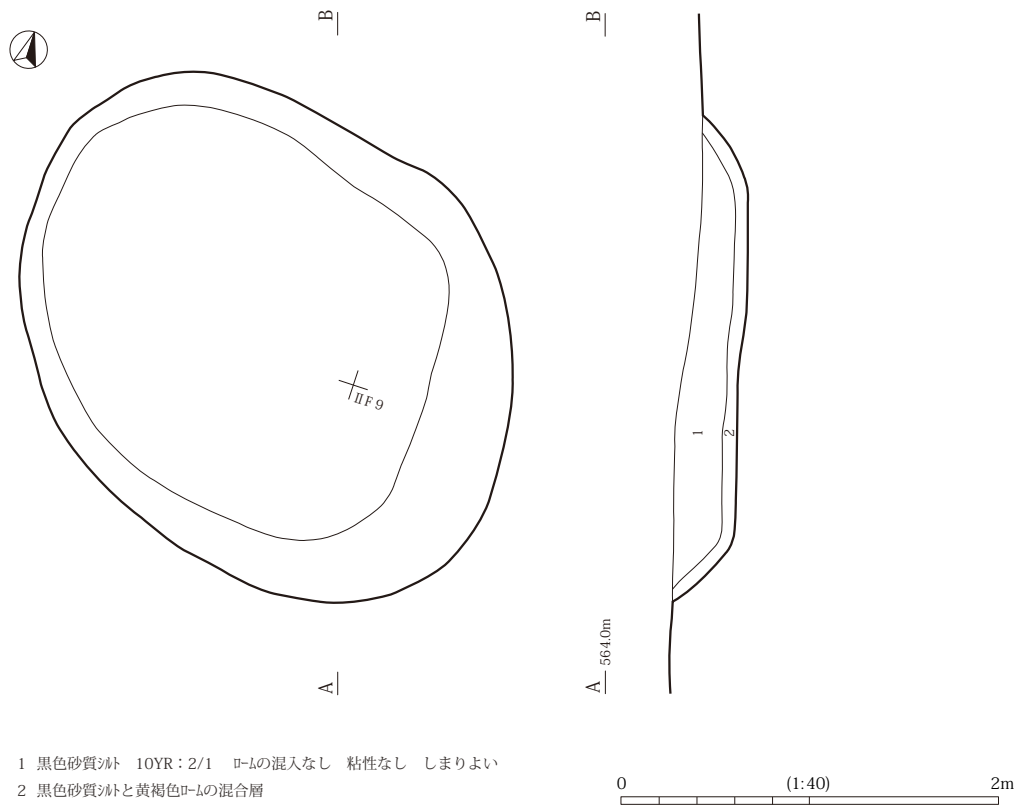
検出段階で、埋土が耕作土基調や現代遺物がみられたものを除き、52基に遺構番号をつけ調査した。

SD03



1 暗褐色砂質シルト 10YR:3/4 炭化物少量混入 粘性なし しまりふつう

SK46



1 黒色砂質シルト 10YR:2/1 R-Lの混入なし 粘性なし しまりよい
 2 黒色砂質シルトと黄褐色R-Lの混合層

第13図 3号溝跡・46号土坑

その後調査の中で、近代遺物の出土で遺構として扱わなかったり、掘立柱建物の柱穴となったものを除き、平安～近世の土坑としたのは43基である。そのうち時期が明らかなのは、平安時代に比定されるSK46の1基のみであった。

他の土坑については、遺物が出土した土坑がほとんどなく、遺物による時期決定は困難であった。このため、埋土による分類を試みたが、数種類に分類できる埋土と出土遺物の間に相関関係は見出せず、時代の判別は出来なかった。

以下に記述するSK46以外の土坑の詳細については、位置・規模・形状・遺物などを記載した遺構一覧表を作成し、本書付録CDに収録した。そちらを参考にされたい。

SK46 (第13図 PL2) 【2区 II F3・4・8・9グリッド】

位置：2区西端に位置し、西斜面の尾根裾部近くにある。重複：なし。検出：Ⅲa層上面にて検出。2区では斜面裾部にのみ、Ⅲa層が削平されずに残っていた。規模・形状：長軸303cm、短軸238cmの楕円形で、深さは39cmを測る。底部は平坦である。断面は逆台形を呈する。長径方向はN53°Wで、傾斜との関係はみいだせない。堆積状況：2層に分層された。1層はⅢa層を基調とする黒色土である。2層は1層と地山であるローム土との混合層で、壁・底をほぼ均一に全面覆っていた。堅く叩き締めた感じはないが、土坑を掘った際、壁・底を整えたと思われる。遺物出土状況：平安時代の土師器甕、内面黒色土器杯の破片、縄文時代の磨製石斧の刃部が見つかった。磨製石斧については、覆土への流れ込みと考えられる。時期：出土土器から平安時代前期(9世紀初頭～後半)に比定される。性格：不明。遺構内及びその周辺にも柱穴・焼土など遺構の性格を推定できるようなものは見当たらない。

(2) 遺物

イ 土器

西四ツ屋遺跡からは、平安時代から近世に至る土器・陶磁器が出土した。総出土量は少ないが、点数比・重量比において、ともにその9割以上を平安時代の土器が占める。

以下、出土土器・陶磁器を時代ごと、遺構別に記述する。

a 平安時代

平安時代土器は、そのほとんどが、1軒だけ見つかった竪穴建物跡SB01からの出土である。図化した遺物は、SB01出土が16点、SK出土2点、遺構外1点の計19点である。

SB01 (第14・15図 PL17・18)

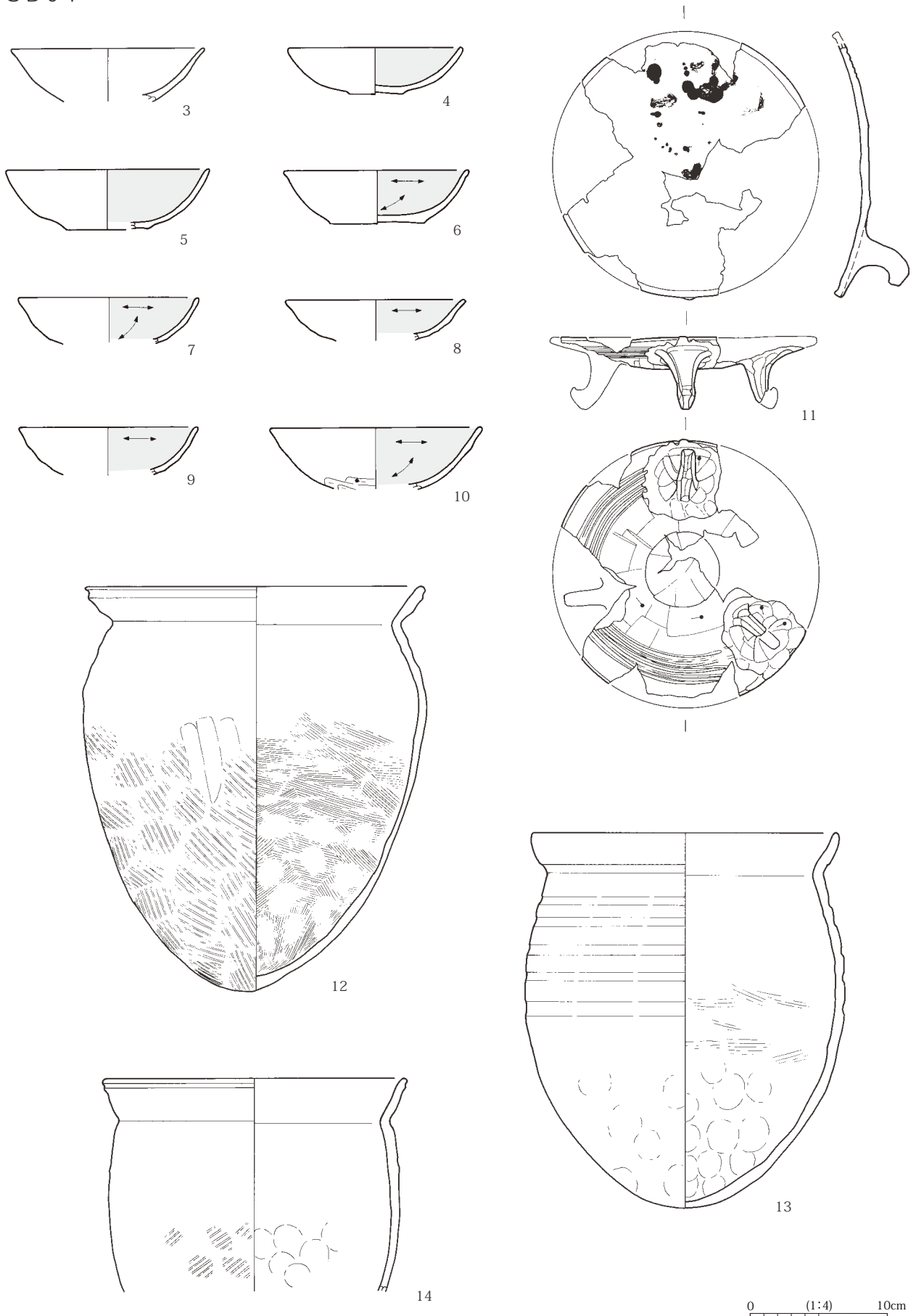
出土土器のほとんどがカマド周辺から出土した。

4～10は内黒土器杯である。うち6点がカマド左右のピット出土で、4～6・10がピット3、7・9がピット4からである。6～10は内面にミガキがみられ、口縁部から胴部上半は横ミガキ、胴部下半から底部にかけては部分的に放射状ミガキがみられる。暗文を意識したのかもしれないが、残存部が少ないため断定はできない。4・5・8は風化が激しく、黒色処理が剥奪している。3はピット3出土遺物で、黒色処理はされていない土師器杯である。

土師器甕は、径が測定でき反転図化の可能な7個体を図化した(12～18)。

12は唯一ほぼ破片全部が残っており、その他は残存率50～10%である。12は、北信地方で多くみられるロクロ成型でタタキの施された砲弾型の長甕である。内部にあて具痕も残っている。その他の甕もロ

SB01



第14図 1号竪穴住居跡出土土器(平安)

ク口成型である。また、16は胴部下半に口縁部に向かって、18は肩部に横方向にケズリが施されている。特徴的なものとしては、13の砲弾型土師器甕であるが、胴部上半に1～2cm間隔の沈線がみられ、ロク口成型の際に自然についたとは思えないほどしっかりした沈線で、何らかの文様づけを意識したとも考えられる。17にも同じような沈線がある。接合はしないが、13と同一個体かもしれない。

SB01からは、他に接合できなかつた土師器甕の破片が1988g出土している。ほぼ完形の土師器甕10が2045gなので、ほぼ1個体分の破片量である。参考までに、内黒土器杯破片は145g、土師器杯破片は131g出土している。隣の表町遺跡出土の完形内黒土器杯が220gなので、こちらはいずれも1個体分に満たない量であった。

特出遺物としては、11の土師器三足盤が出土した。P4及びカマド前にかけての床面直径1mほどの範囲にちらばって見つかった。残存率は50%ほどで、3足中1足はなかつた。この器種は、畿内や東海地方でつくられた灰釉陶器や緑釉陶器にみられ、その他の地方でみられるものはその模倣と考えられている。県内の土師器三足盤としては、管見によれば佐久市下曾根遺跡の出土例1件（佐久市教委2001）しかない。

SK01（第15図）

19は須恵器杯の底部である。色はかなり白くなっており一見軟質須恵器のような外観だが、焼成はかなり良好で須恵器とした。流れ込み遺物の可能性もある。

SK46（第15図）

20は内黒土器杯で、内面にミガキがみられる。風化が激しく、黒色処理が剥奪している部分がある。この遺構からは、図化はできなかつたが、土師器の破片も出土しており、遺構に伴う遺物と判断している。

遺構外（第15図 PL18）

21は須恵器長頸壺の頸部である。1区トレンチ調査中にⅢa層（黒色土）中からみつかった。外面には自然釉がみられる。9世紀頃の遺物と比定される。

平安時代出土土器全般について分析すると、最も多いのが土師器甕類で、次に土師器杯・内黒土器杯が同量程度出土している。須恵器は杯が1片のみである。灰釉陶器は全くない。また、土師器・内黒土器について碗にあたる器種は全くみられない。

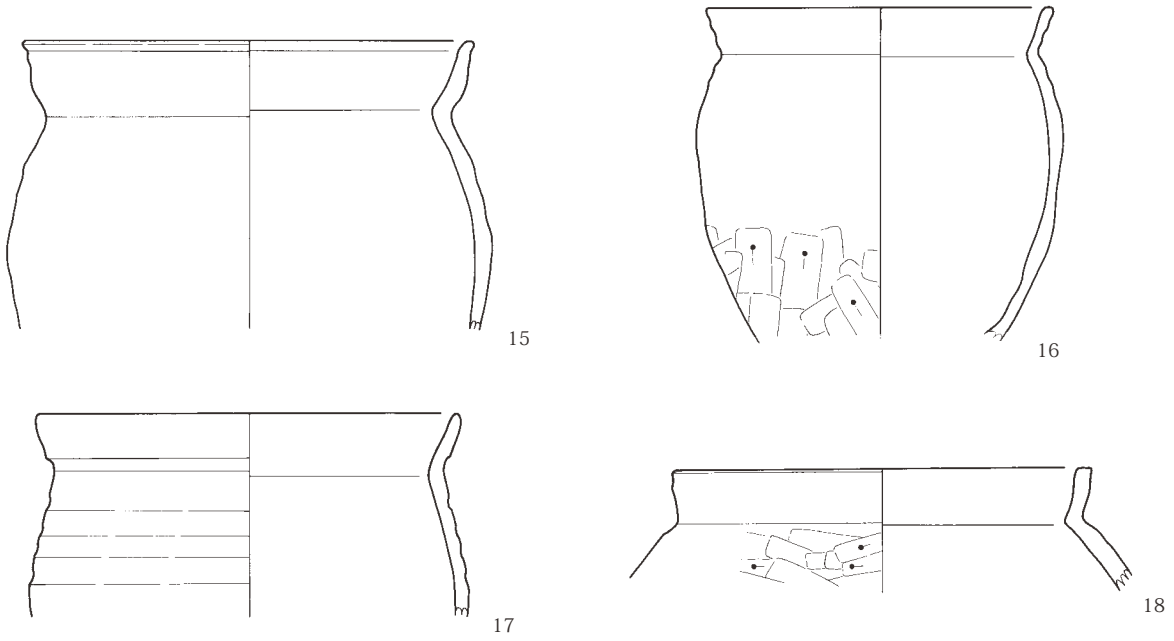
平安時代の北信地方出土遺物に関しては、上信越道発掘調査において善光寺平南部における土器編年が検討されている（鳥羽英継2000・上田典男2000）。それによると、黒色土器などにおける碗器種の出現、灰釉陶器の出現は、共に9世紀前半とされている。一方食膳具における須恵器の消滅は、9世紀中期～後半とされている。

これらのことから、本遺跡における平安時代土器の時期は9世紀初頭～9世紀後半の可能性が最も高いと考えられる。

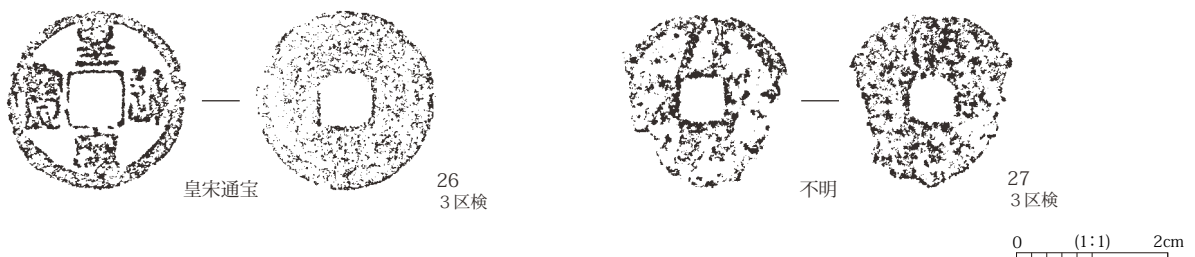
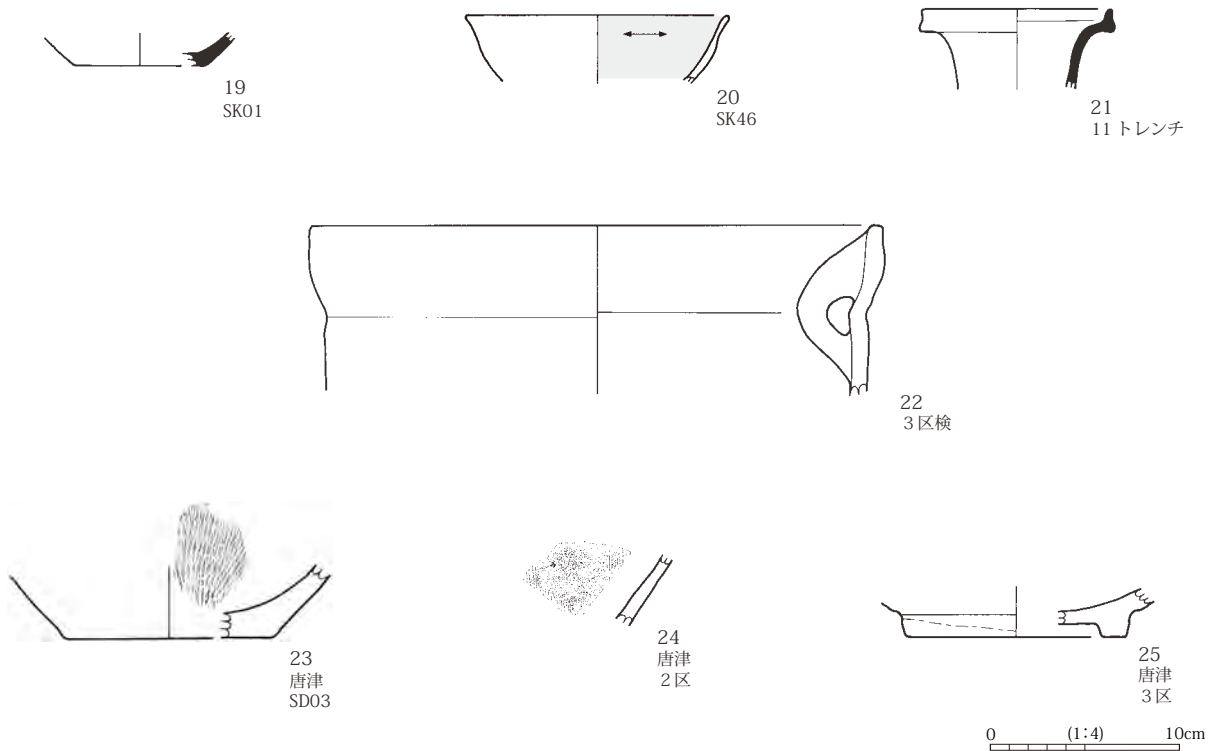
b 中世（第15図 PL18）

中世の土器・陶磁器は、全部で11点出土した。青磁1点、古瀬戸4点、内耳土器6点である。青磁は現代の溝から出土し、その他はすべて遺構外出土である。図化した遺物は、内耳土器の耳部分1点で、その他はすべて小破片であった。

SB01



SB以外



第15図 1号竪穴住居跡・SB以外出土土器・銭貨（平安・中世・近世）

22 は内耳土器の耳部分である。3 区東側斜面に堆積していた、縄文～近世の遺物包含層であるⅡ b 層中からみつかった。遺構には伴わない。

長野県内における内耳の編年については、口縁部の形状が、時代とともに、「く」の字状外反→直立→やや内湾気味という流れが指摘されている。(野村一寿 1990、市川隆之 2005)22 の口縁はほぼ直立しており、編年の中では、16 世紀前半頃が中心とされている。後述する表町遺跡の内耳土器も多くは同様の形状であり、時期は 15 世紀末～16 世紀前半と比定している。これらのことから、22 も同年代頃と考えている。

c 近世 (第 15 図 P L 18)

近世の陶磁器は、全部で 28 点出土した。土坑からの出土はなく、溝状遺構か遺構外からの出土である。遺物の産地は、ほとんど唐津産・伊万里産で占められている。時期は、17 世紀前半～18 世紀後半まで広くみられる。いずれも小破片であるが、底部径がわかる例、すり目のわかる例など 3 点を図化した。

23 は、すり目の残る唐津産すり鉢の胴部で、17 世紀代に製作されたものである。24 は、17 世紀後半～18 世紀前半に製作された唐津産すり鉢である。底部付近で、すり目が幾重にも重なって刻まれている。刻み目の単位は、残存範囲が少なく判別できない。表面は、刻み目は磨り減っており、かなり使用されていたものと思われる。25 は、ハケ目をもつ唐津産鉢の底部である。時期は、江戸時代を通じて広くみられるもので、特定は困難である。

西四ツ屋付近の近世の様相については、遺跡のすぐ東側を江戸時代初期に整備され北国街道が南北に走っており、街道沿いには近世初期に整備されたとされる四ツ屋集落がある。

遺跡は集落のすぐ裏に位置し、現在でも遺跡付近の所有者は、四ツ屋集落の住民で、住宅と地続きの畑などが広がっている。出土した近世陶磁器はいずれも小破片で形あるものはなく、近世以来の四ツ屋集落の住民が、壊れた生活道具を廃棄していたものではないかと考えられる。

ロ 金属製品 (第 15 図 P L 18)

古銭が 2 点出土した。ともに遺構外出土で、26 は縄文から近世の遺物を包含するⅡ b 層から、27 は 3 区検出面 (Ⅳ層上面) からみつかった。

26 は皇宋通宝である。銭文は篆書体で、1039 年鑄造開始の北宋銭である。27 は周囲が欠損している上に磨耗が激しく判読不能である。直径の大きさから 26 と同様の北宋銭と思われるが、断定できない。

北宋銭などの渡来銭は、近世初期、寛文 10 (1670) 年の渡来銭使用禁止令がだされるまで広く使用されており、時期については中世～近世初期の遺物としかいうことはできない。

第3節 小 結

西四ツ屋遺跡には、宅地化や圃場整備などをうけていないなだらかな丘陵部があり、古い地形がそのまま残っている。このことから、調査開始にあたり旧石器時代や縄文時代などの遺構発見に期待を抱いていた。しかし、概期の遺構は、全くみつからなかった。この付近は、日当りは良好だが水利の便が悪い。縄文時代集落は、よりよい立地条件の場所に展開したのだろう。牟礼周辺で確認されている縄文時代集落（住居跡）は、いずれも川の近くである。さらに後述する表町遺跡の陥し穴列の発見により、縄文時代はこの一帯が狩猟場とされていたことが判明した。

平安時代は、前期の住居跡1軒が確認された。これまで旧牟礼村で確認された平安時代住居跡は、同時代の73遺跡中、丸山遺跡で3軒、前田遺跡4軒、上の山遺跡1軒の計3遺跡8軒のみであった。3遺跡とも川に近く平坦な地形に立地しており、水田農耕に好適な場所である。このことから、平安時代の牟礼の人々は、水田などに隣接した地域に住み着いていたものと考えられていた。

これに対して西四ツ屋遺跡は、水利の便が悪く、水田農耕の好適地とは言い難い。現在でも近くに水田はみられない。しかし、住居跡が確認されたことで、水田農耕が難しい場所にまで、平安時代の人々の生活が及んでいたことが判明した。確認された住居跡周辺部における出土土器の少なさなどから、近くに多くの住居が継続的に営まれていた可能性は低い。単独住居か2・3軒程度の小集落と考えられる。

この住居の性格については、ここに住んでいた人々の生業を考えることが重要と思われる。平安期において、県内各地で山中に立地する遺跡が多く存在し、飯綱山麓でもその存在が指摘されている。そこに暮らす人々の生業については、炭焼きや鍛冶職人、猟師などを想定している（桐原1967）。本遺跡の調査では、近代以降の炭焼き跡がみついている。また、本遺跡南約1kmには、奈良時代末から平安時代前期にかけて須恵器生産が行われた前高山窯跡群がある。前高山窯跡群からは須恵器生産と同時期の製炭窯もみついている。したがって、それらを生業とする人々の住居であった可能性は十分考えられる。

平安期小集落の性格については、律令制の解体と関連づける視点もある。これについては、後述の表町遺跡の平安期集落の成果と合わせて、4章3節小結の項で詳細を述べることにしたい。

平安時代後期以後、近世にかけては、集落が営まれた様子はみられなかった。掘立柱建物跡が2棟確認されたが、いずれも小規模で構造も簡素なため、長期間利用した住居施設とは考えられない。この周辺は、耕作地などとして利用されていたのだろう。

西四ツ屋遺跡の発掘は、発見された遺構や遺物は少なかったものの、特に牟礼の平安時代において、未知な部分を解明する手がかりとして、貴重な成果となった。

第4章 表町遺跡

第1節 遺跡および調査の概要

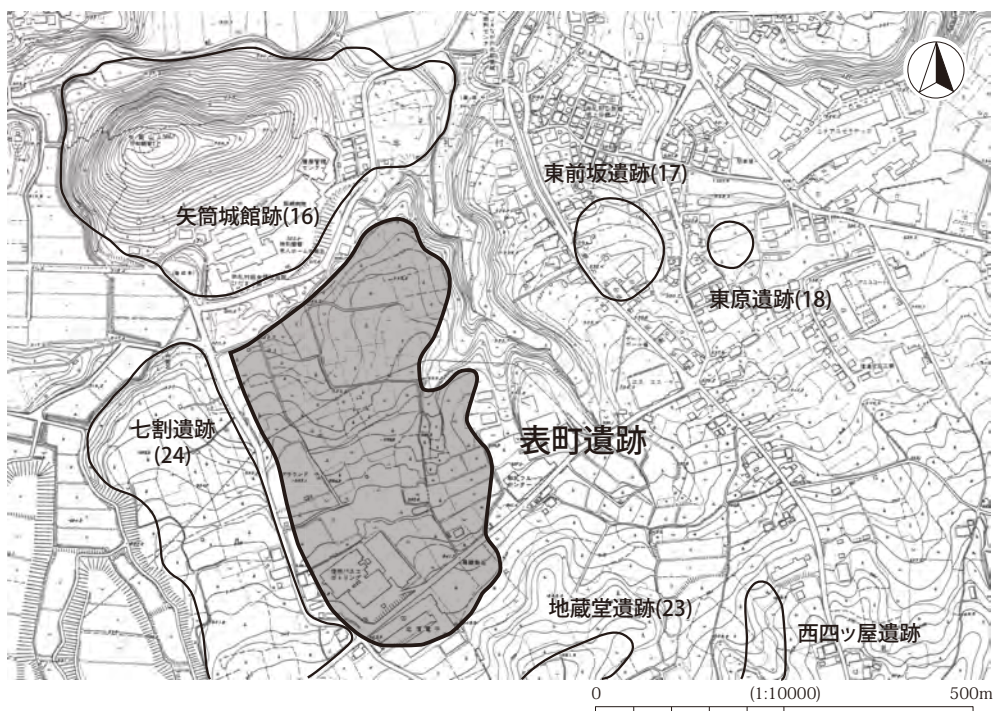
1 遺跡の概要

表町遺跡は、中世矢筒城が築かれた矢筒山の麓へと続く、緩やかな北斜面に立地する。遺跡は、東側と北側が沢水によって削られた崖となっている。西側は隣接する七割遺跡まで、連続した斜面が続いている。遺跡の北側には、外堀とされている谷をはさんで矢筒城館跡がある（第16図）。「表町」の地名は、矢筒城が存在した頃、城の表（南側）に広がる集落があったことからつけられたと、地元では言い伝えられてきた。

表町遺跡は、全体で約131,500㎡の広さがあり、以前から縄文時代の石斧、古代の須恵器、中・近世の陶磁器などが採集されていた。本格的な発掘調査は今回が初めてであるが、平成14年に旧牟礼村教委が今回調査区の約60m東において、試掘調査を行った。その結果、遺物はほとんど出土しなかったが、中世と思われる土坑や直角に曲がる溝などが検出され、大規模な集落遺跡となる可能性が指摘されていた。

現在の土地利用状況は、近年になり民家が数軒できたものの、集落はなく、リンゴを中心とした果樹園が広がっており、一部谷状地形の底部を利用した水田もみられる。

遺跡周辺では、地表面を常時流れる水がほとんどないため、農業に使う水源は、天水と地下水に頼っている。このため、果樹園には畑ごとに井戸が設けられ、散水等に使用されている。また、至るところに大小の溜め池が設けられており、今回の調査区内にも約400㎡、200㎡の大きさをもつ2箇所の溜め池が存在する。ただし、渇水時には池の底が見えるなど水量は豊富とはいえず、この水を利用しての水田耕作は限られた場所のみとなっている。地元に残る明治初期の古地図にも、表町周辺に多くの溜め池が描かれている。これらは、江戸時代以降につくられたものであり、中世以前は水の確保にさらに苦勞したと思われ、周辺は集落の好適地とはいえない。



第16図 遺跡周辺図 (1:10,000)

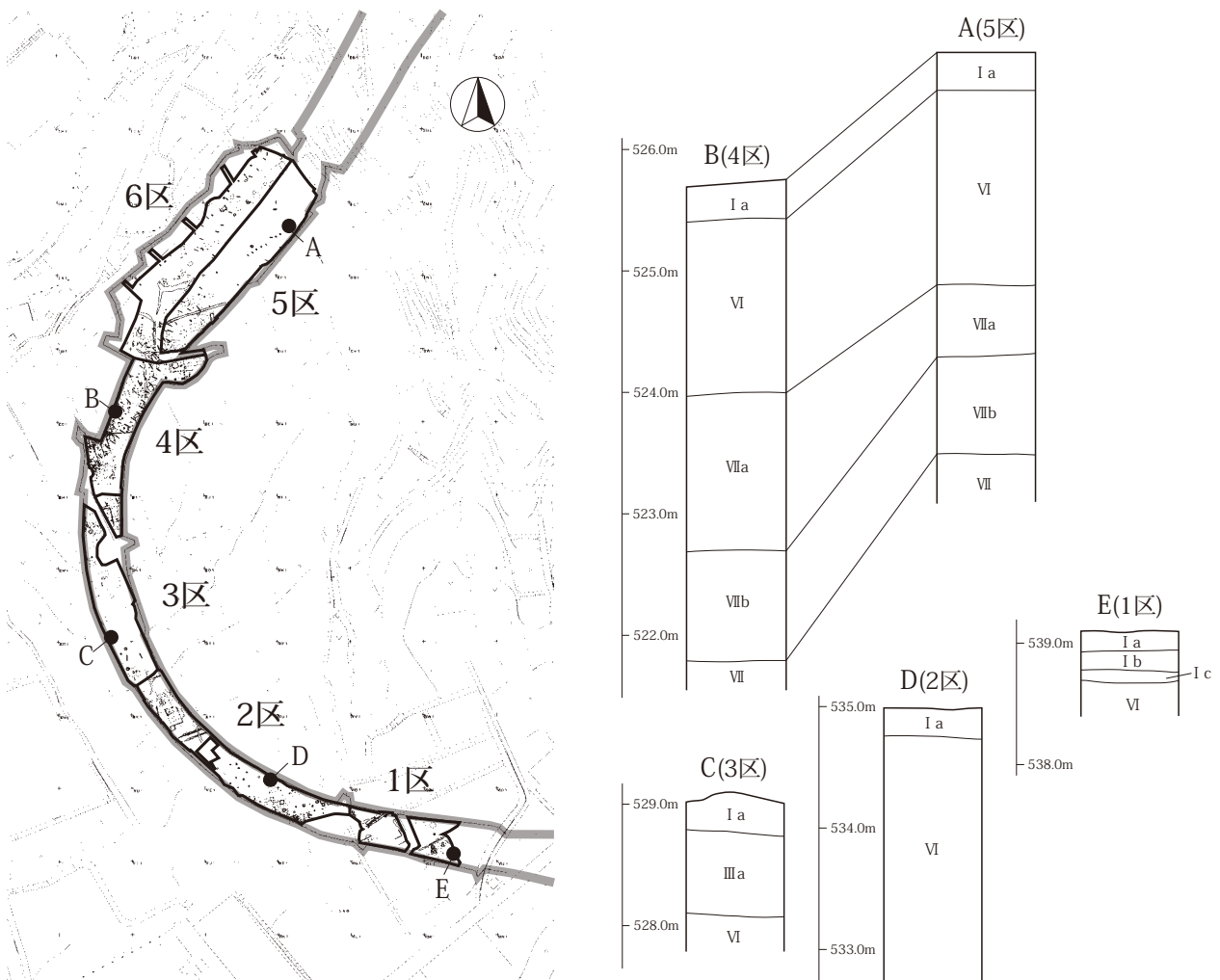
2 調査の概要

今回の調査対象区は、西四ツ屋遺跡と同様道路建設に伴うため、幅約20m・長さ約560mと細長い。その本線部分11,400㎡に加え、北側先線部分にある谷を埋めるための土取り場となった、隣接する畑地4,000㎡もあわせて調査することとなった。このため、調査対象地は、あわせて15,400㎡に及ぶ。これは、表町遺跡総面積の12%にあたる。

調査は、用地買収の進行に伴い南側から順次進め、平成17年度から19年度までの3年間に要した。このため、最も南側の部分から土地利用境や調査年度を考慮しながら、便宜上1区～6区の調査区を設定した。(第17図)

平成17年度は、一部未買収地を残し1区～3区までの調査を行った。ここでは、主に井戸跡・掘立柱建物跡を中心とする戦国時代集落を確認した。井戸跡からは約500年の時を経た数々の木製品が出土した。

平成18年度は、残る本線部分となる4区・5区を調査した。ここでは、前年度調査部分から続く戦国時代集落がさらに北に広がることを確認されたほか、前年は1軒だけだった平安時代竪穴住居跡が6軒追加され、あわせて同時代の掘立柱建物跡もみつかったことから、平安時代この地に集落が存在したことが判明した。さらにこの年の調査では、縄文時代の陥し穴が100基以上見つかった。陥し穴は、規則正しく列をなして、100m以上にわたって並んでいた。本遺跡から北西約3kmにある宮浦遺跡で、縄文時代早期とされる円形の陥し穴が50基ならんで見つかった例があるが、それとは形・配置等異なるタイプの陥し穴であり、貴重な発見となった。



第17図 調査区設定図と基本土層図 (平面1:4000、断面1:60)

平成19年度は、土取り場となる畑地部分と未調査となっていた村道部分のあわせて4,200㎡を調査し、ここを6区とした。この調査では、戦国時代および平安時代の遺構のほか、縄文時代の陥し穴の新たな発見がみつき、さらに縄文人の生活痕跡が広がった。なお、この6区には、歴史的環境で前述したオシャゴンジ跡が含まれている。

調査については、過去の試掘調査において集落遺跡の可能性を指摘されていたことや、古代・中世の土器が表面採集されていたことから、遺構が広範囲に存在する可能性が高いと考え、調査当初より全面表土剥ぎを行うこととした。ただし、検出面を把握する目的で、各地区調査にあたっては、まず重機によるトレンチ掘りを先行した。その結果、調査区ほぼ全域で遺構が確認された。ただ、2区の一部では、湧水が激しいことに加え、遺構・遺物が確認されなかったことから、トレンチ調査のみで終了した部分がある。また、池の底が検出面より低くつくられている溜め池や、作る際に地山を大きく削ってあることが確認された農道部分などは、調査不要と判断した。

検出された遺構は、縄文時代陥し穴133基、平安時代竪穴住居跡9軒、掘立柱建物跡15棟、戦国時代掘立柱建物跡25棟、竪穴状遺構1基、井戸跡27基、近世掘立柱建物跡2棟などである。土坑は、調査段階で1654基検出された。このうち欠番や、現場での検討あるいは整理作業の中で掘立柱建物の柱穴跡としたものを除くと1350基となる。これらのうち83%は遺物が何も出土していないため、個々の時期をすべて明確にすることはできなかった。個々の土坑の詳細は、本書付録CD収録の土坑一覧表・遺構配置図を参照されたい。

攪乱については、西四ツ屋遺跡と同様、遺構を破壊しているもののみ表示した。

なお、6区耕作土中ではあるが、旧石器の可能性が高い石刃1点(第46図、53)が採集された。このため、採集地点付近において、検出面のVI層ロームを掘り下げてみたが、他に遺物の出土はみられなかった。また、全面表土剥ぎ後に行った人力による検出作業でも、VI層ローム上面において、旧石器時代の遺物・ブロックは確認されていない。

3 堆積状況と検出面

表町遺跡の基本土層は、西四ツ屋遺跡での基本土層を踏襲し、新たな観察結果を加えて決定した。表町遺跡で確認された基本土層は以下の通りである。

I層 現表土(盛り土層含む)

I a層 現耕作土(西四ツ屋遺跡にて記述)。

I b層 整地層(西四ツ屋遺跡にて記述)。

以下、近世～現代にかけての水田関連耕作層・整地層、1区・2区に分布。

I c層 黒褐色シルト 10YR3/2 軽石・ローム粒混入少ない しまりふつう やや砂質

I d層 黒褐色シルト 10YR3/1 径1～2cmの軽石・ローム粒5%混入 しまり非常に良い

I e層 黒色シルト 10YR2/1 軽石・ローム粒非常に少ない しまりふつう

I f層 整地層

(II層 表町遺跡では確認されず)

III層 旧表土、腐植土層(堆積時期は近世以前)

III a層 黒色シルト(西四ツ屋遺跡にて記述) 平安時代遺構の埋土主体。

(III b層・IV層・V層 表町遺跡では確認されず)

VI層 黄褐色～灰白色シルト(西四ツ屋遺跡にて記述) ローム主体 水成層と考えられる。

Ⅶ層 腐食土層（ピート層）

Ⅶa層 黒色シルト 10YR2/1 腐食土層 葦などの植物が多く含まれる。

Ⅶb層 暗褐色シルト 10YR3/3 腐食土層 幹や枝など大きめの材木類が多く含まれる。

Ⅷ層 褐灰色 10YR4/1～暗褐色 10YR3/3 粘土質シルト ローム主体 しまり非常によい。

表町遺跡では、多くの場所で現表土（Ⅰa層）を剥ぐと、すぐローム主体のⅥ層となっている。この上面で落ち込みが確認されたことから、この面を検出面とした。

調査区南半分の1区～3区では、このⅥ層が谷状に落ち込んだところがあり、そこに黒色土（Ⅲa層）が堆積していた。Ⅲa層は、透水性が高く、地下からの湧水や上部斜面から流れてくる水の通り道となる。したがって、この層が厚く堆積している部分では、近世以降水田が多くつくられていた。

現地表面はなだらかな斜面に見える場所でも、以前は水田がつくられており、現表土下に造成された階段状の地形が、1区・2区・3区で確認されている。Ⅰc層・Ⅰd層・Ⅰe層が水田耕作に関連する土壌であるが、これらの層の下には、ロームや黒色土などがブロック状になっている整地層（Ⅰf層）がみられ、人為的な造成の跡がみてとれる。整地層には、近世以降現代に至るまでの遺物が含まれており、表町遺跡で確認された水田跡は、すべて近世以降にひらかれたものと考えられ、戦国時代以前の水田跡は確認されなかった。

北半分の4区～6区は、小高い丘陵地形の頂部近くにあたり、Ⅲa層の厚い堆積はみられない。

検出面以下のⅥ層～Ⅷ層は、地理的環境で述べたとおり、牟礼層に比定されると考えている。

Ⅵ層検出面では、斜面下部にむかって、小礫や砂などがつまった自然流路跡が何本かみられた。Ⅵ層内では、砂・シルト・粘土質シルトなどの互層堆積がみられ、筋状の鉄分集積も何本かみられた。これらのことから、Ⅵ層は水成層であり、幾筋もの鉄分集積は、この付近が陸になったり、水中に没したりの繰り返しだったことの現われであるとの見解を得た（野尻湖ナウマンゾウ博物館中村氏、近藤氏）。

Ⅶ層は、腐食土層である。この層は、上下2つに分層でき、上層は葦などの植物が、下層は幹や枝など大きい材木類が多くみられる。中村氏・近藤氏の見解では、上層は水辺などでゆっくり溜まったもので、下層は泥流等で一気に溜まったものである可能性が高いとされた。

この牟礼周辺は火山活動などで一時期鳥居川が堰き止められ、湖となった時期があり、牟礼層はその際の湖底堆積物とされている（長森他 2003）。周辺地質図（第3図）によれば表町周辺がその堆積の境界付近とされ、湖が水辺となっていた時期もあったものと考えられる。

Ⅷ層も牟礼層の一つとして比定される土層である。井戸跡の深堀の際一部で露出したのみであったが、Ⅵ層と同じく水成層と考えられる。

第2節 遺構と遺物

1 概要

表町遺跡では、縄文時代の狩猟場と平安時代の集落、戦国時代の集落が確認された。あとわずかに近世の遺構が確認されている。

縄文時代では、陥し穴 133 基が確認された。確認された縄文時代遺構は陥し穴のみで、住居跡など他の遺構は確認されなかった。平安時代前期になり、遺跡周辺で人々が集落を営み始め、竪穴住居跡 9 軒、掘立柱建物跡 15 棟、土器集中 1 基、焼土坑 1 基などがみついている。本遺跡で最も多くの遺構が確認されたのが戦国時代（16 世紀前半頃）である。掘立柱建物跡 25 棟、竪穴状遺構 1 基、井戸跡 27 基、溝 9 条などが検出された。これら戦国時代の遺構は、南北 350m にわたる今回調査区全体に広がっており、戦国時代この地に大きな集落があったことを物語っている。近世とした遺構は、掘立柱建物跡 2 棟と土坑 2 基のみである。

遺物では、縄文時代土器・石器、平安時代土器・陶器、戦国時代土器・陶磁器・石製品・木製品・金属製品、近世陶磁器・金属製品などがみついている。この中で特筆されるものは、戦国時代の木製品である。井戸跡の底部近くで、水を多く含む泥中に約 500 年近く眠っていたものである。種類のにも、全国でも発見例の少ない白やそりをはじめ、鍬や曲物、漆椀、蒸籠など多種にわたっている。

以下縄文時代、平安時代、戦国時代、近世の 4 時代について、時代順に、遺構・遺物についてまとめて記述する。記述していない遺構・遺物の詳細については、本書付録 CD に遺構・遺物観察表を収録したので参照されたい。

2 縄文時代

(1) 遺構

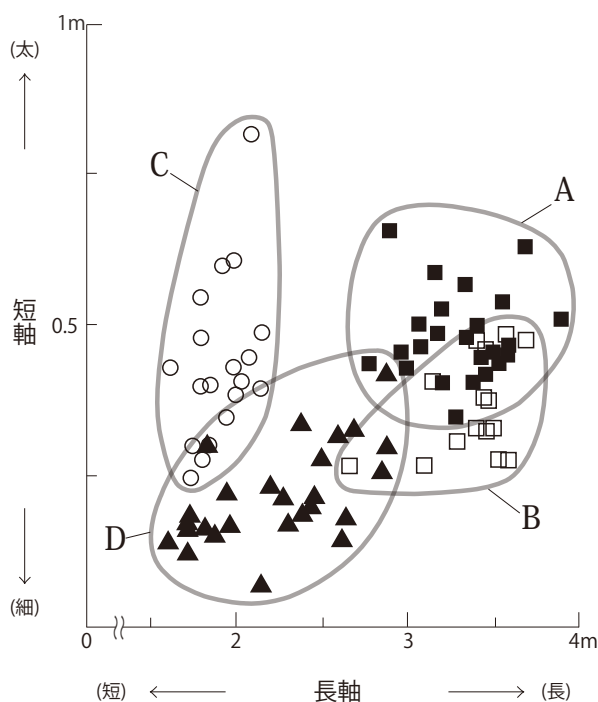
検出した遺構はすべて陥し穴と想定されるものである。これらは平面形により大きく二大別できる。

- ① 上面・坑底とも溝状のタイプ（以下溝状）
- ② 上面・坑底が楕円形・長方形あるいは円形のタイプ（以下楕円形・円形）

溝状には坑底ピットはみられないが、楕円形・円形には坑底ピットを設けるものもある。

①・②は、各々で列を形成する場合が多く、①溝状で構成される列をⅠ群、②楕円形・円形で構成される列をⅡ群、いずれにも属さない陥し穴をⅢ群とした（註1）。属する陥し穴数は、Ⅰ群 91 基、Ⅱ群 38 基、Ⅲ群 4 基である。さらにⅠ群は、列によって、陥し穴の規模・形状に傾向がみられたため、それを考慮し A～D に 4 分類した。分類にあたっては、同様の特徴をもつ列は同分類とした。規模に関し、長軸・短軸に着目してグラフ化したのが第 18 図である。

形状の傾向としては、Ⅰ群 A：長くて太い、



第 18 図 Ⅰ群陥し穴における A～D 分類別規模分布図

I群B：長くて細い、I群C：短くて太い、I群D：短くて細いという特徴があげられる。

想定された列は、I群が19列（A1～3列・B1～4列・C1～5列・D1～7列）、II群が5列（E～I列）となった（第20図～第24図）。想定にあたっては長軸方向のほか、土坑間隔、自然な列線も考慮した。

以下、それぞれの群・列ごとに記述する。なお、個々の陥し穴の詳細については、一覧表（第2表）と、実測図（第25図～第44図）を参照されたい。

I群A：A1～3列に属する24基。（第20・21図 第25～29図 PL9・10）

特徴：長軸2.78～3.90m（平均3.31m）、短軸0.35～0.66m（平均0.48m）、長くて太い形状の陥し穴で構成される。深さは0.44～1.24m（平均0.82m）を測る。短軸断面はV字形かやや底部が広いU字形である。長軸断面はほぼ垂直に掘り込まれたものが多く、袋状を呈するものもみられる。底面はほとんどが平らである。

A1列 位置：5区I S18～4区III C18グリッド。立地：丘陵頂部から谷部へ向かう南西斜面。形状：21基が傾斜にそって弓なりに連なる。列方向：北東—南西。規模：調査区内で90m（西側用地外へ続く）。土坑間隔：3.5m～6.3m。

A2列 位置：5区I S15～5区I S23グリッド。立地：丘陵頂部付近のゆるい西斜面。形状：2基が傾斜にそってならぶ。列方向：北東—南西。規模：調査区内で23m。土坑間隔：23m。

A3列 位置：4区I X7～X10グリッド。立地：丘陵頂部付近のゆるい西斜面。形状：1基のみだが、A1列からの支線ではないか。列方向：東西。規模・土坑間隔：不明、A1列まで19m。

I群B：B1～4列に属する20基。（第21・22図 第29～32図 PL10・11）

特徴：長軸2.67～3.69m（平均3.38m）、短軸0.17～0.48m（平均0.34m）、長くて細い形状の陥し穴で構成される。深さは0.25～1.21m（平均0.68m）を測る。短軸断面はV字形かほとんどである。長軸断面はほぼ垂直に掘り込まれており、底面が凸凹したものが多い。

B1列 位置：5区I S23～4区III C13グリッド。立地：丘陵頂部から谷部へ向かう南西斜面。形状：14基が傾斜にそってほぼ直線状に連なる。列方向：北東—南西。規模：調査区内で80m（西側用地外へ続く）。土坑間隔：4.4m～7.0m。

B2列 位置：3区III H2～III H5グリッド。立地：谷部近くのゆるい西斜面。形状：2基が傾斜にそって直線状に連なる。列方向：東西。規模：調査区内で22m（東西用地外へ続く）。土坑間隔：6.0m。

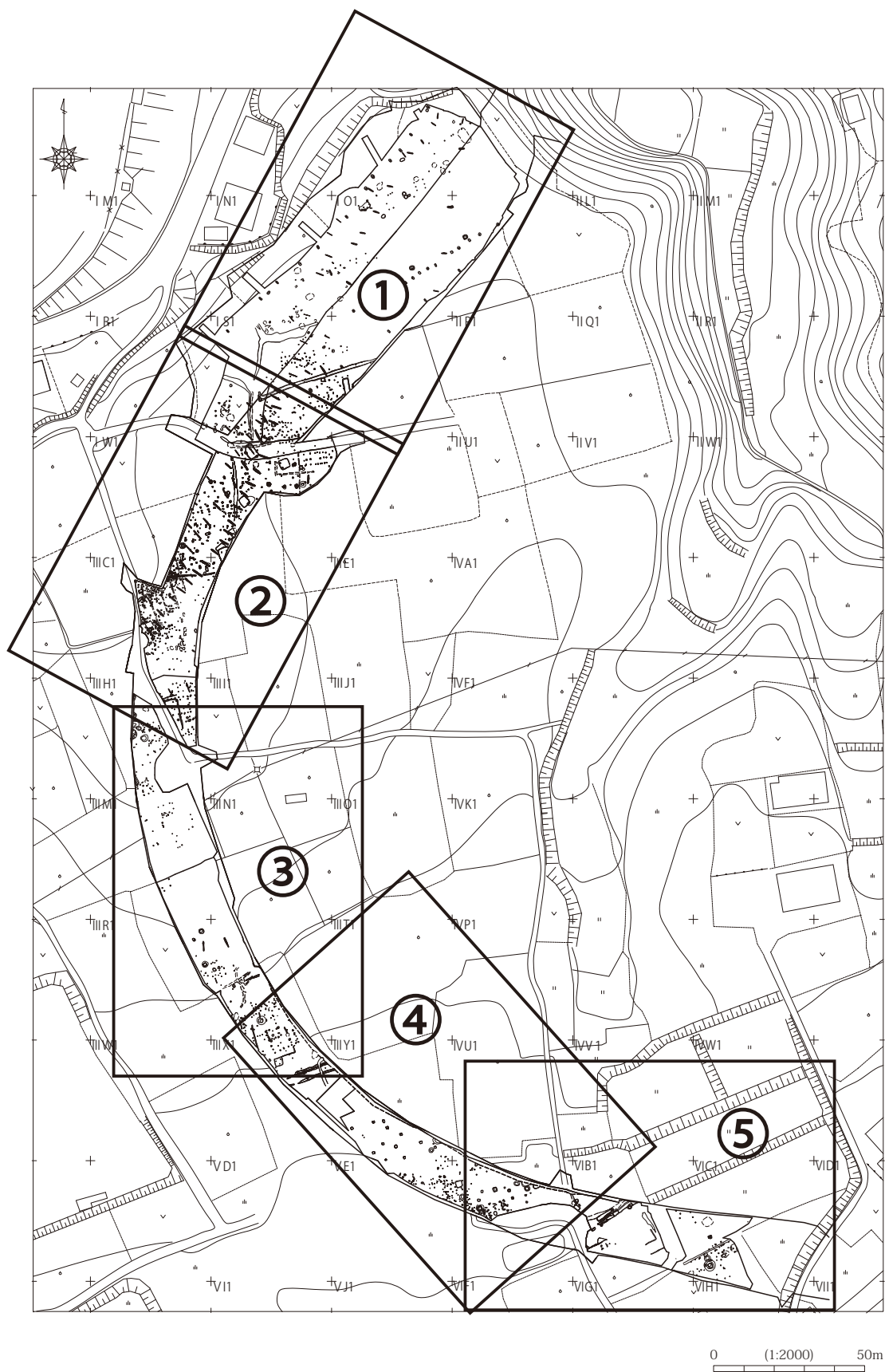
B3列 位置：3区III S2～III R10グリッド。立地：谷部へ向かう北斜面。形状：2基が傾斜に直交して直線状に連なる。列方向：東西。規模：調査区内で19m（東西用地外へ続く）。土坑間隔：7.8m。

B4列 位置：2区III S18～III S22グリッド。立地：谷部へ向かうゆるい北斜面。形状：2基が傾斜に直交して直線状に連なる。列方向：東西。規模：調査区内で16m（東西用地外へ続く）。土坑間隔：7.0m。

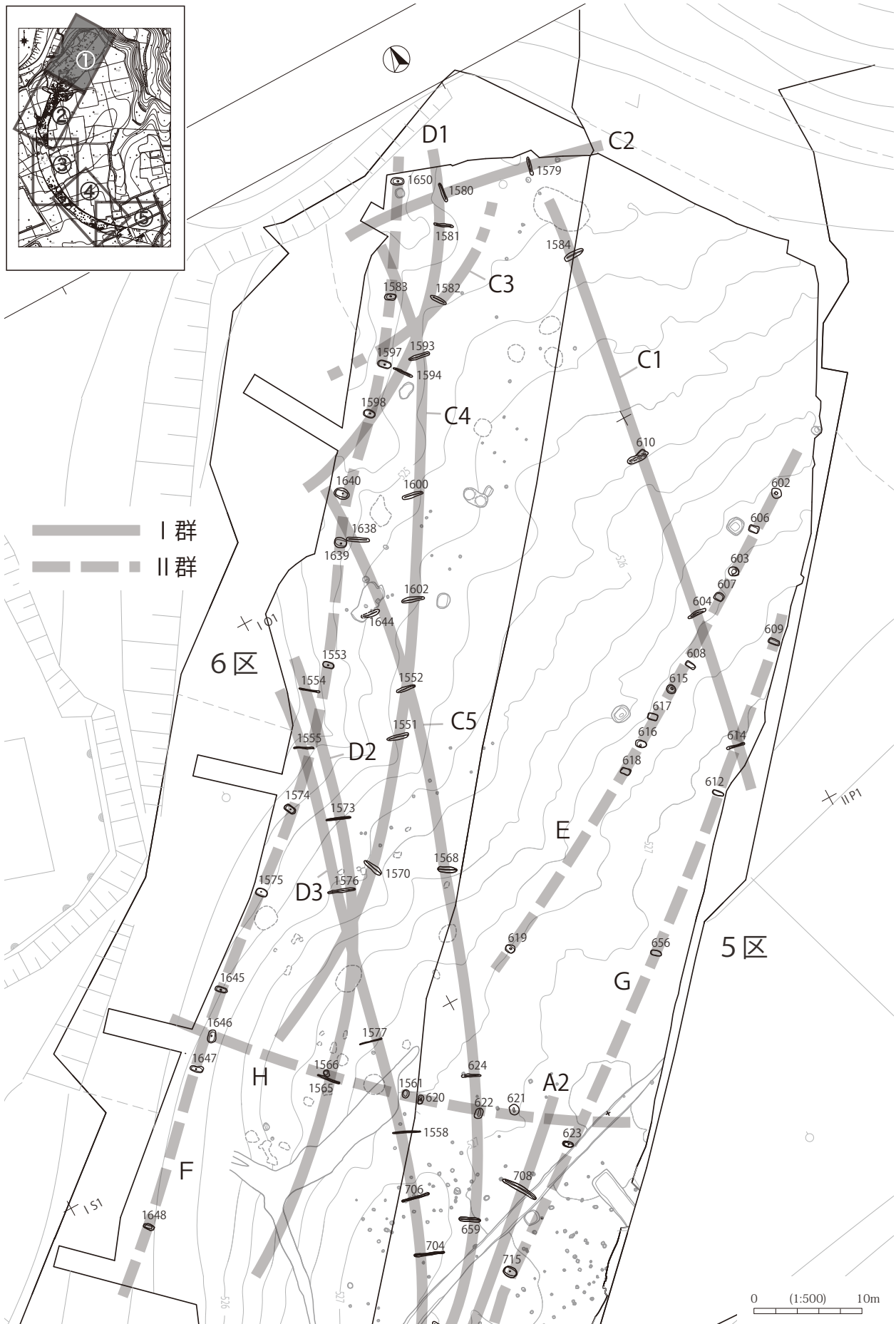
I群C：C1～5列に属する19基。（第20・21図 第32～35図 PL11）

特徴：長軸1.62～2.15m（平均1.91m）、短軸0.25～0.82m（平均0.44m）、短くて太い形状の陥し穴で構成される。深さは0.51～1.22m（平均1.07m）で、ほとんどが1m以上深く掘られている。短軸断面は下半が垂直に近く、上半が開く朝顔形・漏斗形である。長軸断面はほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平らである。

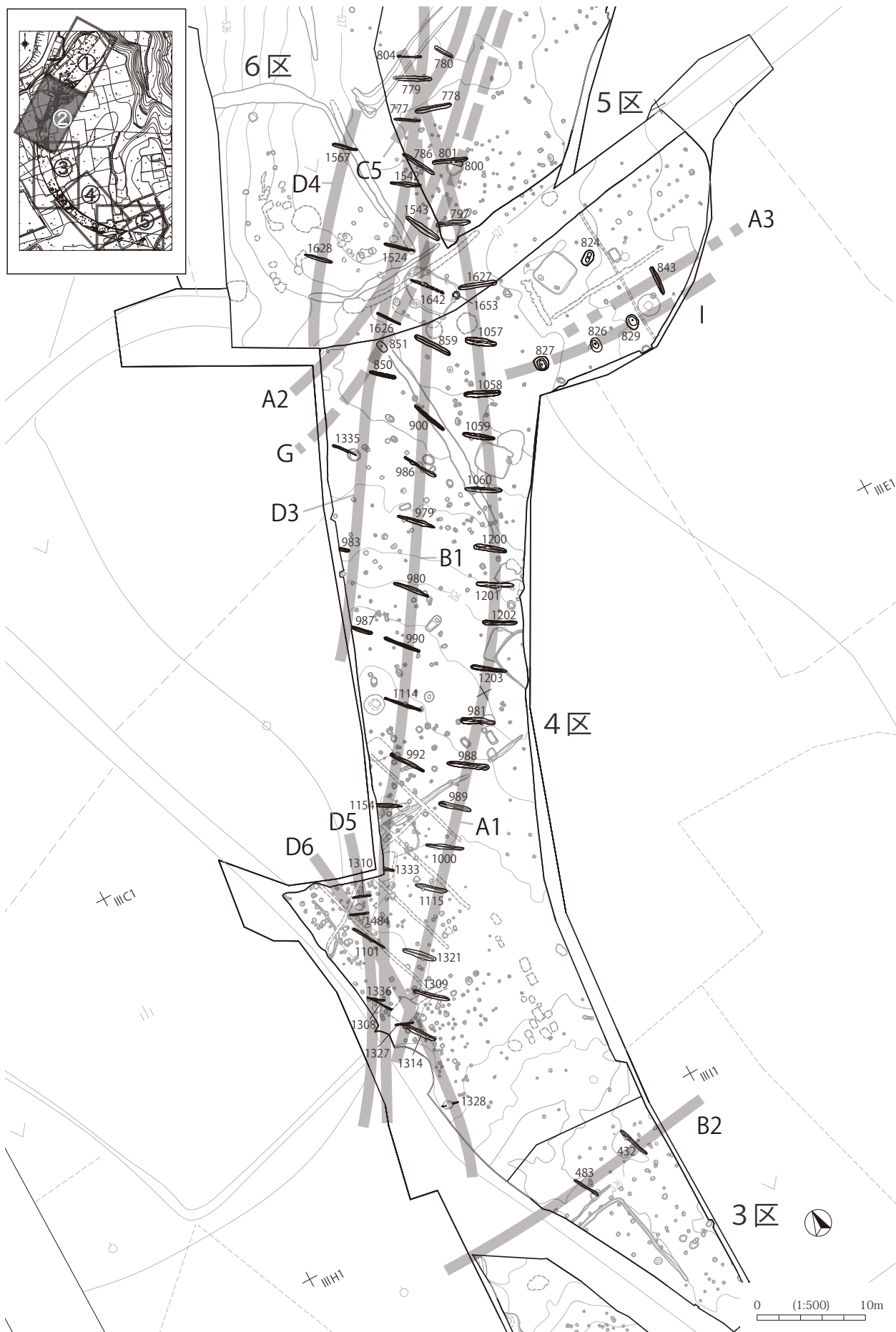
C1列 位置：6区II F16～5区I O20グリッド。立地：丘陵頂部のほぼ平坦面。形状：4基がほぼ直線状に連なる。列方向：南北。規模：調査区内で49m（南側用地外へ続く）。土坑間隔：12.9m～20.0m。



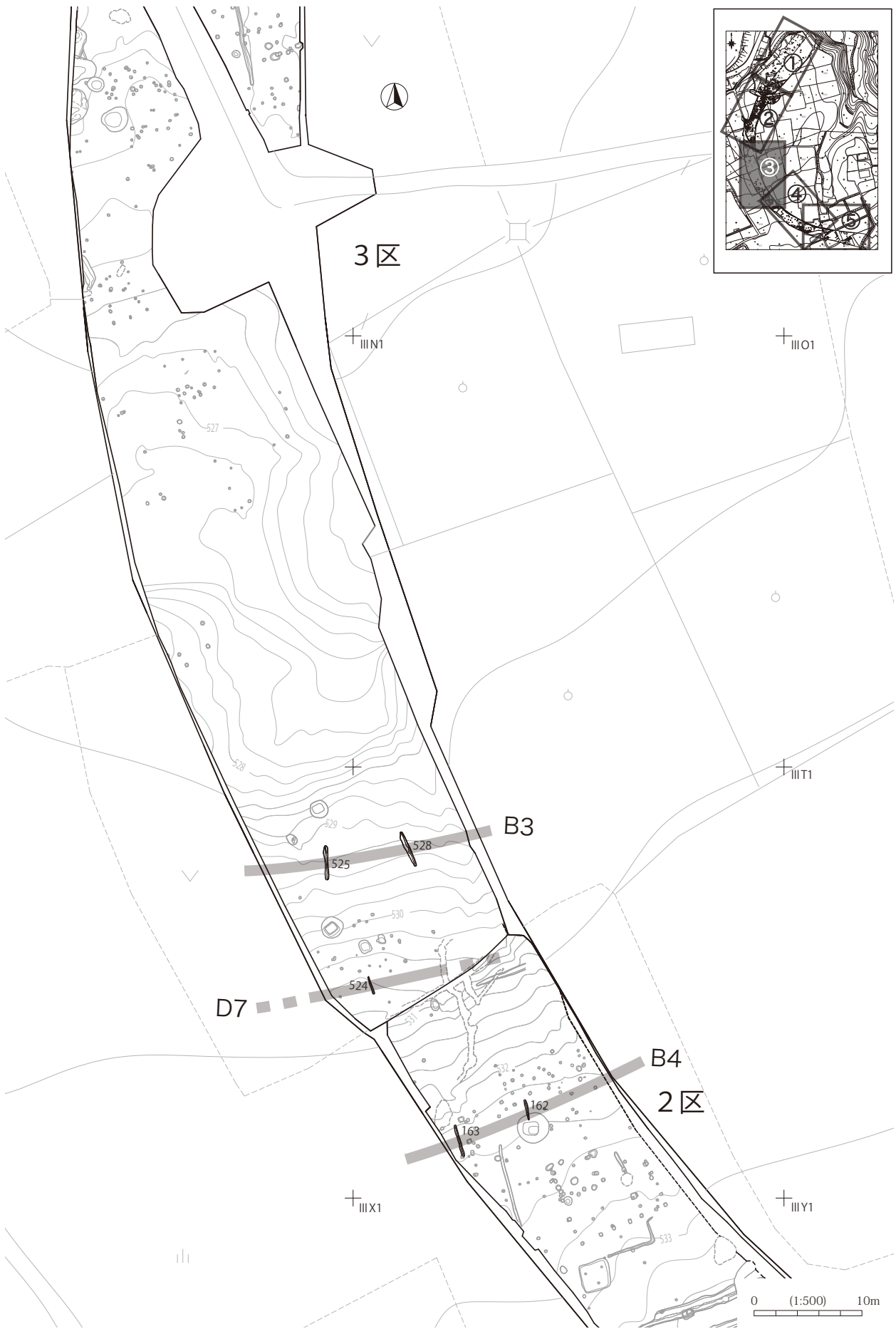
第19図 表町遺跡 遺構全体図(割図)



第20図 表町遺跡 縄文時代遺構全体図①



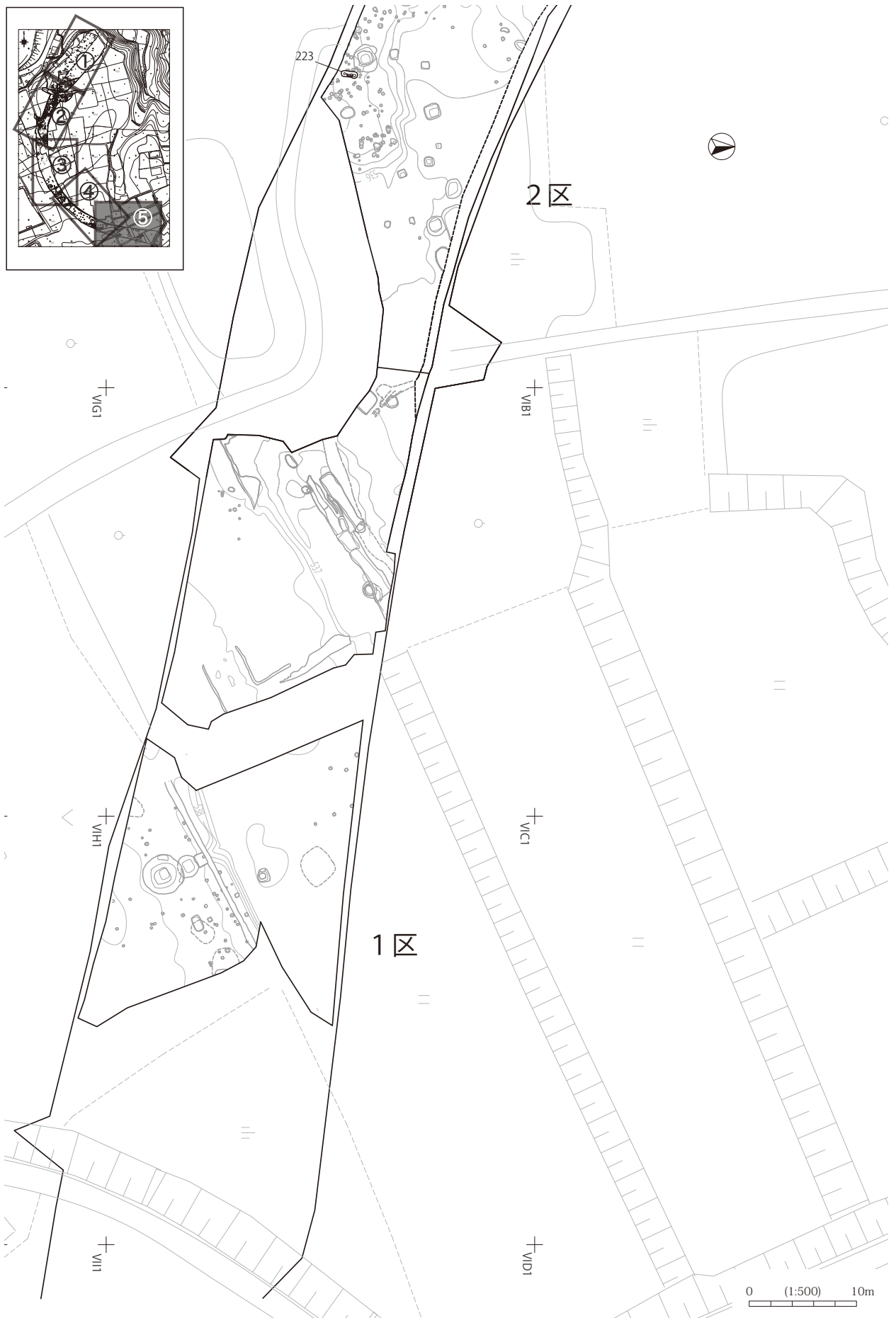
第 21 図 表町遺跡 縄文時代遺構全体図②



第22図 表町遺跡 縄文時代遺構全体図③



第 23 図 表町遺跡 縄文時代遺構全体図④



第24図 表町遺跡 縄文時代遺構全体図⑤

C 2 列 位置：6区 I J9～II F6 グリッド。立地：丘陵頂部の北端、谷へ落ちる崖際。形状：2基が崖に平行して直線状にならぶ。列方向：東西。規模：調査区内で 19m。東西が崖になっており、続くかは不明。土坑間隔：8.4m

C 3 列 位置：6区 I J10～I J18 グリッド。立地：丘陵頂部の北端、谷へ落ちる崖際。形状：1基のみ。崖に平行してならぶと思われる。列方向：東西か。規模・土坑間隔：不明。

C 4 列 位置：6 I J9～I N20 グリッド。立地：丘陵頂部の西端、谷部へ向かう北西斜面。形状：5基が傾斜に直交してやや弓なりに連なる。列方向：北東—南西。規模：調査区内で 58m。土坑間隔：10.0m～12.7m。

C 5 列 位置：6区 I J22～I S19 グリッド。立地：丘陵頂部から谷部へ向かう西斜面。形状：7基が傾斜に直交して弓なりに連なる。列方向：南北。規模：調査区内で 79m（西側用地外へ続く）。土坑間隔：10.3m～22.3m。

I 群D：D 1～7列に属するもの 27 基。（第 20～22 図 第 36～39 図 P L 11・12）

特徴：長軸 1.72～2.88m（平均 2.24m）、短軸 0.08～0.43m（平均 0.23m）、短くて細い形状の陥し穴で構成される。深さは 0.13～0.99m（平均 0.61m）で、1m 以上掘られているものはない。短軸断面は朝顔形・漏斗形が多い。長軸断面は斜めに掘り込まれ逆台形を呈するものが多くみられる。

D 1 列 位置：6区 I J10～I J22 グリッド。立地：丘陵頂部の北端、谷へ落ちる崖際。形状：2基が傾斜に直交して弓なりにならぶ。列方向：北東—南西。規模：調査区内で 34m。土坑間隔：14.2m。

D 2 列 位置：6区 I O1～I S4 グリッド。立地：丘陵頂部から谷部へ向かう北西斜面。形状：3基が傾斜に直交して弓なりに連なる。列方向：南北。規模：調査区内で 34m。土坑間隔：12.5m～24.0m。

D 3 列 位置：6区 I N15～4区 I W20 グリッド。立地：丘陵頂部から谷部へ向かうゆるやかな西斜面。形状：15基が傾斜に直交して弓なりに連なる。列方向：北東—南西。規模：調査区内で 110m（西側用地外へ続く）。土坑間隔：5.2m～14.2m。D 5 列と同一列の可能性もある。

D 4 列 位置：6区 I S17～4区 I S21 グリッド。立地：丘陵頂部から谷部へむかう南西斜面。形状：2基が傾斜にそって弓なりに連なる。列方向：南北。規模：調査区内で 20m（西側用地外へ続く）。土坑間隔：10.7m。D 5 あるいは D 6 列と同一列の可能性もある。

D 5 列 位置：4区 III C8～III C13 グリッド。立地：谷状地形の底部。形状：2基が谷を横切る方向で直線状にならぶ。列方向：南北。規模：調査区内で 14m（西側用地外へ続く）。土坑間隔：9.5m。

D 6 列 位置：4区 III C8～III C23 グリッド。立地：谷状地形の底部。形状：3基が谷を横切る方向で直線状に連なる。列方向：南北。規模：調査区内で 26m（用地外へ続く）。土坑間隔：8.5m～11.0m。

D 7 列 位置：3区 III S11 グリッド。立地：谷部へ向かう北斜面。形状：1基のみ。傾斜に直交してならぶと思われる。列方向：東西か。規模・土坑間隔：不明。

II 群

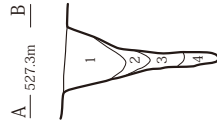
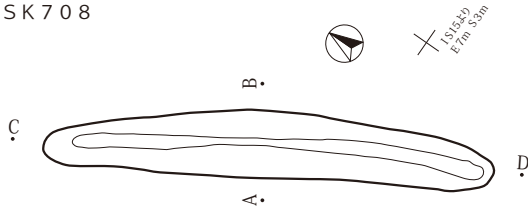
E 列：10 基で構成される。（第 20 図 第 40 図 P L 12・13）

特徴：長方形と円形が交互に並び、同じ形のもが同時期に存在したと考えている。断面は、長方形は逆台形で、円形は壁が斜めである。円形には坑底ピットを一つもつものが多い。

位置：5区 I O21～II K7 グリッド。立地：丘陵頂部のほぼ平坦面。形状：10 基がほぼ直線状に連なる。列方向：北東—南西。規模：調査区内で 49m。土坑間隔：2.7m～19.3m。

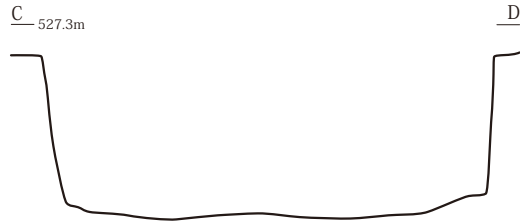
I群A

SK708

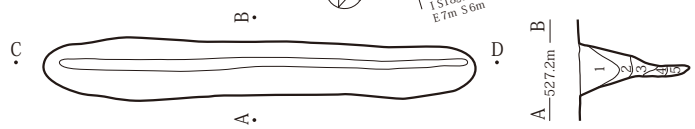


SK708

- 1 黒色シルト
- 2 黄褐色シルト
- 3 暗褐色砂質シルト しまりわるい
- 4 黒褐色シルト



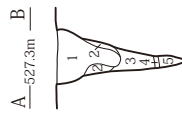
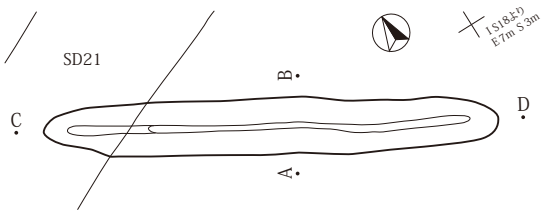
SK778



SK778

- 1 黒色シルト
- 2 褐色シルト
- 3 黒褐色シルト
- 4 にぶい黄褐色シルト
- 5 黒色ローム しまりわるい

SK779

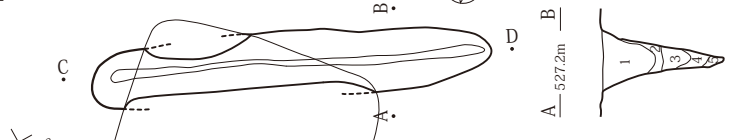


SK779

- 1 黒色シルト
- 2 褐色シルト
- 3 にぶい黄褐色シルト
- 4 黒色シルト
- 5 暗褐色粘土質シルト しまりややわるい



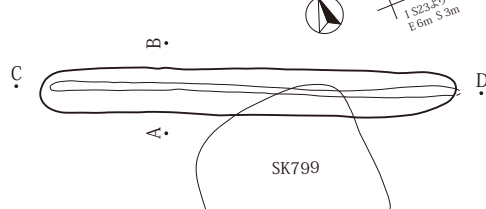
SK797



SK797

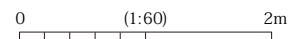
- 1 黒色シルト
- 2 褐色シルト
- 3 黒色シルト しまりわるい
- 4 暗褐色シルト
- 5 黒色ローム しまりわるい

SK801



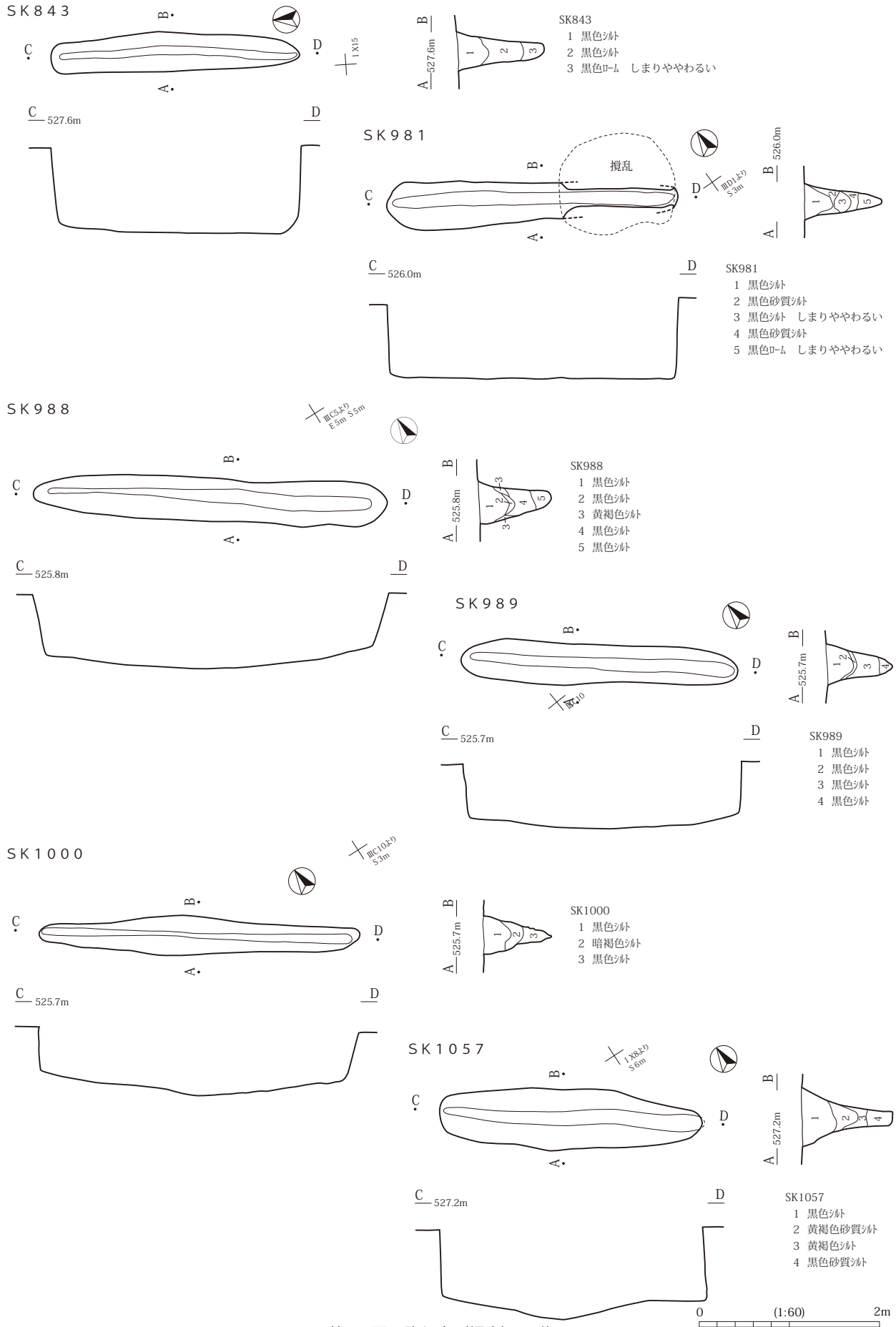
SK801

- 1 黒色シルト
- 2 褐色シルト
- 3 灰黄褐色シルト
- 4 暗褐色シルト
- 5 黒色ローム しまりわるい



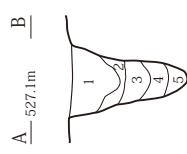
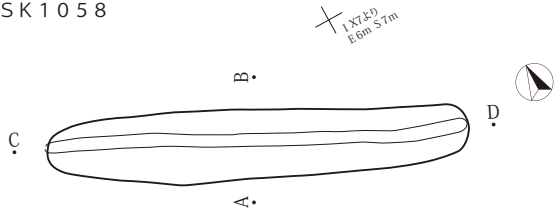
第25図 陥し穴(縄文) I群A

第4章 表町遺跡



第26図 陥し穴（縄文）I群A

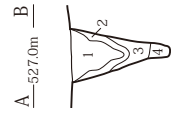
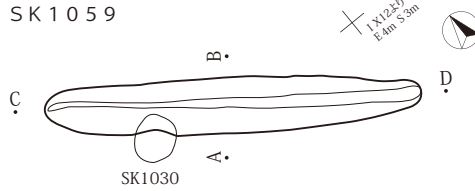
SK1058



- SK1058
- 1 黒色シルト
 - 2 黄褐色シルト
 - 3 黒色シルトとロームの混合層
 - 4 黄褐色シルト
 - 5 黒色砂質シルト



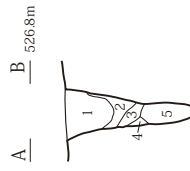
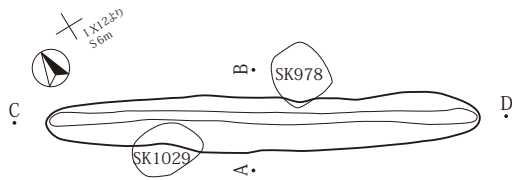
SK1059



- SK1059
- 1 黒色シルト
 - 2 黒色シルトとロームの混合層
しまりややわるい
 - 3 黄褐色シルト
 - 4 黒褐色砂質シルト



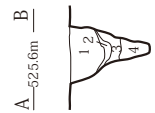
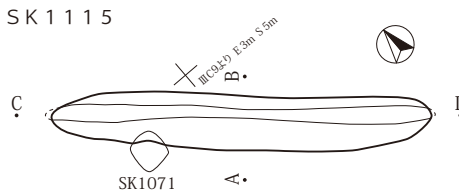
SK1060



- SK1060
- 1 黒色シルト
 - 2 黄褐色シルト
 - 3 黒色シルトとロームの混合層
 - 4 黄褐色ロームブロック
 - 5 黒色砂質シルト



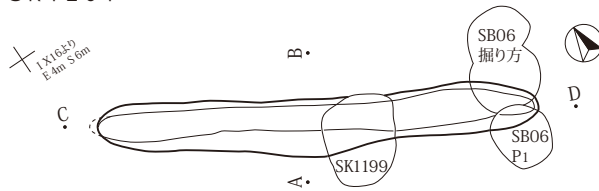
SK1115



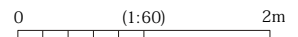
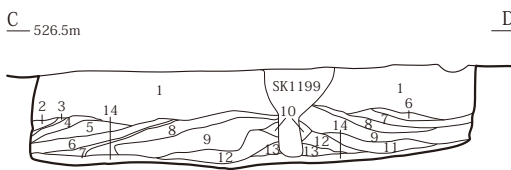
- SK1115
- 1 黒色シルト
 - 2 黒色シルト
 - 3 黄褐色シルト
 - 4 黒色シルト



SK1201

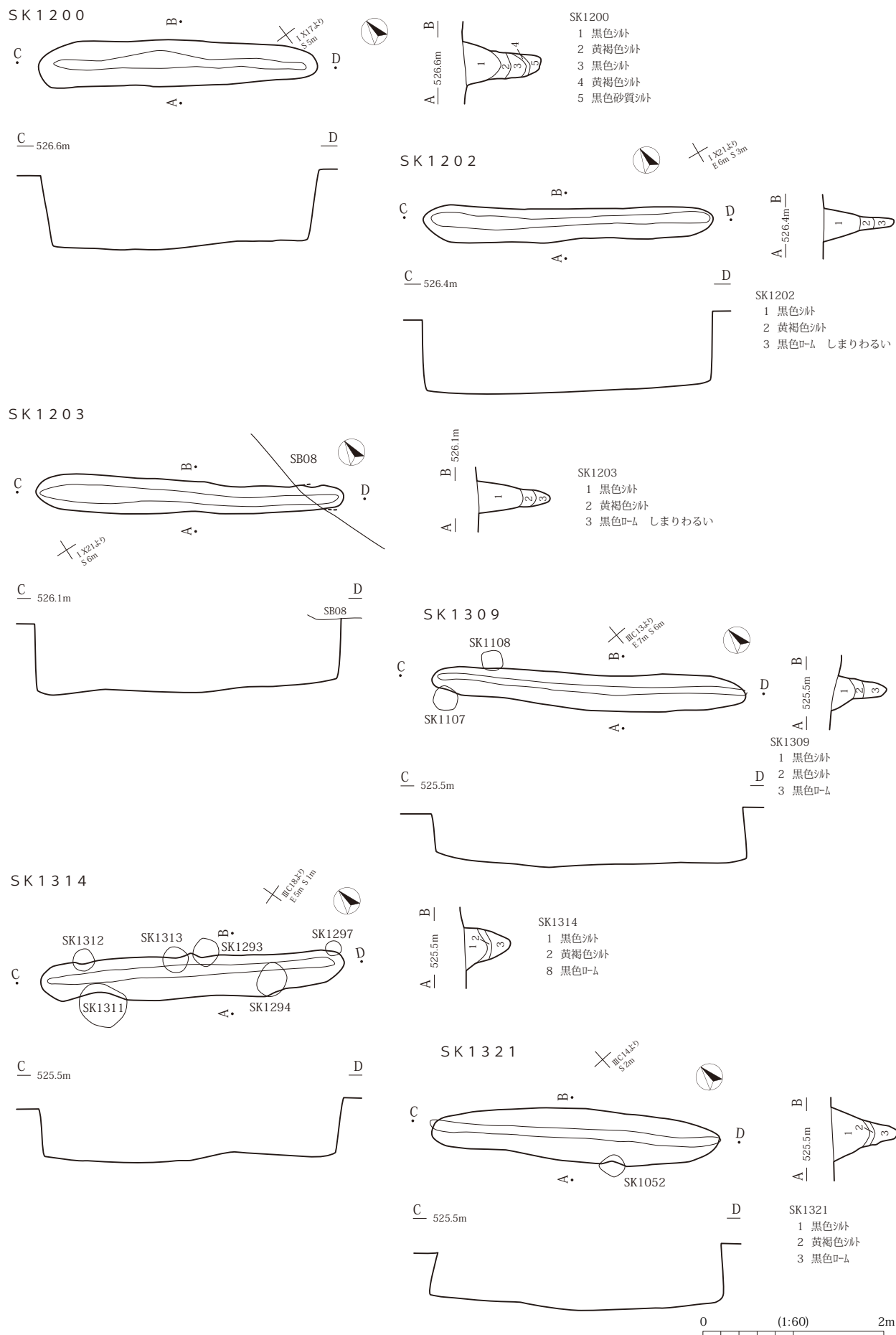


- SK1201
- | | |
|-------------|-----------------|
| 1 黒色シルト | 8 黄褐色シルト |
| 2 にぶい黄褐色シルト | 9 黒色シルト |
| 3 黒色シルト | 10 明黄褐色ロームブロック |
| 4 にぶい黄褐色シルト | 11 にぶい黄褐色シルト |
| 5 黒色シルト | 12 黒色シルト |
| 6 黄褐色シルト | 13 黄褐色シルト |
| 7 黒色シルト | 14 黒色ローム しまりわるい |



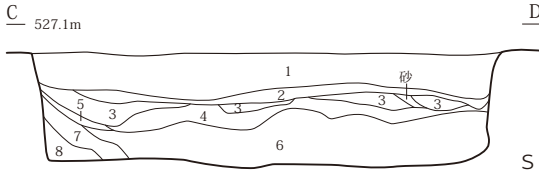
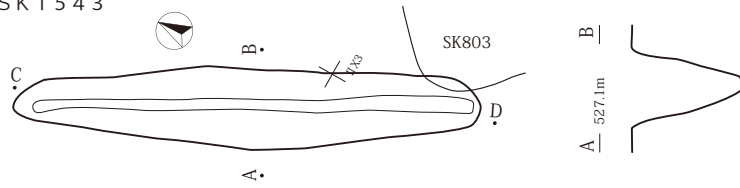
第27図 陥し穴(縄文)I群A

第4章 表町遺跡



第28図 陥し穴（縄文）I群A

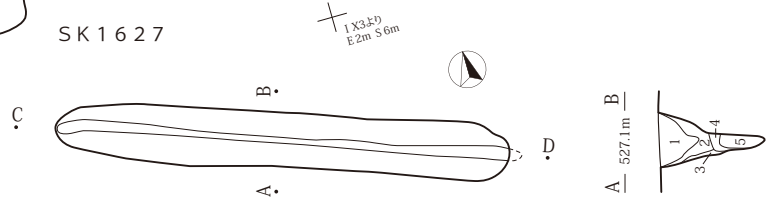
SK1543



SK1543

- 1 黒色シルト
- 2 黒色シルト しまりややわるい
- 3 褐色シルト
- 4 黒色粘土質シルト しまりややわるい
- 5 褐色シルト
- 6 暗褐色砂質シルト しまりややわるい
- 7 黒色砂質シルト しまりややわるい
- 8 黒色粘土質シルト しまりややわるい

SK1627

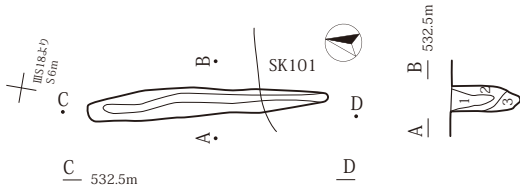


SK1627

- 1 黒色シルト
- 2 明黄褐色砂質シルト
- 3 にぶい黄褐色砂質シルト
- 4 黒色シルト
- 5 黒色D-L

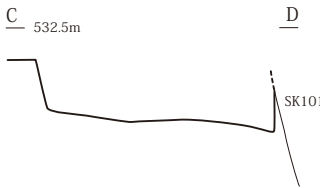
I群B

SK162

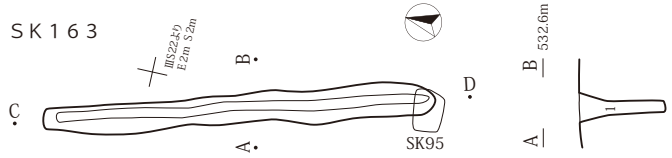


SK162

- 1 黒色シルト
- 2 黄褐色砂質シルト
- 3 黒色D-L



SK163

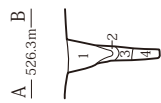
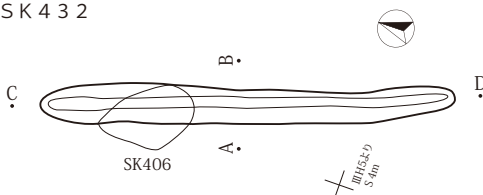


SK163

- 1 黒色シルト



SK432

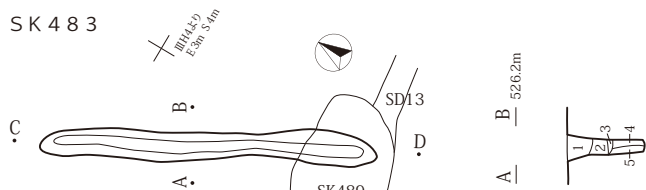


SK432

- 1 黒色シルト
- 2 黄褐色シルト
- 3 黒色シルト
- 4 暗褐色シルト しまりややわるい



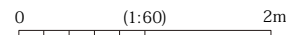
SK483



SK483

SK483

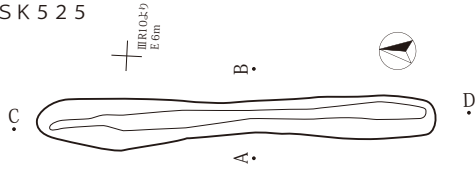
- 1 黒色シルト
- 2 暗褐色シルト
- 3 黒色シルト
- 4 暗褐色シルト しまりややわるい
- 5 黄褐色シルト しまりややわるい



第29図 陥し穴(縄文) I群A・B

第4章 表町遺跡

SK 525

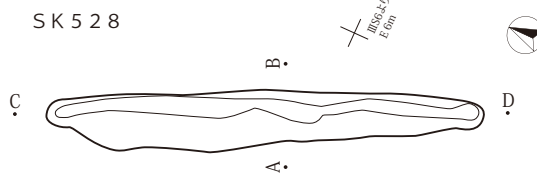


SK525
1 黒色シルト

C 529.7m



SK 528

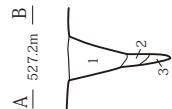
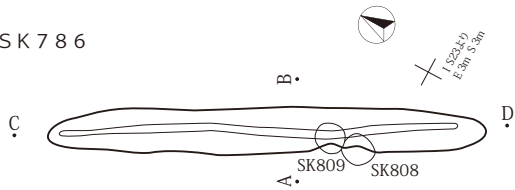


SK528
1 黒色シルト
2 黒褐色シルト

C 529.8m



SK 786

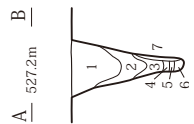
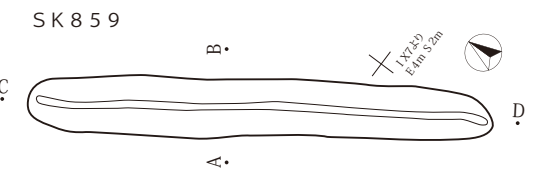


SK786
1 黒色シルト
2 褐色シルト
3 黒色ローム

C 527.2m



SK 859

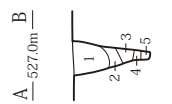
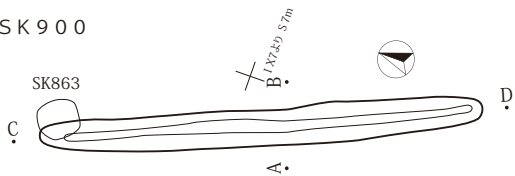


SK859
1 黒色シルト
2 黄褐色シルト
3 灰白色ローム
4 黒色ローム しまりややわるい
5 灰白色ローム しまりわるい
6 黒色ローム しまりややわるい
7 黄褐色ローム

C 527.2m

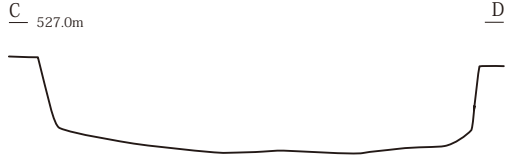


SK 900

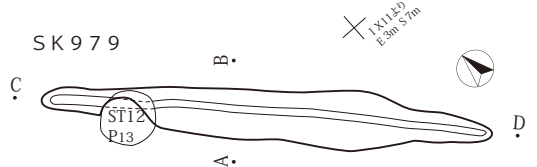


SK900
1 黒色シルト
2 黄褐色シルト
3 黒色シルト
4 灰白色ローム しまりわるい
5 黒色ローム しまりややわるい

C 527.0m

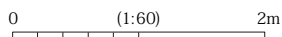


SK 979

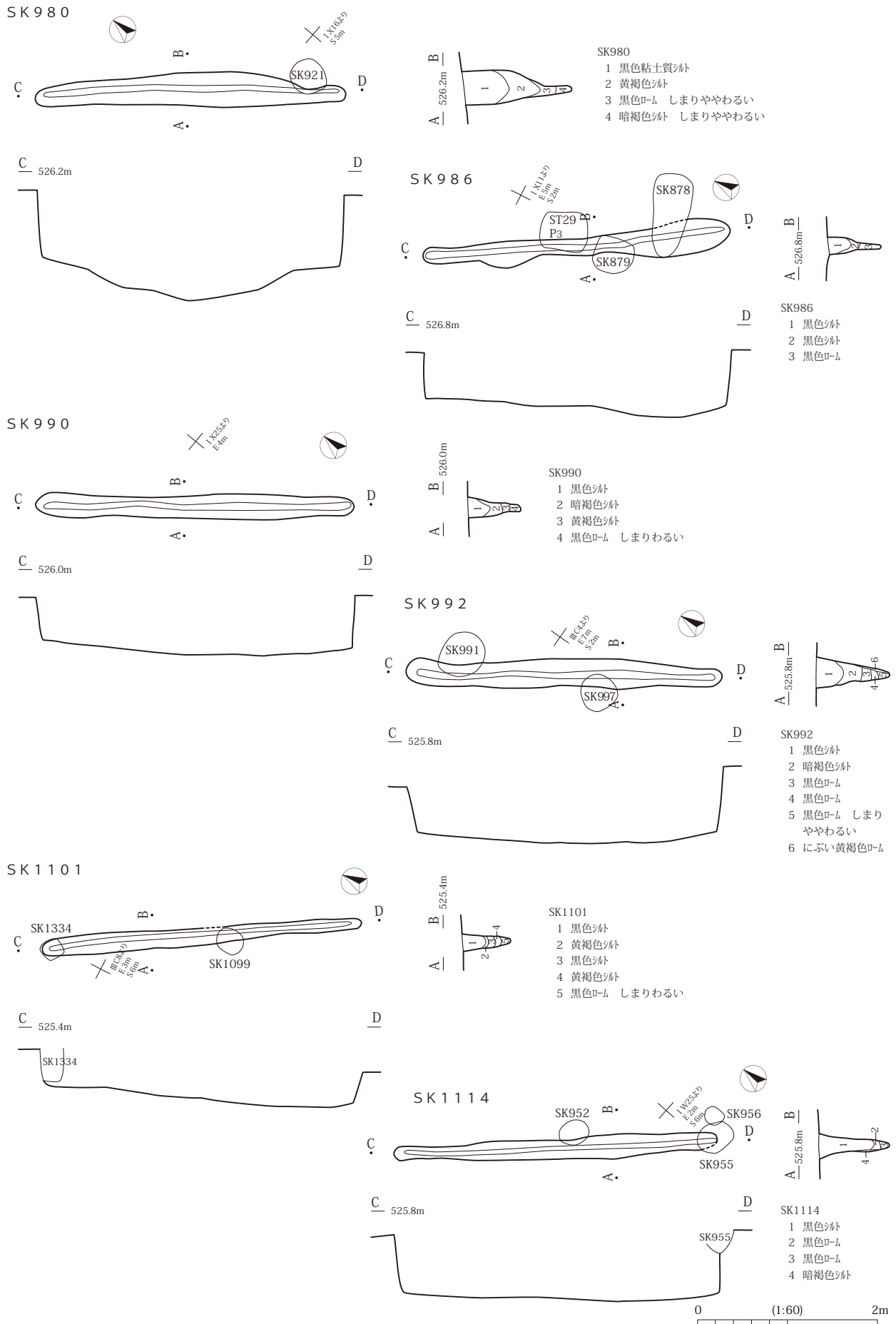


SK979
1 黒色シルト
2 黒色ロームと黄褐色土の混合層
3 黒色ローム しまりわるい

C 526.6m



第30図 陥し穴(縄文)I群B

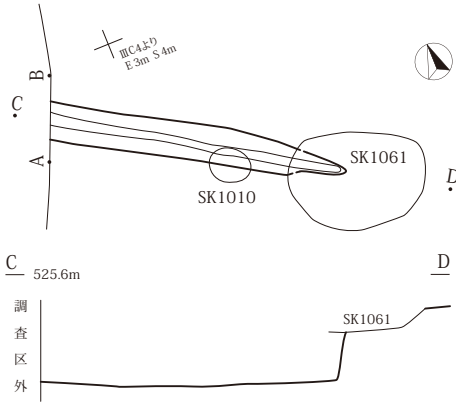


第31図 陥し穴(縄文)I群B

第4章 表町遺跡

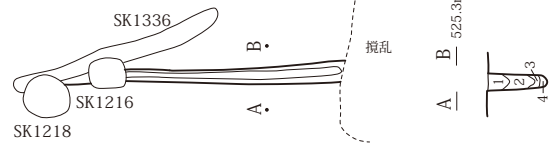
SK1154

調査区外



- SK1154
 1 黒色シルト
 2 黒色シルト
 3 黒色ローム しまりわるい

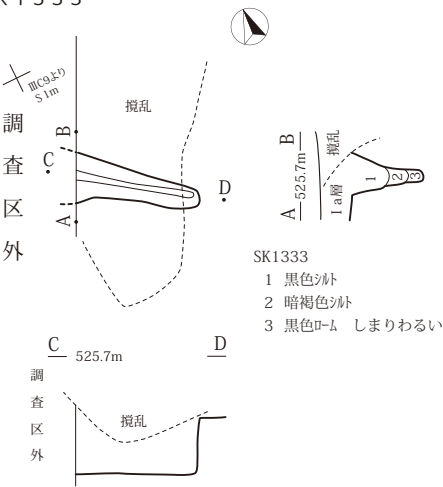
SK1308



- SK1308
 1 黒色シルト
 2 黄褐色シルト
 3 にぶい黄褐色シルト
 4 黒色ローム しまりわるい

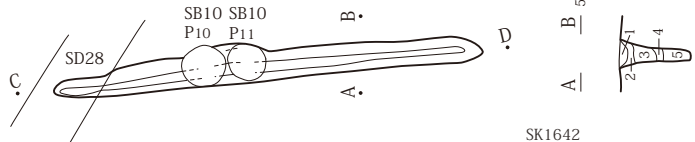
SK1333

調査区外



- SK1333
 1 黒色シルト
 2 暗褐色シルト
 3 黒色ローム しまりわるい

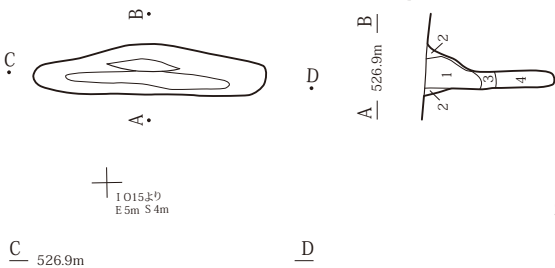
SK1642



- SK1642
 1 黒色シルト
 2 暗褐色シルト
 3 黒色シルト
 4 暗褐色シルト
 5 黒色ローム しまりやわわるい

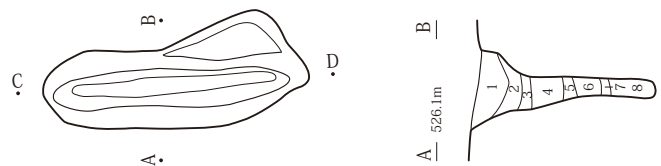
I群C

SK604

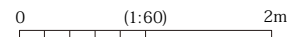


- SK604
 1 黒色シルト
 2 黒褐色シルト
 3 暗褐色砂質シルト
 4 黒褐色シルト 礫混入

SK610

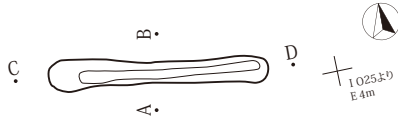


- SK610
 1 黒色シルト
 2 黒褐色シルト
 3 暗褐色砂質シルト
 4 黒褐色粘土質シルト
 5 暗褐色シルト
 6 黒褐色砂質シルト
 7 暗褐色シルト
 8 黒褐色砂質シルト 礫混入

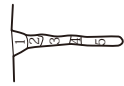


第32図 陥し穴(縄文) I群B・C

SK614

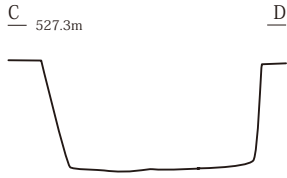


527.3m
A B

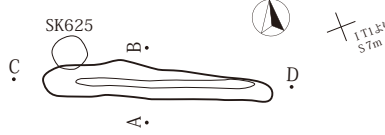


SK614

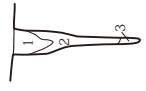
- 1 黒色シルト
- 2 暗褐色砂質シルト
- 3 黒褐色砂質シルト
- 4 暗褐色シルト
- 5 黒褐色シルト



SK624

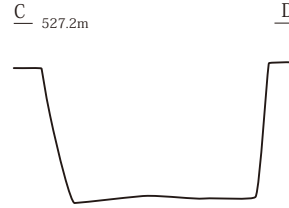


527.2m
A B

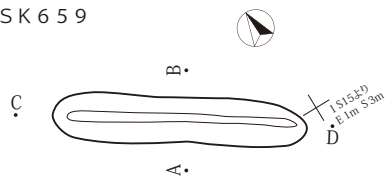


SK624

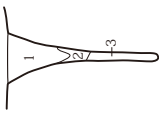
- 1 黒色シルト
- 2 暗褐色シルト
- 3 黒色ローム しまりわるい



SK659

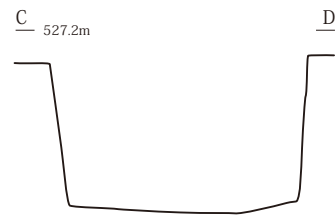


527.2m
A B

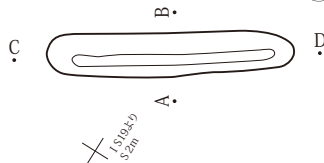


SK659

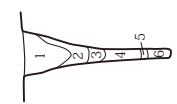
- 1 黒色シルト
- 2 暗褐色シルト
- 3 黒色ローム しまりわるい



SK780

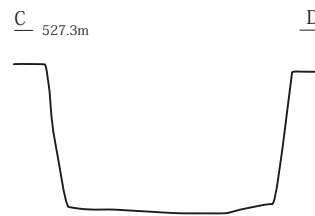


527.3m
A B

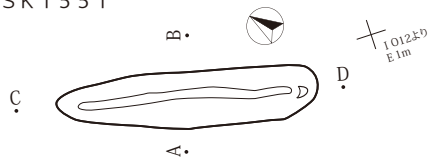


SK780

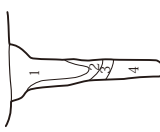
- 1 黒色シルト
- 2 暗褐色シルト
- 3 黒色シルト しまりわるい
- 4 暗褐色シルト しまりわるい
- 5 黒色ローム
- 6 暗褐色ローム しまりややわるい



SK1551

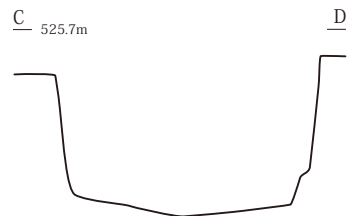


525.7m
A B

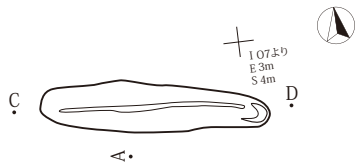


SK1551

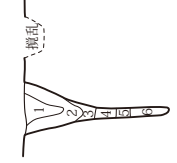
- 1 黒色シルト
- 2 黒褐色シルト
- 3 黒色シルト しまりややわるい
- 4 黒褐色砂質シルト しまりわるい



SK1552

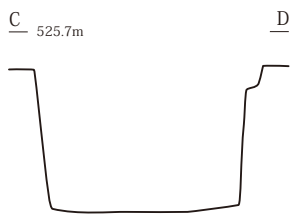


525.7m
A B



SK1552

- 1 黒色シルト
- 2 黒色シルト
- 3 暗褐色シルト しまりややわるい
- 4 黒色シルト しまりややわるい
- 5 暗褐色シルト しまりややわるい
- 6 黒色砂質シルト しまりわるい

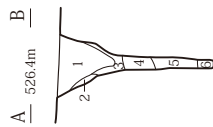
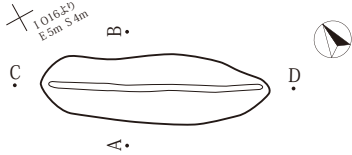


第33図 陥し穴(縄文)I群C

0 (1:60) 2m

第4章 表町遺跡

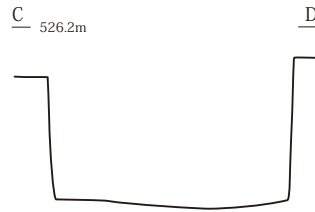
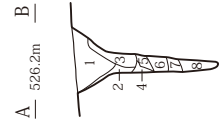
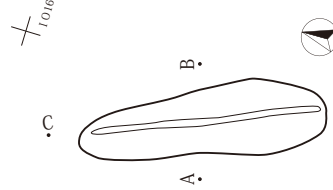
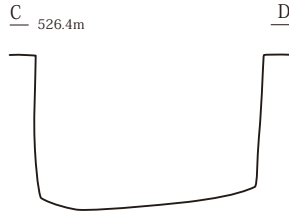
SK1568



SK1568

- 1 黒色シルト
- 2 黒色シルト
- 3 暗褐色シルト
- 4 黒褐色砂質シルト しまりややわるい
- 5 黒色ローム しまりわるい
- 6 黒色砂質シルト しまりわるい

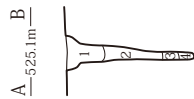
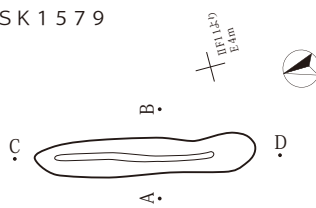
SK1570



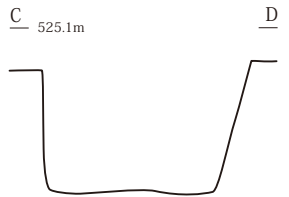
SK1570

- 1 黒色シルト
- 2 暗褐色シルト
- 3 黒褐色シルト
- 4 暗褐色シルト
- 5 黄褐色ロームアロック 壁の崩れと思われる
- 6 黒色ローム
- 7 暗褐色シルト
- 8 黒色ローム しまりわるい

SK1579

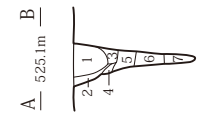
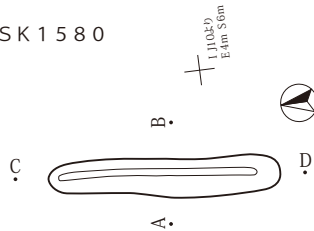


SK1580

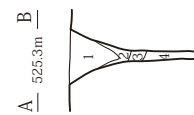
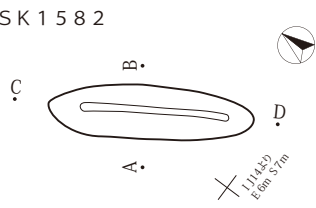


SK1579

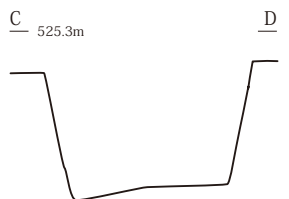
- 1 黒色シルト
- 2 黒色粘土質シルト
- 3 黒褐色粘土質シルト しまりややわるい
- 4 黒色粘土質シルト



SK1582

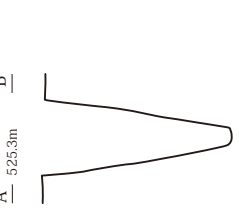
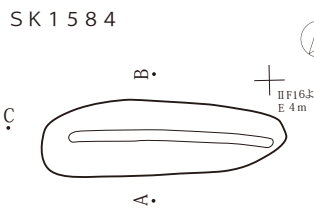


SK1584



SK1582

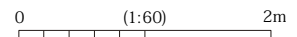
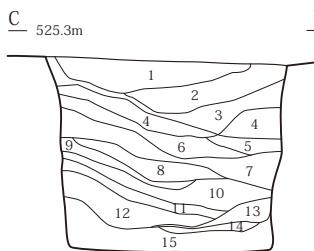
- 1 黒色シルト
- 2 黒色粘土質シルト
- 3 黒褐色粘土質シルト
- 4 黒色ローム 粘性あり、しまりややわるい



SK1584

- 1 黒色シルト
- 2 黒褐色シルト
- 3 暗褐色シルト しまりややわるい
- 4 黒褐色シルト
- 5 黄褐色ロームアロック 壁の崩れと思われる
- 6 暗褐色シルト
- 7 黒褐色シルト
- 8 褐色粘土質シルト しまりわるい

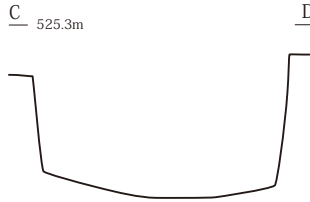
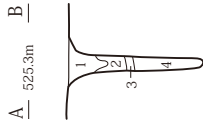
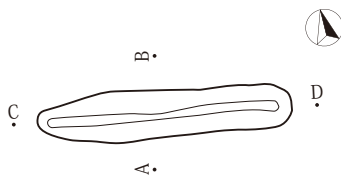
- 9 褐色粘土質シルト しまりわるい
- 10 褐色粘土質シルト しまりわるい
- 11 褐色粘土質シルト しまりわるい
- 12 褐色粘土質シルト しまりわるい
- 13 褐色粘土質シルト しまりわるい
- 14 褐色粘土質シルト しまりわるい
- 15 褐色粘土質シルト しまりわるい



第34図 陥し穴(縄文)I群C

SK1593

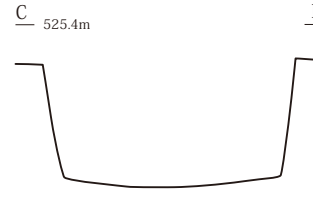
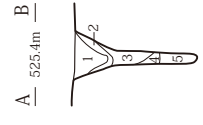
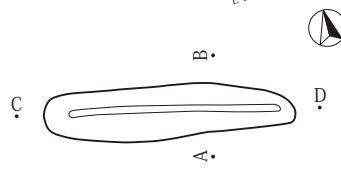
1J194号
E 3m S 1m



- SK1593
 1 黒色シルト
 2 黒色粘土質シルト
 3 黒色粘土質シルト しまりややわるい
 4 黒色ローム しまりややわるい

SK1600

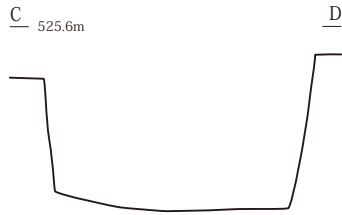
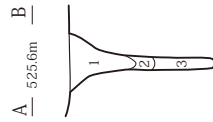
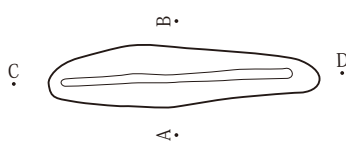
1J234号
E 4m S 4m



- SK1600
 1 黒色シルト
 2 黒色シルト
 3 黒色粘土質シルト
 4 黒色粘土質ローム しまりややわるい
 5 黒色粘土質シルト しまりややわるい

SK1602

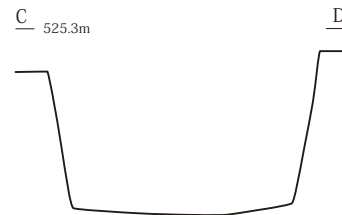
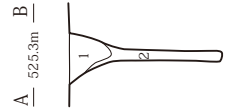
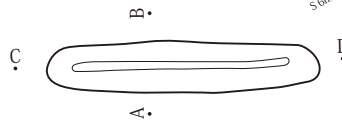
102



- SK1602
 1 黒色シルト
 2 黒色粘土質シルト
 3 黒色ローム しまりややわるい

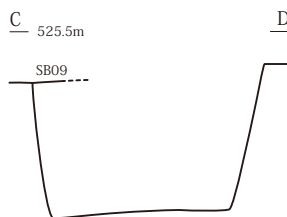
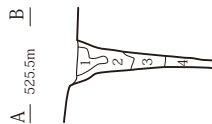
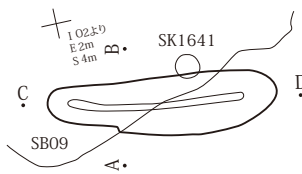
SK1638

1J224号
E 6m S 6m



- SK1638
 1 黒色シルト
 2 暗褐色シルト

SK1644



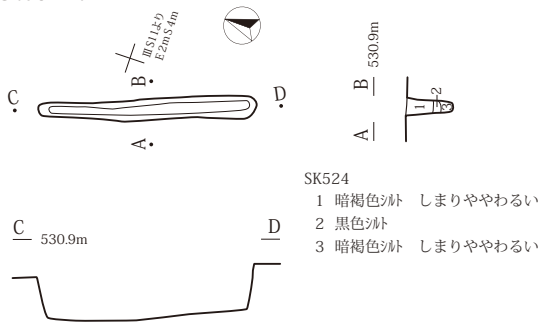
- SK1644
 1 黒色シルト
 2 黒色シルト
 3 暗褐色粘土質シルト
 4 黒色ローム しまりややわるい

0 (1:60) 2m

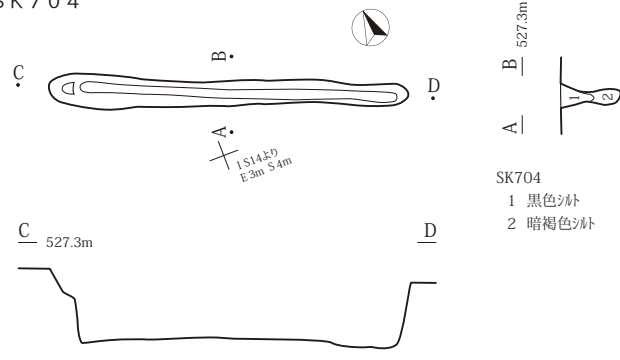
第35図 陥し穴(縄文)I群C

I群D

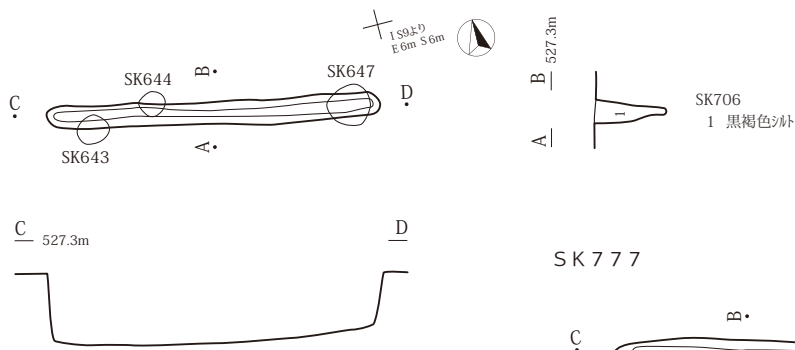
SK524



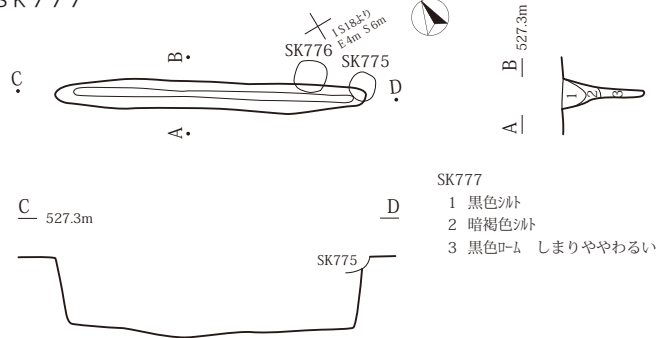
SK704



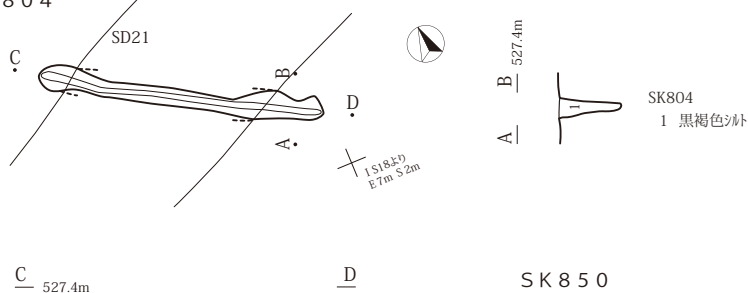
SK706



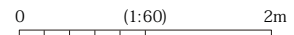
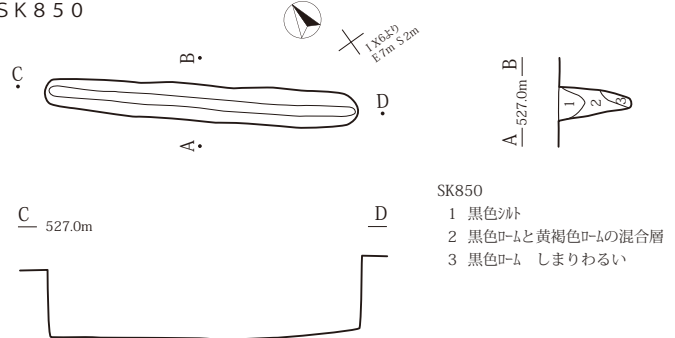
SK777



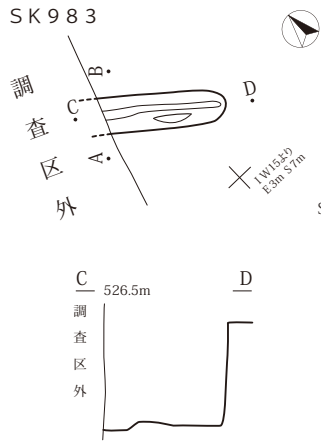
SK804



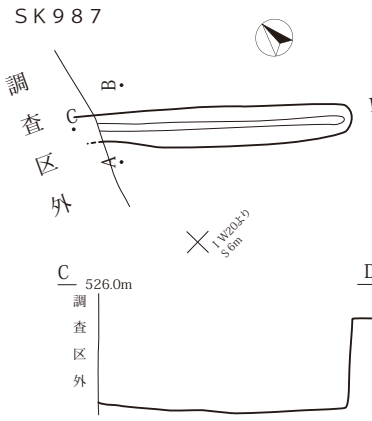
SK850



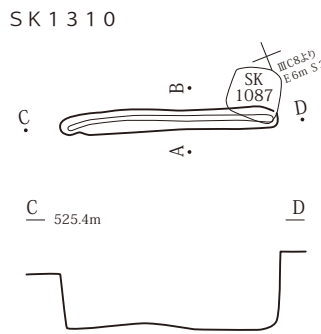
第36図 陥し穴(縄文) I群D



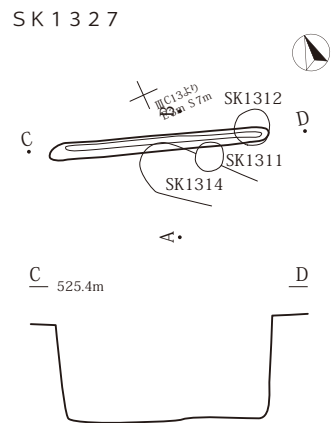
- SK983
- 1 黒色シルト
 - 2 黄褐色シルト
 - 3 黄褐色砂質シルト しまりわるい



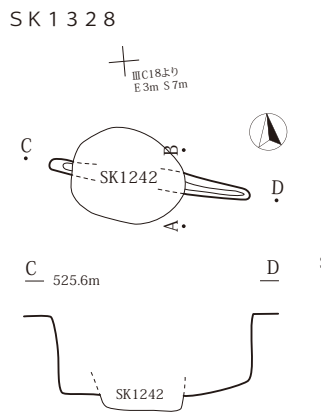
- SK987
- 1 黒色シルト
 - 2 黄褐色シルト
 - 3 黒色シルト
 - 4 黄褐色シルト
 - 5 黒色ローム
 - 6 明黄褐色ローム
 - 7 黒色ローム しまりわるい



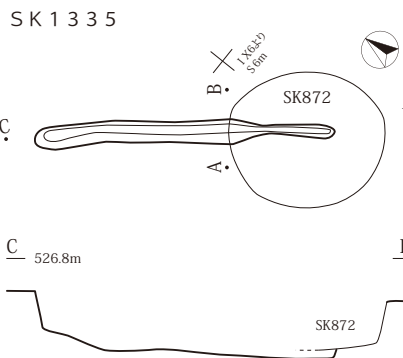
- SK1310
- 1 黒色砂質シルト



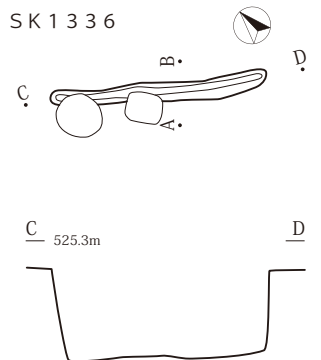
- SK1327
- 1 黒色シルト
 - 2 黄褐色シルト
 - 3 黒色ローム しまりわるい



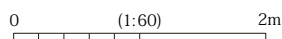
- SK1328
- 1 黒褐色シルト
 - 2 黄褐色シルト 1層との境はつきりせず
 - 3 黒色ローム しまりわるい
 - 4 黒色ロームと黄褐色ローム、灰白色ロームが混在



- SK1335
- 1 黒色シルト
 - 2 黄褐色シルト 明黄褐色ローム主体



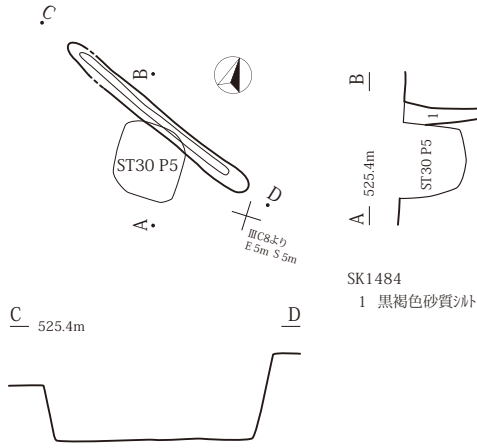
- SK1336
- 1 黒色シルト
 - 2 黄褐色シルト
 - 3 黒色ローム しまりわるい



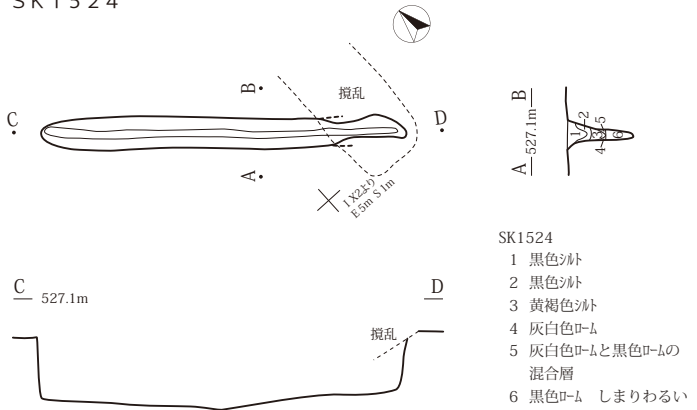
第37図 陥し穴(縄文)I群D

第4章 表町遺跡

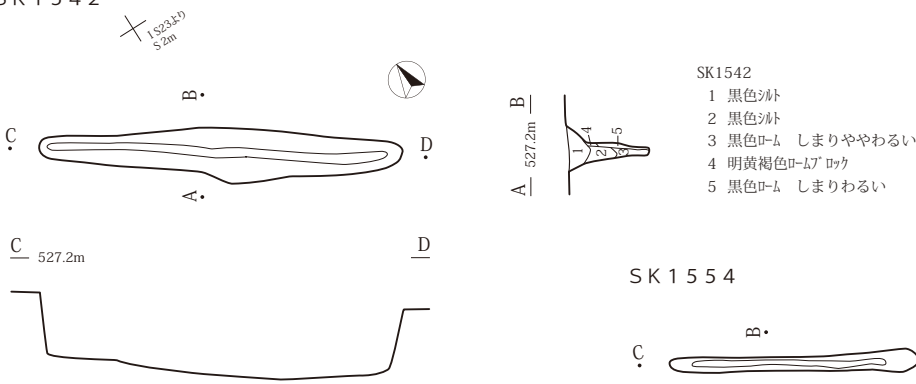
SK1484



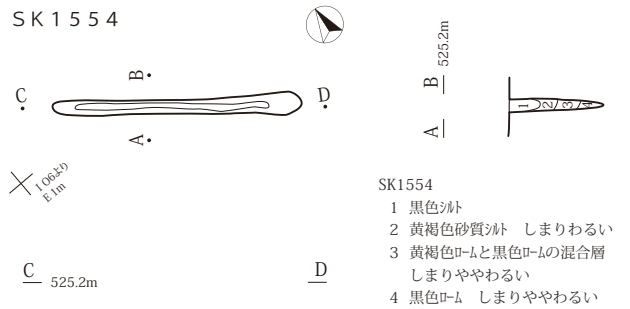
SK1524



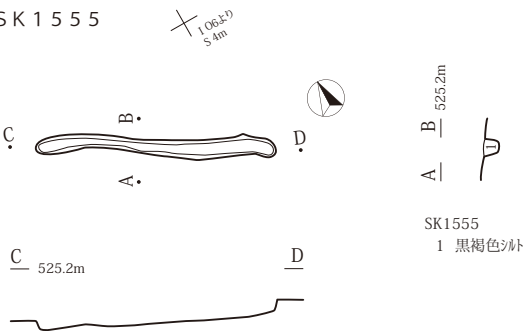
SK1542



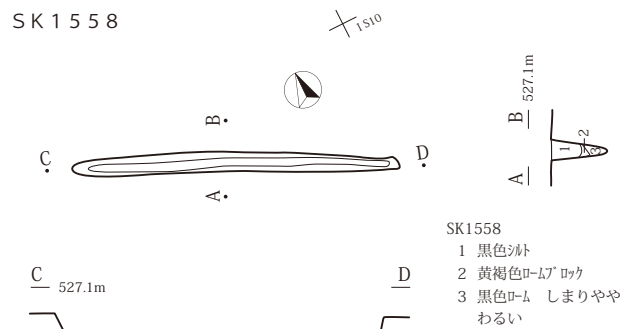
SK1554



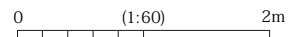
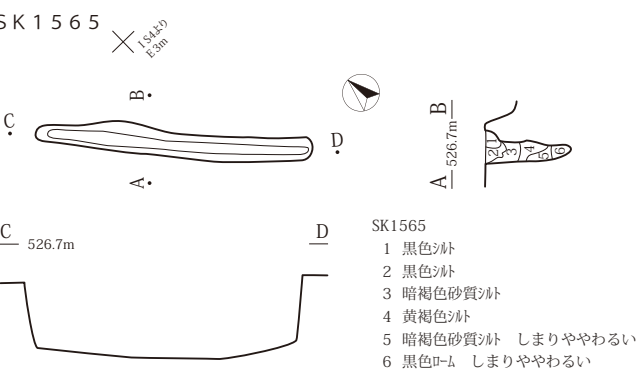
SK1555



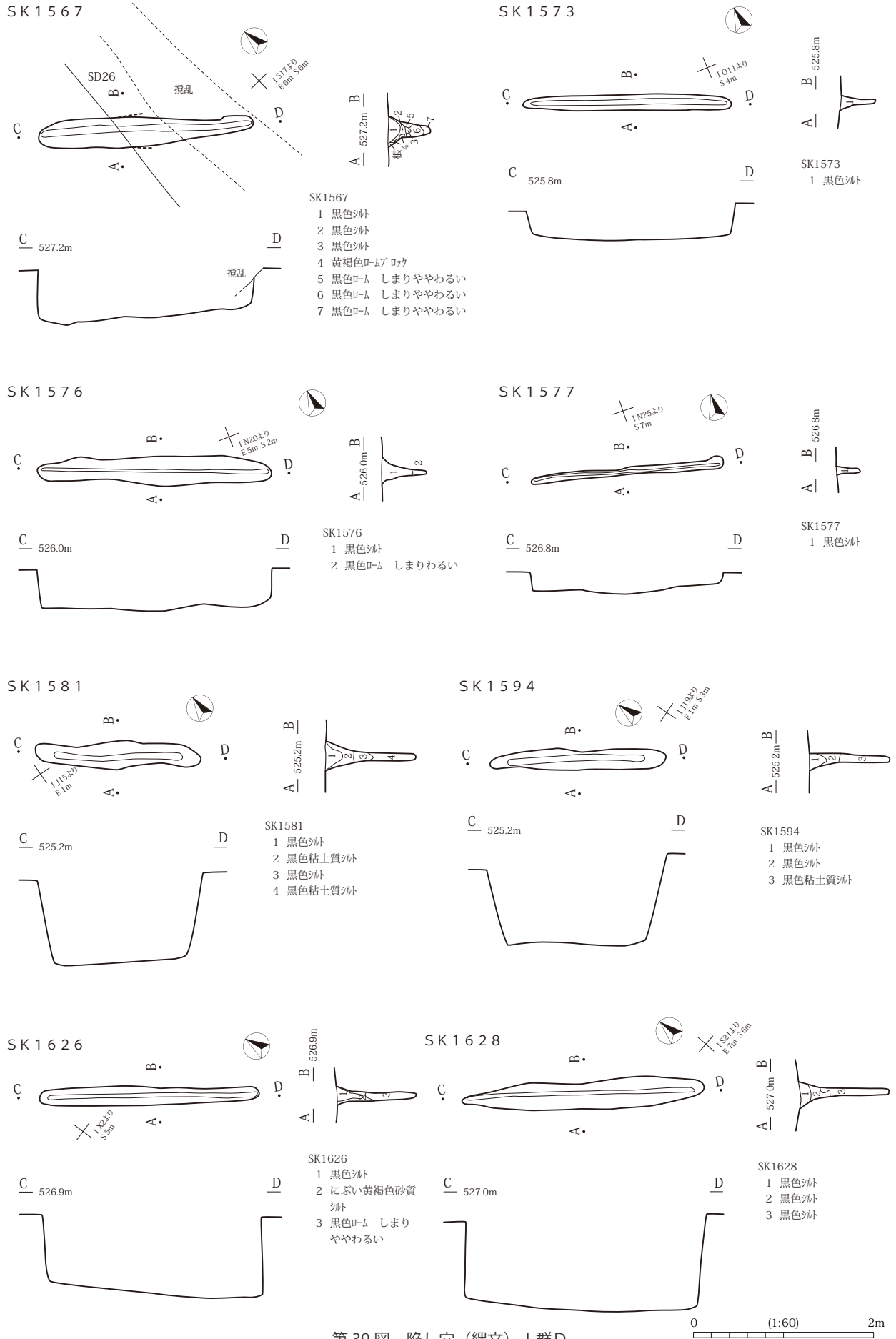
SK1558



SK1565



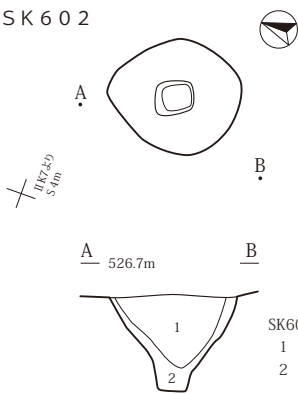
第38図 陥し穴(縄文)I群D



第39図 陥し穴(縄文)I群D

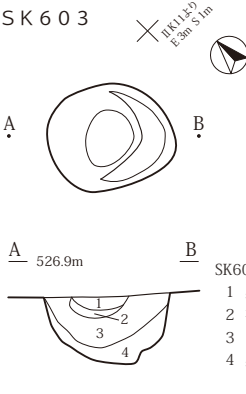
II群E

SK602



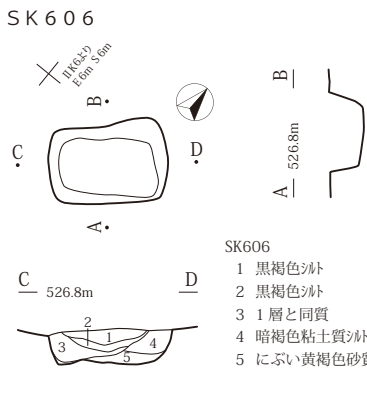
SK602
1 黒色シルト
2 黒褐色シルト

SK603



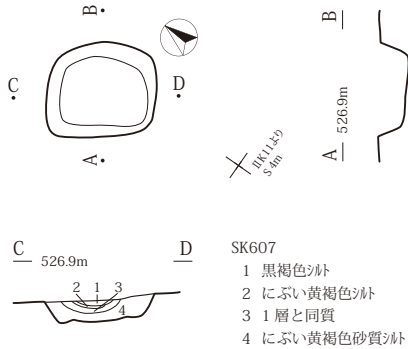
SK603
1 黒色シルト
2 褐色シルト ロームブロック多量混入
3 1層と同質
4 黒褐色シルト

SK606



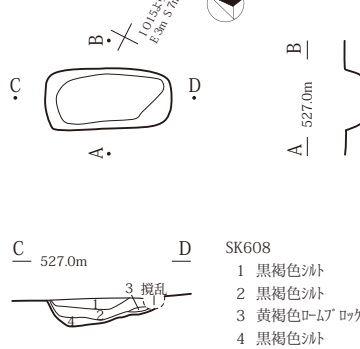
SK606
1 黒褐色シルト
2 黒褐色シルト
3 1層と同質
4 暗褐色粘土質シルト
5 にぶい黄褐色砂質シルト

SK607



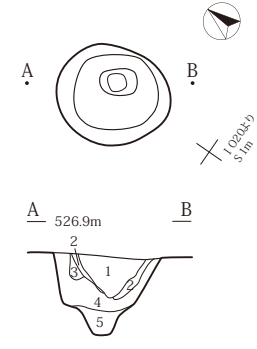
SK607
1 黒褐色シルト
2 にぶい黄褐色シルト
3 1層と同質
4 にぶい黄褐色砂質シルト

SK608



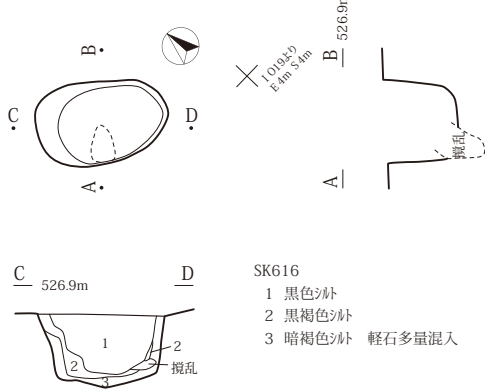
SK608
1 黒褐色シルト
2 黒褐色シルト
3 黄褐色ロームブロック
4 黒褐色シルト

SK615



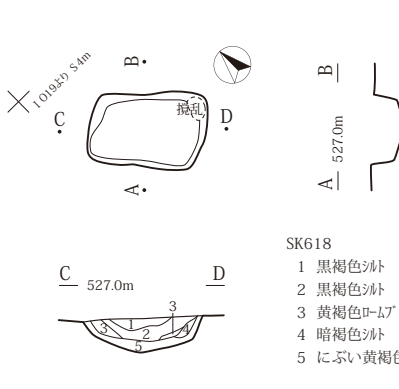
SK615
1 黒色シルト
2 黒褐色シルト
3 黄褐色ロームブロック
4 暗褐色シルト 軽石多量混入
5 にぶい黄褐色粘土質シルト 逆茂木痕、軽石多量混入

SK616



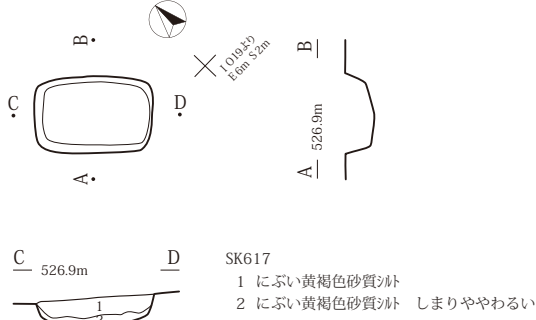
SK616
1 黒色シルト
2 黒褐色シルト
3 暗褐色シルト 軽石多量混入

SK618



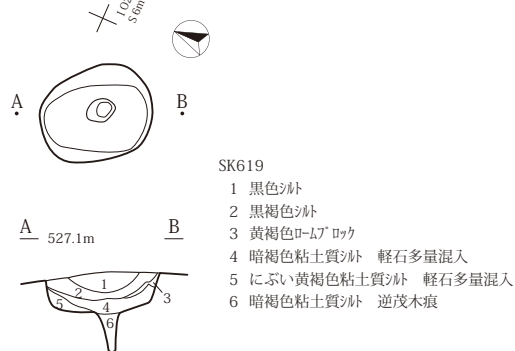
SK618
1 黒褐色シルト
2 黒褐色シルト
3 黄褐色ロームブロック
4 暗褐色シルト
5 にぶい黄褐色砂質シルト

SK617



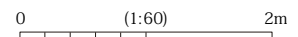
SK617
1 にぶい黄褐色砂質シルト
2 にぶい黄褐色砂質シルト しまりやわわるい

SK619



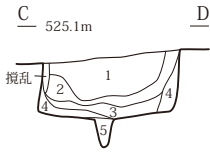
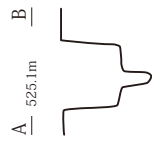
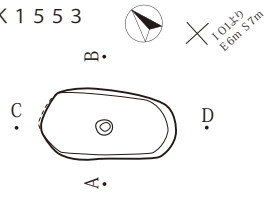
SK619
1 黒色シルト
2 黒褐色シルト
3 黄褐色ロームブロック
4 暗褐色粘土質シルト 軽石多量混入
5 にぶい黄褐色粘土質シルト 軽石多量混入
6 暗褐色粘土質シルト 逆茂木痕

第40図 陥し穴(縄文)II群E



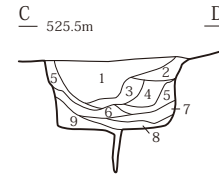
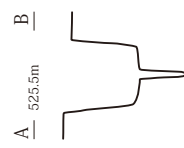
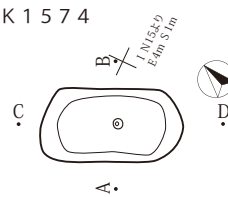
II群F

SK1553



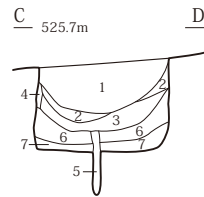
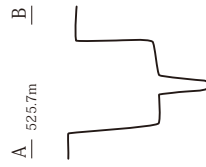
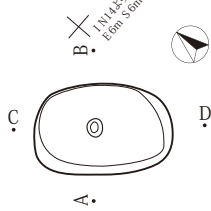
- SK1553
- 1 黒色シト
 - 2 暗褐色砂質シト
 - 3 1層と2層の混合層
 - 4 暗褐色砂質シト
 - 5 褐灰色砂質シト 逆茂木痕、しまりわるい

SK1574



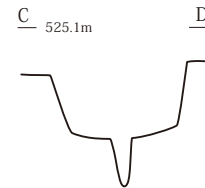
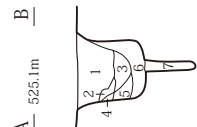
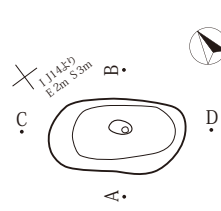
- SK1574
- 1 黒色シト
 - 2 暗褐色砂質シト
 - 3 黒色シト
 - 4 黒色シト
 - 5 黒褐色シト しまりややわるい
 - 6 黒色シト
 - 7 黒色ロム しまりややわるい
 - 8 黄褐色砂質シト
 - 9 黒色砂質シト しまりややわるい

SK1575



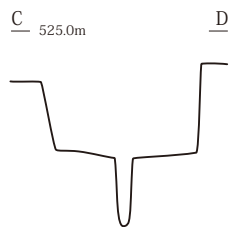
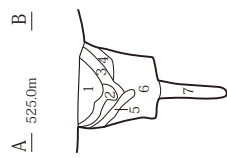
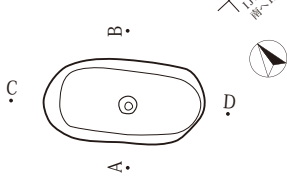
- SK1575
- 1 黒色シト
 - 2 黒褐色砂質シト
 - 3 黒色ロム
 - 4 暗褐色砂質シト
 - 5 黒色砂質シト 逆茂木痕、しまりわるい
 - 6 暗褐色シト
 - 7 黄褐色シト

SK1583



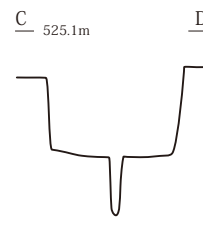
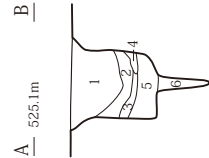
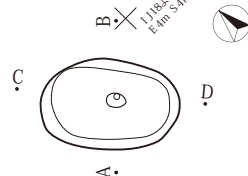
- SK1583
- 1 黒色シト
 - 2 黒褐色シト
 - 3 黒色シト
 - 4 黒色シト
 - 5 黒色粘土質シト
 - 6 黒色シト
 - 7 黒褐色シト 逆茂木痕、しまりややわるい

SK1597



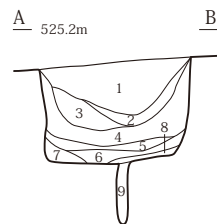
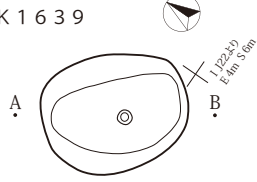
- SK1597
- 1 黒色シト
 - 2 黒色シト
 - 3 黒色シト
 - 4 2層と同質
 - 5 黒色シト
 - 6 黒色ロム しまりややわるい
 - 7 黒褐色シト 逆茂木痕、しまりややわるい

SK1598

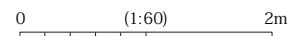


- SK1598
- 1 黒色シト
 - 2 黒色シト
 - 3 1層と同質
 - 4 黒色シト
 - 5 黒色ロム しまりややわるい
 - 6 黒褐色シト 逆茂木痕、しまりややわるい

SK1639



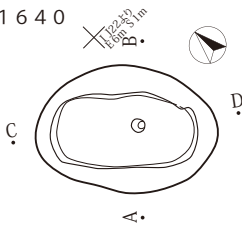
- SK1639
- 1 黒色シト
 - 2 黒色シト
 - 3 1層と同質
 - 4 黒色シト
 - 5 黒色シト
 - 6 黄褐色シト しまりややわるい
 - 7 黒色ロム
 - 8 黄褐色シト
 - 9 黄褐色シト 逆茂木痕 しまりわるい



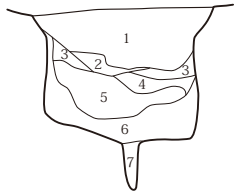
第41図 陥し穴(縄文) II群F

第4章 表町遺跡

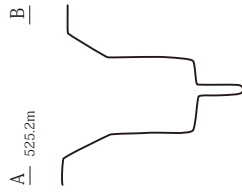
SK1640



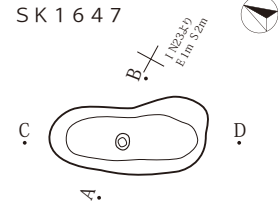
C 525.2m D



- SK1640
 1 黒色シルト
 2 暗褐色シルト
 3 黒色シルト
 4 暗褐色シルト
 5 黒色ローム しまりやわわい
 6 暗褐色シルト
 7 褐色シルト しまりやわわい



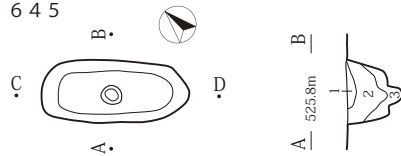
SK1647



C 525.8m D



SK1645



C 525.8m D

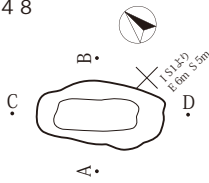


- SK1645
 1 黒色シルト
 2 黒色シルト
 3 暗褐色シルト

SK1647

- SK1647
 1 黒色シルト
 2 黒色シルト
 3 暗褐色砂質シルト
 4 黄褐色ローム ロック
 5 黒色ローム しまりやわわい
 6 黒褐色シルト 逆茂木痕、しまりやわわい

SK1648



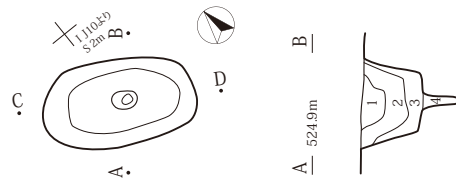
C 525.4m D



SK1648

- SK1648
 1 黒色シルト
 2 黄褐色シルト
 3 黄褐色シルト しまりやわわい

SK1650



C 524.9m D

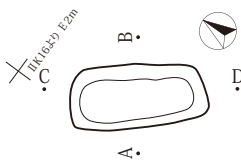


SK1650

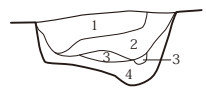
- SK1650
 1 黒色シルト
 2 黒色シルト
 3 黒色シルト
 4 黒色シルト 逆茂木痕

II群G

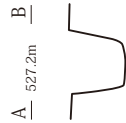
SK609



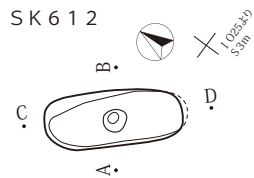
C 527.2m D



- SK609
 1 黒色シルト
 2 黒色シルト
 3 黄褐色ローム ロック
 4 黒褐色シルト



SK612



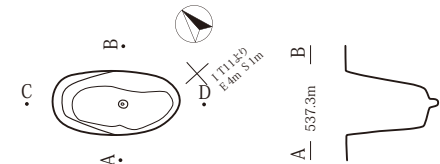
C 527.3m D



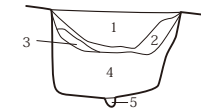
SK612

- SK612
 1 黒色シルト
 2 にぶい黄褐色ローム
 3 黒褐色シルト
 4 黒褐色シルト 逆茂木痕

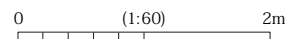
SK623



C 527.3m D

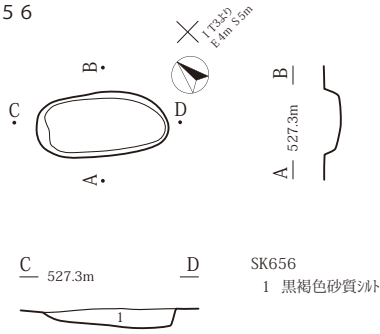


- SK623
 1 黒色シルト
 2 にぶい黄褐色シルト
 3 黒色シルト
 4 黄褐色シルト
 5 黒色ローム しまりやわわい



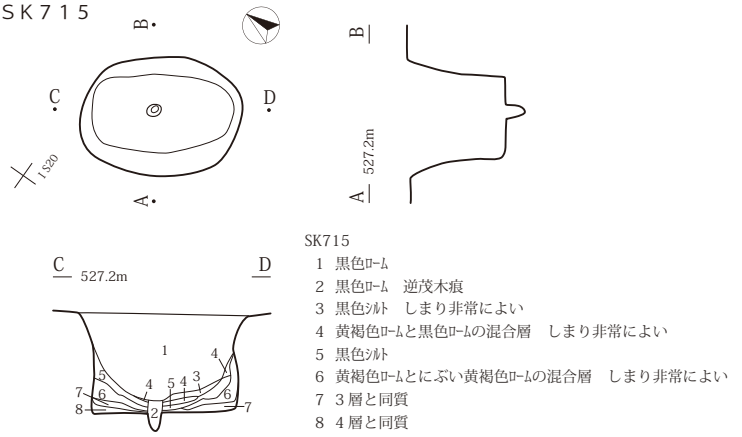
第42図 陥し穴(縄文) II群F・G

SK656



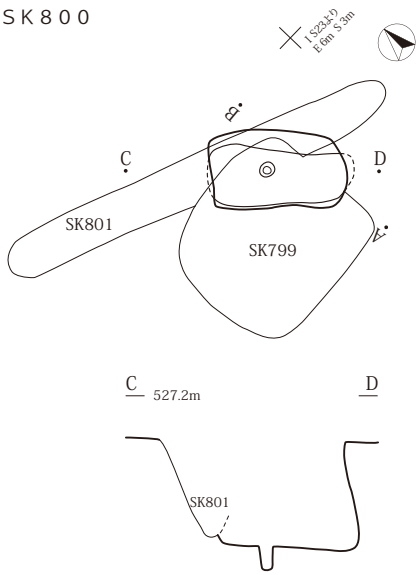
SK656
1 黒褐色砂質シルト

SK715



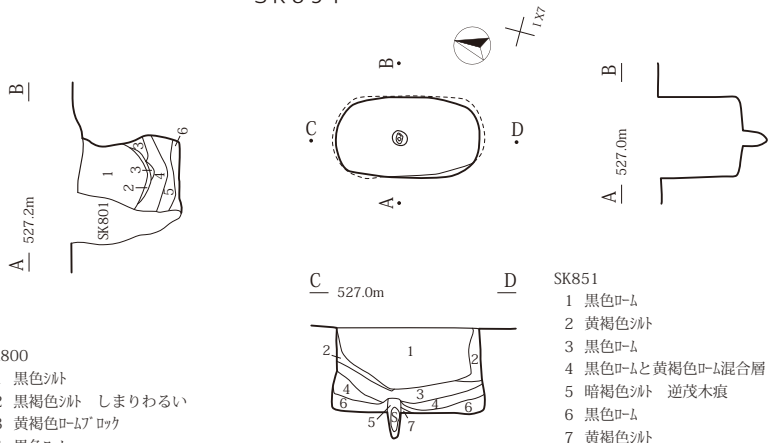
SK715
1 黒色ロ-ム
2 黒色ロ-ム 逆茂木痕
3 黒色シルト しまり非常によい
4 黄褐色ロ-ムと黒色ロ-ムの混合層 しまり非常によい
5 黒色シルト
6 黄褐色ロ-ムとにぶい黄褐色ロ-ムの混合層 しまり非常によい
7 3層と同質
8 4層と同質

SK800



SK800
1 黒色シルト
2 黒褐色シルト しまりわるい
3 黄褐色ロ-ムブロック
4 黒色ロ-ム
5 黒色ロ-ムとにぶい黄褐色ロ-ムの混合層 しまりわるい
6 黒褐色シルト

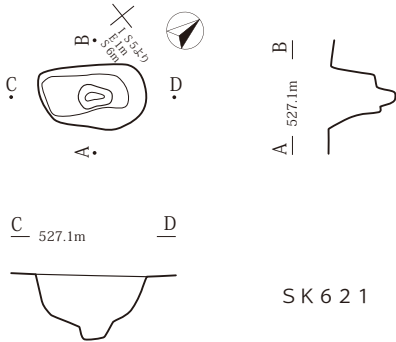
SK851



SK851
1 黒色ロ-ム
2 黄褐色シルト
3 黒色ロ-ム
4 黒色ロ-ムと黄褐色ロ-ム混合層
5 暗褐色シルト 逆茂木痕
6 黒色ロ-ム
7 黄褐色シルト

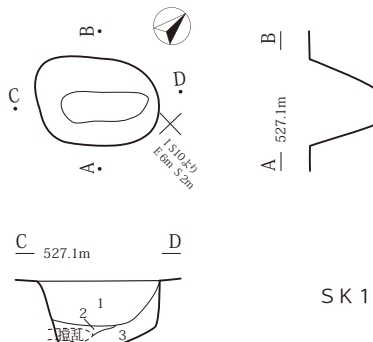
II群H

SK620



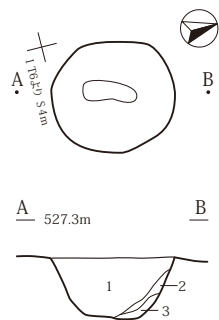
SK620
1 黒色シルト しまりややわるい

SK622



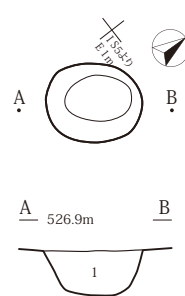
SK622
1 黒色シルト
2 黒褐色シルト
3 暗褐色シルト 軽石多量混入

SK621

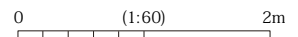


SK621
1 黒色シルト
2 にぶい黄褐色シルト
3 黒褐色シルト しまりややわるい

SK1561



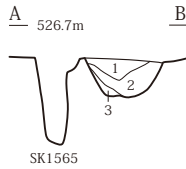
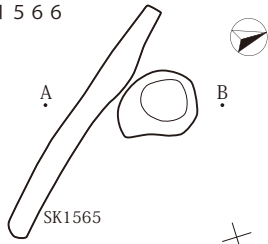
SK1561
1 黒色シルト



第43図 陥し穴(縄文) II群G・H

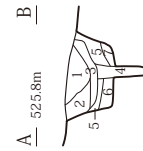
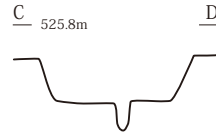
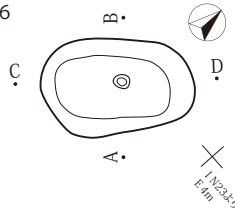
第4章 表町遺跡

SK1566



- SK1566
 1 黒色シルト
 2 黒色シルト
 3 黄褐色シルト

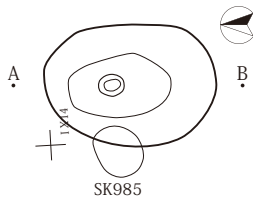
SK1646



- SK1646
 1 黒色シルト
 2 暗褐色シルト
 3 暗褐色シルト
 4 黒色砂質シルト 逆茂木痕、しまりわるい
 5 暗褐色砂質シルト しまりややわるい
 6 黒褐色砂質シルト しまりややわるい
 7 黒色ローム しまりややわるい

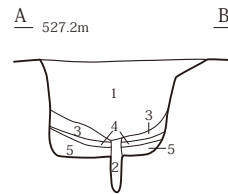
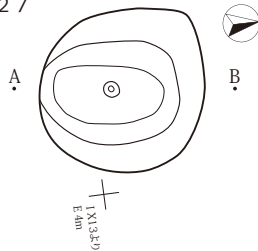
II群 I

SK826



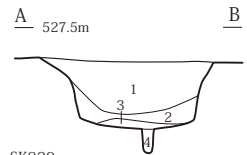
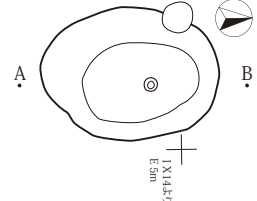
- SK826
 1 黒色シルト
 2 黒色シルト
 3 黒褐色シルト
 4 黒褐色シルト 逆茂木痕

SK827



- SK827
 1 黒色シルト
 2 黒褐色粘土質シルト 逆茂木痕
 3 黄褐色シルト
 4 暗褐色粘土質シルト 粘性強い
 5 黄褐色砂質シルト

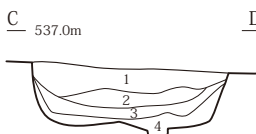
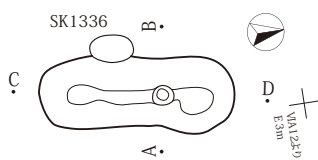
SK829



- SK829
 1 黒色シルト
 2 黄褐色シルト 明黄褐色ローム主体
 3 暗褐色粘土質シルト 黄褐色ローム粒状に混入
 4 黒褐色シルト 逆茂木痕、しまりややわるい

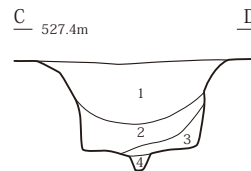
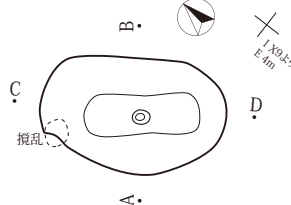
III群

SK223

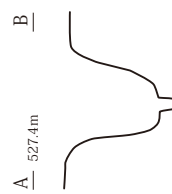


- SK223
 1 黒色ローム しまりややわるい
 2 黒褐色シルト
 3 黒色ローム
 4 黒褐色シルト

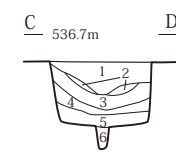
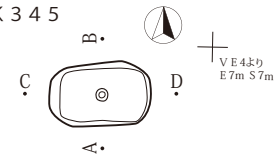
SK824



- SK824
 1 黒色シルト
 2 黒色ローム しまり非常にわるい
 3 黒色ローム しまりわるい
 4 黒色ローム 逆茂木痕、しまりわるい

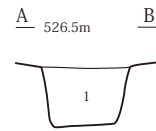
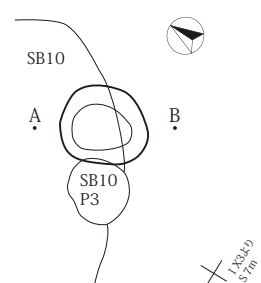


SK345

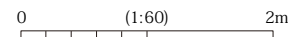


- SK345
 1 黒色シルト
 2 黒褐色シルト
 3 暗褐色シルト
 4 褐色粘土質シルト
 5 黒色ローム しまりややわるい
 6 褐灰色砂質シルト 逆茂木痕、しまりややわるい

SK1653



- SK1653
 1 黒色シルト



第44図 陥し穴(縄文) II群H・I III群

F列：12基で構成される。(第20図 第41・42図 PL13)

特徴：すべて楕円形で、1基以外はすべて坑底ピットを1つもつ。断面は、検出面近くでやや開くものもみられるが、ほとんどが壁は垂直である。

位置：6区I J9～I S1 グリッド。立地：丘陵頂部の西端、谷へ落ちる崖際。形状：12基が崖にそってほぼ直線状に連なる。列方向：北東—南西。規模：調査区内で106m。土坑間隔：4.7m～14.8m。

G列：7基で構成される。(第20・21図 第42・43図 PL13・14)

特徴：すべて楕円形で、1基以外はすべて坑底ピットを1つもつ。断面もF群と同様である。

位置：5区II K16～4区I X6 グリッド。立地：丘陵頂部から谷部へ向かうゆるやかな西斜面。

形状：7基がほぼ直線状に連なる。列方向：北東—南西。規模：調査区内で110m。土坑間隔：12.7m～19.5m。

H列：6基で構成される。(第20図 第43・44図 PL14)

特徴：円形4基、楕円形2基で、楕円形のは坑底ピットを1つもつ。同じ形のものが同時期に存在したと考えている。

位置：6区I N18～5区I T16 グリッド。立地：丘陵頂部から谷部へ向かう北西斜面。形状：6基が傾斜にそって直線状に連なる。列方向：北西—南東。規模：調査区内で28m。土坑間隔：3.3m～11.3m。

I列：3基で構成される。(第21図 第44図 PL14)

特徴：すべてがほぼ円形で、坑底ピットを1つもつ。断面も下半がほぼ垂直、上半は壁が屈折し開く同じ形をしている。

位置：4区I X8～I X14 グリッド。立地：丘陵頂部のほぼ平坦面。形状：3基がほぼ直線状にならぶ。列方向：東西。規模：調査区内で9.5m。土坑間隔：4.1m～5.4m。

III群：列に属さないものや判断できないもの4基。(第44図)

すべてが楕円形・円形タイプである。SK824は、その形状や位置からI列と関連する可能性もある。また、その他の穴でも調査区外に関係する陥し穴の存在が考えられる。

陥し穴の配置や時期についての考察は、本章3節小結の項で述べることにしたい。

(註1) 列をもととしたグループ分けについては、指導を頂いた佐藤宏之氏から、「同じ列に属する陥し穴が、同じ特徴をもっているのは、同一集団によってつくられたものと考えられる。よって、列を基本としたグループ分けは、のちの研究・分析において有効」との示唆を受けた。

(2) 遺物

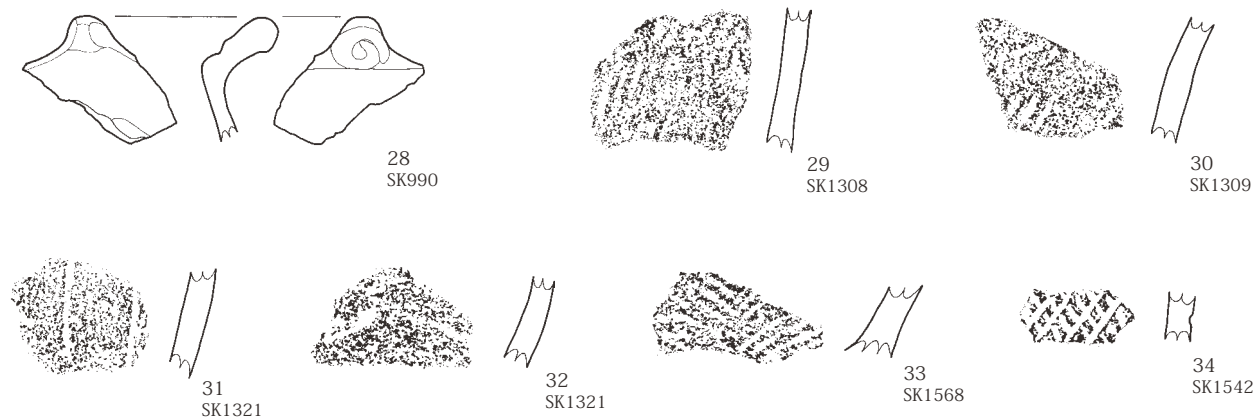
イ 土器

縄文土器は、全部で90点出土したが、小破片が多く、総重量は769gに過ぎない。このうち陥し穴からの出土が40点297g、それ以外が50点472gである。

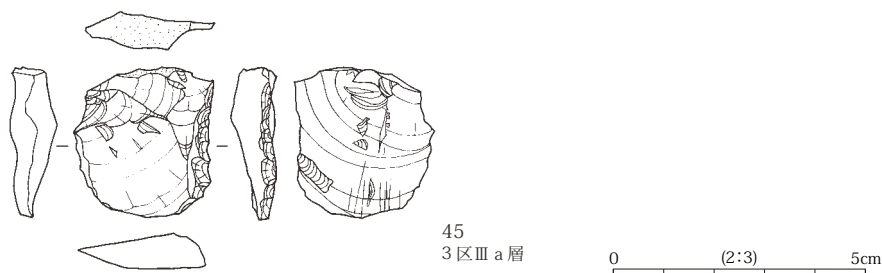
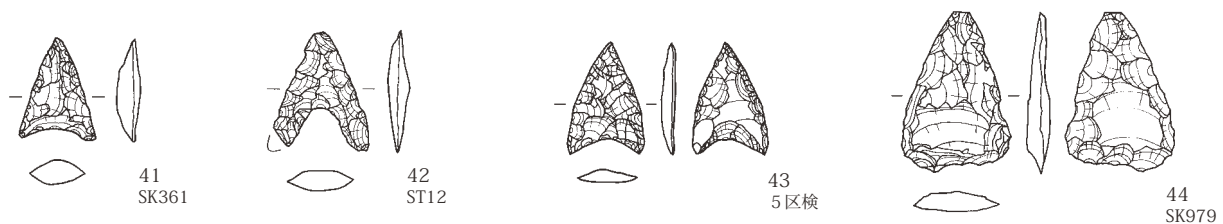
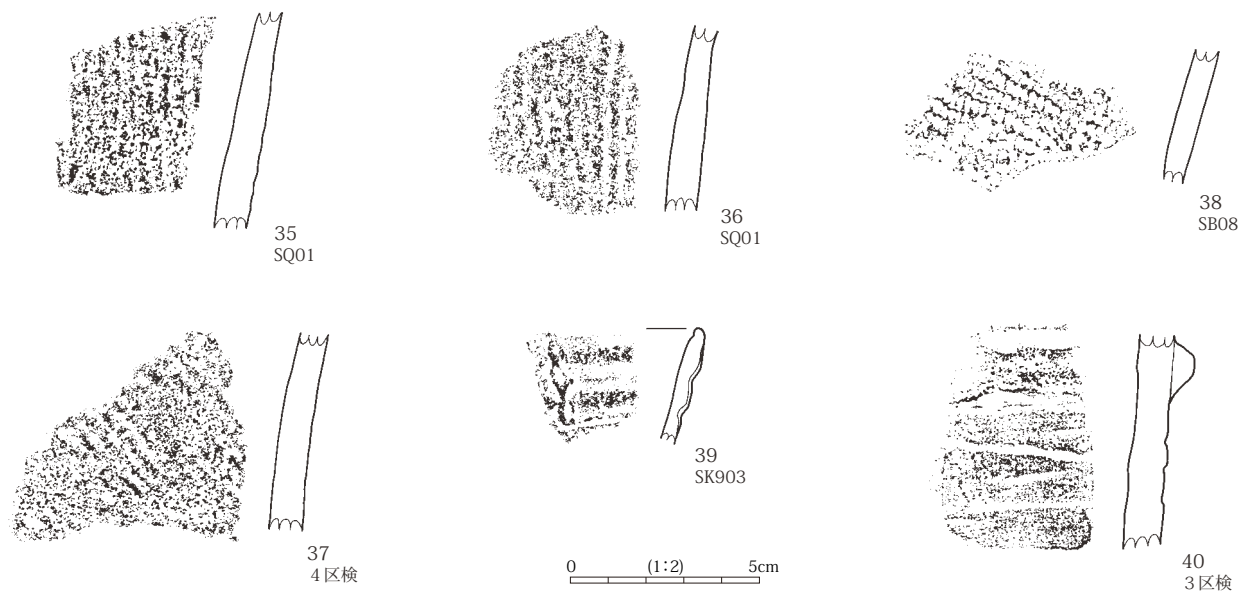
ほとんどの土器片は、磨耗が激しく、文様等はみえない。表面の剥離も著しい。かろうじて文様が判別できたものなど13点を図化した(第45図)。器種はすべて深鉢と思われる。

28～34は陥し穴から出土した土器である。34以外は、すべて縄文時代後期と思われる。28は、口縁部で、突起部内面に、輪状の隆帯がはられている。口縁にいくつかの突起部をもつ器形と思われる。後期堀之内1式と考えられる。29・30・33は、単節縄文が施されている。31は縦に、32は横に単沈線がみ

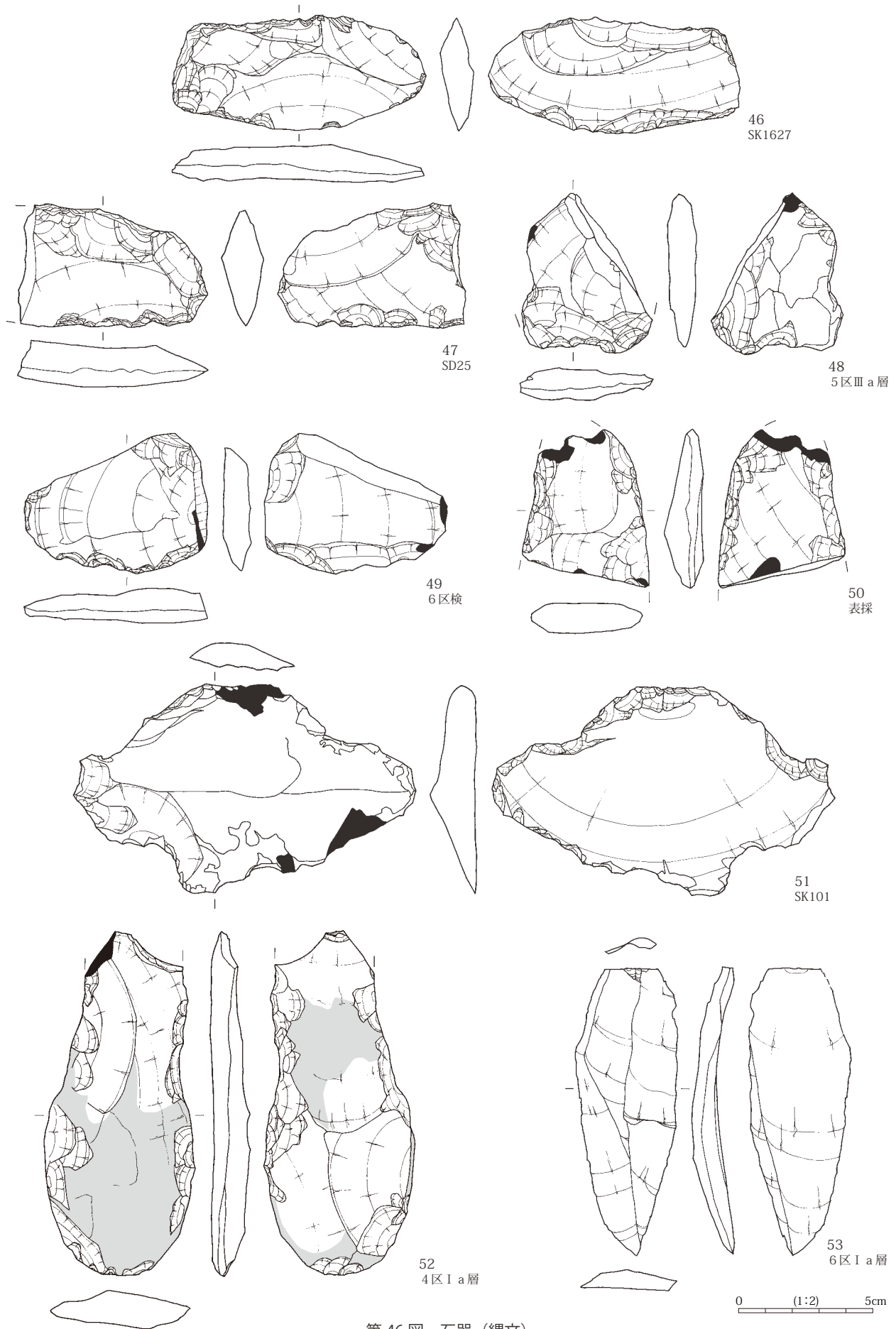
陥し穴



陥し穴以外



第45図 土器・石器（縄文）



第46図 石器 (縄文)

える。沈線内の施文の有無は、磨耗が激しく不明である。

34 は、唯一縄文時代中期と思われる土器である。半節竹管で斜格子状の沈線を施している。中期五領ケ台式と考えられる。

35 ~ 40 は、陥し穴以外から出土した土器である。35 ~ 38 は、羽状縄文がみられ、胎土、厚さなどから縄文時代前期と思われる。断面は黒くなっており繊維の入っている可能性もあるが、確認できない。35・36 はともに縦状の縄文で、出土場所も同じことから同一個体と思われる。

39・40 は、縄文時代後期と思われる土器である。39 は、口縁部で、薄く、外面には縦に粘土紐がはられ刺突による文様がみえる。堀ノ内2式と考えられる。40 は、隆帯がまわっている。

ロ 石器

石器は、全部で13点出土し、すべてを図化・掲載した(第45・46図)。このうち、陥し穴からの出土は、44の石鏃と46の打製石斧で、ともに溝状陥し穴からみつかった。器種別には、石鏃4点、削器4点、打製石斧2点、剥片2点である。これらは縄文時代のもと思われる。他に旧石器時代の石刃1点が出土した。

石鏃は、41が凝灰岩、42が黒曜石、43がチャート、44が緑色凝灰岩と石材が異なっている。44は、端部があった可能性もある。51は、大きいのが、特定の器種を想定させるような成型がみられないため、剥片とした。52の打製石斧は、刃部と体部に磨耗がみられる。刃部の磨耗は掘削の際の使用によるもの、体部の磨耗は縛り付けた紐との摩擦によってできたものと推定される。

53は、旧石器時代石刃と思われる。石材は、野尻湖付近の旧石器でみられる無斑晶質安山岩である。

第2表-1 陥し穴一覧表

() は、残存値、推定値を示す。

遺構番号(SK)	調査区	大々地区	位置関係		群	列	平面関係(上端)				平面関係(下端)			断面関係		備考	
			中地区(8mグリッド)	群			平面形	長軸(m)	短軸(m)	長軸方向	長短比	長軸(m)	短軸(m)	長短比	検出面からの深さ(cm)		底面標高(m)
1	708	5	I	S15	I A	A2	溝	3.55	0.54	N 31° W	6.6	3.27	0.13	25.2	129	525.76	年代測定(後期)
2	778	5	I	S18	I A	A1	溝	3.41	0.50	N73° W	6.8	3.22	0.10	32.2	99	526.10	縄文土器片
3	779	5	I	S18	I A	A1	溝	3.58	0.45	N60° W	8.0	3.20	0.07	45.7	102	526.07	
4	797	5	I	X3・S23	I A	A1	溝	3.18	0.49	N66° W	6.5	2.97	0.11	27.0	110	525.82	年代測定(後期)
5	801	5	I	S23	I A	A1	溝	3.28	0.35	N67° W	9.4	3.25	0.09	36.1	83	526.06	
6	843	4	I	X10	I A	A3	溝	2.78	0.44	N5° E	6.3	2.63	0.10	26.3	99	526.35	
7	981	4	III	C5	I A	A1	溝	3.20	0.53	N57° W	6.0	3.09	0.17	18.2	87	524.84	
8	988	4	III	C5	I A	A1	溝	3.90	0.51	N56° W	7.6	3.58	0.17	21.1	83	524.75	縄文土器片
9	989	4	III	C4・5・10	I A	A1	溝	3.08	0.47	N49° W	6.6	2.93	0.16	18.3	76	524.71	縄文土器片
10	1000	4	III	C9	I A	A1	溝	3.54	0.44	N56° W	8.0	3.44	0.11	31.3	75	524.65	
11	1057	4	I	X7	I A	A1	溝	2.90	0.66	N54° W	4.4	2.89	0.19	15.4	105	525.89	
12	1058	4	I	X7・12	I A	A1	溝	3.34	0.57	N64° W	5.9	3.35	0.11	30.5	99	525.86	縄文土器片
13	1059	4	I	X12	I A	A1	溝	2.97	0.45	N53° W	6.6	2.93	0.11	26.6	79	525.91	
14	1060	4	I	X11・12・17	I A	A1	溝	3.44	0.44	N60° W	7.8	3.38	0.12	28.2	103	525.52	縄文土器片
15	1115	4	III	C9	I A	A1	溝	3.0	0.43	N50° W	7.0	3.07	0.14	21.9	70	524.63	
16	1200	4	I	X16	I A	A1	溝	3.07	0.50	N53° W	6.1	2.76	0.20	13.8	88	525.47	縄文土器片
17	1201	4	I	X16・21	I A	A1	溝	3.50	0.45	N59° W	7.8	3.54	0.28	12.6	85	525.38	縄文土器片
18	1202	4	I	X21	I A	A1	溝	3.20	0.41	N61° W	7.8	3.09	0.16	19.3	94	525.19	
19	1203	4	I	X21	I A	A1	溝	3.38	0.41	N55° W	8.2	3.28	0.20	16.4	83	525.05	縄文土器片
20	1309	4	III	C13	I A	A1	溝	3.45	0.42	N48° W	8.2	3.41	0.08	42.6	66	524.60	縄文土器片(後期)
21	1314	4	III	C13・18	I A	A1	溝	3.35	0.48	N37° W	7.0	3.18	0.12	26.5	72	524.53	
22	1321	4	III	C13・14	I A	A1	溝	3.16	0.59	N44° W	5.4	3.21	0.12	26.8	75	524.49	縄文土器片(後期)
23	1543	6	I	S22・X2・3	I A	A2	溝	3.69	0.63	N27° W	5.9	3.48	0.13	26.8	89	525.97	
24	1627	6	I	X2・3	I A	A1	溝	3.59	0.46	N71° W	7.8	3.67	0.10	36.7	88	526.01	縄文土器片 打製石斧
25	162	2	III	S17・18・23	I B	B4	溝	(1.90)	0.24	N11° W	7.9	(1.78)	0.08	22.3	60	531.76	
26	163	2	III	S22	I B	B4	溝	3.10	0.27	N15° W	11.5	2.92	0.08	36.5	77	531.64	
27	432	3	III	H4・5	I B	B2	溝	3.29	0.31	N20° W	10.6	3.15	0.11	28.6	86	525.19	
28	483	3	III	H4	I B	B2	溝	2.67	0.27	N30° W	9.9	2.45	0.10	24.5	67	525.18	
29	525	3	III	R5・10	I B	B3	溝	3.15	0.41	N4° W	7.7	2.98	0.14	21.3	120	528.24	
30	528	3	III	S1・6	I B	B3	溝	3.45	0.46	N24° W	7.5	3.35	0.16	20.9	90	528.64	
31	786	5	I	S23	I B	B1	溝	3.47	0.37	N29° W	9.4	3.15	0.07	45.0	104	525.96	
32	859	4	I	X7	I B	B1	溝	3.69	0.48	N34° W	7.7	3.59	0.07	51.3	93	526.0	縄文土器片
33	900	4	I	X6・7・11・12	I B	B1	溝	3.50	0.32	N23° W	10.9	3.24	0.10	32.4	76	525.96	縄文土器片
34	979	4	I	X11・16	I B	B1	溝	3.58	0.48	N45° W	7.5	3.47	0.08	43.4	105	525.30	石鏃
35	980	4	I	W20	I B	B1	溝	3.45	0.38	N41° W	9.1	3.26	0.07	46.6	123	524.75	縄文土器片
36	986	4	I	X11	I B	B1	溝	3.41	0.38	N30° W	9.0	3.33	0.08	41.6	75	525.78	
37	990	4	I	W20・25	I B	B1	溝	3.53	0.28	N41° W	12.6	3.40	0.09	37.8	69	525.05	縄文土器片(後期)
38	992	4	III	C4	I B	B1	溝	3.50	0.33	N33° W	10.6	3.31	0.09	36.8	84	524.68	
39	1101	4	III	C8・13	I B	B1	溝	3.55	0.23	N30° W	15.4	3.37	0.05	67.4	68	524.50	
40	1114	4	I	W24・25	I B	B1	溝	3.59	0.28	N43° W	12.8	3.47	0.06	57.8	77	524.80	
41	1154	4	III	C4	I B	B1	溝	(2.39)	0.30	N60° W	8.0	(2.33)	0.09	25.9	69	524.72	
42	1308	4	III	C13	I B	B1	溝	(2.27)	0.17	N33° W	13.4	(2.27)	0.07	32.4	49	524.58	縄文土器片(後期)
43	1333	4	III	C9	I B	B1	溝	(0.99)	0.37	N55° W	2.7	(0.94)	0.07	13.4	51	524.76	

第2表-2 陥し穴一覧表

遺構番号 (SK)	調査区	位置関係 大々地区 中地区 (8mグリッド)	群	平面関係 (上端)				平面関係 (下端)				断面関係		備考		
				平面形状	長軸 (m)	短軸 (m)	長軸方向	長短比	長軸 (m)	短軸 (m)	長短比	検出面からの 深さ (cm)	底面標高 (m)			
															列	
44	1642	6 I	X2	I B	B1	溝	3.40	0.33	N39° W	10.3	3.24	0.10	32.4	56	526.14	
45	604	5 I	O15	I C	C1	溝	1.85	0.40	N86° W	4.6	1.30	0.13	10.0	105	525.51	年代測定 (後期)
46	610	5 I・II	O5・K11	I C	C1	溝	2.10	0.82	N86° W	2.6	1.62	0.15	10.8	149	524.34	
47	614	5 I	O20	I C	C1	溝	1.74	0.25	N78° W	7.0	1.43	0.10	14.3	89	526.16	
48	624	5 I	S5	I C	C5	溝	1.81	0.28	N65° W	6.5	1.41	0.07	20.1	113	525.79	
49	659	5 I	S14・15	I C	C5	溝	2.0	0.39	N58° W	5.1	1.82	0.08	22.8	124	525.76	
50	780	5 I	S19	I C	C5	溝	1.94	0.35	N32° W	5.5	1.59	0.09	17.7	118	525.85	
51	1551	6 I	O6・7・11・12	I C	C4	溝	2.08	0.45	N76° W	4.6	1.69	0.08	21.1	127	524.22	
52	1552	6 I	O7	I C	C5	溝	1.81	0.40	N83° W	4.5	1.48	0.04	37.0	118	524.28	
53	1568	6 I	O16	I C	C5	溝	1.80	0.55	N59° W	3.3	1.69	0.06	28.2	125	525.94	縄文土器片 (後期)
54	1570	6 I	N20・O16	I C	C4	溝	1.98	0.61	N22° W	3.2	1.83	0.05	36.6	120	524.76	
55	1579	6 II	F6・11	I C	C2	溝	1.75	0.30	N16° E	5.8	1.26	0.05	25.2	105	523.79	
56	1580	6 I	J10	I C	C2	溝	1.85	0.30	N6° E	6.2	1.57	0.06	26.2	102	523.86	
57	1582	6 I	J14	I C	C3	溝	1.62	0.43	N33° W	3.8	1.18	0.06	19.7	111	523.95	
58	1584	6 II	F16	I C	C1	溝	1.93	0.60	N87° W	3.2	1.63	0.09	18.1	156	523.55	
59	1593	6 I	J19	I C	C4	溝	2.02	0.41	N78° W	4.9	1.83	0.09	20.3	113	523.94	
60	1600	6 I	J23	I C	C4	溝	1.99	0.43	N76° W	4.6	1.67	0.06	27.8	100	524.12	
61	1602	6 I	O2	I C	C4	溝	2.15	0.49	N71° W	4.4	1.83	0.08	22.9	124	524.14	
62	1638	6 I	J22	I C	C5	溝	2.15	0.40	N58° W	5.4	1.71	0.07	24.4	128	523.82	
63	1644	6 I	O2	I C	C5	溝	1.80	0.48	N80° E	3.8	1.40	0.06	23.3	123	524.02	
64	524	3 III	S11	I D	D7	溝	1.72	0.17	N19° W	10.1	1.57	0.08	19.6	44	530.26	
65	704	5 I	S14	I D	D3	溝	2.85	0.27	N67° W	10.6	2.51	0.08	31.4	64	526.46	
66	706	5 I	S9	I D	D3	溝	2.64	0.19	N77° W	13.9	2.53	0.09	28.1	59	526.48	
67	777	5 I	S18	I D	D3	溝	2.45	0.22	N58° W	11.1	2.21	0.07	31.6	64	526.35	
68	804	5 I	S18	I D	D3	溝	2.28	0.22	N60° W	10.4	2.25	0.06	37.5	60	526.57	年代測定 (後期)
69	850	4 I	X6	I D	D3	溝	2.50	0.29	N48° W	8.6	2.44	0.09	27.1	64	526.12	
70	983	4 I	W15	I D	D3	溝 (0.98)	0.29	N52° W	3.4	(0.92)	0.08	11.5	85	525.40		
71	987	4 I	W20	I D	D3	溝 (2.0)	0.32	N44° W	6.3	(1.95)	0.06	32.5	76	524.99	縄文土器片	
72	1310	4 III	C8	I D	D5	溝	1.73	0.19	N68° W	9.1	1.66	0.07	23.7	64	524.53	
73	1327	4 III	C13	I D	D6	溝	1.73	0.13	N69° W	13.3	1.57	0.04	39.3	85	524.32	
74	1328	4 III	C18・23	I D	D6	溝	1.60	0.15	N77° W	10.7	1.46	0.06	24.3	66	524.69	
75	1335	4 I	W10・X6	I D	D3	溝	2.39	0.20	N39° W	12.0	2.28	0.09	25.3	54	526.00	
76	1336	4 III	C13	I D	D5	溝	1.72	0.18	N54° W	9.6	1.64	0.07	23.4	72	524.35	
77	1484	4 III	C8	I D	D6	溝	1.82	0.17	N68° W	10.7	1.52	0.07	21.7	69	524.49	
78	1524	2 I	S22・X2	I D	D3	溝	2.88	0.26	N48° W	11.1	2.80	0.07	40.0	59	526.22	
79	1542	6 I	S22・23	I D	D3	溝	2.88	0.43	N56° W	6.7	2.71	0.08	33.9	68	526.25	縄文土器片 (中期)
80	1554	6 I	O1・6	I D	D2	溝	1.97	0.18	N52° W	10.9	1.54	0.06	25.7	87	523.87	
81	1555	6 I	N10・O6	I D	D3	溝	1.91	0.16	N61° W	11.9	1.86	0.12	15.5	25	524.71	
82	1558	6 I	S9	I D	D3	溝	2.62	0.16	N65° W	16.4	2.41	0.08	30.1	51	526.48	
83	1565	6 I	S4	I D	D2	溝	2.21	0.24	N41° W	9.2	2.08	0.10	20.8	68	525.79	
84	1567	6 I	S17	I D	D4	溝	2.38	0.35	N48° W	6.8	2.33	0.09	25.9	61	526.35	
85	1573	6 I	N15・O11	I D	D2	溝	2.31	0.18	N69° W	12.8	2.19	0.06	36.5	42	525.14	
86	1576	6 I	N20	I D	D3	溝	2.60	0.33	N70° W	7.9	2.53	0.05	50.6	50	525.31	
87	1577	6 I	N24・25	I D	D3	溝	2.14	0.15	N77° W	14.3	2.07	0.04	51.8	26	526.30	
88	1581	6 I	J10・15	I D	D1	溝	1.84	0.31	N52° W	5.9	1.43	0.08	17.9	103	523.89	
89	1594	6 I	J18・19	I D	D1	溝	1.95	0.23	N37° W	8.5	1.52	0.07	21.7	102	523.92	
90	1626	6 I	X2	I D	D3	溝	2.44	0.21	N35° W	11.6	2.37	0.06	39.5	96	525.72	
91	1628	6 I	S21	I D	D4	溝	2.69	0.34	N46° W	7.9	2.53	0.05	50.6	107	525.68	
92	602	5 II	K7	II E	E	円	1.05	0.92	N22° W	1.1	0.30	0.27	1.1	75	525.70	
93	603	5 II	K11	II E	E	楕円	1.02	0.85	N43° W	1.2	0.39	0.45	0.9	56	526.13	
94	606	5 II	K6	II E	E	長方形	0.95	0.67	N38° W	1.4	0.77	0.45	1.7	31	526.21	
95	607	5 I・II	O15K11	II E	E	方形	0.88	0.74	N35° W	1.2	0.69	0.55	1.3	25	526.38	
96	608	5 I	O15	II E	E	長方形	1.0	0.48	N26° W	2.1	0.81	0.37	2.2	23	526.49	
97	615	5 I	O14・15・19・20	II E	E	円	0.90	0.80	N38° W	1.1	0.66	0.59	1.1	68	526.00	
98	616	5 I	O19	II E	E	楕円	1.06	0.67	N42° W	1.6	0.83	0.59	1.4	60	526.08	年代測定 (早期)
99	617	5 I	O19	II E	E	長方形	0.94	0.61	N46° W	1.5	0.84	0.50	1.7	27	526.45	
100	618	5 I	O19	II E	E	長方形	0.93	0.62	N45° W	1.5	0.85	0.51	1.7	28	526.48	
101	619	5 I	O21	II E	E	楕円	0.90	0.76	N22° W	1.2	0.86	0.53	1.6	65	526.18	
102	1553	6 I	O1	II F	F	楕円	1.06	0.55	N50° W	1.9	1.01	0.48	2.1	55	524.37	
103	1574	6 I	N15	II F	F	楕円	1.13	0.59	N25° W	1.9	0.86	0.45	1.9	66	524.62	
104	1575	6 I	N14	II F	F	楕円	1.10	0.72	N42° W	1.5	0.97	0.61	1.6	76	524.70	
105	1583	6 I	J14	II F	F	楕円	1.11	0.58	N53° W	1.9	0.80	0.43	1.9	61	524.21	年代測定 (前期)
106	1597	6 I	J18	II F	F	楕円	1.26	0.65	N45° W	1.9	1.12	0.50	2.2	74	523.99	
107	1598	6 I	J18	II F	F	楕円	1.10	0.72	N40° W	1.5	0.94	0.56	1.7	71	524.10	
108	1639	6 I	J22	II F	F	楕円	1.18	0.94	N35° W	1.3	1.03	0.59	1.7	84	524.14	
109	1640	6 I	J22	II F	F	楕円	1.44	1.03	N45° W	1.4	1.10	0.56	2.0	108	523.87	
110	1645	6 I	N18	II F	F	楕円	1.17	0.50	N48° W	2.3	0.91	0.35	2.6	42	525.18	
111	1647	6 I	N22・23	II F	F	不整形円	1.23	0.58	N49° W	2.1	1.04	0.36	2.9	63	524.94	
112	1648	6 I	S1	II F	F	楕円	1.0	0.50	N45° W	2.0	0.66	0.26	2.5	69	524.51	
113	1650	6 I	J9・10	II F	F	楕円	1.23	0.70	N58° W	1.8	0.89	0.48	1.9	60	524.01	
114	609	5 II	K16	II G	G	長方形	1.10	0.50	N36° W	2.2	0.90	0.33	2.7	60	526.35	
115	612	5 I	O24	II G	G	楕円	1.10	0.45	N41° W	2.4	1.10	0.37	3.0	50	526.60	
116	623	5 I	T11	II G	G	楕円	1.01	0.50	N48° W	2.0	0.80	0.31	2.6	69	526.36	
117	656	5 I	T3	II G	G	楕円	1.05	0.50	N46° W	2.1	0.93	0.42	2.2	15	526.90	
118	715	5 I	S20	II G	G	楕円	1.27	0.94	N36° W	1.4	1.13	0.62	1.8	81	526.12	年代測定 (前期)
119	800	5 I	S23	II G	G	長方形	1.08	0.63	N43° W	1.7	1.15	0.48	2.4	86	526.00	
120	851	4 I	X1	II G	G	長方形	1.13	0.65	N16° W	1.7	1.20	0.65	1.8	70	526.02	
121	620	5 I	S5	II H	H	楕円	0.85	0.51	N40° E	1.7	0.66	0.19	3.5	43	526.39	
122	621	5 I	T6	II H	H	円	0.98	0.87	N15° E	1.1	0.42	0.16	2.6	51	526.50	
123	622	5 I	S10	II H	H	楕円	0.97	0.70	N49° E	1.4	0.69	0.24	2.9	58	526.30	
124	1561	6 I	S5	II H	H	円	0.76	0.63	N36° E	1.2	0.52	0.36	1.4	37	526.32	
125	1566	6 I	S4	II H	H	不整形楕円	0.64	0.53	N18° E	1.2	0.35	0.34	1.0	30	526.16	
126	1646	6 I	N18・23	II H	H	楕円	1.23	0.80	N40° E	1.5	0.90	0.49	1.8	43	525.17	
127	826	4 I	X13・14	II I	I	楕円	1.36	0.94	N4° E	1.4	0.80	0.50	1.6	63	526.50	
128	827	4 I	X8・13	II I	I	円	1.29	1.29	N7° E	1.0	0.86	0.46	1.9	80	526.17	
129	829	4 I	X9・14	II I	I	楕円	1.40	1.06	N1° E	1.3	0.92	0.64	1.4	57	526.70	
130	223	2 VI	A12	III	III	楕円	1.54									

3 平安時代

(1) 遺構

イ 竪穴住居跡

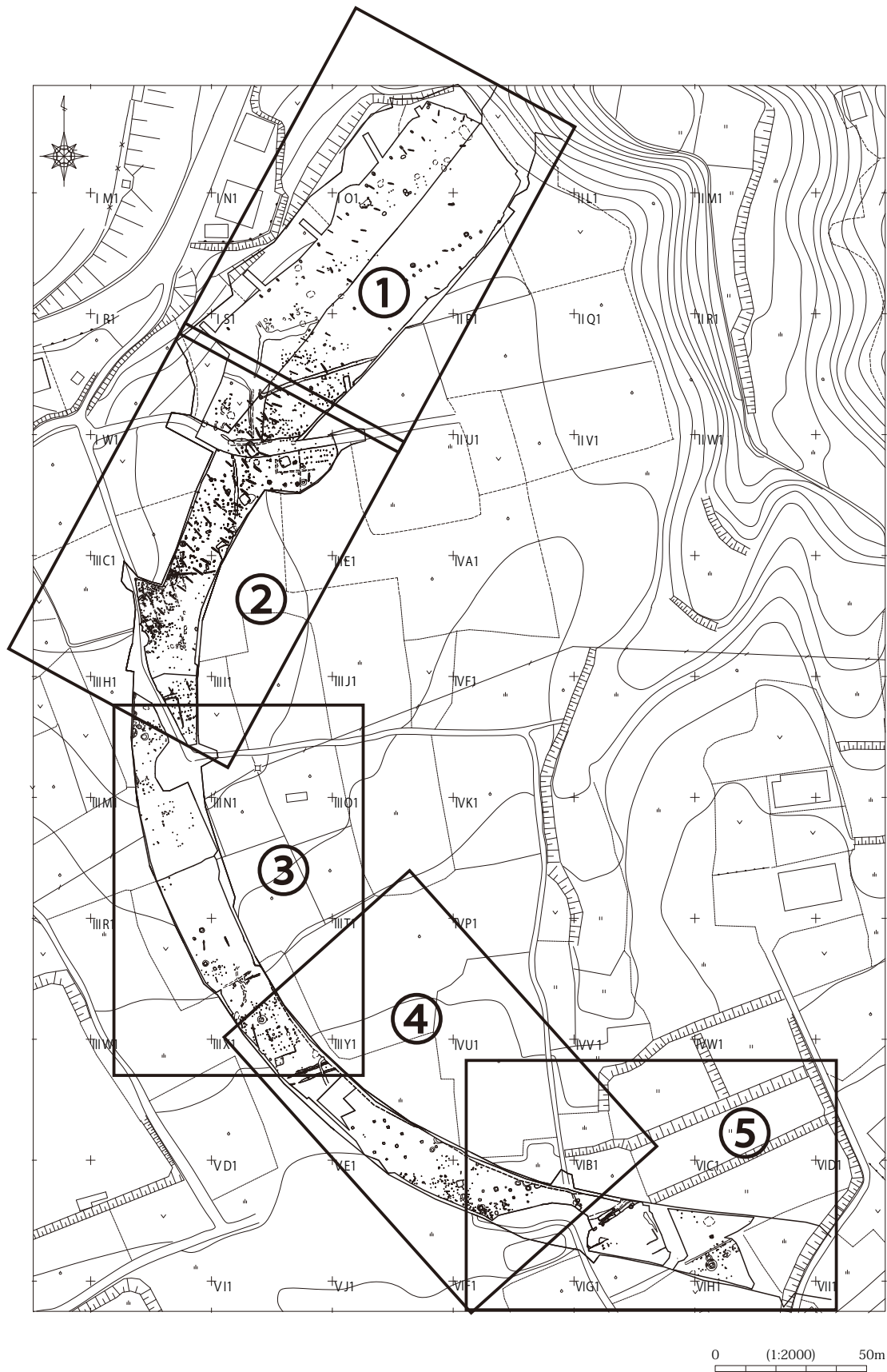
9軒確認された。分布は、調査区南寄りの2区1軒(SB01)、中央部の4区周辺に7軒(SB03～08、10)、北寄りの6区1軒(SB09)である。(第48～52図)

SB01 (第53・72図 PL3・21) 【2区 VE3・4グリッド】

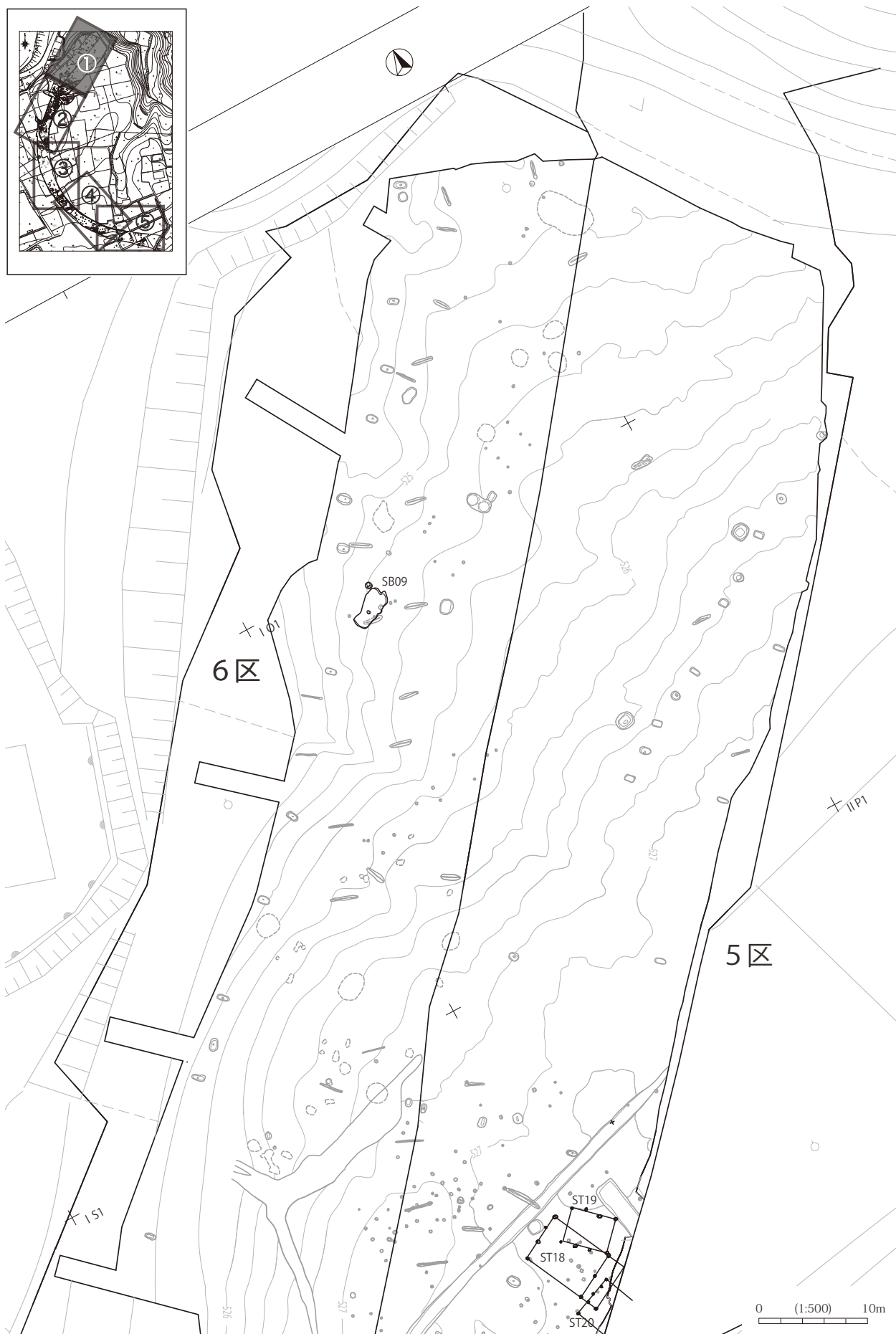
位置：2区南側西寄り、なだらかな北斜面にある。重複：戦国時代土坑5基(SK348、349、366、393、399)に切られる。検出：VI層上面にて確認した。検出の際、調査区境付近で、黒色土の広がり土師器の集中箇所がみられた。調査区境の壁面観察により、幅35cmほどの被熱ロームとそれとほぼ同じ高さでフラットに続く面があり、周溝と思われる屈曲する溝も検出されたため、住居跡と認定した。住居跡上部は耕地整理のため、削平されていた。規模・形状：住居は南側半分が調査区外である。東西方向は、周溝とカマドと推定した比熱ローム部分の間が5.0mで、これを一辺とするほぼ正方形プランであったと推測される。床面積は残存部分で8.55㎡である。主軸：カマド方向でN57°Wである。床面・壁：床面は、削平のため、全体の1/4ほどしか残存していない。堅くはなく、叩き締めた様子はみられない。壁は、削平のため、残っていない。カマド：調査において被熱した地山のロームが直径35cmほどのほぼ円形で確認された。位置的にも住居西壁中央の壁際にあることから、ここにカマドが構築されていたと判断した。ピット：4基確認された。同時に検出した戦国時代SKとは出土遺物と埋土の違いを根拠として区別した。P1・P2は支柱穴と思われる。P1はやや方形、P2は円形で、直径は45～50cmを測る。柱間寸法は2.55m、床からの深さは両方とも約50cmである。柱痕・礎石は検出されなかった。本来4本柱であったと想定される。P4は、その位置と出土遺物の多さからカマド施設に伴うものの可能性がある。その他の施設：壁際に周溝がつくられている。幅13～20cm深さ10cmほどで、他の壁際にもつくられていたものと思われる。堆積状況：残っていた部分で1層確認された。黒色砂質シルトで、黄褐色のロームブロックが多量に混入していた。焼土・炭化物はほとんどなかった。遺物出土状況：54～57、64～66はじめ多くの遺物はP3、P4からの出土である。時期：遺物から平安時代前期(9世紀代)に比定される。

SB03 (第53・72図 PL3・21) 【4区 IX3・4・8・9グリッド】

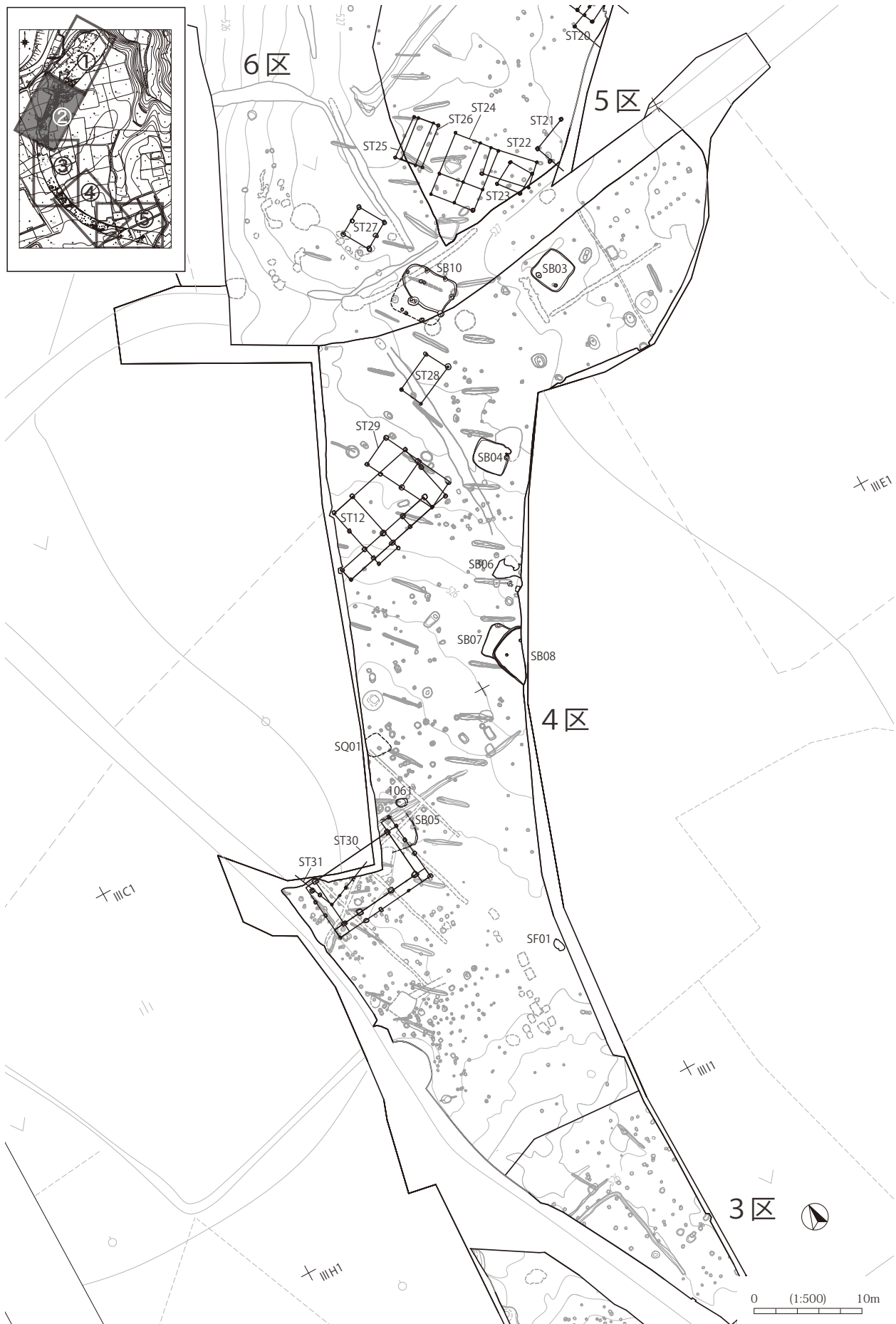
位置：4区から5区にかけて広がる丘陵部のほぼ頂部にあり、周囲は平坦である。重複：なし。検出：VI層上面において、黒色方形のプランを確認した。土師器片が集中して出土し、住居跡と判断した。規模・形状：一辺3.3mの方形である。床面積は9.73㎡を測る。主軸：カマド方向でN24°W。床面・壁：床面は灰白色ロームが多く混入する砂質シルトで、よく締まっている。貼床は認められなかった。壁は、検出面から25cmを測る。カマド：北壁ほぼ中央にある。40cm×60cmの範囲で堅く焼け締まった火床が確認できた。周囲には、粘質土塊や焼土が広く分布していた。粘土カマドであった可能性が高いが、袖などの痕跡は確認できなかった。その他の施設：カマドの反対側の南壁際中央部に40cm×15cm、高さ17cmの角礫が出土した。角礫は上面・下面とも平らで、上面が水平、下面は床面に接する形でみつかった。被熱した様子はみられずカマドで使用した石とは思えない。設置された可能性もあり、入口施設などが考えられる。ピット：2基確認された。P1は、すり鉢状の形態で、カマドの近くにあり、近くの床面に焼土もみられたことから、カマドに伴う施設と考えた。P2は、中央部分が円形に掘り下げられており、柱穴の可能性が考えられる。その他に柱穴は検出されなかった。堆積状況：カマドも含め4層に分層された。1層はⅢa層基調の黒色土層で、住居跡全体を覆っている。2～4層はカマド部分でみられ、2・3層は焼土を多く含んでいた。4層は火床である。時期：遺物から平安時代前期(9世紀代)に比定される。



第47図 表町遺跡 遺構全体図(割図)



第48図 表町遺跡 平安時代遺構全体図① (SB・ST)



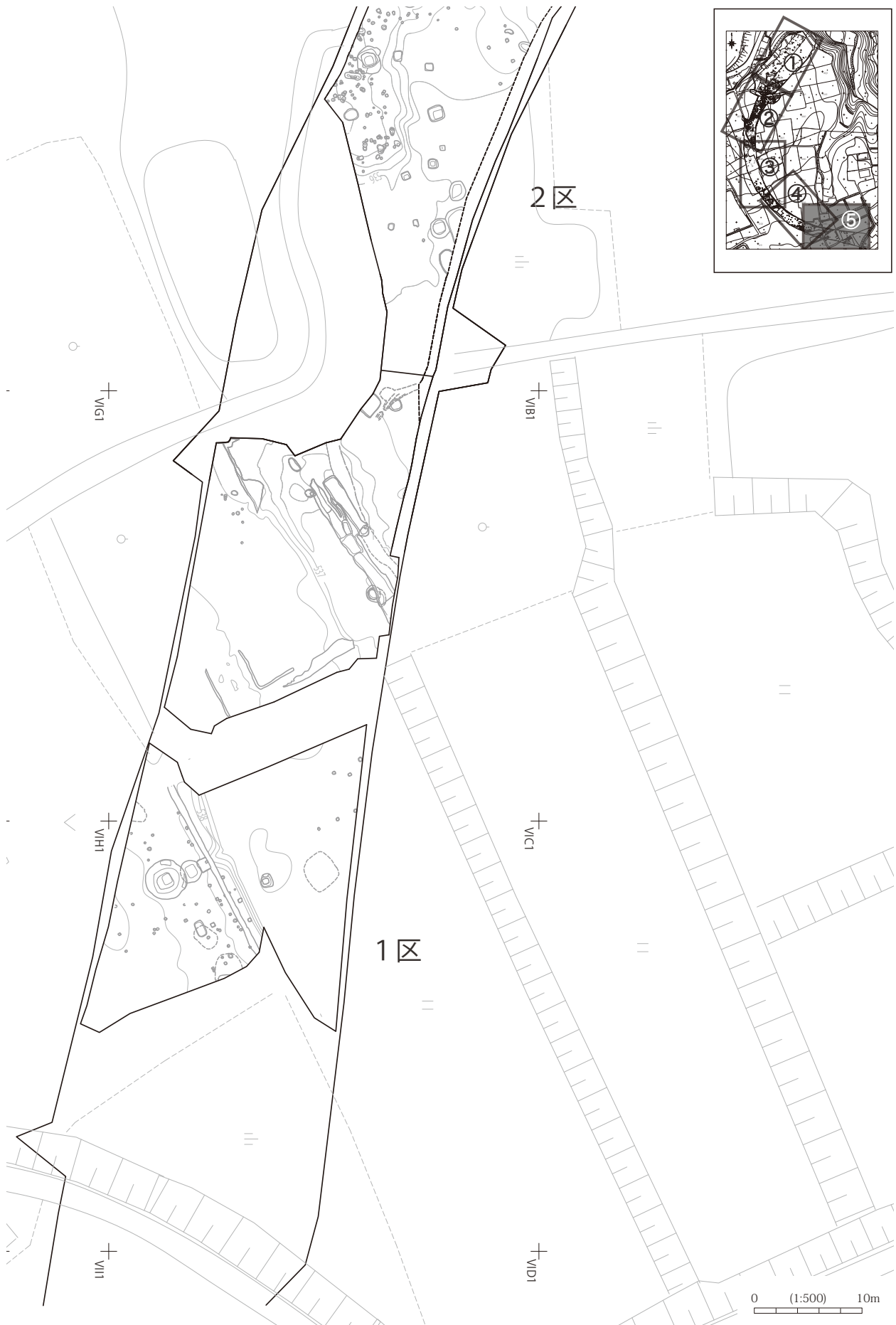
第49図 表町遺跡 平安時代遺構全体図② (SB・ST・SF・SQ・SK1061)



第50図 表町遺跡 平安時代遺構全体図③

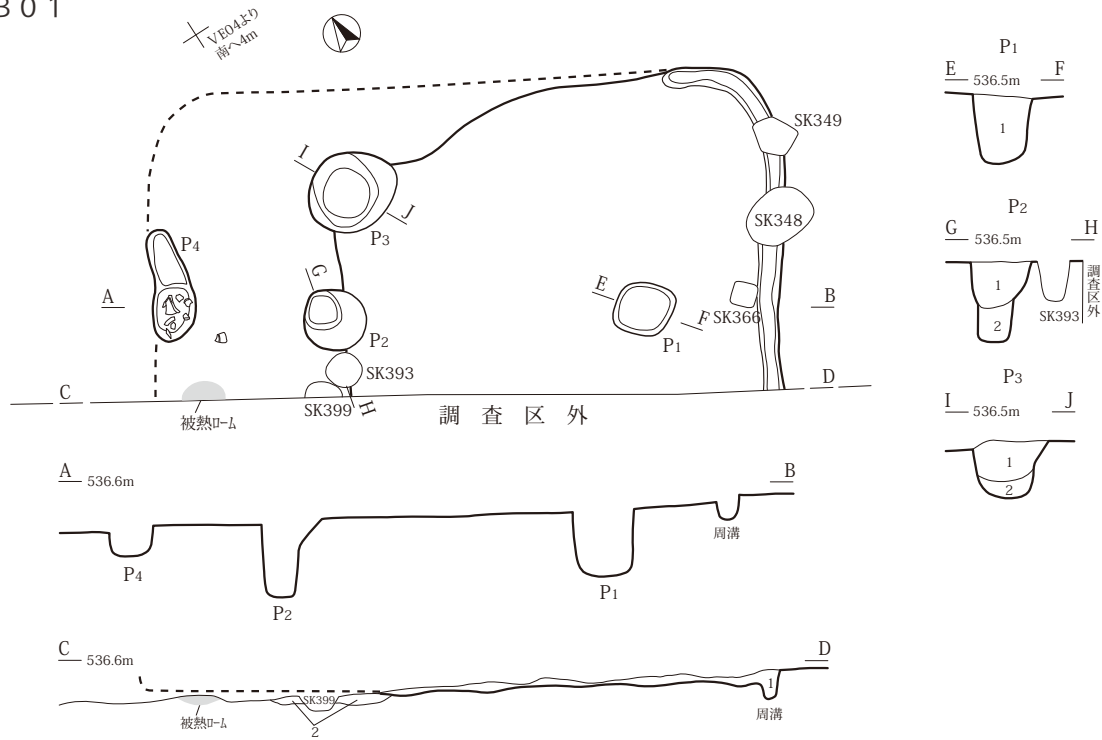


第 51 図 表町遺跡 平安時代遺構全体図④ (SB)



第52図 表町遺跡 平安時代遺構全体図⑤

SB01



SB01

- 1 黒色砂質シルト 10YR:1.7/1 黄褐色(10YR:5/8)ローム 30%混入 粘性なし しまりふつう
- 2 褐色砂質シルト 10YR:4/4 掘り方 黒色土30%混入 粘性なし しまりふつう

pit1

- 1 黒色砂質シルト 10YR:1.7/1 黄褐色ローム 粘り混入 粘性あり しまりふつう

pit2

- 1 黒色砂質シルト 10YR:1.7/1 粘性あり しまりふつう
- 2 黒色砂質シルト 10YR:1.7/1 黄褐色ローム 粘り混入 粘性なし しまりふつう

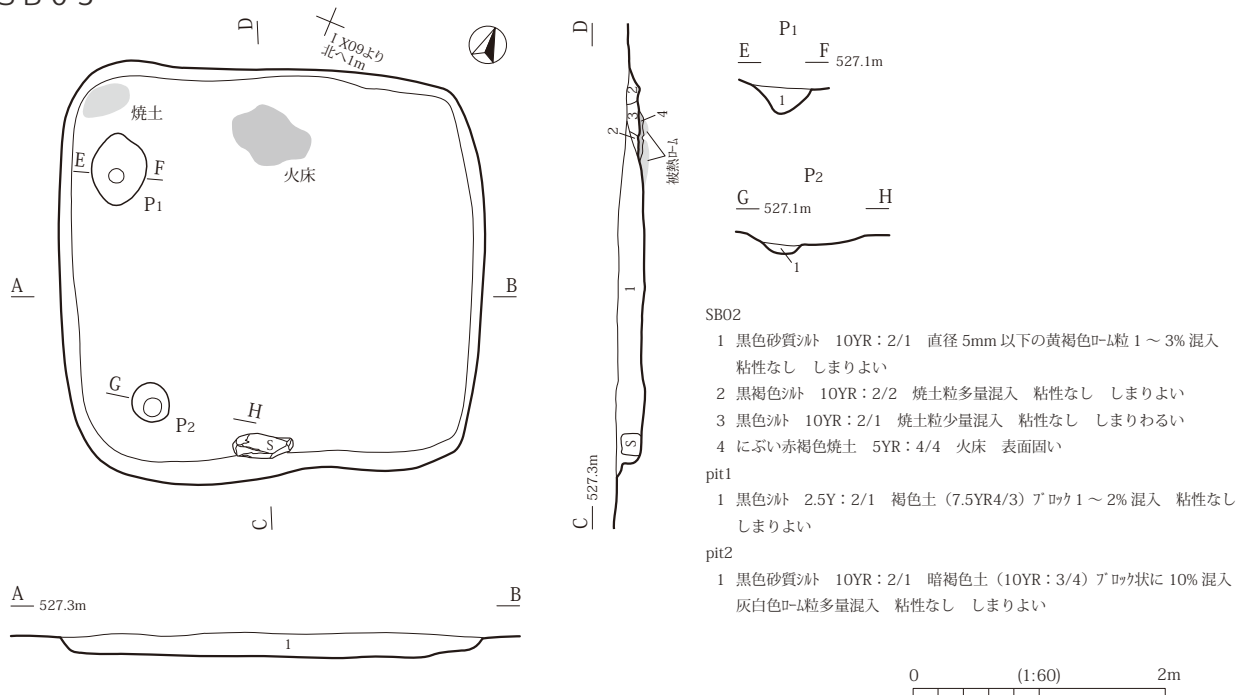
pit3

- 1 黒色砂質シルト 10YR:1.7/1 焼土ブロック、炭化物ブロック混入 粘性あり しまりふつう
- 2 黒色砂質シルト 10YR:1.7/1 黄褐色ローム多量混入 粘性あり しまりふつう

pit4

- 1 黒色砂質シルト 10YR:1.7/1 土器多数あり 粘性あり しまりややわるい

SB03



SB02

- 1 黒色砂質シルト 10YR:2/1 直径5mm以下の黄褐色ローム粒 1~3%混入 粘性なし しまりよい
- 2 黒褐色シルト 10YR:2/2 焼土粒多量混入 粘性なし しまりよい
- 3 黒色シルト 10YR:2/1 焼土粒少量混入 粘性なし しまりわるい
- 4 にぶい赤褐色焼土 5YR:4/4 火床 表面固い

pit1

- 1 黒色シルト 2.5Y:2/1 褐色土(7.5YR4/3)ブロック 1~2%混入 粘性なし しまりよい

pit2

- 1 黒色砂質シルト 10YR:2/1 暗褐色土(10YR:3/4)ブロックに10%混入 灰白色ローム粒多量混入 粘性なし しまりよい

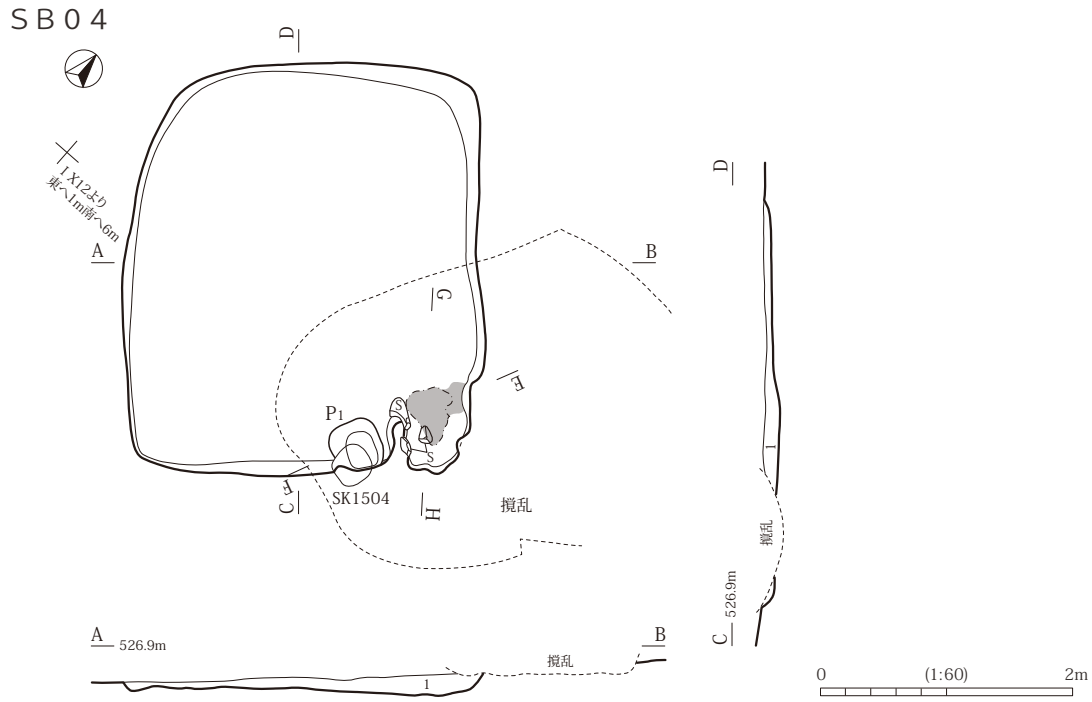
第53図 1号・3号竪穴住居跡

SB04 (第54・73図 PL3・21) 【4区 I X12グリッド】

位置：4区のゆるやかな南西斜面にある。重複：戦国時代SK1504に切られる。検出：VI層上面において、黒色方形プランを確認した。東側1/4ほどが耕作による攪乱を受けている。規模・形状：3.24m×2.86mのやや長方形プランである。床面積は8.44㎡を測る。主軸：カマド方向でN41°E、ほぼ傾斜にそって構築されている。床面・壁：掘りこんだVI層を床面とする。ほぼ平らでやや堅くはなっているものの、貼床や叩き締めた様子はない。掘方はみられない。壁は、最も遺存していた北東壁で高さ19cmを測る。カマド：南東壁北寄りにある。カマドの軸は、北東壁にほぼ平行(G-H)につくられている。燃烧部には明瞭な火床が残っていた。直径約40cmで、表面が厚さ3cmほど硬化していた。火床奥には支脚石が原位置に残っており、硬化範囲は支脚石まで達していた。煙道部は残っていなかった。支脚石は安山岩質の角礫で、上部が三角錘状になっていた。加工の可能性が考えられたが、表面観察では明確な加工痕跡はみられなかった。火床の左右には袖石が残っており、構造は石組み粘土カマドである。ただ原位置を保っているのは向かって右側の二つの石で、左側の石は耕作により動いていた。ピット：カマド向かって右側に直径45cm、深さ40cmのP1が検出された。底部に炭・灰が多く堆積しており、灰出しピットと判断した。支柱穴含めその他のピットや周溝は確認されなかった。堆積状況：住居跡全体は、Ⅲa層基調の黒褐色土で覆われている。カマド部分は6層に分層された。カマドの1～3層は焼土を多く含んでいた。カマド4層は火床である。カマド5層は袖土、6層はカマド構築の際の掘方である。遺物出土状況：80～84はじめほとんどの土器が、カマド周辺で出土した。時期：遺物から平安時代前期(9世紀代)に比定される。

SB05 (第55・73図 PL3・21・22) 【4区 Ⅲ C4・9グリッド】

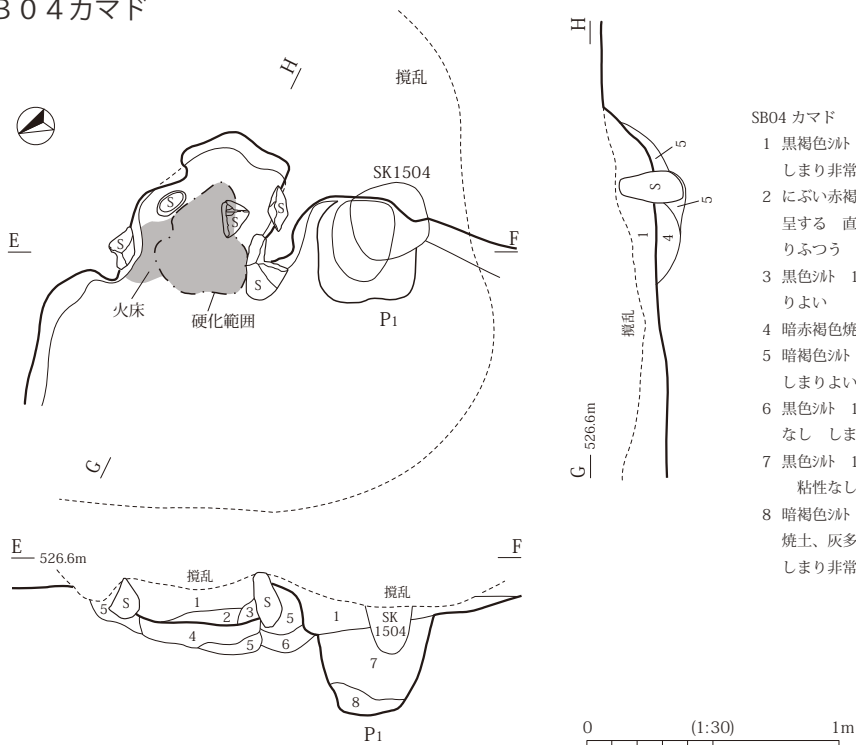
位置：4区西寄りの調査区境、ゆるやかな南西斜面にある。重複：戦国時代ST33とSK6基に切られる。また、平安時代ST30と時代不明のSK1490とは位置的に重複するが、削平によりSB05埋土との切り合いがなく、前後関係は不明。検出：VI層上面にて検出。調査開始時のトレンチ調査において、この付近で土師器、内黒土器片が集中して出土、焼土・炭化物も多く見られたため住居跡の存在が予想された。VI層上面における検出作業で、東壁のプランとカマドの痕跡は確認できたものの、その他の壁のプランは削られており確認できなかった。カマドの西側に土師器片など平安期遺物が出土する暗褐色土の落ち込みがいくつかみられ、これらが本住居跡掘方と判断し、この落ち込みが広がる範囲でプランを推定した。規模・形状：南東コーナー部分しか残っておらず全体状況は不明。掘方の残存状況からは一辺3～3.5mの方形プランを呈すると推定される。その場合、住居全体の1/6ほどの床面が残っていることとなる。主軸：不明。床面・壁：VI層を掘り込み床面とする。壁が確認できるのは東壁の一部のみで、高さ5cmほどである。その壁から西に1mほどの範囲で平らな面があり、ここを床面と判断した。貼床や叩き締めた様子はみられない。カマド：東壁際にありほぼ中央と思われる。この付近には検出時より焼土・炭化物が集中しており、その下から表面が硬化した火床が確認された。袖などの痕跡は確認できなかった。火床の中央に直径10cmほどの硬化していない部分があった。支脚石痕の可能性はあるが断定はできない。ピット：この付近にある、大小数々の落ち込みのうち、本住居跡使用時に伴うと判断したのは1基である。P1は、南東コーナー近くの南壁際に位置する。柱穴かどうかは不明。その他柱穴にあたるものは確認されなかった。堆積状況：3層に分層された。1層は住居跡を覆っていた埋土である。暗褐色土で、焼土を多く含んでいた。2層は火床で、表面が硬く焼き締まっていた。3層は掘方で、地山のVI層ロームブロックを多く含んでいる。遺物出土状況：カマド周辺(92～94)とP1(86～91)から多くの土器が出土した。P1からは完形の内黒杯が2点(88・89)みついている。また、本遺跡住居跡で唯一灰釉陶器が出土した。時期：遺物から平安時代前期(9世紀代)と比定される。灰釉陶器が出土していることから、遺跡の中では新しい住居跡と考えられる。



SB04

1 黒褐色シルト 10YR:3/1 黄褐色ロームブロック底部近くに多く混入 粘性なし しまりよい

SB04カマド



SB04 カマド

- 1 黒褐色シルト 10YR:2/2 住居跡覆土1層に対応 粘性なし しまり非常によい
- 2 にぶい赤褐色砂質シルト 5YR:4/4 全体に焼土混入し赤色を呈する 直径1cm以上のロームブロックも見える 粘性なし しまりふつう
- 3 黒色シルト 10YR:2/1 黄褐色ローム30%混入 粘性なし しまりよい
- 4 暗赤褐色焼土 5YR:3/6 火床 表面固い 粘性ややあり
- 5 暗褐色シルト 10YR:3/4 黄褐色ローム粒30%混入 粘性なし しまりよい
- 6 黒色シルト 10YR:2/1 黄褐色ローム粒・ブロック30%混入 粘性なし しまりよい
- 7 黒色シルト 10YR:2/1 P1 1層 黄褐色ロームブロック10%混入 粘性なし しまりふつう
- 8 暗褐色シルト 10YR:3/3 P1 2層 黄褐色ロームブロック1%混入 焼土、灰多量混入 灰出しピットと考えられる 粘性なし しまり非常にわるい

第54図 4号竪穴住居跡・同カマド

SB06 (第55・73図 PL3・22) 【4区 I X16・17・21・22グリッド】

位置：4区東寄りの調査区境、ゆるやかな南西斜面にある。重複：戦国時代SK1198、1199、1349に切られる。検出：Ⅲa層(黒色)下部～Ⅵ層(明黄褐色ローム)上面で検出。Ⅵ層近くの、地山がやや黄色がかったところで、黒色土が落ち込むコーナー部分のプランがみえ、カマド跡と思われる焼土が確認できたため、住居跡と認定した。住居の東側1/3程度は調査区外、西側半分は削平により残っていない。また住居東壁も攪乱で壊されている。規模・形状：北東のコーナー部分しか残っておらず不明。カマドが壁の中央につくられていたと想定すると、一辺約3mの規模となる。主軸：不明。想定カマド方向でN36°W。床面・壁：Ⅵ層を掘り込み床面としていたと思われるが、床下まで削られており不明。壁が確認できるのは東壁の一部のみで、高さ6cmほどである。カマド：北西壁際に地山のロームが被熱され硬化した部分があり、周囲では焼土・炭化物が多くみられたため、カマド跡と判断した。袖などの痕跡は確認できなかった。ピット：P1・P2は、平安時代土器片が多く出土し、住居に伴うものと判断した。P1・P2の他にP1に切られる形で、明黄褐色ロームブロックを多く含んだ黒褐色土の落ち込みが見られたが、床面中央に位置するため、掘方と判断した。P1・P2はともに住居内の位置関係から支柱穴とは考えられない。堆積状況：2層に分層された。1層は住居跡を覆っていた埋土である。黒色土で、ロームの混入はほとんどみられない。Ⅲa層基調と思われる。2層は掘方で、地山のⅥ層ロームブロックを多く含んでいる。遺物出土状況：P2から、完形に近い軟質須恵器杯(96)が出土した。時期：遺物から平安時代前期(9世紀代)と比定される。

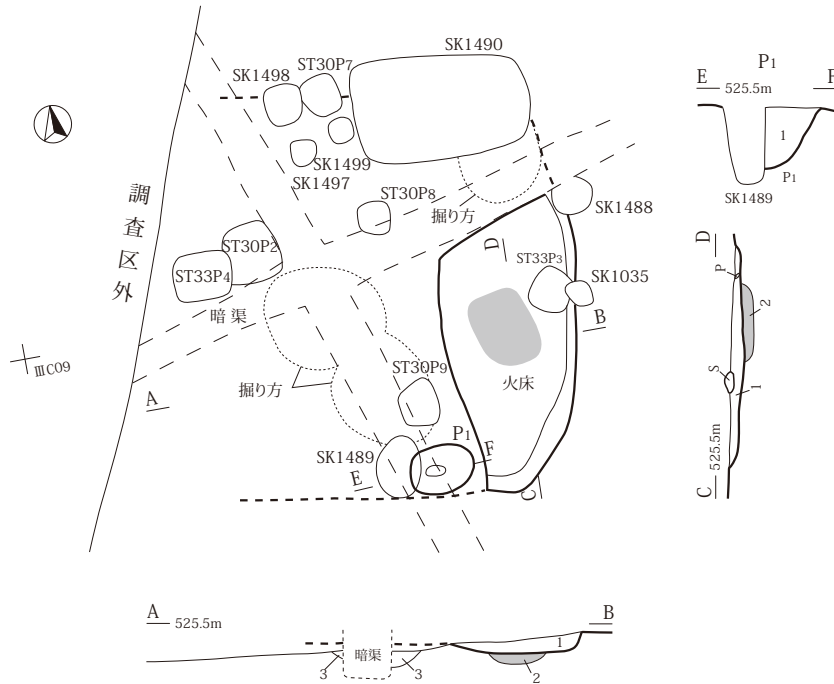
SB07 (第56・74図 PL3・22) 【4区 I X21グリッド】

位置：4区東寄りの調査区境、ゆるやかな南西斜面にある。重複：平安時代住居跡SB08および時期不明のSK1195に切られる。検出：Ⅲa層(黒色)下部～Ⅵ層(明黄褐色ローム)上面で検出。Ⅵ層近くの、地山がやや黄色がかったところで、方形となるプランが2つ切りあった形で検出された。双方から土師器甕・杯片などが出土したため、平安期竪穴住居跡2軒の切り合いと判断した。切り合いの新旧は、表面精査で埋土中の明黄褐色ロームブロック混入の度合いで区別ができ、東側の大きい住居跡が西側の小さな住居跡を切っていることが確認された。この切り合いは、両住居跡を通して設定した断面精査でも確認した。西側の古い住居跡をSB07、東側の新しい住居跡をSB08とした。規模・形状：SB08によって、住居の東半分が壊されている。規模は残っている北東-南西方向で3.22mを測る。これを1辺とする方形プランと推定される。主軸：N45°E。床面・壁：Ⅵ層を掘り込み床面としている。床面はほぼ平坦で、貼床や叩き締めた様子はみられなかった。壁はほとんど残っておらず、最も残っている北東壁で高さ20cmほどである。カマド：火床はじめ痕跡は確認されなかった。ただ掘り下げの過程で、SB08と接している北東壁中央付近で埋土中に多く焼土がみられ、この付近につくられていた可能性が高い。ピット：北側コーナー部で1基みつかった。土器は出土したが炭化物や灰などはみられなかった。堆積状況：1層で、明黄褐色ロームブロックを多く含んでいた。SB08のロームブロック混入の少ない埋土とは容易に見分けることができた。掘方はない。遺物出土状況：P1から土師器甕(100・101)・内黒杯の破片が出土しただけである。時期：遺物から平安時代前期(9世紀代)に比定される。

SB08 (第56・74図 PL3) 【4区 I X21、Ⅲ D1グリッド】

位置：4区東寄りの調査区境、ゆるやかな南西斜面にある。重複：平安時代住居跡SB07を切り、時期不明のSK1195に切られる。検出：Ⅲa層(黒色)下部～Ⅵ層(明黄褐色ローム)上面で検出。詳細はSB07の記述参照。規模・形状：調査区境がほぼ住居の対角線を通っており、東半分は調査区外である。残って

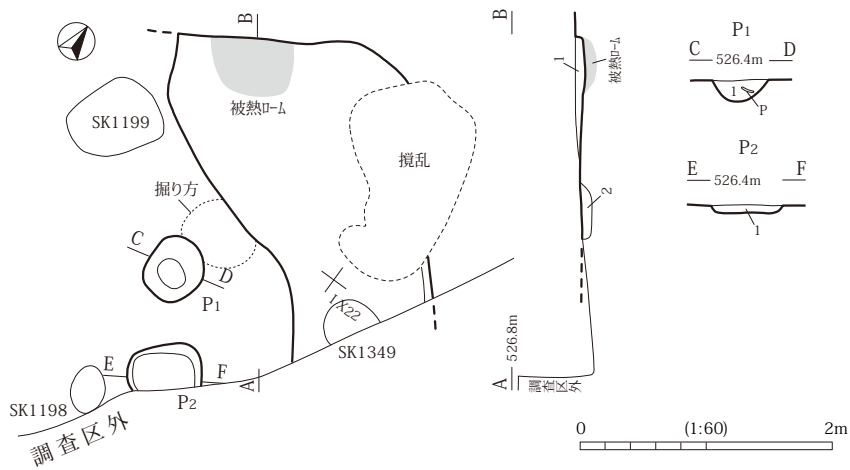
SB05



SB05

- 1 暗褐色砂質シルト 10YR: 3/4 焼土粒多量混入 明黄褐色ロームブロック少量混入 粘性なし しまりよい
 - 2 にぶい赤褐色焼土 5YR: 4/4 火床
 - 3 にぶい黄褐色シルト 10YR: 4/3 掘り方 明黄褐色ローム粒、焼土粒少量混入 粘性なし しまりふつう
- pit1
- 1 黒褐色シルト 10YR: 2/2 明黄褐色ローム粒・ブロック10%混入 粘性なし しまりよい

SB06



SB06

- 1 黒色シルト 10YR: 2/1 ロームほとんどなし 粘性なし しまりふつう
 - 2 黒褐色シルト 10YR: 3/1 掘り方 焼土粒、明黄褐色ローム粒30%混入 粘性なし しまりふつう
- pit1
- 1 暗褐色シルト 10YR: 3/4 焼土粒散在 明黄褐色ローム粒10%混入 粘性なし しまりややわるい
- pit2
- 1 黒褐色シルト 10YR: 3/1 焼土粒散在 明黄褐色ローム粒5%混入 粘性なし しまりふつう

第55図 5号・6号竪穴住居跡

いた北壁・西壁とも対面の壁が残っておらず、規模は不明。ただ残存部分のみで南北方向が4.26mあり、本遺跡の住居跡の中では大きい住居跡である。方形または長方形プランと思われる。主軸：西壁を基準としてN 20° W。床面・壁：掘りこんだVI層と一部Ⅲ a層を床面としている。貼床や叩き締めた様子はみられなかった。壁は斜めに立ち上がり、最も残っている北壁東寄りで高さ25cmを測る。カマド：火床その他痕跡は確認されなかった。埋土掘り下げの過程でも、炭化物・焼土の集中はみられなかった。調査区外である東壁につくられたと推定している。ピット：3基確認された。P1・P2は支柱穴と思われる。P1・P2ともほぼ円形で、柱間寸法は芯々間で1.85mである。柱痕・礎石は検出されなかった。本来4本柱であると想定される。堆積状況：2層に分層された。1層は住居跡を覆っていた埋土である。黒褐色土で、明黄褐色ロームの混入がSB07の埋土と比べて少ない。2層は掘方で、P1周辺で確認できた。地山のVI層ロームブロックを多く含んでいる。遺物出土状況：平安時代土器のほか、単節縄文の施された縄文時代前期の深鉢胴部破片(38)が1片出土した。時期：遺物から平安時代前期(9世紀代)と比定される。SB07と切り合い関係にあるが、双方の土器様相に大きな違いはみられず、二つの住居跡に大きな時間差はないと考えられる。

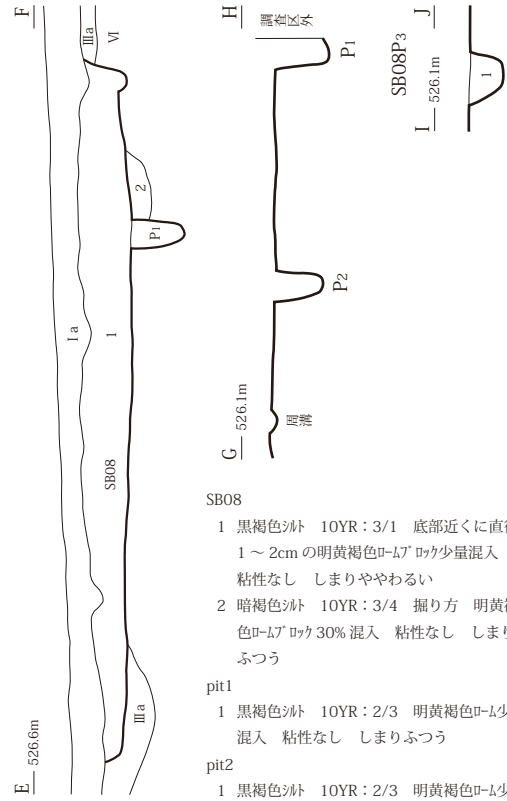
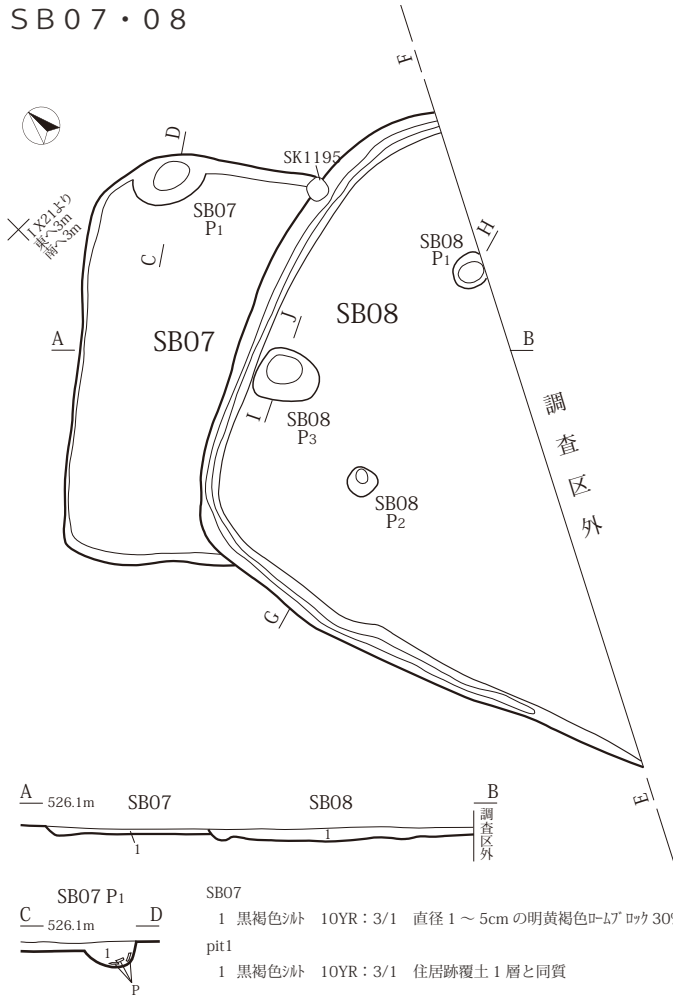
SB09 (第56・74・75図 PL4・22) 【6区 I O2グリッド】

位置：6区最北部にある。遺跡北側を東西に走る谷へ向かう、ゆるやかな北斜面に立地する。重複：時期不明のSK1564、1641、1654に切られる。検出：VI層上面にて検出。表土剥ぎの際、この付近で耕作土中に土師器片が多くみられた。VI層上面で黒色土の広がりが見られ、検出の結果、南壁と2つのコーナープランを確認、住居跡と認定した。北半分は削られ北壁のプランは確認できなかったが、想定される住居跡範囲内に黒褐色土の不定形の落ち込みが見られた。残っていた床面レベルより10～15cmほど下であったが、住居跡と同時期の土器片が出土したため掘方と判断した。規模・形状：東西4.10m、南北は掘方の広がる範囲でプランを推定すると4.2mである。構築時はほぼ正方形プランであったと想定される。主軸：カマド方向でN 71° Eである。床面・壁：VI層を掘り込み床面とする。ほぼ平らで、貼床や叩き締めた様子はみられない。壁は、最も遺存していた南壁で高さ10cmを測る。カマド：東壁やや南よりにつくられている。火床が確認されたのみで、袖やその他の痕跡は確認されなかった。カマド周辺の埋土内に数個の拳～人頭大礫が見られた。焼けた様子はみられなかったが、他にこの付近で大きい礫の出土はなく、カマドに使用されていた石であった可能性は考えられる。ピット：本住居跡に伴うものは2基である。出土遺物から判断した。P1はカマドのすぐ北側で、灰出しピットの可能性も考えられるが、埋土内に灰・炭・焼土はほとんどなかった。P2は、ほぼ円形に落ち込み、土師器片が出土した。性格は不明である。支柱穴と思われるピットは確認されなかった。堆積状況：2層に分層された。1層は住居跡全体を覆っていた埋土である。黒色土で、軽石が少量混入している。2層は掘方で、北西・南東コーナー部で確認できた。1層に比べ、やや褐色がかっている。遺物出土状況：108～114はじめ多くの土器がカマド南側のコーナー付近で出土した。特出遺物としては、土師質の羽釜型甑片(121・122)が出土している。この住居からは、軟質須恵器も含め、須恵器は全くみられなかった。時期：遺物から平安時代前期(9世紀代)に比定される。食膳具に須恵器が全くみられない住居跡が、表町・西四ツ屋量遺跡で確認された全10軒中、4軒ある(西四ツ屋SB01、表町SB05、07、09)。これらは、遺跡内では新しい住居群ではないかと考えている。平安時代集落の時期判断については、本章小結にて記述する。

SB10 (第57・75図 PL4・23) 【6区 I X2グリッド】

位置：6区最南部にあり、丘陵部の尾根頂部、ほぼ平坦面にある。遺跡内を東西に横切る農道下からみつ

SB07・08



SB08

- 1 黒褐色シルト 10YR: 3/1 底部近くに直径1～2cmの明黄褐色ローム岩少量混入 粘性なし しまりややわるい
- 2 暗褐色シルト 10YR: 3/4 掘り方 明黄褐色ローム岩30%混入 粘性なし しまりふつう

pit1

- 1 黒褐色シルト 10YR: 2/3 明黄褐色ローム少量混入 粘性なし しまりふつう

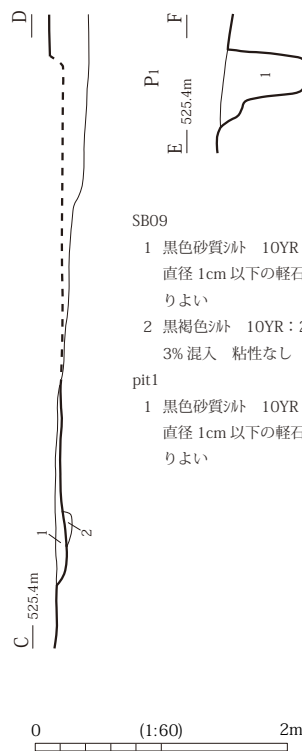
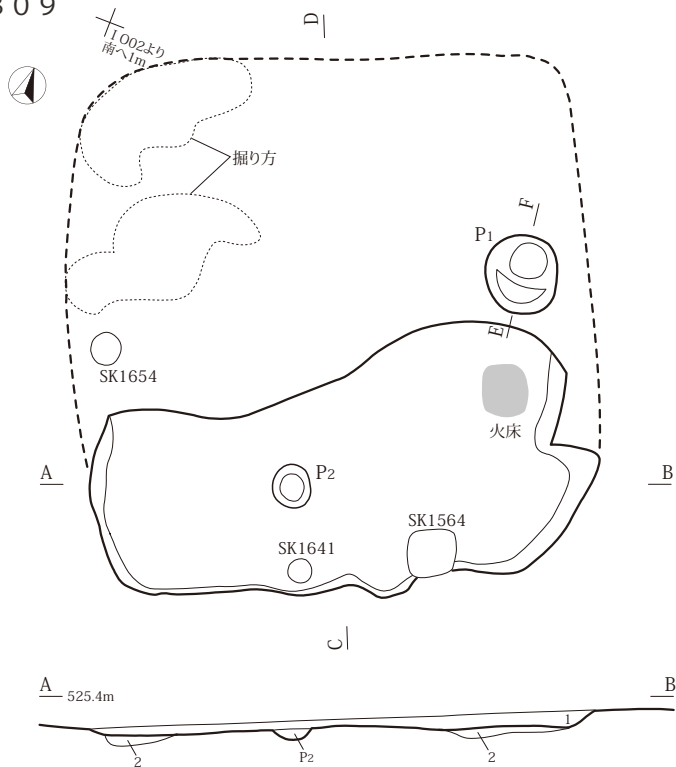
pit2

- 1 黒褐色シルト 10YR: 2/3 明黄褐色ローム少量混入 粘性なし しまりふつう

pit3

- 1 黒褐色シルト 10YR: 2/3 明黄褐色ローム少量混入 粘性なし しまりふつう

SB09



SB09

- 1 黒色砂質シルト 10YR: 1.7/1 明黄褐色ローム岩、直径1cm以下の軽石10%混入 粘性なし しまりよい
- 2 黒褐色シルト 10YR: 2/3 明黄褐色ローム粒・ブロカ3%混入 粘性なし しまりよい

pit1

- 1 黒色砂質シルト 10YR: 1.7/1 明黄褐色ローム岩、直径1cm以下の軽石10%混入 粘性なし しまりよい

第56図 7号・8号・9号竪穴住居跡

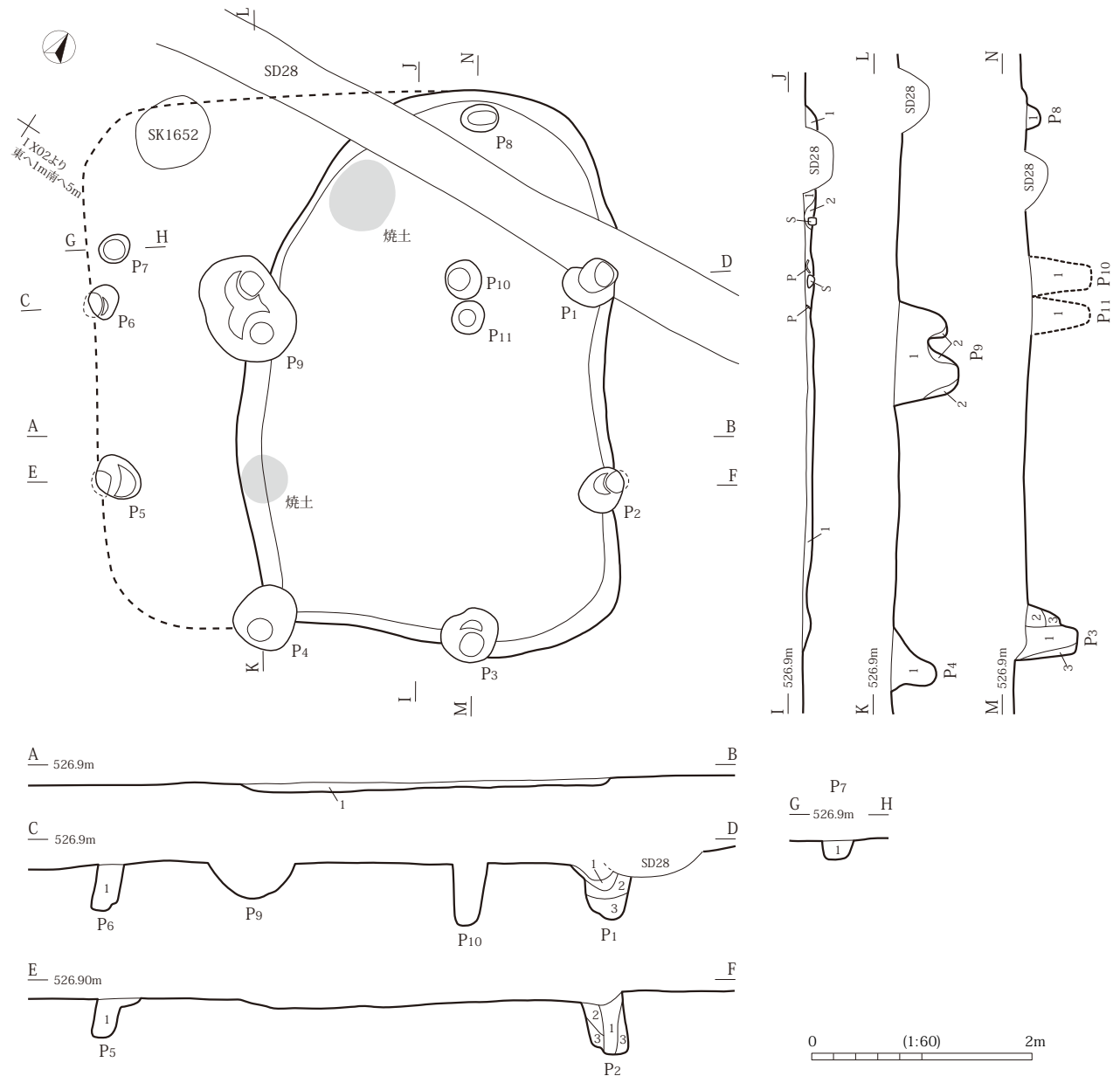
かった。重複：時期不明のSK1652と位置的に重複するが、削平によりSB10埋土との切り合いがなく、前後関係は不明。また、住居跡北東部を現代の溝により壊されている。検出：VI層上面にて、北側は円形、南側は方形のプランを呈する黒褐色土の落ち込みを確認した。落ち込みを横切る形で現代の溝がみられたため、まず溝を完掘した。その結果、溝の壁面で、平坦なローム面を確認、多くの土師器片がその上面でみられたことから、住居跡の可能性をもつ竪穴状遺構と考えた。竪穴の東壁・南壁には2基ずつピットがみつかった。竪穴掘り下げと並行して、周囲柱穴群の調査を行った。その結果、竪穴から約1m離れた西側において、東側に傾いて斜めに掘られた2つのピットを確認。竪穴東壁でみつかったピットと対応するものだったため、これも一体の遺構とした。結果として、周囲を柱穴によって囲まれた方形プランで、内部を一部掘り下げた形の竪穴住居跡と判断した。規模・形状：柱穴まで含めた住居跡全体で、南北5.12m、東西4.66mのほぼ正方形プランを呈する。住居内の竪穴部分は、南北5.1m、東西3.3m、床面積は14.88㎡を測る。主軸：長軸方向でN33°W。床面・壁：VI層を掘り込み床面とする。貼床はみられないが、やや硬く締まっている。竪穴部の壁は、最も遺存していた東壁で高さ10cmを測る。カマド：カマドの明らかな痕跡は確認できなかった。竪穴部の北西隅と西壁中央付近に焼土の広がりが見られた。ただ、硬化面や炭化物が集中しているような様子はなく、カマドの可能性もあるが、断定できない。ピット：住居に伴うものとしたのは11基である。このうち、P3・P4・P9・P10・P11はほぼ垂直に掘られている。P1・P2・P5・P6は住居中央に傾いて掘られている。P7・P8は他のピットと比較すると浅い。上屋構造については、宮本氏より、P3・P4・P9・P10あるいはP11に支柱をたて、そこに梁・桁を組み、その梁・桁に向けてP1・P2・P5・P6から斜めに補助柱をたてて、建物の主たる構造をつくったものと考えられるとの指導を得た。堆積状況：2層に分層された。住居跡全体は明黄褐色ローム混入の少ない黒褐色土で覆われており、一部にロームブロックを多量に混入する埋土がみられた。時期：遺物から平安時代前期(9世紀代)に比定される。

第3表 竪穴住居跡(SB)一覧表

()は推定値、残存値を示す

遺跡名	SB No.	位置		平面形	主軸	規模				カマド		柱穴		特記遺物	特記事項	図版 No.	
		調査区	グリッド			主軸×直交軸 (m) × (m)	床面積 (㎡)	深さ (cm)	床標高 (m)	位置	構造	本数	柱間 (m)				
			大地区														中地区
表町	SB01	2	V	E3・4	(方)	N 57° W	5.03 × (2.55)	(8.55)	23	536.27	北西壁中央	不明	2	2.55	底面1/4のみ周溝あり 南半分調査区外	53	
	SB03	4	I	X3・4・8・9	方	N 24° W	3.3 × 3.37	9.73	25	526.89	北壁中央	粘土	2	1.84	刻書土器「十」	53	
	SB04	4	I	X12	長方	N 141° E	3.24 × 2.86	8.44	19	526.53	南東壁北寄り	石組み粘土	—	—	双耳杯	カマド支脚石	54
	SB05	4	III	C4・9	(方)	不明	(3.36) × (3.2)	(10.75)	16	524.76	東壁中央	不明	—	—	墨書土器「世」、灰釉、内黒土器完形2	床面1/6のみ	55
	SB06	4	I	X16・17・21・22	(方)	不明	(2.61 × 2.07)	(5.40)	6	526.23	北西壁中央	不明	—	—		北東部コーナーのみ	55
	SB07	4	I	X21	(方)	N45° E	3.22 × (1.95)	(5.72)	20	525.85	確認されず	—	—	—	SB08に切られる。西半分のみ	56	
	SB08	4	I III	X21 D1	(方)	N20° W	(4.26) × (4.17)	(15.71)	25	525.81	確認されず	—	2	1.85		東半分調査区外	56
	SB09	6	I	O2	(方)	N71° E	4.1 × (4.2)	(6.71)	19	525.10	東壁南寄り	不明	—	—	羽釜型甗	南1/4のみ	56
	SB10	6	I	X2	方	N33° W	5.12 × 4.66	21.34 (竪穴部14.88)	14	526.66	不明	不明	10	1.91 ~ 3.31		床面一部竪穴	57
	(参考)																
西四ツ屋	SB01	3	I	V6・7	(方)	N142° E	3.33 × 4.06	12.72	35	557.32	南東壁南寄り	石組み	2	2.11	土師器三足盤	北東部3/4のみ	11

SB10



SB10

- 1 黒褐色シルト 10YR:2/2 明黄褐色ロ-ム粒を3~5%混入 粘性なし しまりよい
- 2 黒褐色シルト 10YR:2/2 明黄褐色ロ-ム粒・ブロッカを30%混入 粘性なし しまりよい
- pit1
 - 1 黒褐色シルト 10YR:2/2 明黄褐色ロ-ム粒10%混入 粘性なし しまりよい
 - 2 黄褐色砂質シルト 10YR:5/6 明黄褐色ロ-ム主体 黒色土30%混入 粘性なし しまりややわるい
 - 3 黄褐色シルト 10YR:5/6 明黄褐色ロ-ム主体 黒色土ブロッカわずか 灰白色粘土質ロ-ム混入 粘性なし しまりややわるい
- pit2
 - 1 黒褐色シルト 10YR:2/2 明黄褐色ロ-ム粒・ブロッカを10%混入 粘性なし しまりよい
 - 2 黒褐色シルト(10YR:2/2)とロ-ムの混合層粘性ややあり しまりややわるい
 - 3 黄褐色シルト 10YR:5/6 明黄褐色ロ-ム主体 粘性強い しまりわるい
- pit3
 - 1 黒褐色シルト 10YR:2/2 明黄褐色ロ-ム粒・ブロッカを10%混入 粘性なし しまりよい
 - 2 黒褐色シルト(10YR:2/2)とロ-ムの混合層粘性ややあり しまりややわるい
 - 3 黄褐色シルト 10YR:5/6 明黄褐色ロ-ム主体 粘性強い しまりわるい
- pit4
 - 1 黒褐色シルト 10YR:2/2 明黄褐色ロ-ム粒3~5%混入 粘性なし しまりよい

pit5

- 1 黒褐色シルト 10YR:2/2 明黄褐色ロ-ム粒・ブロッカ30%混入 粘性なし しまりよい
- pit6
 - 1 黒褐色シルト 10YR:2/2 明黄褐色ロ-ム粒1%混入 粘性なし しまりよい
- pit7
 - 1 黒褐色シルト 10YR:2/2 ロ-ムの混入なし 粘性なし しまりよい
- pit8
 - 1 黒褐色シルト 10YR:2/2 明黄褐色ロ-ム粒・ブロッカを10%混入 粘性なし しまりよい
- pit9
 - 1 ロ-ム、黒色、白粘土混合層明黄褐色ロ-ム、黒色シルト、灰白色粘土質ロ-ムの混合層 粘性強い しまりよい
 - 2 ロ-ム、粘土混合層明黄褐色ロ-ムと灰白色粘土質ロ-ムの混合層 粘性ややあり しまりふつう
- pit10
 - 1 黒褐色シルト 10YR:2/2 明黄褐色ロ-ム10%混入 粘性なし しまりよい
- pit11
 - 1 黒褐色シルト 10YR:2/2 明黄褐色ロ-ム10%混入 粘性なし しまりよい

第57図 10号竪穴住居跡

ロ 掘立柱建物跡

今回の発掘調査では、平安時代～近世までの掘立柱建物跡が42棟確認されたが、現場段階で把握できた建物跡は半分程度で、その他は整理段階において、図上で確認した建物跡である。また、現場で確認していた建物跡でも、整理段階で規模・範囲や、庇など付属施設などの構造上の変更があった(註3)。

平安時代の掘立柱建物跡と認定したのは、15棟である。

15棟すべてが、竪穴住居跡7軒が集中していた調査区中央部の4区から5区にかけて分布している。

以下に特徴的な掘立柱建物跡3棟について記述する。それ以外の掘立柱建物跡については、建物跡と認定した根拠・位置・規模・形状・遺物・などを記載した遺構一覧表を作成し掲載した(第4表)。また、個別遺構図についてはすべての建物跡について掲載してある(第58～68図)。そちらを参照されたい。

ST12 (第58・59図) 【4区 I W15・20、X11グリッド】

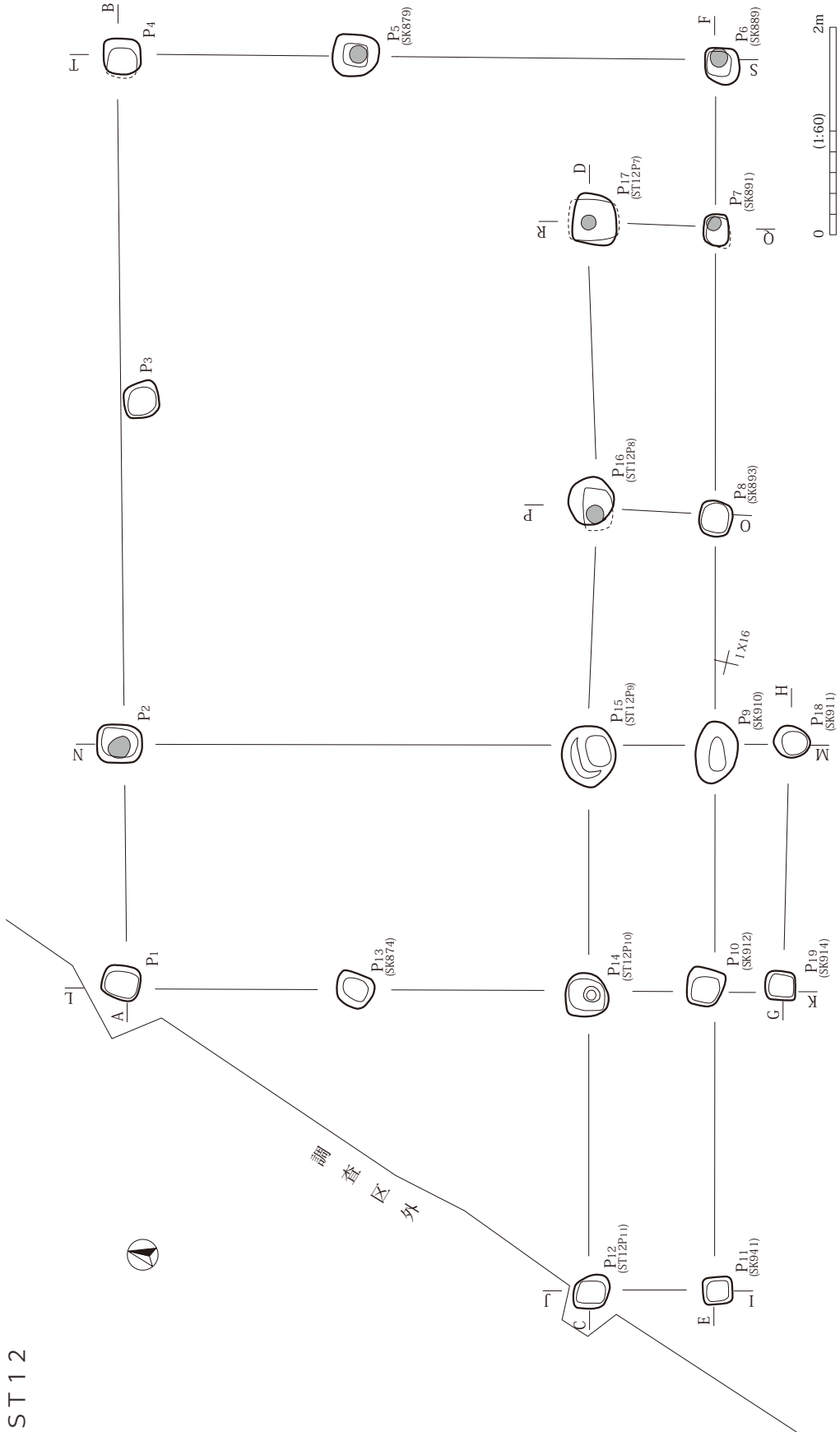
位置：4区西寄りの調査区境、ゆるやかな南西斜面にある。重複：なし。検出：VI層上面にて検出した。構造的特徴：建物西側が調査区境にかかっており、全貌は不明。確認部分で桁行11.85m、梁行5.72mの5間×3間の総柱建物。柱列がきちんと直線上に並び、桁・梁がほぼ直角につくられている。P3のみ柱線からずれるが、P2・P4間のほぼ中間で、壁の内側にたてた補助柱と考え、建物の一部とした。P19・20は入口的施設と推定される。主軸：N 77° E。面積：67.78㎡(確認部分)。入口部分を中央とした左右対称建物の可能性もある。その場合の規模は桁行約16m、床面積約83.5㎡。柱穴：6基で柱痕が確認された。柱材なし。堆積状況：柱痕が確認されたP5・6・17は、柱痕周囲の埋土にロームがブロック状に多く混入し、人為的に埋められた様子がみられた。遺物出土状況：いずれも破片であるが、P5から土師器甕と内黒杯、P6・10・11から土師器甕が出土している。時期：遺物から平安時代前期(9世紀代)に比定される。

ST27 (第65・76図 PL5・23) 【6区 I S22グリッド】

位置：6区南寄りに位置する。遺跡北側を東西に走る谷へと向かう、ゆるやかな北西斜面に立地する。重複：なし。上部を攪乱で壊されている。検出：VI層上面で検出した。構造的特徴：桁行2.89m、梁行2.78mの2間×1間の側柱建物。古代掘立柱建物の典型とされる梁間1間の建物である。主軸：N 60° E。面積：8.03㎡。柱穴：柱痕・柱材なし。遺物出土状況：P4より、土師器甕(144)が出土した。P6から土師器杯片が出土した。時期：遺物から平安時代前期(9世紀代)に比定される。

ST30 (第67・68図 PL5) 【4区 III C3・4・8・9グリッド】

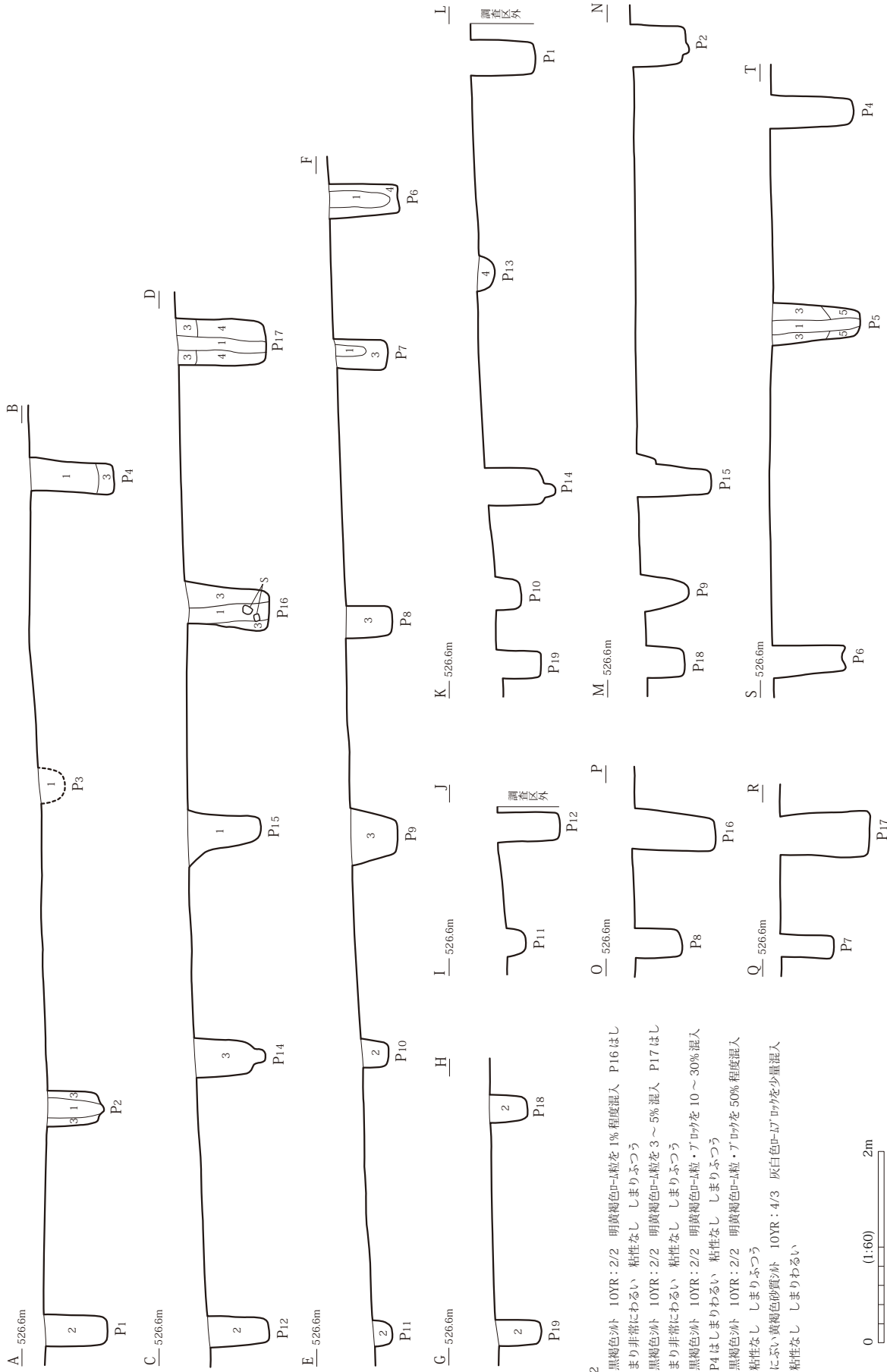
位置：4区西寄りの調査区境、ゆるやかな南西斜面を下りきったほぼ平坦部にある。重複：戦国時代のST33及び土坑群に切られる。また、同じ平安時代に比定されるST31と位置的に重複する。遺構間の切り合いがないため、前後関係は不明。検出：VI層上面にて検出した。構造的特徴：建物が調査区境にかかっており、全貌は不明。北方向には拡大する可能性はある。P1～6が母屋部分、その周囲のP7～17が庇部分を構成したものと考えられる。母屋部分は桁行8.18m、梁行4.72mの3間×1間の側柱建物である。柱列がきちんと直線上に並び、桁・梁がほぼ直角につくられている。庇部分は桁行10.33m、梁行6.74mで、母屋全面につくられていたと考えられる。庇は4間×4間と思われるが、北面は調査区外で、断定はできない。主軸：N 87° E。面積：母屋部分で38.6㎡、庇部分も入れて69.6㎡(確認部分よりの推定)。柱穴：P2～6の5基で柱穴内礎石が確認された。いずれも上面が平らな石で、柱穴掘方底部から10cmほど上部にある。柱痕は確認されなかった。堆積状況：礎石が確認されたP4・5・6は、礎石上部と下部



第58図 12号掘立柱建物跡①

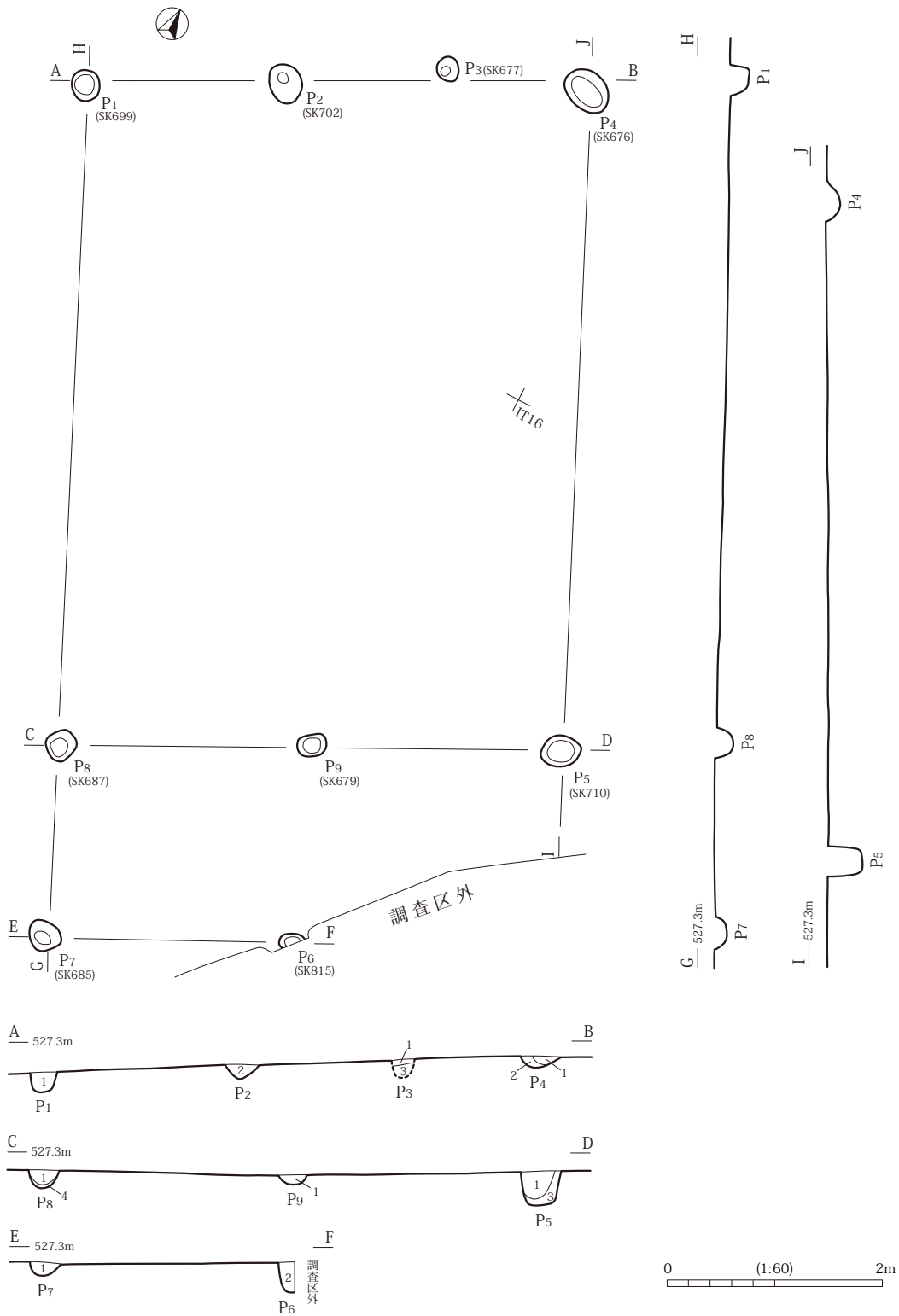
ST12

ST12



第59図 12号掘立柱建物跡②

ST18

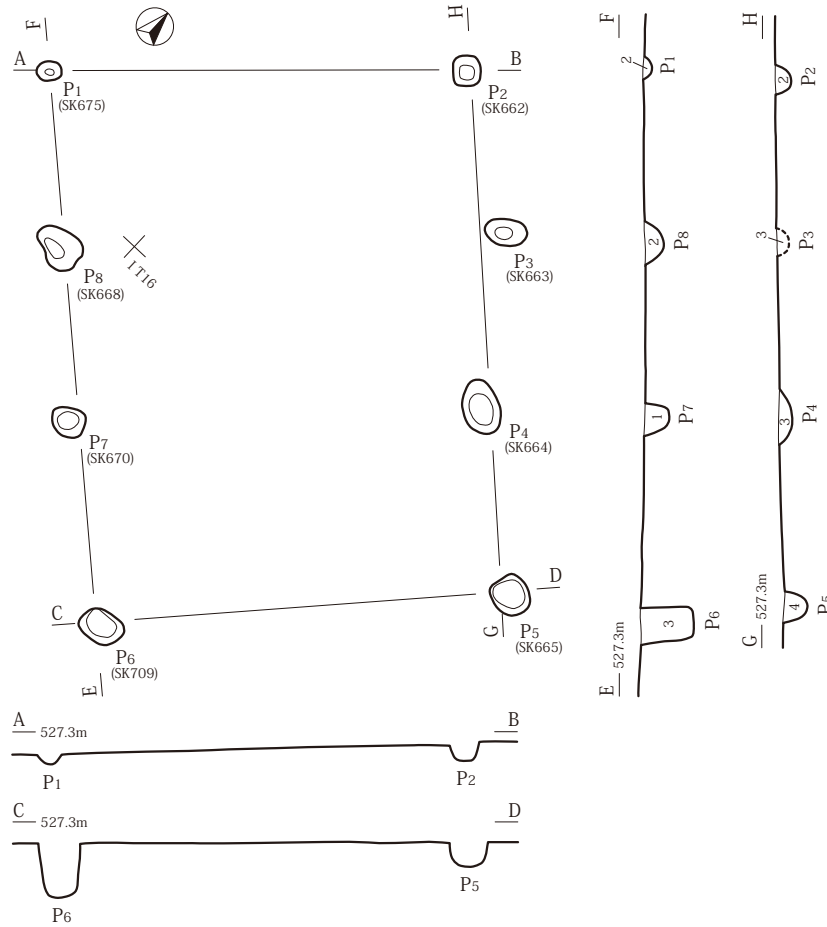


ST18

- 1 黒褐色沙土 10YR: 2/2 明黄褐色ロ-ム粒を 1% 程度混入 粘性なし しまりふつう
- 2 黒褐色沙土 10YR: 2/2 明黄褐色ロ-ム粒を 3~5% 混入 P4 は細粒ロ-ム粒多 粘性なし しまりふつう
- 3 黒褐色沙土 10YR: 2/2 明黄褐色ロ-ム粒・ブロックを 10~30% 混入 粘性なし しまりふつう
- 4 黒褐色沙土と明黄褐色ロ-ムブロックの混合層粘性なし しまりふつう

第 60 図 18 号掘立柱建物跡

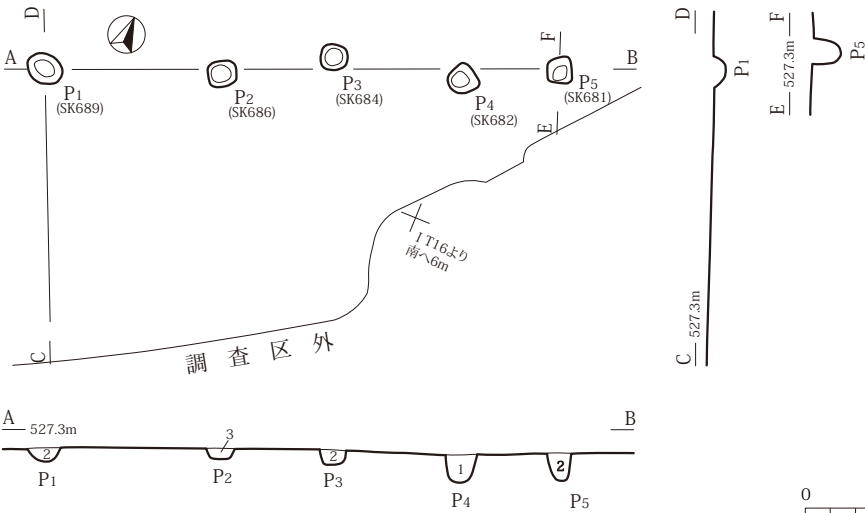
ST19



ST19

- 1 黒褐色シルト 10YR:2/2 ロームの混入なし 粘性なし しまりふつつ
- 2 黒褐色シルト 10YR:2/2 明黄褐色ローム粒を1%程度混入 粘性なし しまりふつつ
- 3 黒褐色シルト 10YR:2/2 明黄褐色ローム粒を3~5%混入 粘性なし しまりふつつ
- 4 黒褐色シルト 10YR:2/2 明黄褐色ローム粒・ブロックを10~30%混入 粘性なし しまりふつつ

ST20

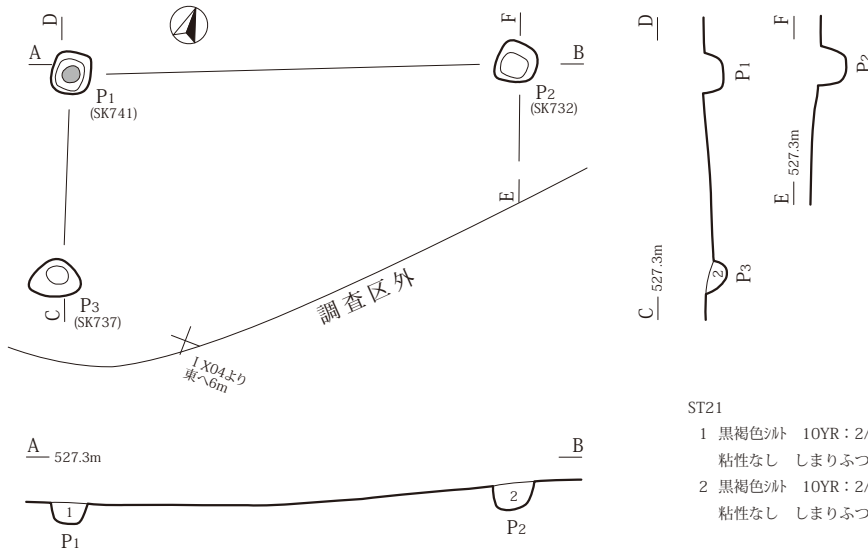


ST20

- 1 黒褐色シルト 10YR:2/2 明黄褐色ローム粒を1%程度混入 粘性なし しまりふつつ
- 2 黒褐色シルト 10YR:2/2 明黄褐色ローム粒を3~5%混入 粘性なし しまりふつつ
- 3 黒褐色シルト 10YR:2/2 明黄褐色ローム粒・ブロックを10~30%混入 粘性なし しまりふつつ

第61図 19号・20号掘立柱建物跡

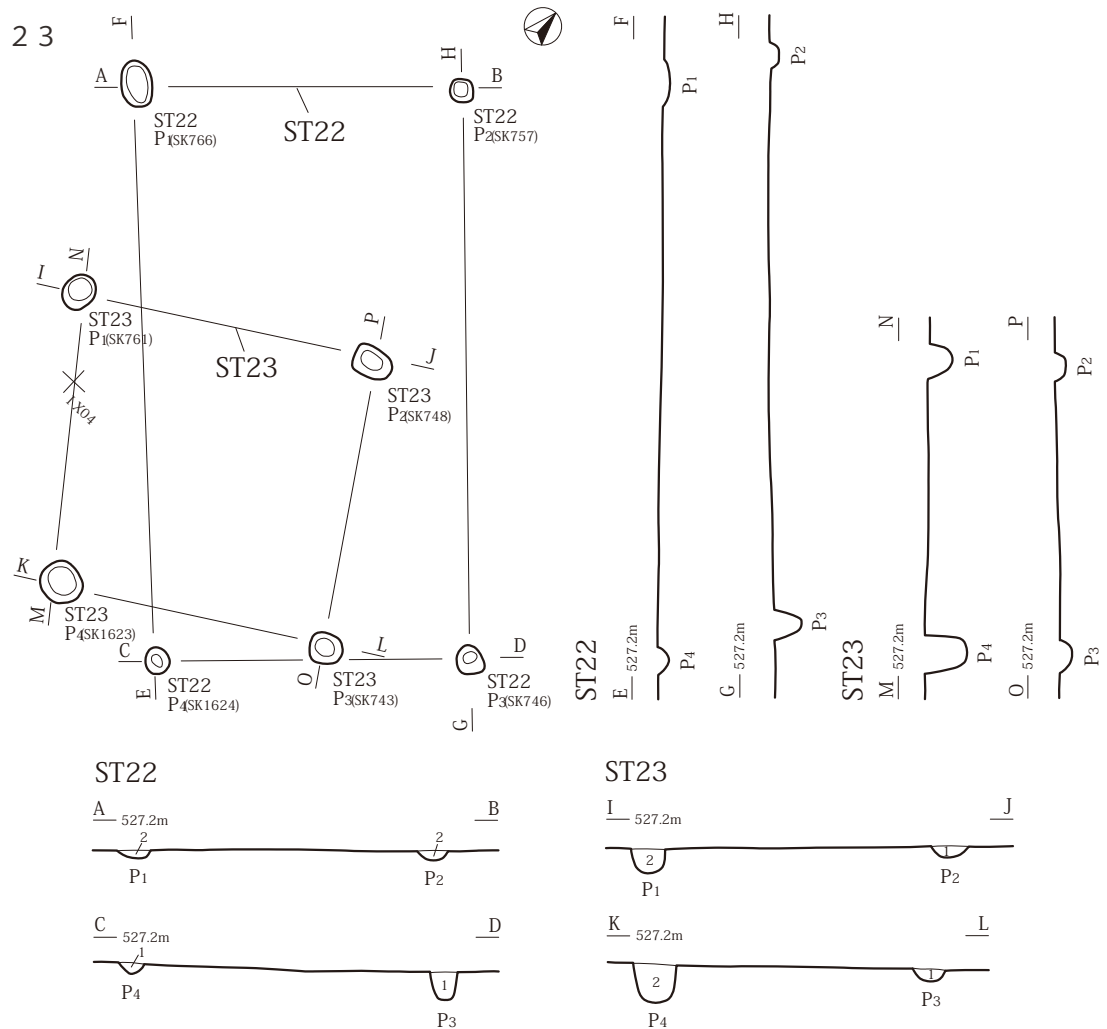
ST21



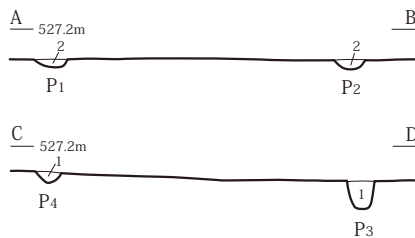
ST21

- 1 黒褐色シルト 10YR: 2/2 明黄褐色 π -L粒を 3~5% 混入
粘性なし しまりふつう
- 2 黒褐色シルト 10YR: 2/2 明黄褐色 π -L粒を 1% 程度混入
粘性なし しまりふつう

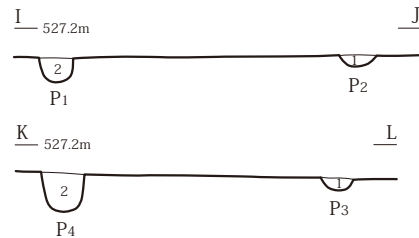
ST22・23



ST22



ST23

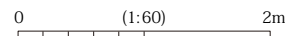


ST22

- 1 黒褐色シルト 10YR: 2/2 明黄褐色 π -L粒を 1% 程度混入 粘性なし しまりふつう
- 2 黒褐色シルト 10YR: 2/2 明黄褐色 π -L粒を 3~5% 混入 粘性なし しまりふつう

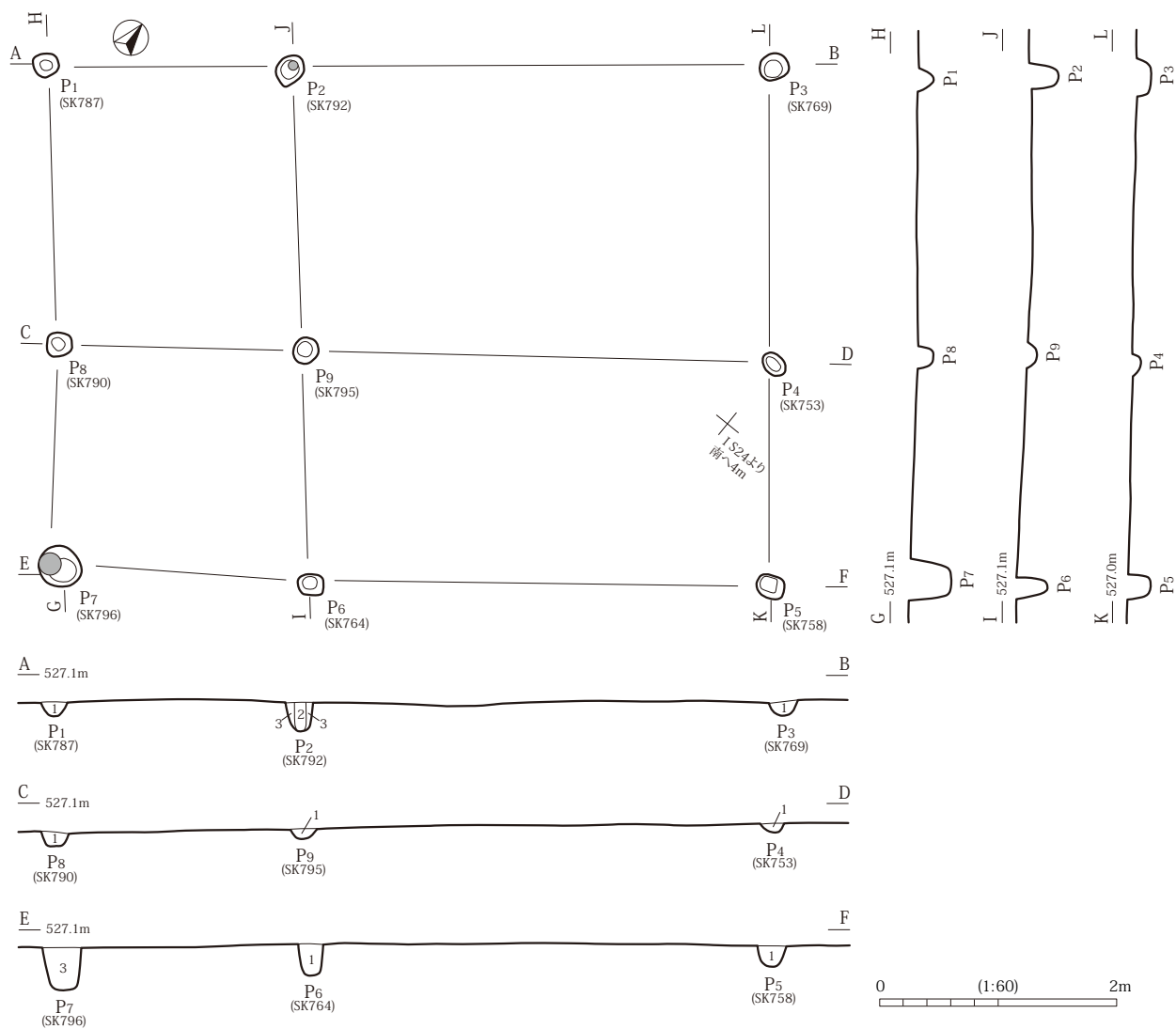
ST23

- 1 黒褐色シルト 10YR: 2/2 明黄褐色 π -L粒を 1% 程度混入 P2は π -L π の混入 粘性なし しまりふつう
- 2 黒褐色シルト 10YR: 2/2 明黄褐色 π -L粒を 3~5% 混入 P4は π -L π の混入 粘性なし しまりふつう



第62図 21号・22号・23号掘立柱建物跡

ST24

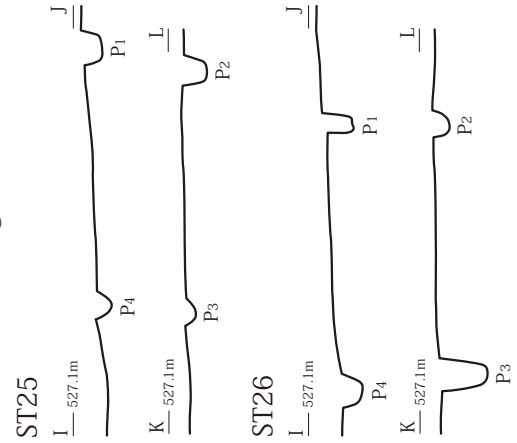
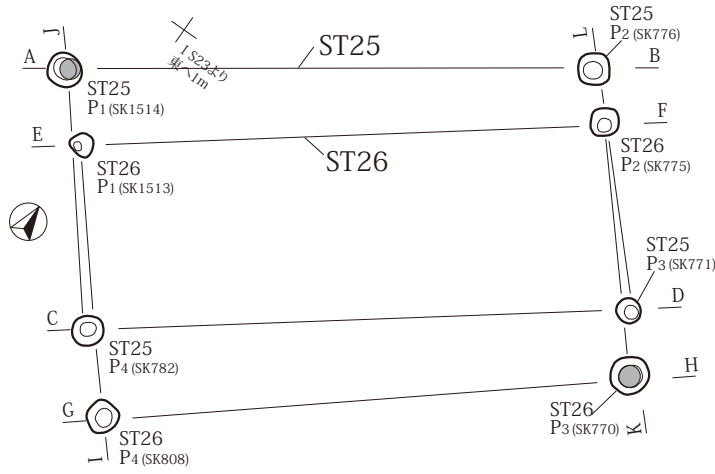


ST24

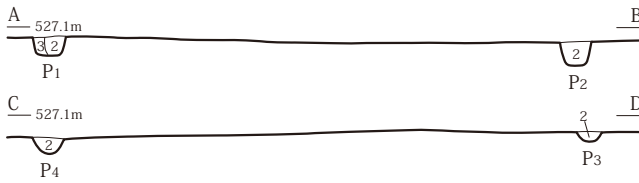
- 1 黒褐色シルト 10YR:2/2 明黄褐色0-1粒を1%程度混入 粘性なし しまりふつう
- 2 黒褐色シルト 10YR:2/2 明黄褐色0-1粒を3~5%混入 粘性なし しまりややわるい
- 3 黒褐色シルト 10YR:2/2 明黄褐色0-1粒・ブロックを10~30%混入 粘性なし しまりふつう

第63図 24号掘立柱建物跡

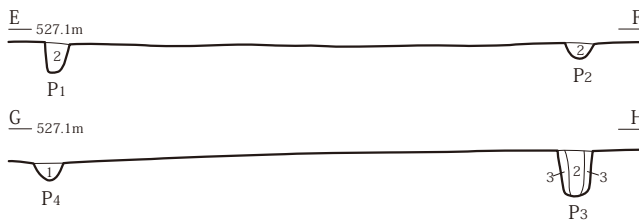
ST25・26



ST25



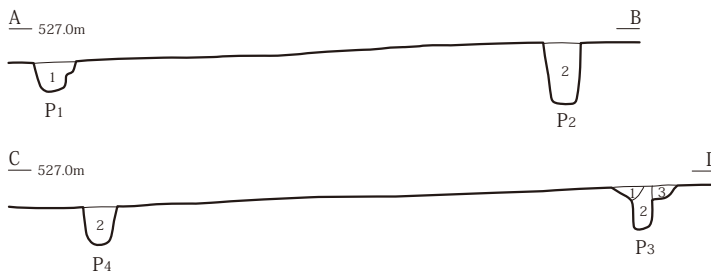
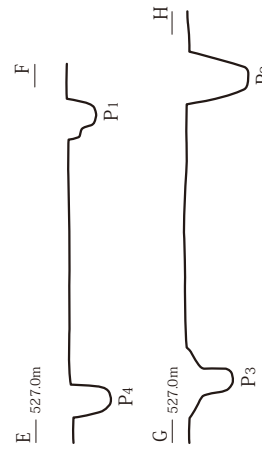
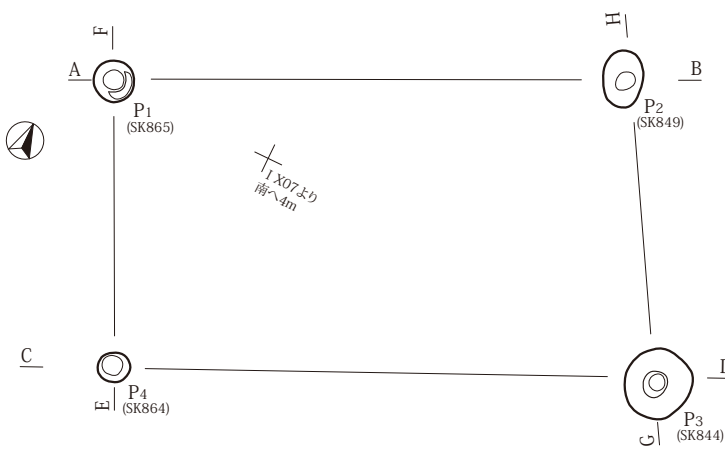
ST26



ST25・26

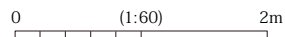
- 1 黒褐色シルト 10YR:2/2 ロ-ム粒の混入なし 粘性なし しまりふつつ
- 2 黒褐色シルト 10YR:2/2 明黄褐色ロ-ム粒を1%程度混入 粘性なし しまりふつつ
- 3 黒褐色シルト 10YR:2/2 明黄褐色ロ-ム粒・ブロックを10~30%混入 粘性なし しまりふつつ

ST28



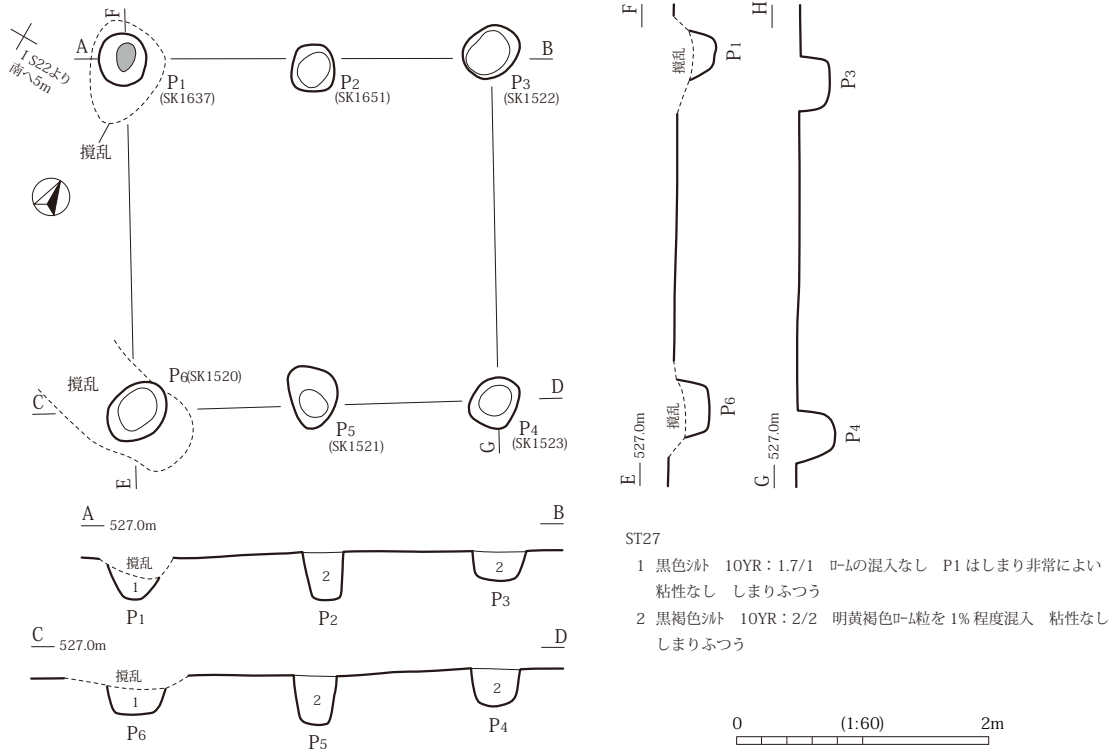
ST28

- 1 黒褐色シルト 10YR:2/2 明黄褐色ロ-ム粒を3~5%混入 粘性なし しまりふつつ
- 2 黒褐色シルト 10YR:2/2 ロ-ム粒の混入なし 粘性なし しまりふつつ
- 3 黒褐色シルト 10YR:2/2 明黄褐色ロ-ム粒・ブロックを10~30%混入 粘性なし しまりふつつ



第64図 25号・26号・28号掘立柱建物跡

ST27



第 65 図 27号掘立柱建物跡

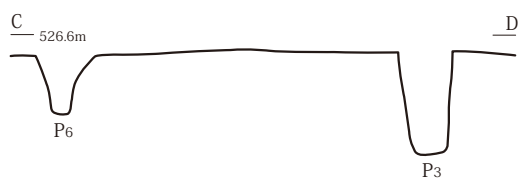
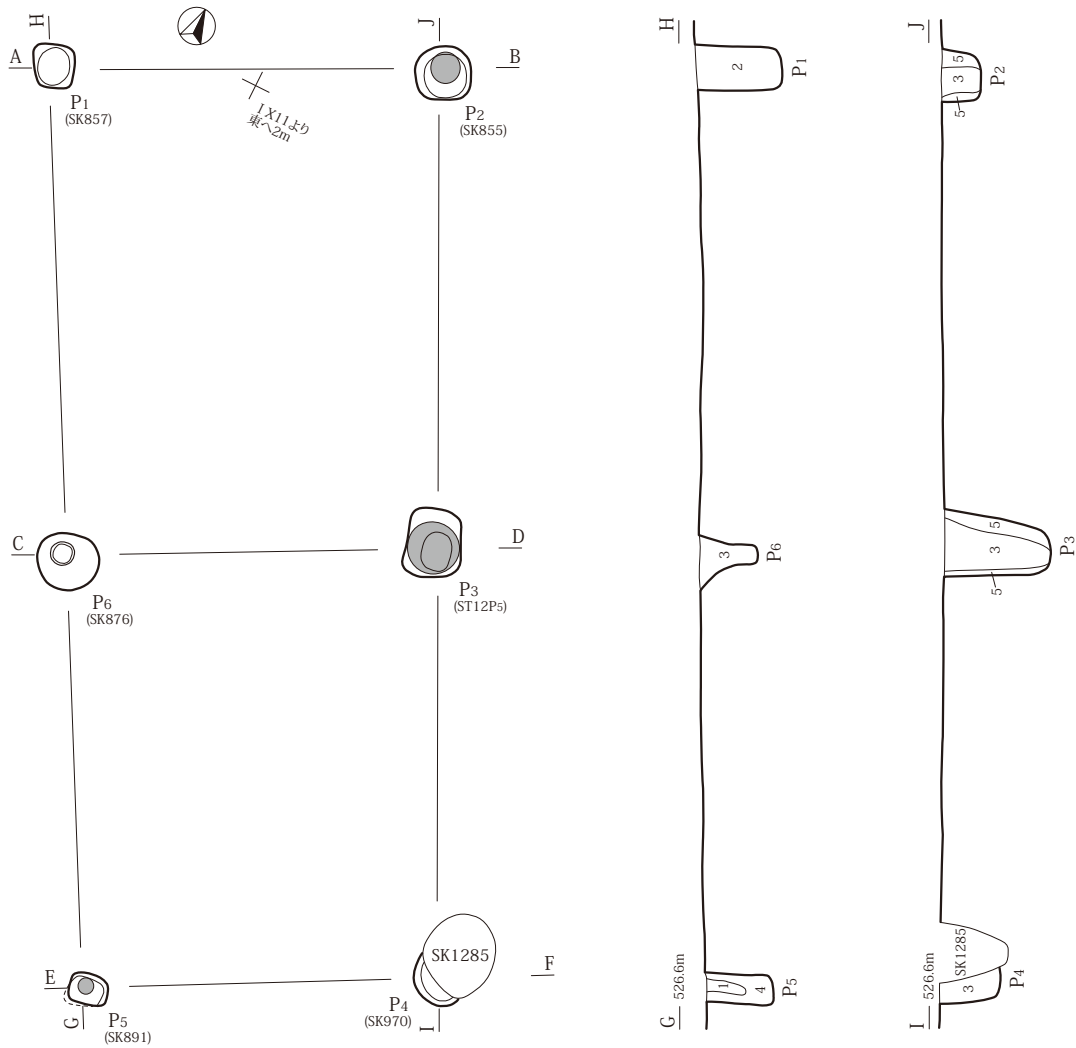
で埋土に違いがみられた。遺物出土状況：P1・4・5・6から土師器甕、P5から内黒杯・軟質須恵器杯・須恵器杯、P6から土師器甕・内黒杯のいずれも小破片が出土している。時期：遺物から平安時代前期（9世紀代）に比定される。

第4表 平安時代 掘立柱建物跡（ST）一覧表

（ ）は推定値、残存値を示す

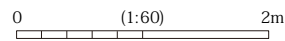
ST No.	調査区	位置		長軸方向	規模				構造					図版No.	
		グリッド			柱間数	桁(m)	梁(m)	面積(m ²) [含底]	柱穴掘方		柱間間隔		庇		
		大地区	中地区						掘方平面形	掘方規模(cm)	桁行(m)	梁行(m)			
1	ST12	4	I	W15・20 X11	N77°E	5×3	11.85	5.72	67.78	円・楕円・方	28～59	1.61～3.33	1.12～4.56	—	58・59
2	ST18	5	I	S15・20 T11・16	N26°W	2×3	7.92	4.65	36.83	円・楕円・方	20～46	1.79～6.13	1.34～2.33	—	60
3	ST19	5	I	S15・20 T11・16	N48°W	3×1	4.4	3.29	14.48	円・楕円・不整楕円・方	19～43	1.30～1.63	3.23～3.29	—	61
4	ST20	5	I	S20・25 T16	N68°E	4×1	4.09	(2.35)	(9.61)	円・方	20～30	0.78～1.40	2.35	—	61
5	ST21	5	I	S24・25 X4	N69°E	1×1	3.54	(2.26)	(8.00)	不整楕円・方	31～41	3.54	1.59	—	62
6	ST22	5	I	S23・24 X4	N45°W	1×1	4.57	2.58	11.79	円・楕円・方	19～37	4.51～4.57	2.48～2.58	—	62
7	ST23	5	I	S23・24 X4	N38°W	1×1	2.39	2.31	5.52	円・楕円・長方	26～34	2.13～2.39	2.30～2.31	—	62
8	ST24	5	I	S23・24 X3	N51°E	2×2	6.09	4.37	25.58	円・楕円・方・長方	20～35	2.07～4.02	1.85～2.50	—	63
9	ST25	5	I	S18・23	N52°E	1×1	4.29	2.05	8.79	円・方	20～27	4.14～4.29	1.90～2.05	—	64
10	ST26	5	I	S18・23	N50°E	1×1	4.18	2.16	9.03	円	19～30	4.18	2.0～2.16	—	64
11	ST27	6	I	S22	N60°E	2×1	2.89	2.78	8.03	円・楕円・方	37～53	1.40～1.50	2.70～2.78	—	65
12	ST28	4	I	X6・7	N65°E	1×1	4.32	2.36	10.20	円・楕円	26～54	4.05～4.32	2.25～2.36	—	64
13	ST29	4	I	X6・11	N29°W	2×1	7.26	3.1	22.51	円・方	31～54	3.40～3.85	2.78～3.10	—	66
14	ST30	4	III	C3・4・8・9	N84°E	3×1	8.18	4.72	38.61 [69.02]	円・楕円・方・長方	26～61	1.85～3.55	4.60～4.72	○	67・68
15	ST31	4	III	C3・8	N69°E	3×2	3.13	2.26	7.07	円・方	20～41	0.91～1.13	0.80～1.47	—	68

ST29



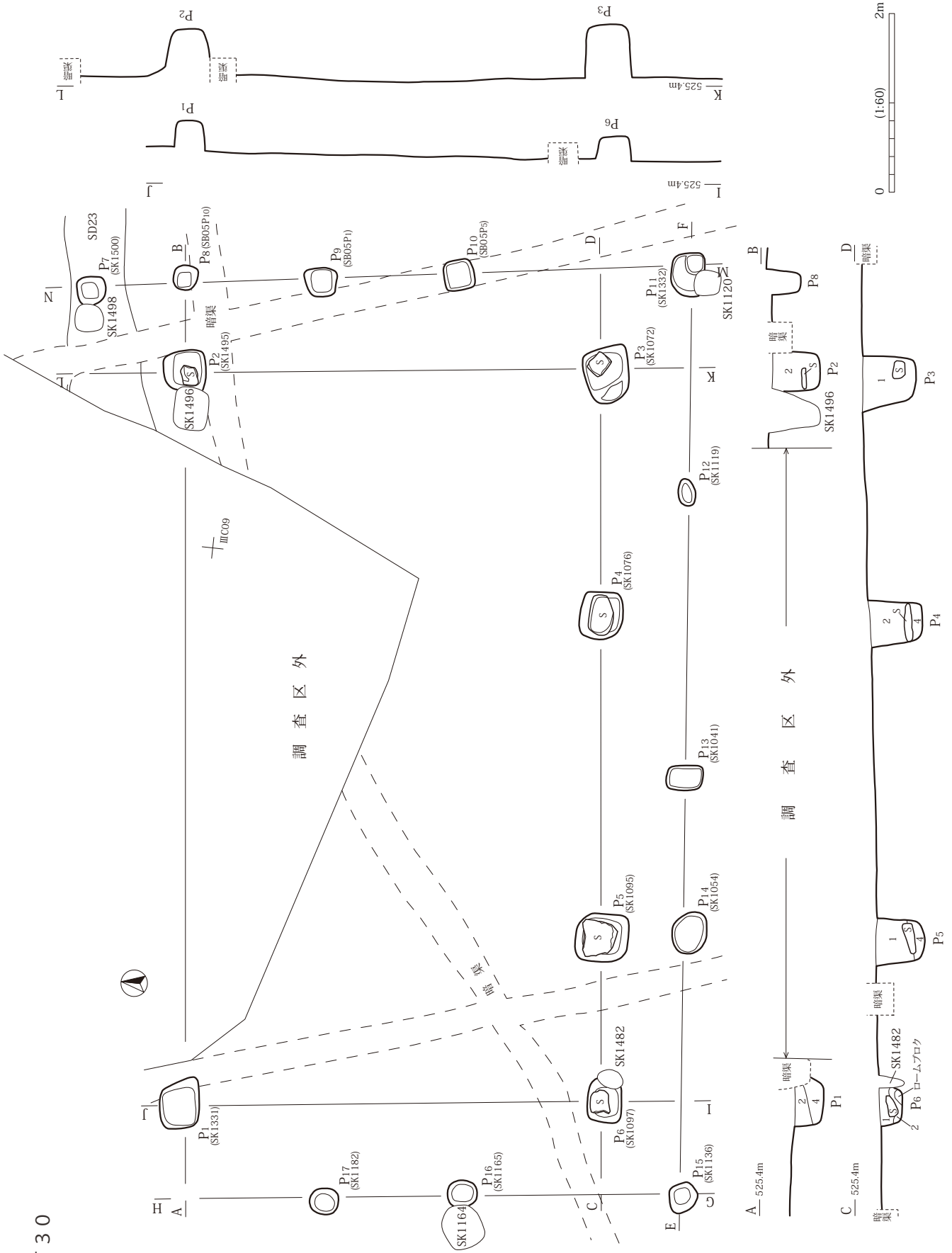
ST29

- 1 黒褐色シルト 10YR: 2/2 礫の混入なし 粘性なし しまりわるい
- 2 黒褐色シルト 10YR: 2/2 明黄褐色礫粒を1%程度混入 粘性なし しまりふつう
- 3 黒褐色シルト 10YR: 2/2 明黄褐色礫粒を3~5%混入 粘性なし しまりふつう
- 4 黒褐色シルト 10YR: 2/2 明黄褐色礫粒・ブロックを10~30%混入 粘性なし しまりふつう
- 5 黒褐色シルトと明黄褐色礫・ブロックの混合層 粘性なし しまりふつう

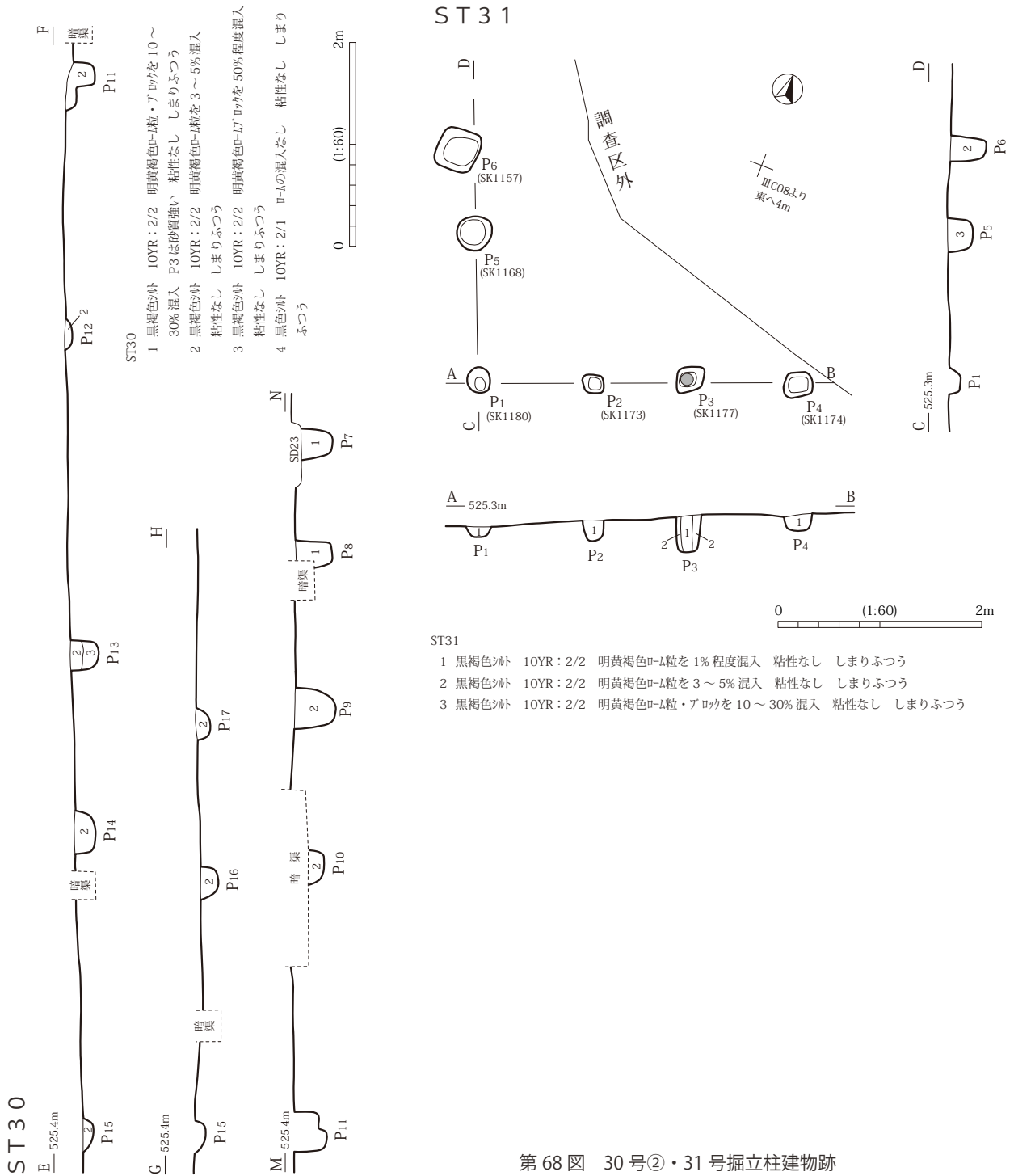


第66図 29号掘立柱建物跡

ST 30



第67図 30号掘立柱建物跡①



第 68 図 30 号②・31 号掘立柱建物跡

ハ 土器集中遺構

SQ01 (第69・76図 PL16・23) 【4区 I W24、III C4グリッド】

位置：4区西寄りの調査区境、ゆるやかな南西斜面にある。重複：なし。検出：調査開始時のトレンチ調査において、この付近で土師器、内黒土器片が集中して出土、焼土・炭化物も多く見られた。当初住居跡を想定し、調査区境の壁面で断面観察したが壁の立ち上がりは確認されなかった。VI層上面における平面精査でも、土器は出土するものの、住居跡のプランやカマドの痕跡は確認されなかった。住居跡の掘方の可能性も考えたが、土器の出土量や炭・焼土粒の混入量が多く、周辺住居跡の掘方状況とは全く違っていた。このため、土器集中遺構 (SQ01) として調査した。規模・形状：平面精査の結果、南北 2.3m × 東西 1.5m

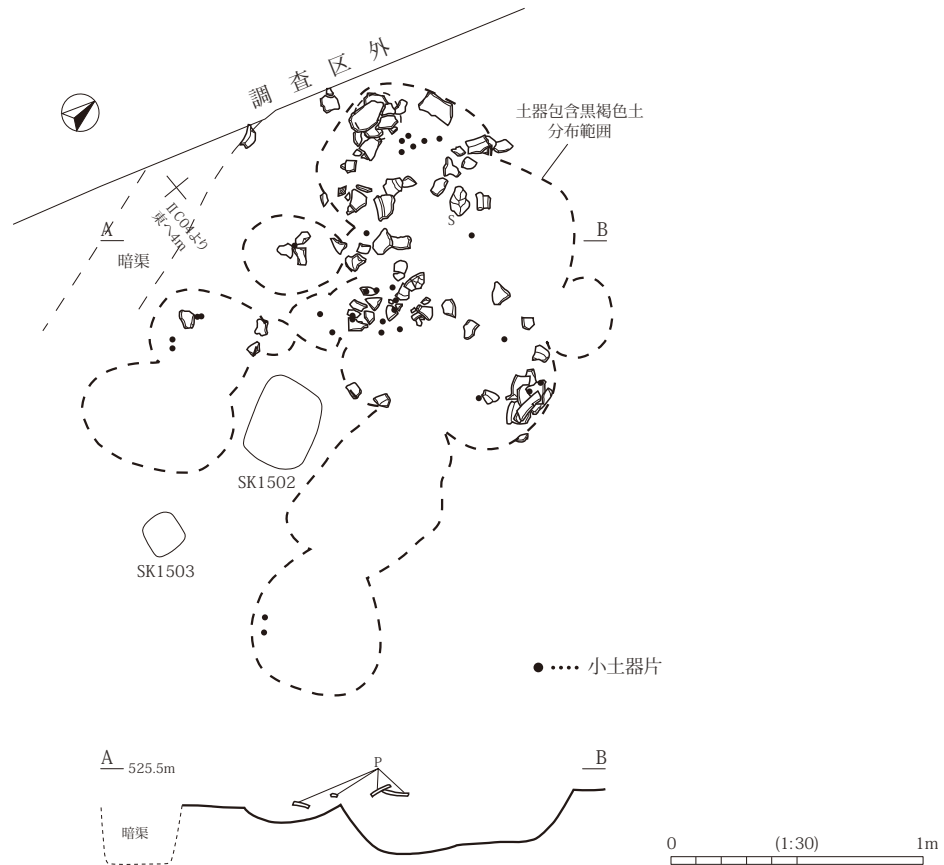
ほどの範囲で、土器や炭、焼土粒を多く含む不整形の黒褐色シルトの広がりが確認された。特に土器片は、黒褐色土の北半分南北 1.0m × 東西 1.5m の範囲に集中していた。黒褐色土の底部は凸凹しており、深さ 5 ~ 20cm を測る。堆積状況：黒褐色シルト主体で、黒色シルト・明黄褐色ロームがブロック状に混入しており、自然埋没とは思われない。ほぼ同じ場所で、浅い穴を掘っては、土器片や炭を捨てるような行為を繰り返していたとみられる。遺物出土状況：遺物は土師器甕(137 ~ 142)が最も多く、他に土師器杯(134)、内黒土器杯、須恵器甕・蓋(135)・長頸壺、軟質須恵器杯(136)の破片が出土した。時期：出土遺物で周辺住居跡との大きな違いはみられず、平安時代前期(9世紀代)に比定される。

二 焼土坑

SF01 (第70図 PL16) 【4区 III C15・20グリッド】

位置：4区東寄りの調査区境、ゆるやかな南西斜面を下りきったほぼ平坦部にある。重複：なし。検出：4区調査区東境の壁面において、赤褐色焼土層とその下の焼土硬化面が確認され、土師器・須恵器などの出土がみられた。この付近は、地山のVI層(ローム)が谷状に凹んでおり、そこに黒色のIII a層が堆積している。焼土は、III a層中にあり、焼土硬化面下部の黒褐色土はVI層まで落ち込んでいた。当初住居跡のカマドを想定し、周囲の平面精査を行ったが、プランは確認できなかった。また、焼土部分以外からの土器の出土は全くなかった。このため、焼土坑として調査した。規模・形状：焼土は、南北 1.2m × 東西 0.7m ほどの範囲に分布し、中心部に 0.4m × 0.3m ほどの焼土硬化面がみられる。硬化面の上面は平坦でなく、凸凹があり上部の黒色土が落ち込む筋状のひび割れがみられた。堆積状況：硬化面上層は赤褐色焼土で、焼土粒や焼土ブロックを多量に混入し、下位ほど硬くなる。燃えカスなどはなく、何を燃やしていたかは確認できなかった。焼土層は周囲に漸移的に影響を及ぼしていることから、この場所である程度の期間火

SQ01



第69図 1号土器集中遺構

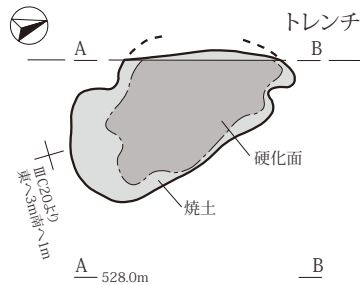
を焚く行為が続けられていたと考えられる。住居跡カマドの可能性も残るが、断定できない。遺物出土状況：遺物はすべて硬化面より上で出土した。土師器甕が多く、他に内黒土器杯、土師器杯、軟質須恵器杯、須恵器杯がみられた。いずれも小破片である。時期：遺物から平安時代前期（9世紀代）に比定される。

ホ 土 坑

平安時代の土坑と推定したのは103基である。内訳は、建物としては組めなかったが柱穴と思われるものが94基、意図をもって掘られたと思われるものが7基で、その他2基は自然の落ち込みの可能性もありうる。時期決定の根拠は、出土遺物が平安時代のみかそれ以前に限られること、または近くに関連が考えられる住居跡などの遺構があることなどである。

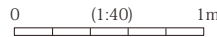
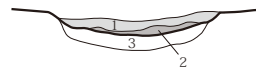
以下に記述するSK1061は、竪穴跡住居跡や掘立柱建物跡が集中する地区にあり、完形遺物が特異な状態で出土した土坑である。これ以外の平安土坑の詳細については、位置・規模・形状・遺物などを記載した土坑一覧表を作成し、本書付録CDに収録した。「時期」の欄に推定時期を記載してある。

SF01

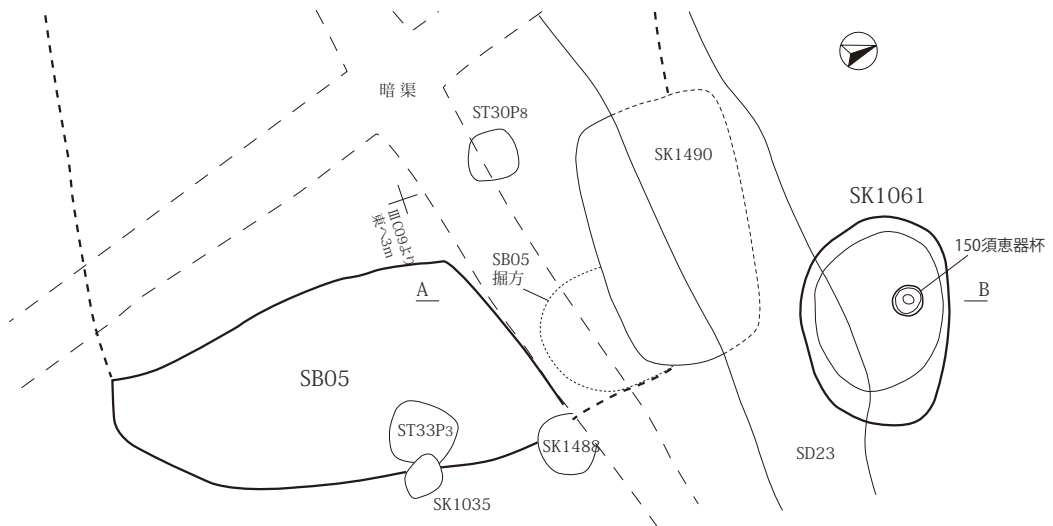


SF01

- 1 にぶい赤褐色焼土 5YR:4/4 上部はやや赤み強い 下部は焼土粒ブロックが混在し 硬い 粘性なし しまりややわるい
- 2 暗赤褐色シルト 5YR:3/3 土層界は漸移的 被熱され変色 粘性なし しまりよい
- 3 黒褐色シルト 7.5YR:2/2 地山(VI層)との境は漸移的で明瞭ではない 粘性なし しまりよい

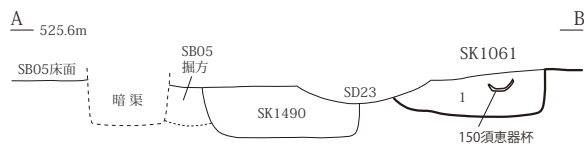
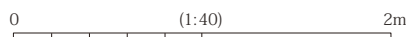


SK1061



SK1061

- 1 黒褐色シルト 10YR:3/1 明黄褐色0-1粒・ブロック10%混入 粘性なし しまりよい



第70図 1号焼土坑・1061号土坑

SK1061 (第70・77図 PL16・23) 【4区 III C4グリッド】

位置：4区西寄りに位置し、ゆるやかな南西斜面にある。重複：戦国時代溝跡SD23に切られる。検出：VI層上面にて検出。規模・形状：長軸98cm短軸78cmの楕円形で、深さは26cmを測る。底部は平坦である。壁は斜めに掘り込まれている。長径方向はN61°Wである。堆積状況：黒褐色シルトの単一層。遺物出土状況：内黒土器杯(149)と完形の須恵器杯(150)が、土坑底部から10cmほど浮いた位置で、正位で重なり合うように出土した。埋土の断面観察では、杯の上下で埋土の違いはみられず、埋めた様子はみられなかった。他に灰釉陶器碗(151)も出土した。骨・炭化物などの出土はない。灰釉陶器は、本土坑周辺の検出面および近くの竪穴住居跡(SB05)で見つかったのみである。時期：遺物から平安時代前期(9世紀代)に比定される。性格：不明だが、明らかに意図をもって掘られた土坑である。本遺跡で数少ない灰釉陶器が出土したことから、同じく灰釉陶器が出土した唯一の住居跡SB05との関連が考えられる。

(2) 遺物

平安時代の遺物は、土器・陶器のみで、石製品や金属製品は出土しなかった。

土器・陶器

平安時代土器・陶器は3,553点、総重量で37,057g出土した。種別では、土師器・内黒土器・須恵器・軟質須恵器・灰釉陶器がみられた。(第71図)

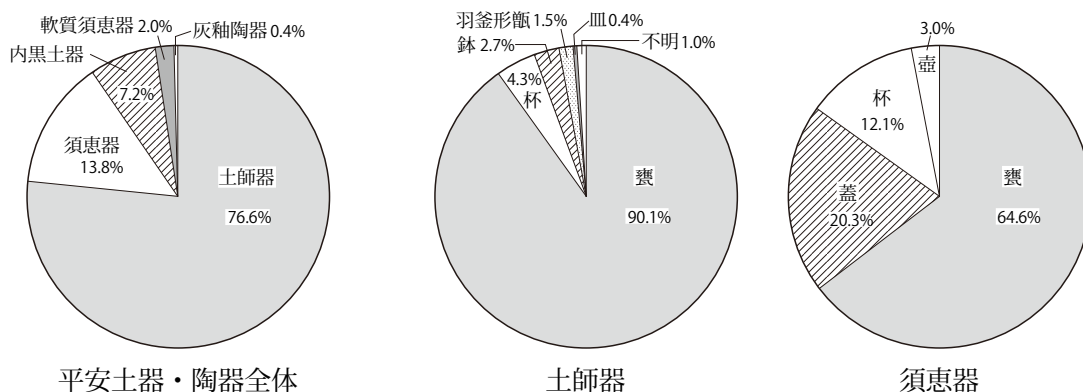
この中で土師器が最も多く、平安時代土器・陶器総量の3/4(重量比、以下すべて同)を占める。器種別では甕が最も多く、土師器中の9割である。他に杯・鉢・羽釜形甕などがみられた。

次に多いのは、平安土器・陶器総量の1割強を占める須恵器である。器種別では甕が最も多く、次いで蓋、杯、壺の順であった。

内黒土器は405点、2679g出土し、平安土器・陶器総量の1割弱であった。内黒土器の器種は、胴部のみ破片は断定できないが、底部の破片はほとんどが杯で、椀と確認されたのは5点だけである。杯の底部は糸切り底のみである。

軟質須恵器は須恵器の一種で、灰白色軟質の焼き上がりで、黒斑がみられるものもある(註4)。本遺跡からは、平安土器・陶器総量の2%出土した。器種はすべて杯と考えられる。灰釉陶器は総量のわずか0.4%で、椀・皿・壺の器種がみられた。

平安時代の土器様相については、松本平や千曲市屋代遺跡群、長野市松原遺跡などで、用途別や食膳具における器種別の組成による時期区分が検討されている(小平和夫1990、鳥羽2000、上田2000)。しかし、



第71図 表町遺跡 平安時代土器・陶器組成

本遺跡は、削平が激しく、各住居跡からの出土遺物が非常に少ないため、当時の使用状況を表しているとはいえ、検討対象にすることは難しい。よって、各住居跡の出土遺物の状況や、遺跡全体の器種別・用途別組成は、付属 CD に収録した。参考までに、遺跡全体の出土遺物における組成は、用途別では、食膳具が 2 割、煮炊具が 7 割、貯蔵具が 1 割である。食膳具における器種別では、内黒土器が最も多く、次いで土師器、須恵器、軟質須恵器、灰釉陶器の順となっていた。

以下遺物について、遺構ごとに記述する。本遺跡はいずれの遺構も削平が激しく遺物の残存状況が悪いため、主な遺物についてのみ記述した。掲載した出土遺物の詳細な特徴（色調・胎土など）や各々の住居跡の器種割合などについては、本書付録 CD に一覧表を収録したので参照されたい。

SB01 (第72図 PL 21)

いずれも破片で完形のものはない。56 の須恵器杯は、外面にロクロ成型のあとが明瞭にみえ、意識的に残したともうけとれる。57～66 はすべて土師器甕で、口径 10～15cm の小型甕 (57・58) と、口径 20～22cm の長甕 (59～66) に大別される。ロクロ成型でケズリまたはタタキの施された砲弾型の長甕とロクロ成型の小型甕が一緒に使われることは、平安時代前期における北信地方での地域性とされており (笹澤浩 1988、山田真一 1997)、本住居跡はじめ、以下に記述するすべての住居跡でその傾向はみられた。

また土師器甕の口縁端部に着目した時期判断もある。8 世紀末から 9 世紀初めにかけては、甕の口縁端部にはっきりと面をつけている甕がみられ、時代が下った 9 世紀末にはそういった甕はみられなくなる (註 2)。本住居跡では、60、63～65 が該当する。

SB03 (第72図 PL 21)

いずれも破片のみである。67 の須恵器杯は 1/3 程度の残存であるが、口縁～底部まで残っており、器形や糸切りされた底部の様子がはっきりとみられた。73 は、口縁端部に面がはっきりとみえる土師器甕である。76 の内黒土器杯には、外面に「十」の刻書がみられた。焼成後に書かれたものである。文字か記号かは判断できない。

SB04 (第73図 PL 21)

完形の土器はない。78、79 はともに内黒土器杯の底部である。ともに外面下部に横方向になでた成型のあとがみえる。特に 78 はその痕が強く、高台のような形となっている。80 は、須恵器杯の体部外面に把手を一对つけた双耳杯の耳部である。管見だが、長野県内で塩尻市吉田川西遺跡 SB95、松本市下神遺跡区画溝で 1 点ずつみられた程度の非常に貴重なものと思われる (県埋文 1989、1990a)。82～84 の土師器甕は、口縁の形状から、3 個体は確認できる。時期差がみえると前述した口縁端部の面が、いずれもはっきりとみられなくなっている。

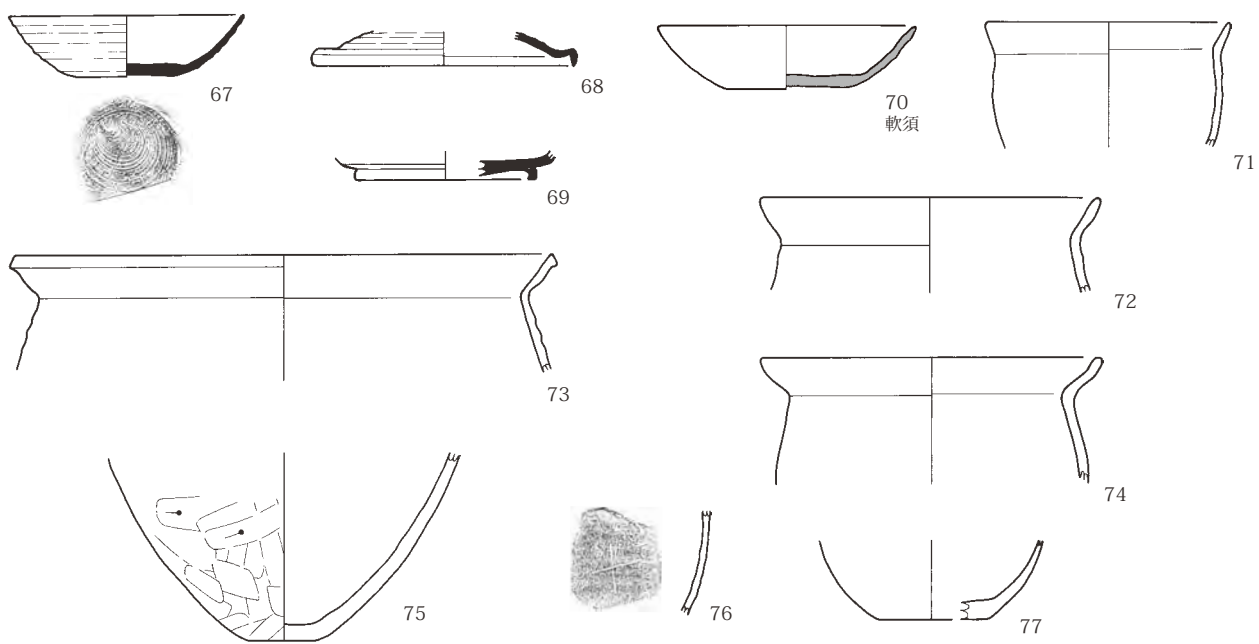
SB05 (第73図 PL 21・22)

残存状態の悪い住居跡であったが、遺物は完形含め多数出土した。85 は、炭化物の吸着がみられず土師器杯としたが、内面にミガキがみられることから、内黒土器であった可能性もある。86～89 は内黒土器で、特に 88、89 は完形である。89 は、内部上半には横方向下半には縦方向のミガキの痕がはっきりとみてとれ、外面には「世」の一文字が書かれた本遺跡唯一の墨書土器である。90 は、本遺跡では数少ない灰釉陶器で、住居跡からの出土はこれ 1 点のみである。灰白色で緻密な胎土をしており、断面三日月形の高台を付けている。光ヶ丘窯式に比定される。92 は、土師器鉢で、外部下半には、横方向のケズ

SB01



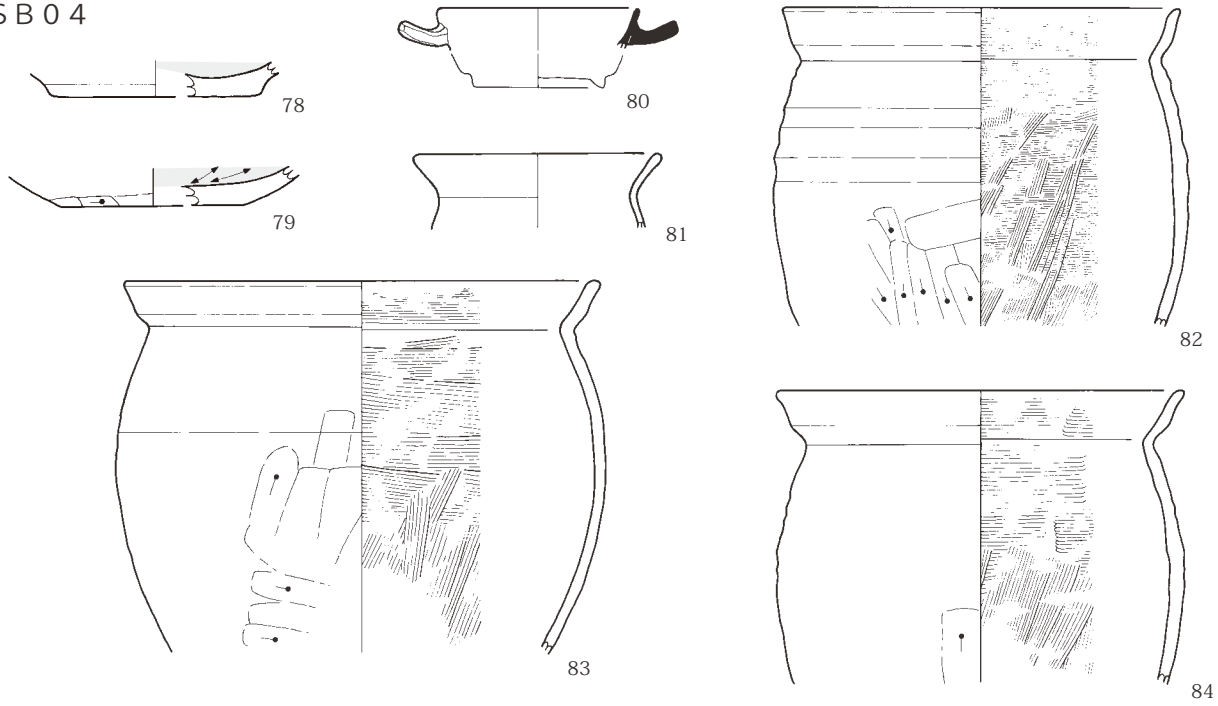
SB03



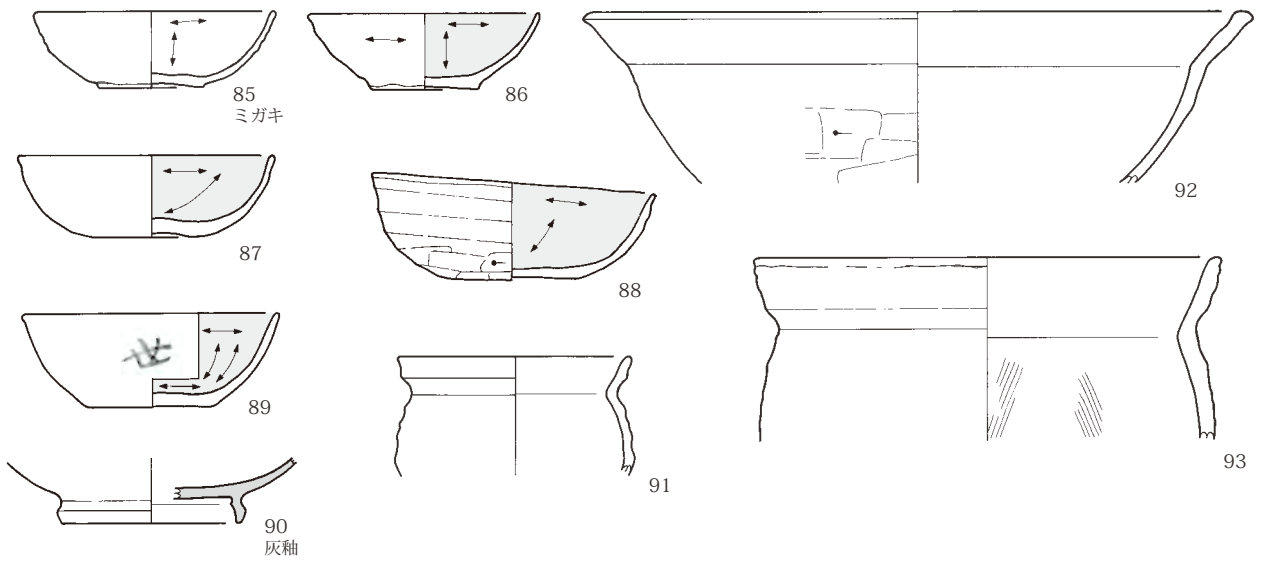
0 (1:4) 10cm

第72図 1号・3号竪穴住居跡出土土器(平安)

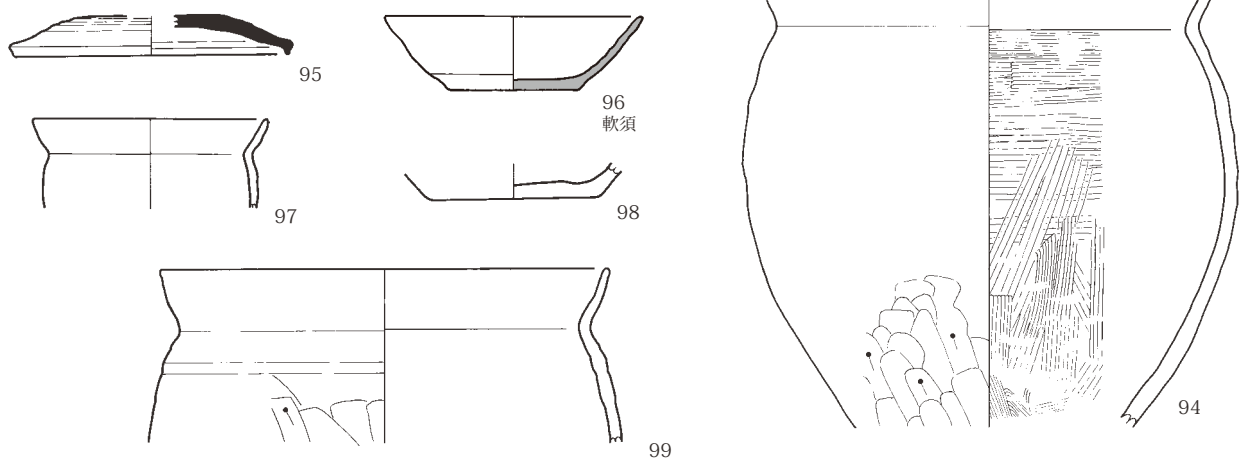
SB04



SB05



SB06



第73図 4号・5号・6号竪穴住居跡出土土器(平安)

りがされている。93・94の土師器甕には、口縁端部の面はみられない。

SB06 (第73図 PL22)

住居跡の残存状況が悪く遺物量は少なかったが、図化可能な遺物は5点あった。95の須恵器蓋は焼成が悪く、やや白みがかっている。96は残存状況がよく、2/3程度残っている。内面にミガキはみられず、これも焼成が悪い。色調が全体的に白く軟質須恵器としたが、やや赤みがかった部分もみられ、土師器的特徴もみられる土器である。99の土師器甕は口縁端部が薄く、面は全くみられない。

SB07 (第74図 PL22)

遺物は非常に少ない。図化できたのは、P1から出土した100、101の土師器甕のみである。ともに口縁端部は薄く、面はみられない。

SB08 (第74図)

この住居跡も遺物は少ない。103は土師器甕底部で、丸底である。底部内面まで、横方向のハケ目がはっきりと残っていた。手持ちで回しながら成型したものと思われる。

SB09 (第74・75図 PL22)

104、105の土師器杯とともに炭化物の吸着がみられなかったが、内部にはミガキがみられ、内黒土器と同質のものと思われる。108の内黒杯は口径が16cmあり、かなり大型の杯である。109～111は土師器鉢で、外面上半はナデ、下半は手持ちヘラケズリされている。ヘラケズリはおそらく底部まで続いていたと思われる。北信地方では、長野市松原遺跡で胎土・焼成とも類似した鉢の出土が、9世紀の住居跡から何例かみられている(上田2000)。112～119の土師器甕については、北信地方において典型的な砲弾型の甕である。小破片のため図化はできなかったが、小型甕も出土しており、やはりセットで使用されていたと思われる。口縁端部に面はみられない。

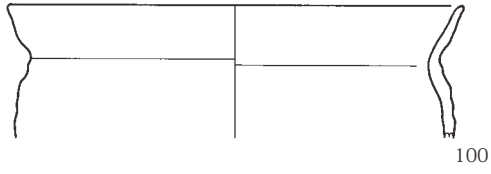
本住居跡の特出遺物は、121、122である。羽釜形甕とした。鏝をもつ器形としては羽釜があるが、羽釜の出現は、松本平および北信地方における土器編年において10世紀中頃以降とされ(小平1990、鳥羽2000、上田2000)、本遺跡における土器様相(9世紀代)とあわない。このため、松原遺跡などで9世紀からみられるとされる羽釜形甕(上田2000)と判断した。121は鏝部で、上部からみると体部と鏝部との間に隙間がみえ、後から貼り付けたことがはっきりとわかる。羽釜形甕には、鏝が全周するものと部分的にしかないものがあるが、これは前者である。122は、鏝部はないが、直立する口縁の形状などから甕とした。この122については、甕の底部ではないかとの考えもあった。しかし、底部とした場合口径が大きすぎてのせられる甕がないと思われることや、底部は常に蒸気があたる所なので内面が荒れるが、この土器は全く荒れていないなどから口縁と判断した(註2)。

SB10 (第75図 PL23)

123～125は須恵器杯、126は須恵器蓋である。この住居跡からは他の住居跡に比べて多くの須恵器が出土した。129の土師器甕は、口縁部に明瞭な面がみられた。須恵器の出土と口縁部に明瞭な面をもつ土師器甕の出土には、本遺跡でみる限り関連があると思われる。132は、丸底の土師器甕で、底部内面には細かいハケ目がびっしりとみられ、使用時の影響と思われる炭化物の残存がみられた。

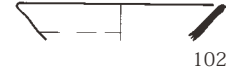
SQ01 (第76図 PL23)

SB07

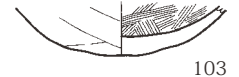


100

SB08

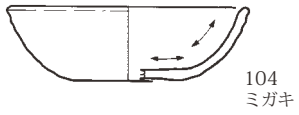


102

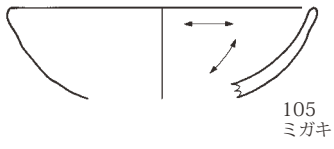


103

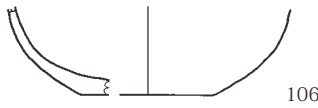
SB09



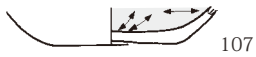
104
ミガキ



105
ミガキ



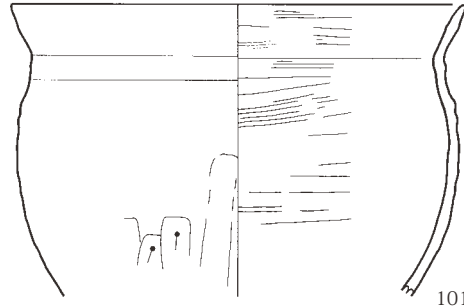
106



107



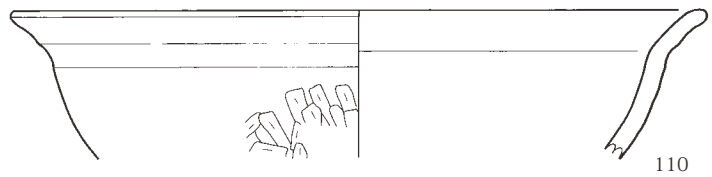
108



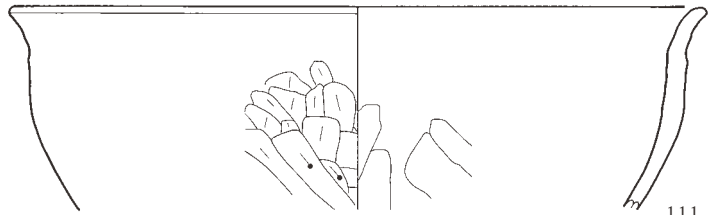
101



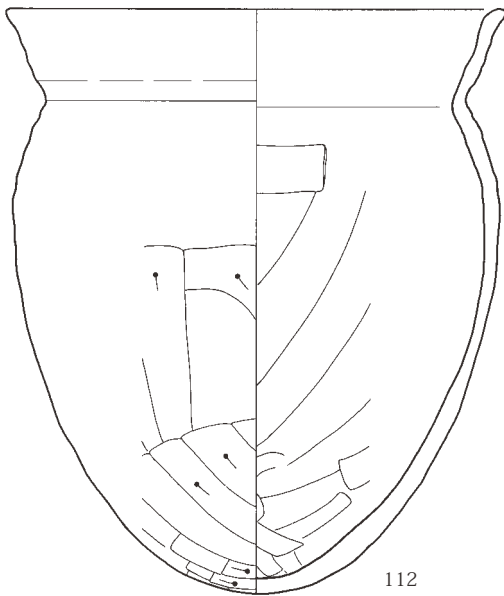
109



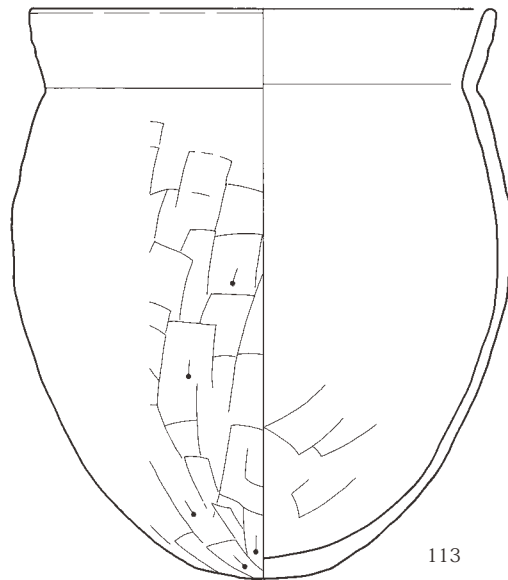
110



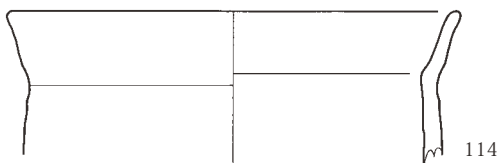
111



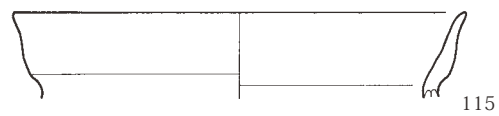
112



113



114

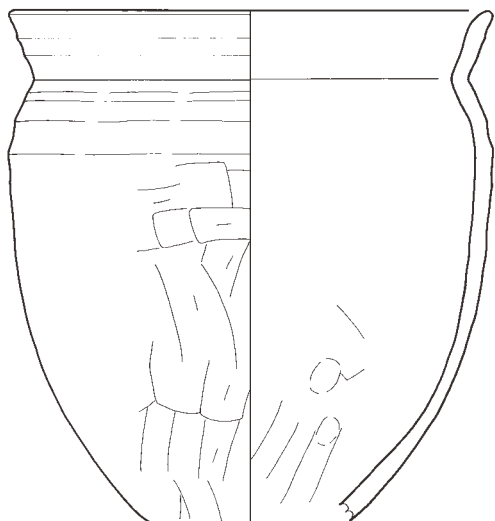


115

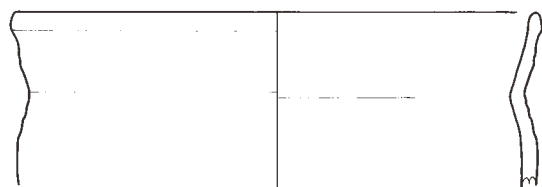
0 (1:4) 10cm

第74図 7号・8号・9号竪穴住居跡出土土器(平安)

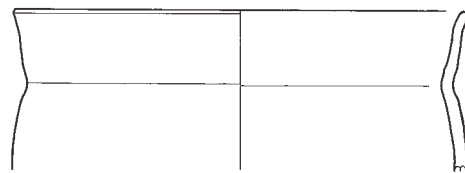
SB09



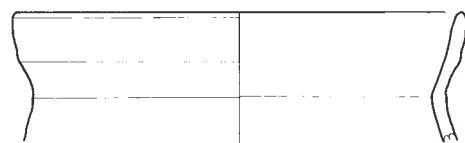
116



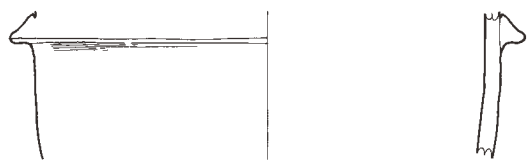
118



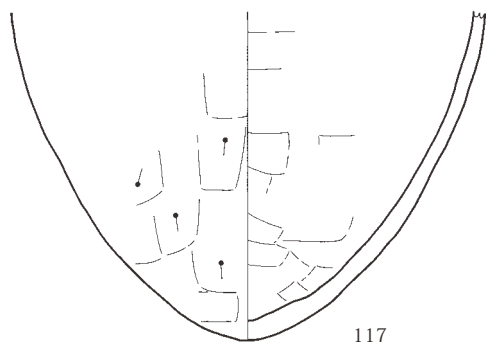
119



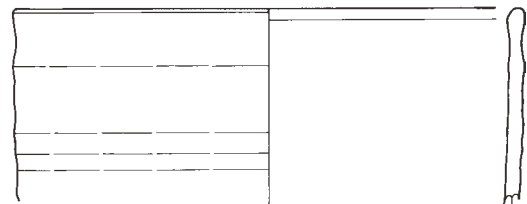
120



121

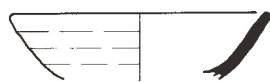


117



122

SB10



123



124



125



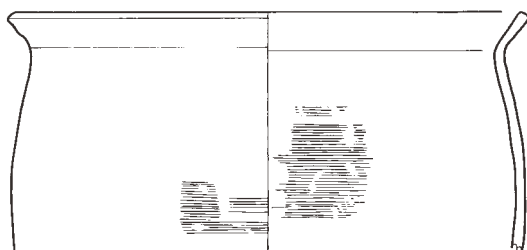
126



127



128



129



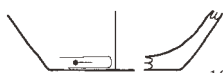
130



131



132

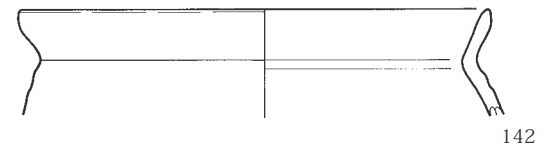
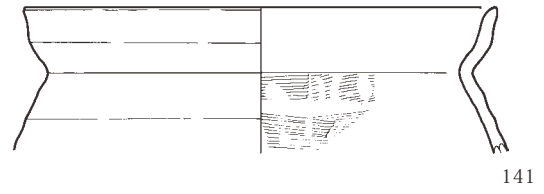
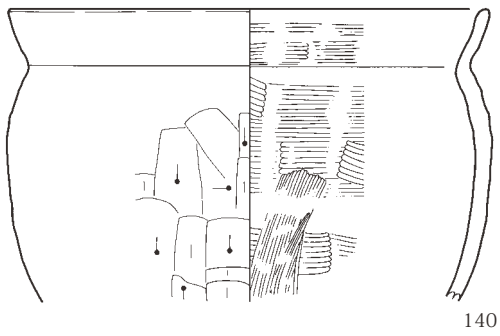
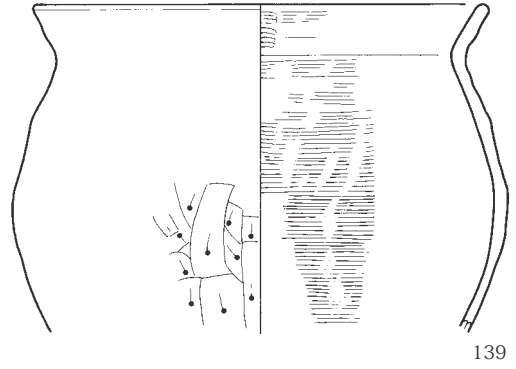
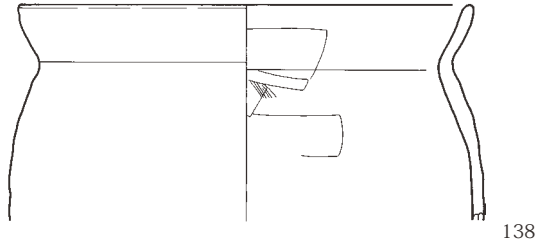
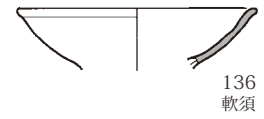
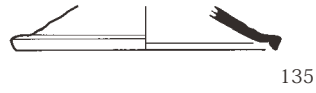
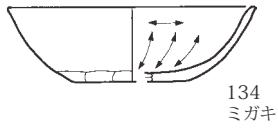


133

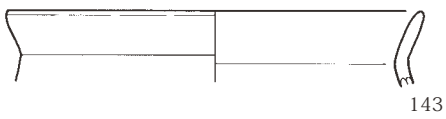
0 (1:4) 10cm

第75图 9号・10号竪穴住居跡出土土器(平安)

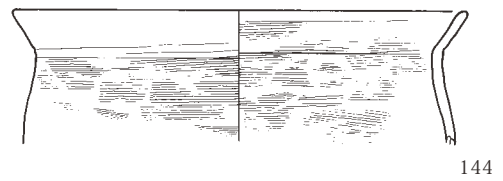
SQ01



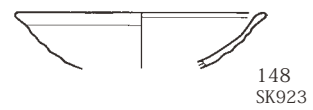
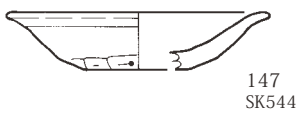
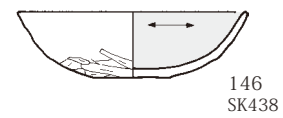
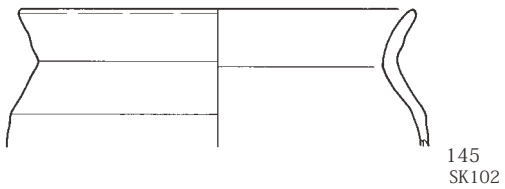
ST22



ST27



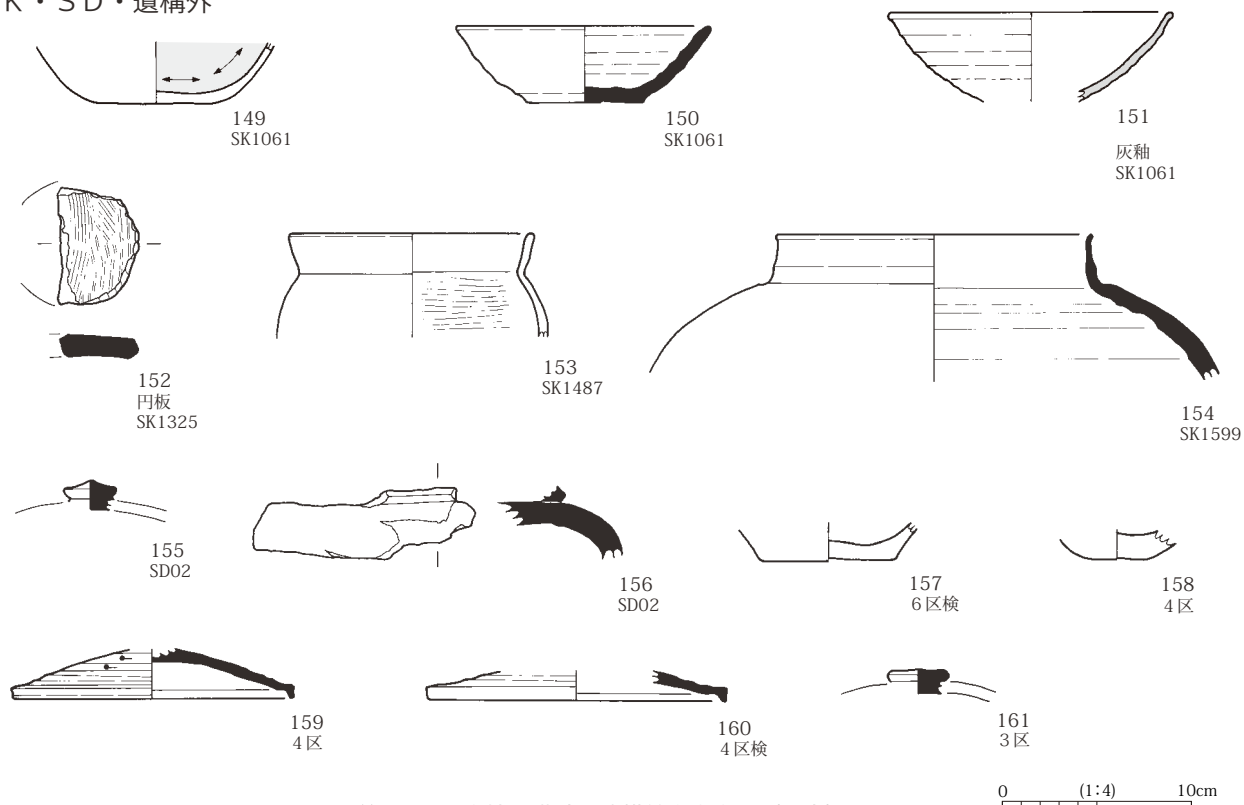
SK



0 (1:4) 10cm

第76図 土器集中遺構・掘立柱建物跡・土坑出土土器（平安）

SK・SD・遺構外



第77図 土坑・溝跡・遺構外出土土器（平安）

住居跡とは判断できなかった土器集中遺構であるが、土器の様相は、住居跡と違いはみられなかった。138～142の土師器甕については、口縁部の明瞭な面はみられない。

ST27（第76図 PL23）

144は、柱穴内から大きな破片が集中して出土し、建物跡に伴う遺物と考えられる土器である。体部には、口縁直下から横方向のハケ目が整然とされており、意識的にかいたとも思われる。このハケ目は内面にもされている。

SK1061（第77図 PL23）

竪穴住居跡SB05近くの土坑からの出土で、住居との関連が考えられる遺物である。150の須恵器杯は、完形である。内部の見込にもしっかりとおさえた痕がみえる。151は灰釉陶器碗で、器壁が薄く、内外面ともハケ塗りされている。灰白色の緻密な胎土で、SB05出土の灰釉陶器と同様、光ヶ丘窯式に比定される。

SK1325（第77図 PL23）

152は、須恵器甕の胴部を利用した円盤と思われる。周囲には、意図的に成型したと思われる痕がみられる。出土した遺構は、20cmほどの小ピットであり、遺構との関連、性格等は不明である。

（註2）原明芳氏より指導を得た。内面下部が荒れた甕は、塩尻市吉田川西遺跡SB141（泉埋文1989）などで出土例がある。

（註3）平安時代・戦国時代の掘立柱建物跡については、宮本長二郎氏より、現場段階・整理段階ともに、建物構造、図上での建物検討などについて指導を得た。

（註4）軟質須恵器の定義については、松本平の長野道関連遺跡（小平1990）、北信地方の上信越道屋代遺跡群（鳥羽2000）・松原遺跡（上田2000）などで技法・焼成・色調などをもとに検討・定義されている。本遺跡の場合は、小破片が多く、技法による分類はできない状況にあり、焼成・色調を分類の基準とした。

4 戦国時代

(1) 遺構

イ 掘立柱建物跡

戦国時代の掘立柱建物跡と認定したのは、25棟である。

25棟の分布は、1区に2棟、2区に5棟、3区に6棟、4区に8棟、5区に4棟と調査区全体に広がっている。(第79図～第83図)

以下に特徴的な掘立柱建物跡5棟について記述する。ST01は、大型で建物内に焼土が確認された。ST11・13～15の4棟は、ともに大型で規模・軸が揃っており、その位置関係(第79・80図)から関連が想定される建物群である。ST35は、重なる井戸跡(SK101)との関連が考えられる建物跡である。

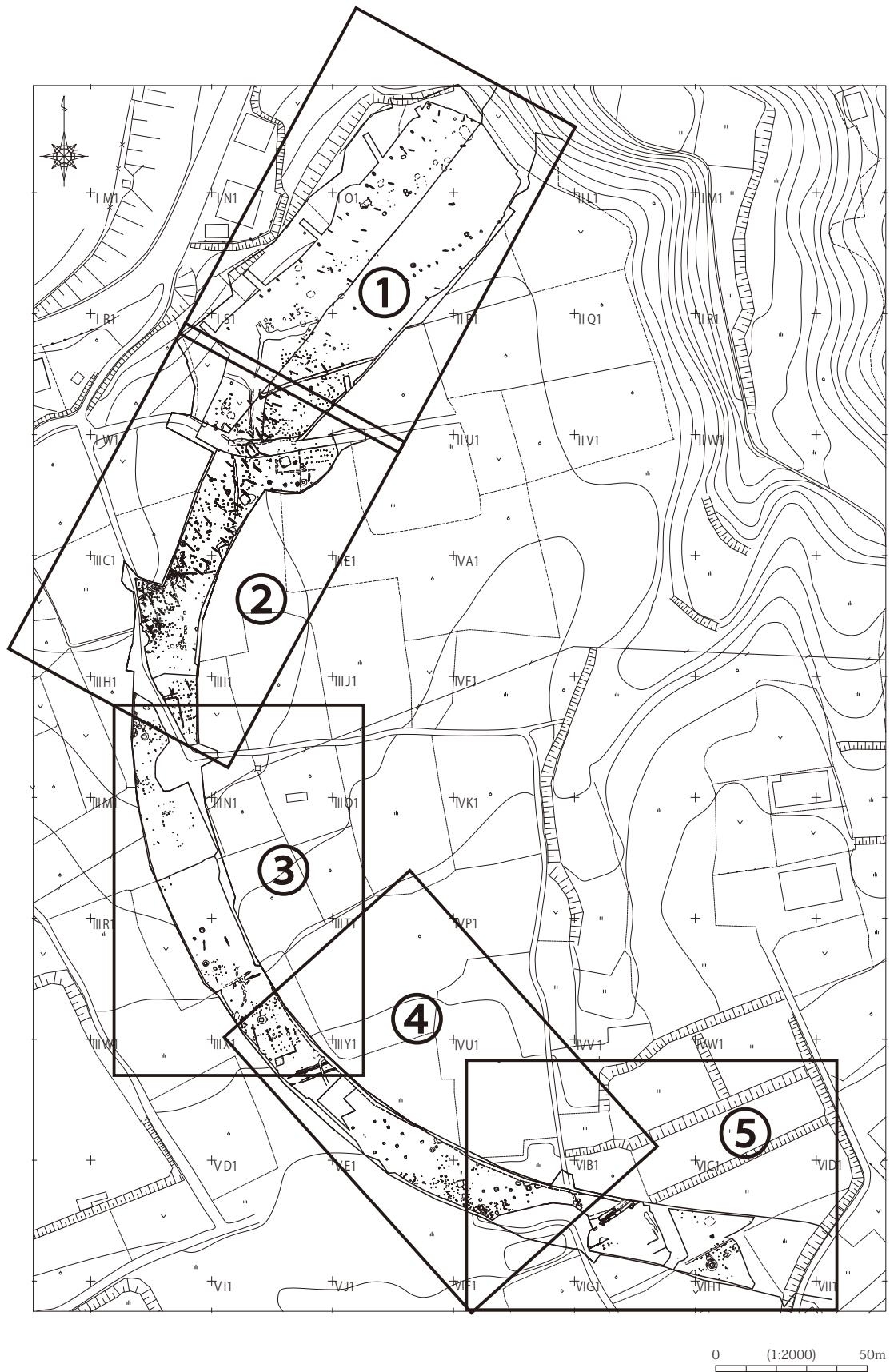
記述した以外の掘立柱建物跡については、建物跡と認定した根拠・位置・規模・形状・遺物などを記載した遺構一覧表を作成し掲載した(第5表)。また、個別遺構図についてはすべての建物跡について掲載してある(第84図～第98図)。

ST01(第84図 PL4)【2区 III S23・24、X3・4グリッド】

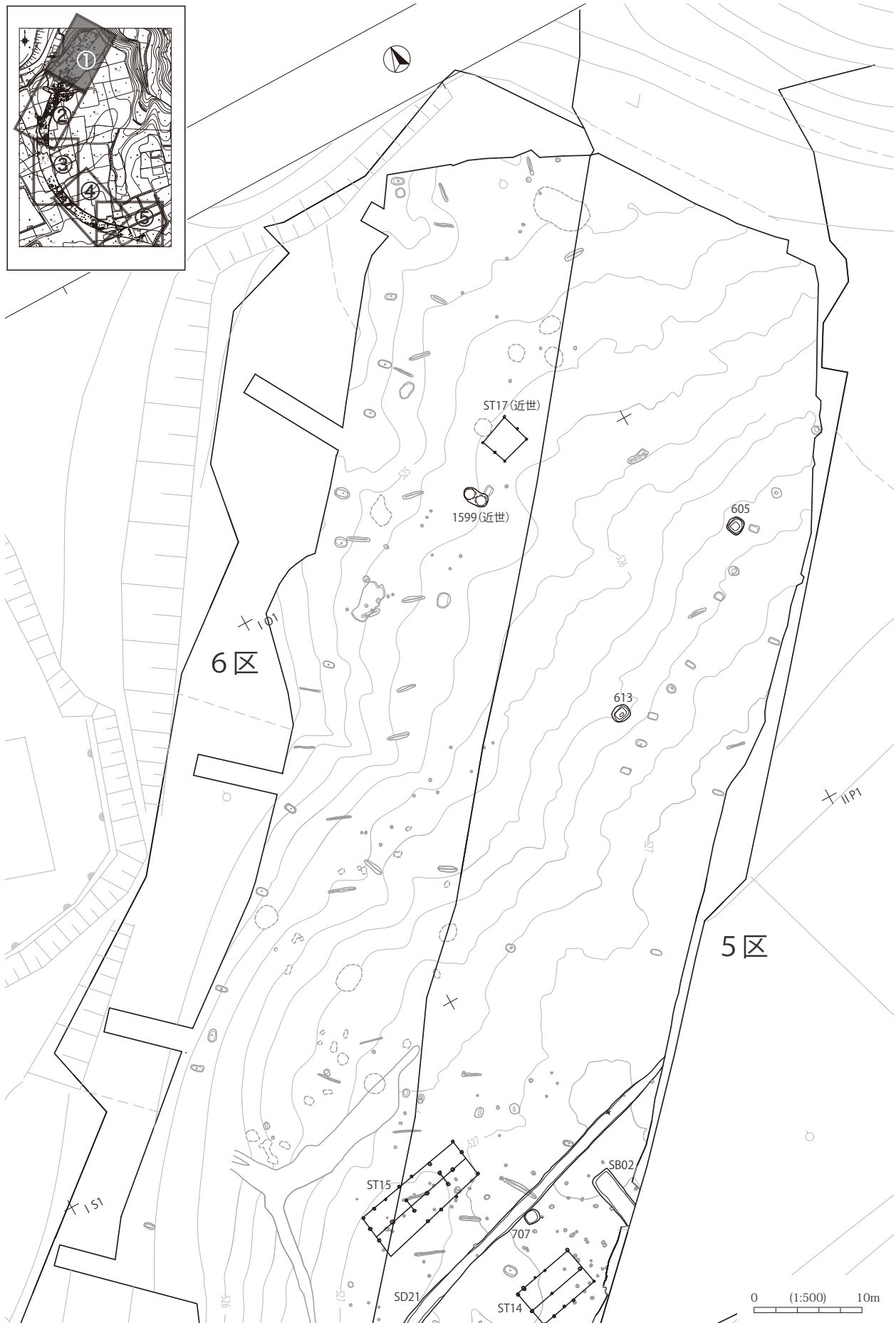
位置：2区北部東寄り、ゆるやかな北斜面にある。重複：なし。検出：VI層上面。構造的特徴：桁行8.81m、梁行4.60mの側柱建物である。柱間数は、桁行では南列が6間、北列で5間、梁行では東列が4間、西列で3間と違いがある。列ごとには、柱穴の深さが北列0.08～0.24m、南列0.37～0.60mとあまり違いはない。主軸：N66°E。面積：40.53㎡。柱穴：方形・長方形を呈するものが多く、一辺18～46cmを測る。柱間距離1.00～2.47m、7基で柱痕が確認された。柱材なし。堆積状況：柱痕が確認された柱穴では、柱痕周囲の埋土にロームがブロック状に多く混入し、人為的に埋められた様子がみられた。その他の施設：北壁際やや西よりに、焼土が確認された。直径0.5mほどの円形で、やや硬くしまっていた。この場所で火が焚かれていたと考えられる。おそらくこの部分の壁は、土が塗られるなど焼けない工夫がなされていたのではないかと考えている。遺物出土状況：柱穴からの出土はない。検出面では内耳鍋の破片が出土している。時期：柱穴からの出土遺物がなく、この遺構だけでの時期決定は難しいが、検出面の遺物や戦国時代に比定された井戸跡など周囲遺構との関連から戦国時代と考えられる。

ST11(第90図 PL4)【4区 I X4・5・9・10グリッド】

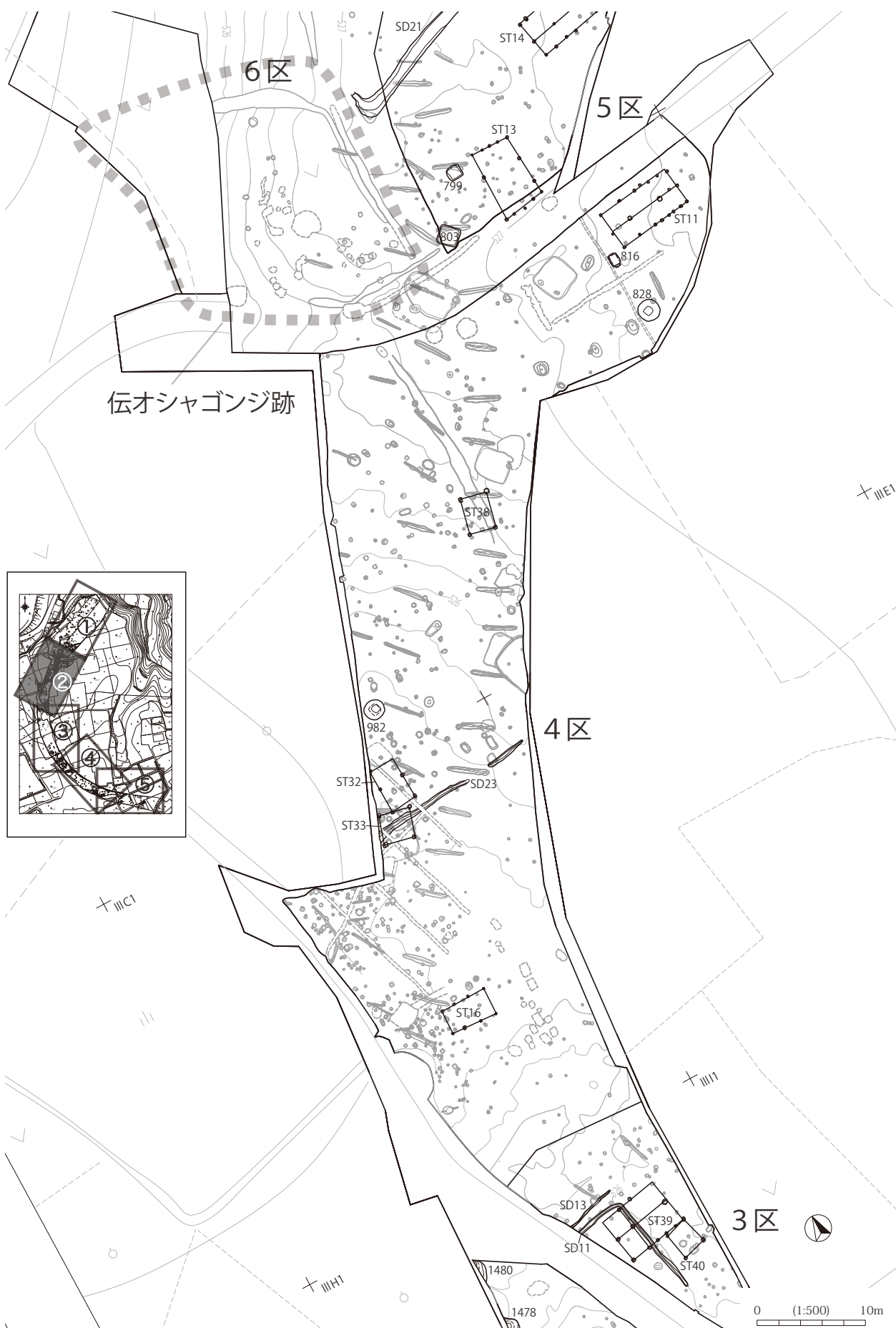
位置：4区から5区にかけて広がる丘陵部のほぼ頂部にあり、周囲は平坦である。重複：なし。検出：VI層上面。構造的特徴：桁行7.40m、梁行3.68mの側柱建物である。柱間数は、桁行では南列が7間北列で6間と違いがある。梁行は2間である。柱の位置関係からP4・P6・P10・P11・P13は、補助柱あるいは間仕切り用柱の可能性はある。P18・P19は棟持柱と考えられる。それぞれ壁から2.0m離れた位置にあり、柱間距離は3.3mを測る。主軸：N83°E、ほぼ東西方向である。面積：27.23㎡。柱穴：方形・長方形を呈するものが多く、一辺23～44cmを測る。柱間距離0.55～3.30m、5基で柱痕が確認された。柱材なし。堆積状況：柱痕が確認された柱穴では、柱痕周囲の埋土にロームがブロック状に多く混入し、人為的に埋められた様子がみられた。遺物出土状況：柱穴からの出土はない。検出面では内耳鍋・かわらけの破片が出土した。時期：柱穴からの出土遺物がなく、この遺構だけでの時期決定は難しいが、検出面の遺物や戦国時代に比定された溝跡・竪穴状遺構・掘立柱建物跡群など周囲遺構との関連から戦国時代と考えられる。



第78図 表町遺跡 遺構全体図(割図)



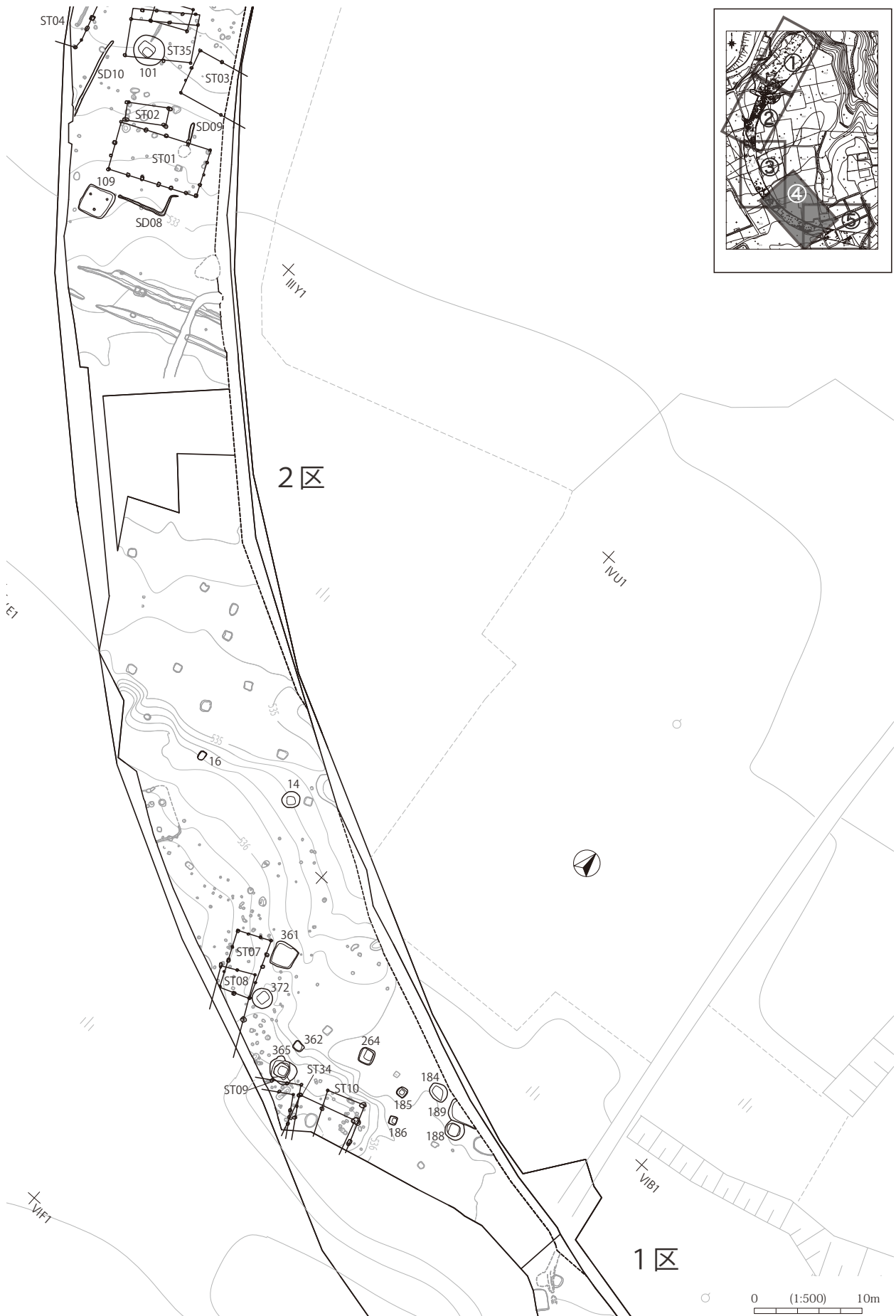
第 79 図 表町遺跡 戦国時代・近世遺構全体図① (ST・SD・井戸跡・竪穴状遺構・大型 SK・近世 SK)



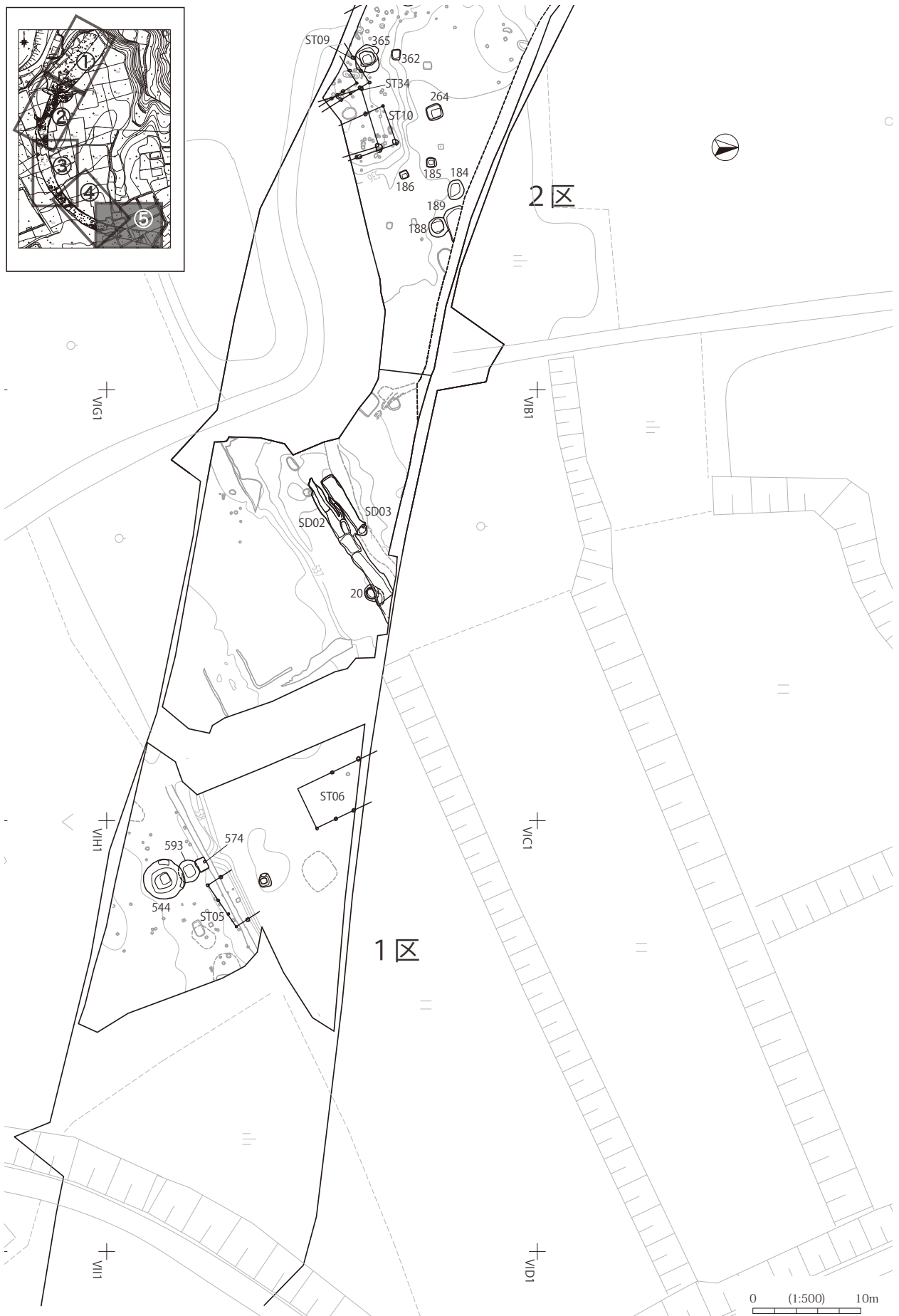
第80図 表町遺跡 戦国時代・近世遺構全体図② (ST・SD・井戸跡・大型SK)



第81図 表町遺跡 戦国時代・近世遺構全体図③ (ST・SD・井戸跡・大型SK・近世SK)

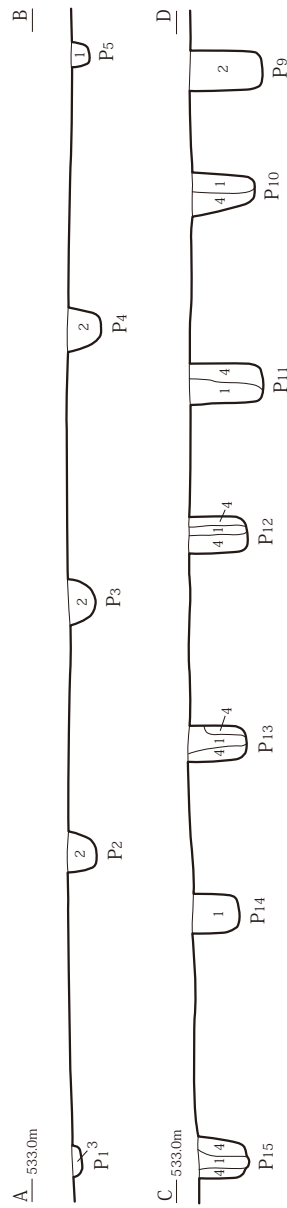
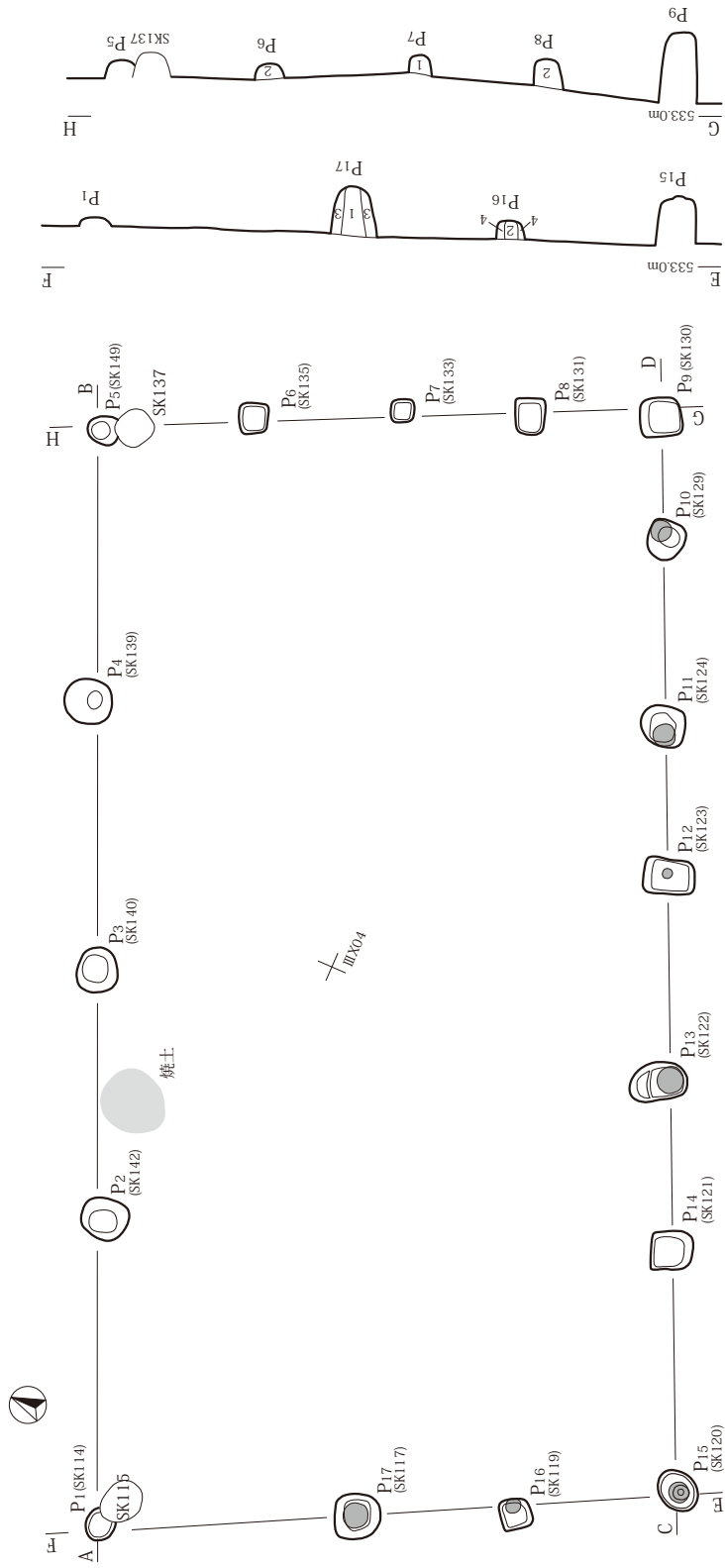


第82図 表町遺跡 戦国時代・近世遺構全体図④ (ST・SD・井戸跡)



第83図 表町遺跡 戦国時代・近世遺構全体図⑤ (ST・SD・井戸跡)

ST01



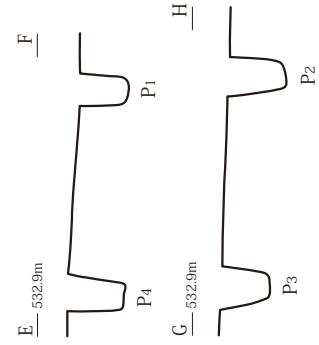
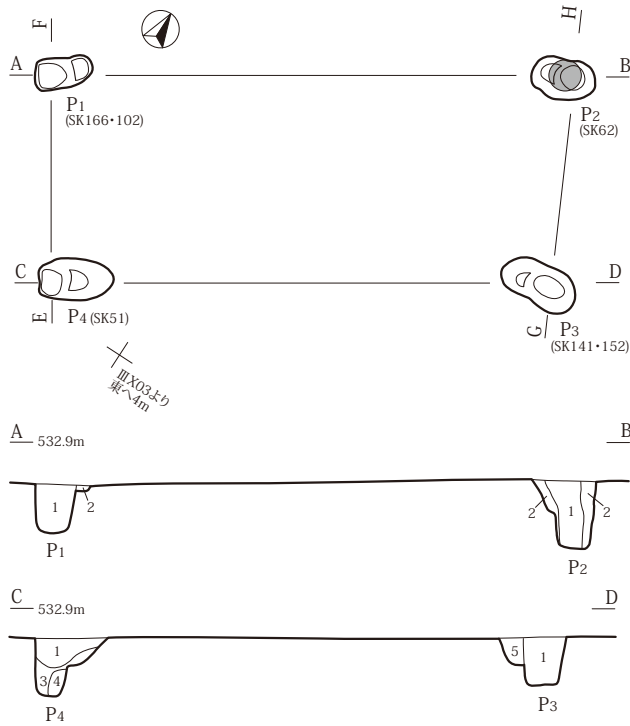
ST01

- 1 黒色沙土 10YR : 2/1 黄褐色ローム粒を1%程度混入 粘性なし
しまりややわるい
- 2 黒色沙土 10YR : 2/1 黄褐色ローム粒を3~5%混入 粘性なし
しまりふつつ
- 3 黒色沙土 10YR : 2/1 黄褐色ローム粒・アロウを10~30%混入
粘性なし しまりふつつ
- 4 黒色沙土と黄褐色ロームの混合層粘性なし しまりふつつ



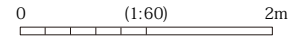
第84図 1号掘立柱建物跡

ST02

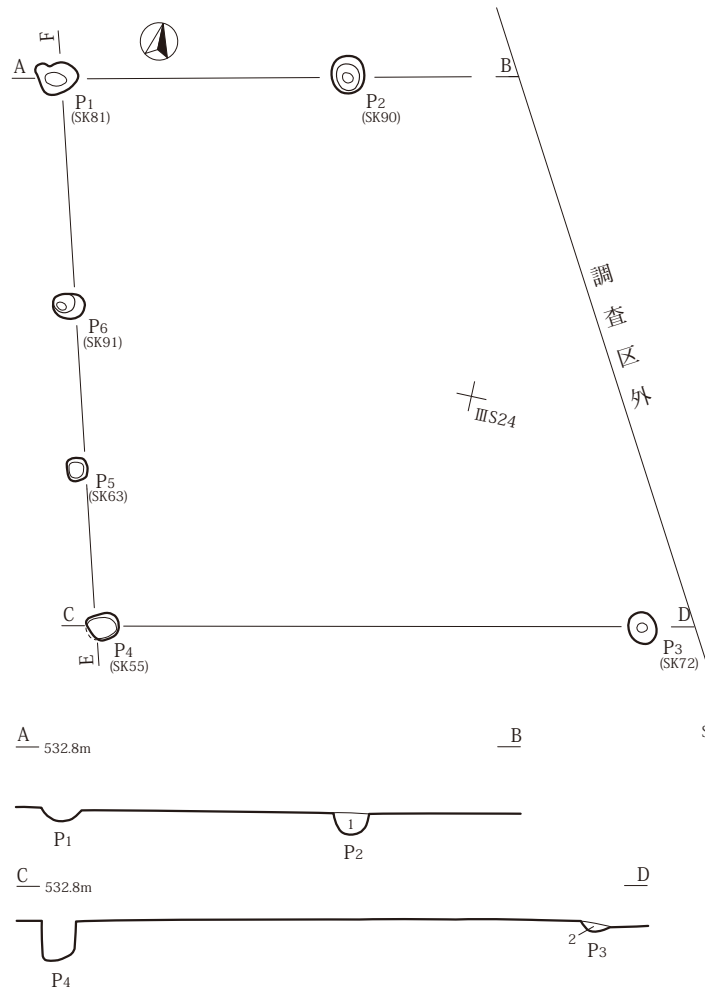


ST02

- 1 黒色シルト 10YR:2/1 黄褐色ローム粒を1%程度混入 P4はしまりよし 粘性なし しまりふつつ
- 2 黒色シルト 10YR:2/1 黄褐色ローム粒・ブロックを10~30%混入 焼土粒少量混入 粘性なし しまりふつつ
- 3 黒色シルト 10YR:2/1 黄褐色ローム粒を50%程度混入 粘性なし しまりふつつ
- 4 黒色シルト 10YR:2/1 黄褐色ローム粒を3~5%混入 粘性なし しまりふつつ
- 5 黒色シルト 10YR:1.7/1 黄褐色ローム粒を1%程度混入 粘性なし しまりややわるい

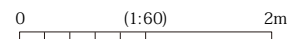


ST03



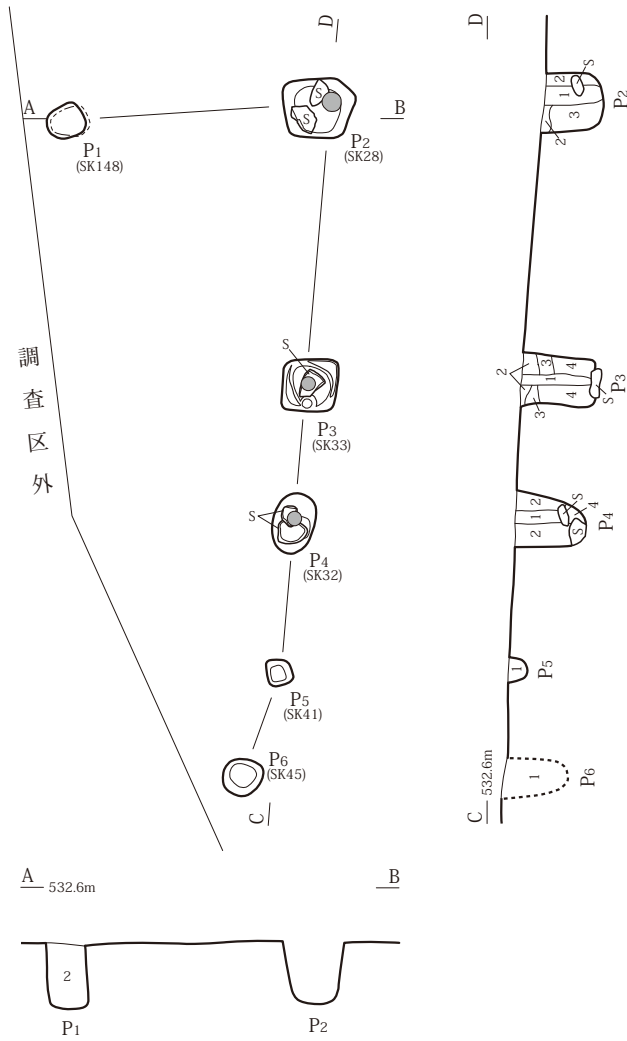
ST03

- 1 黒色シルト 10YR:2/1 黄褐色ローム粒を1%程度混入 粘性なし しまりふつつ
- 2 黒色シルト 10YR:2/1 黄褐色ローム粒を3~5%混入 粘性なし しまりふつつ
- 3 黒色シルト 10YR:2/1 黄褐色ローム粒・ブロックを10~30%混入 粘性なし しまりふつつ



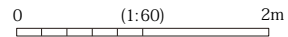
第85図 2号・3号掘立柱建物跡

ST04

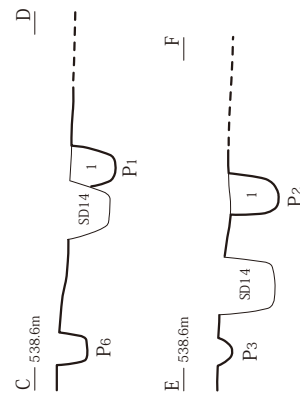
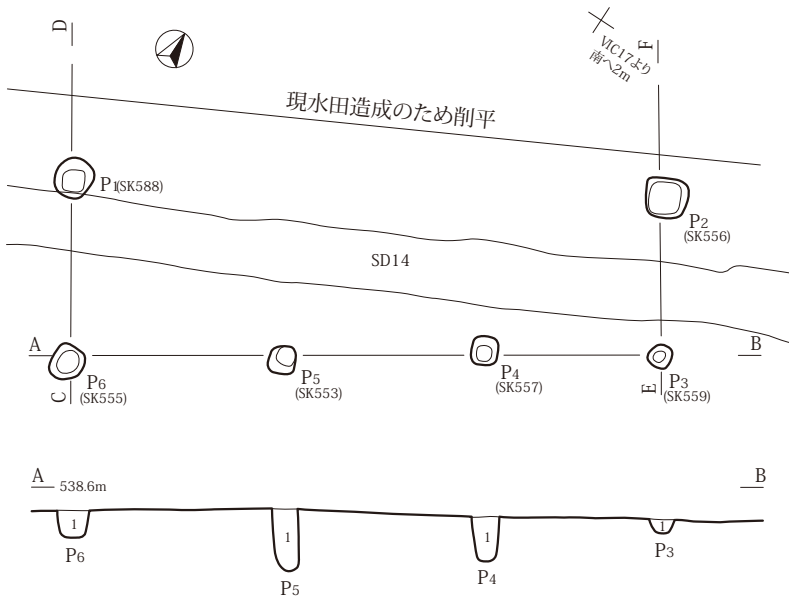


ST04

- 1 黒褐色砂質シルト 10YR: 2/2 黄褐色M粒を1%程度混入 粘性なし
しまりややわるい
- 2 黒色シルトと明黄褐色ロームブロックの混合層粘性なし しまりふつう
- 3 黒色シルト 10YR: 2/1 黄褐色M粒を3~5%混入 粘性なし
しまりふつう
- 4 2層と同質粘性なし しまりふつう

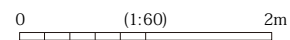


ST05

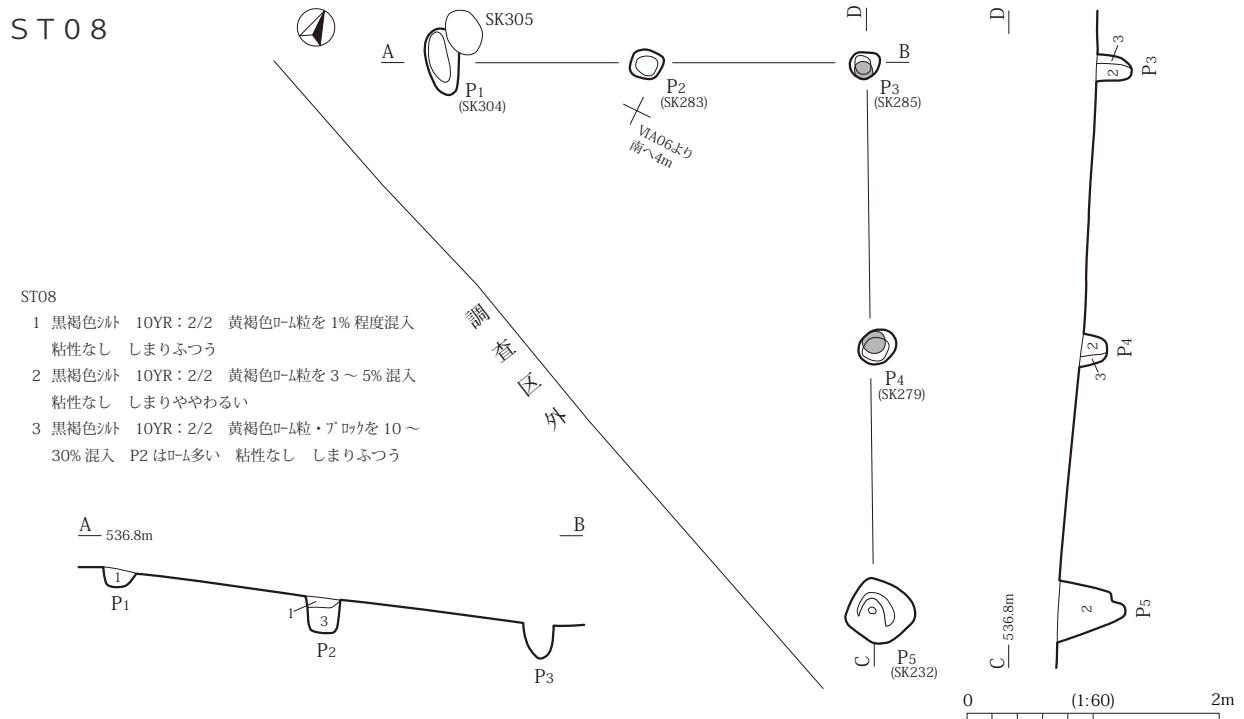
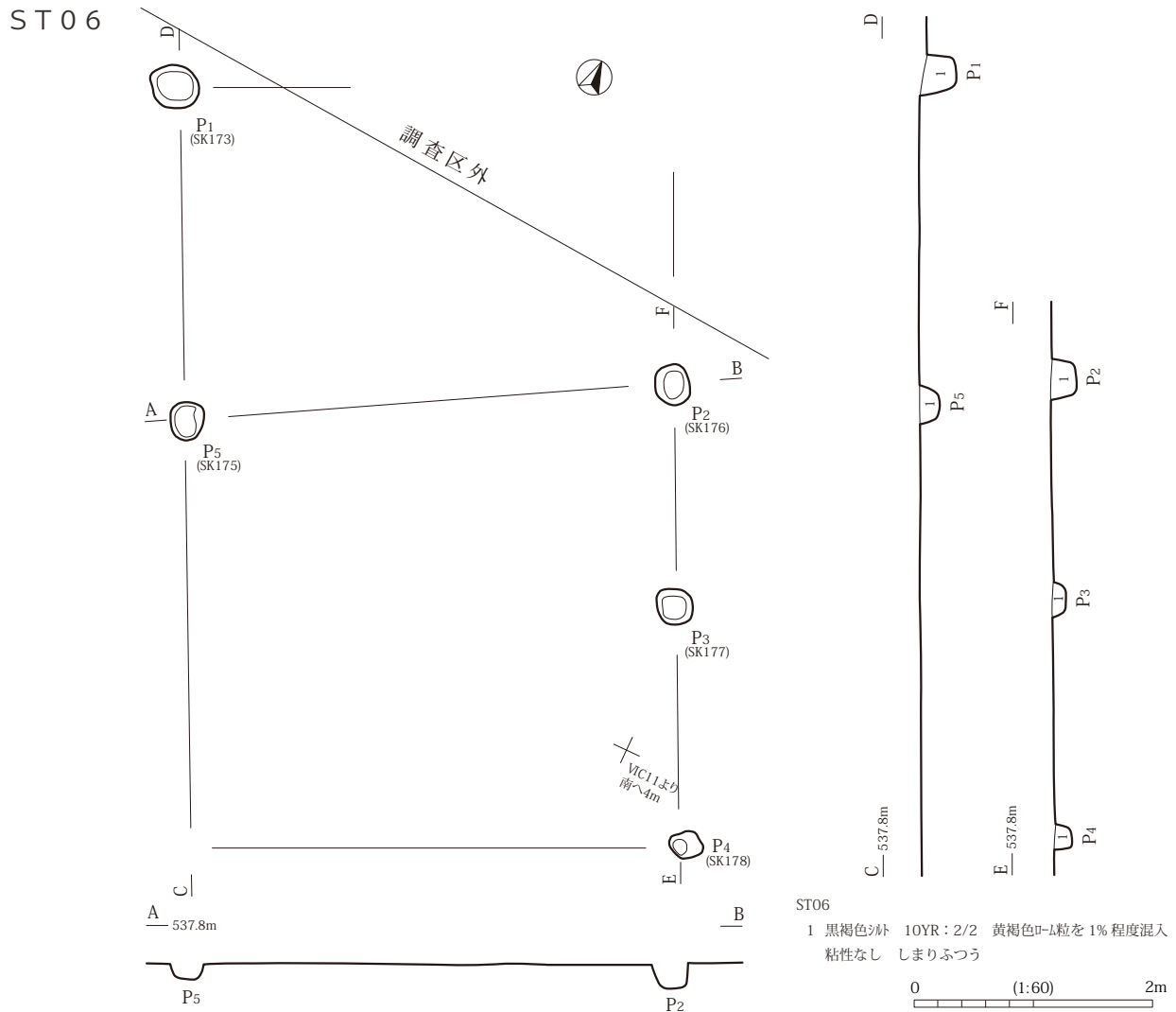


ST05

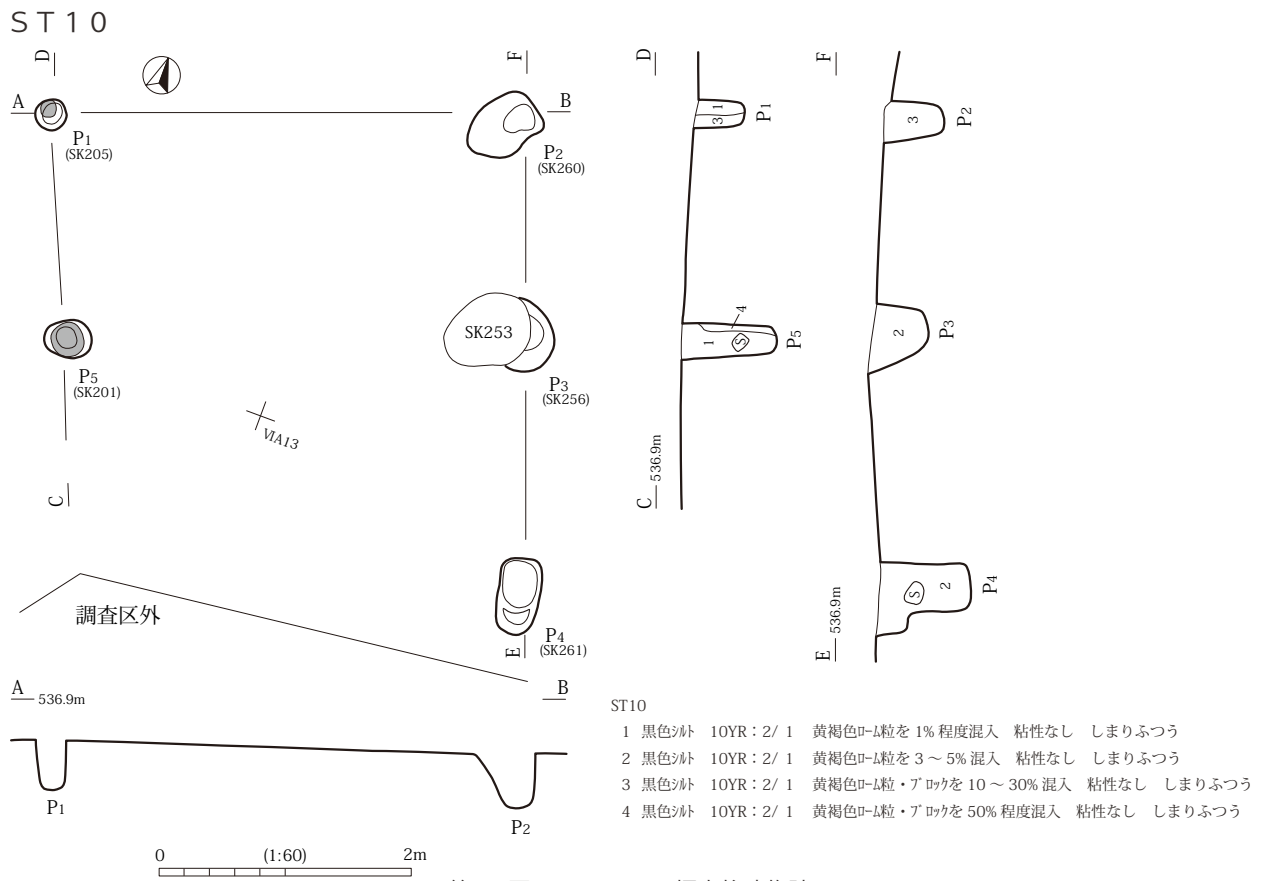
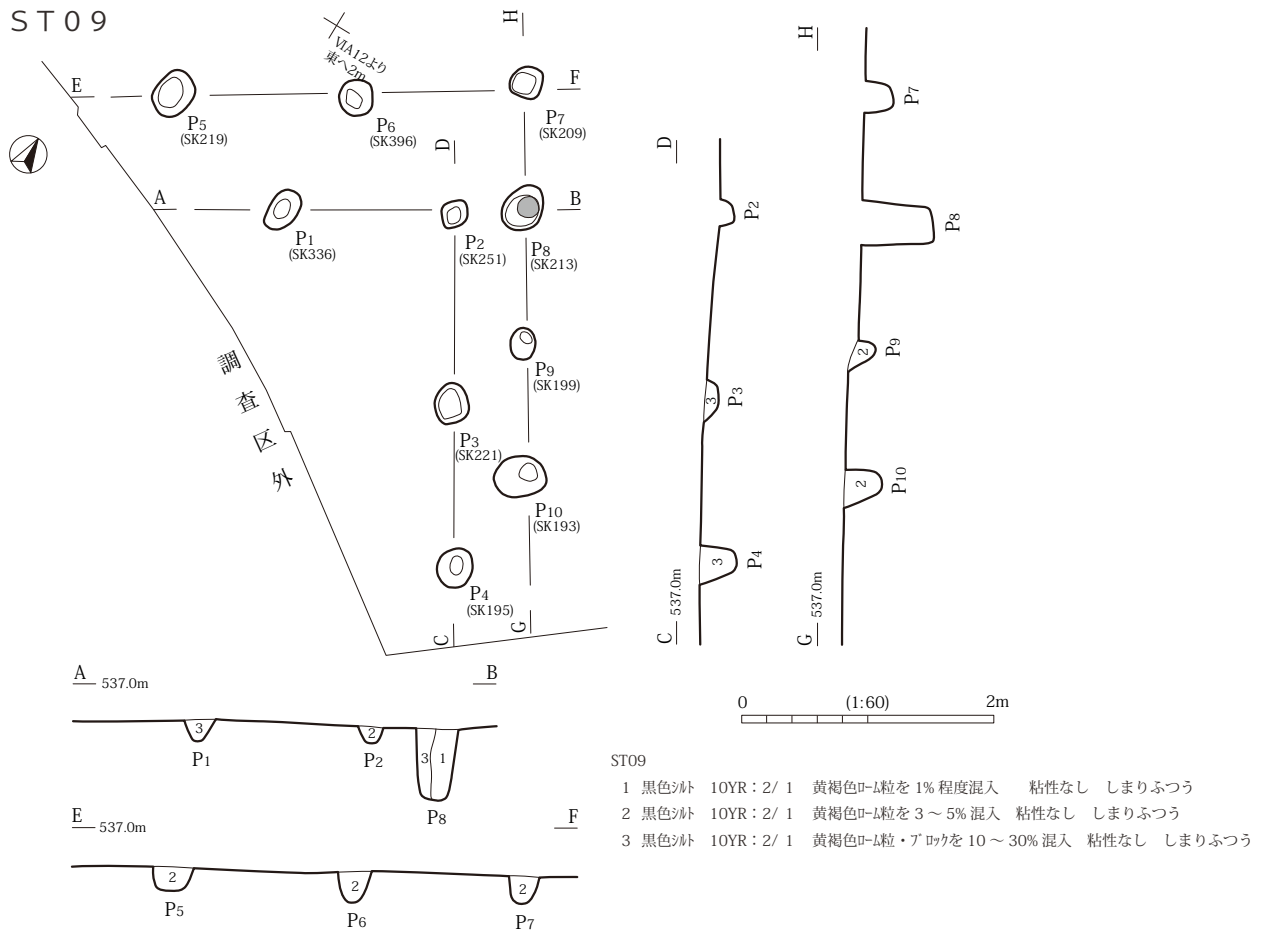
- 1 黒褐色シルト 10YR: 2/2 黄褐色M粒を1%程度混入
粘性なし しまりふつう



第86図 4号・5号掘立柱建物跡

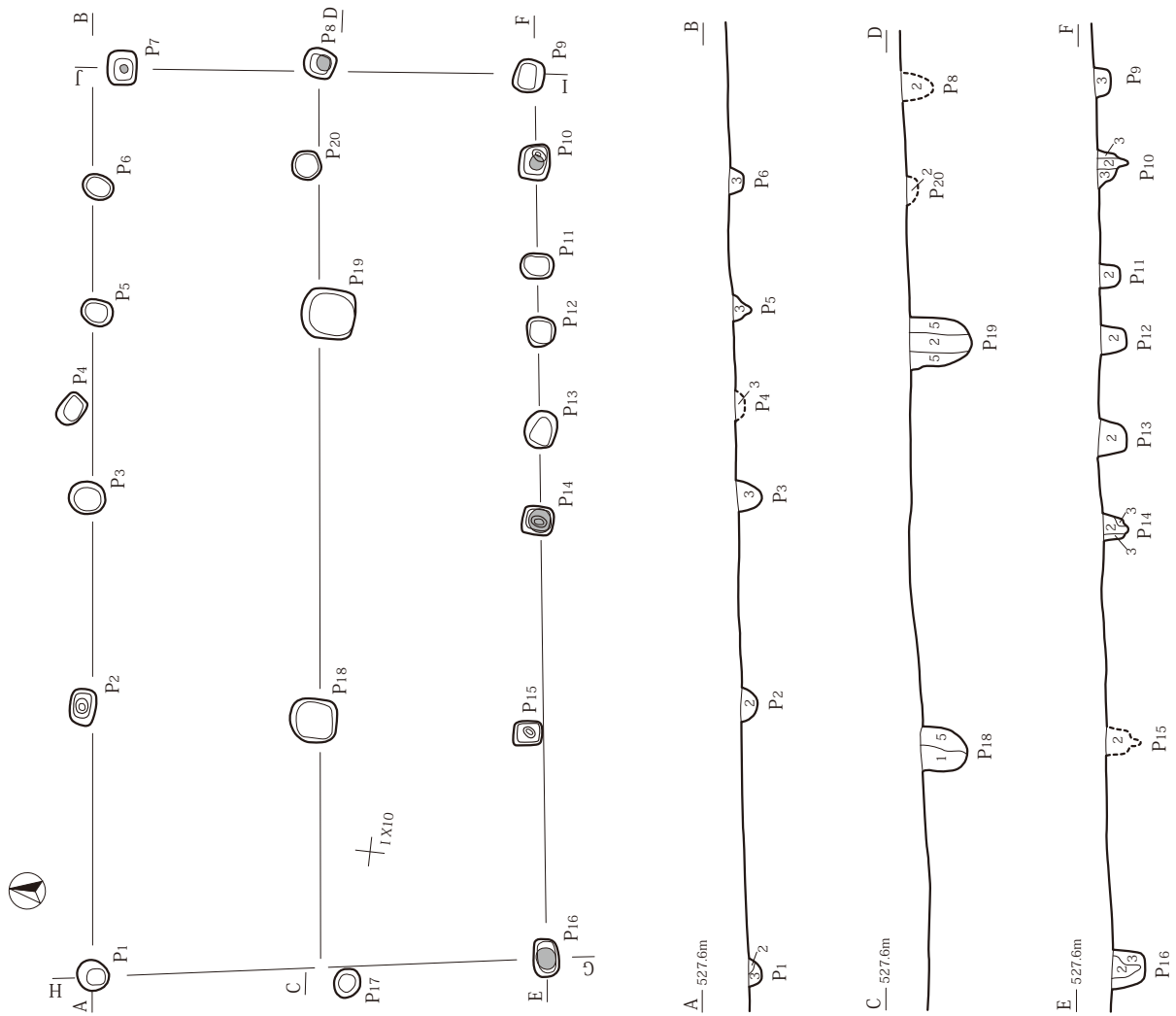


第87図 6号・8号掘立柱建物跡



第 89 図 9号・10号掘立柱建物跡

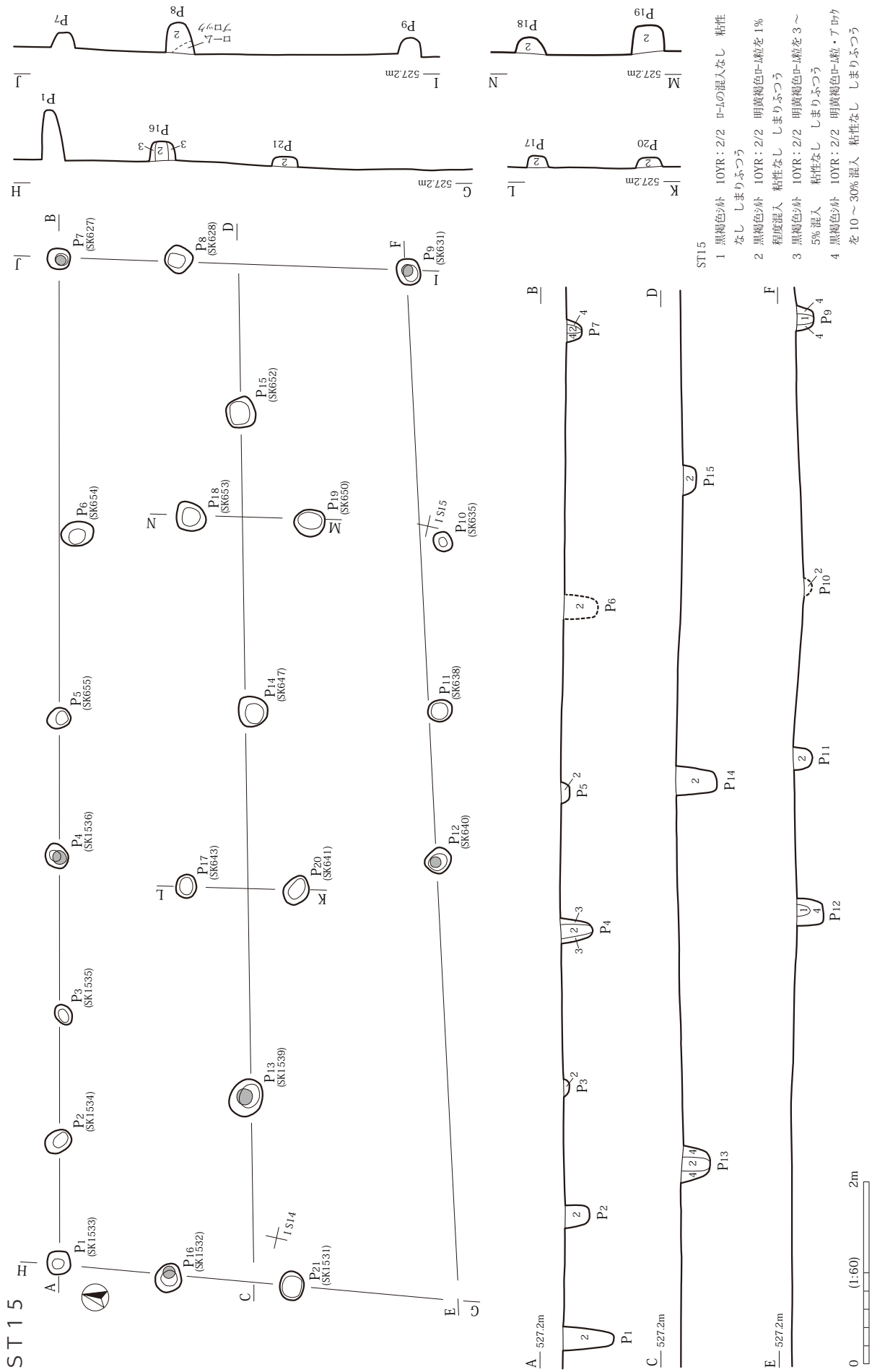
ST11



ST11

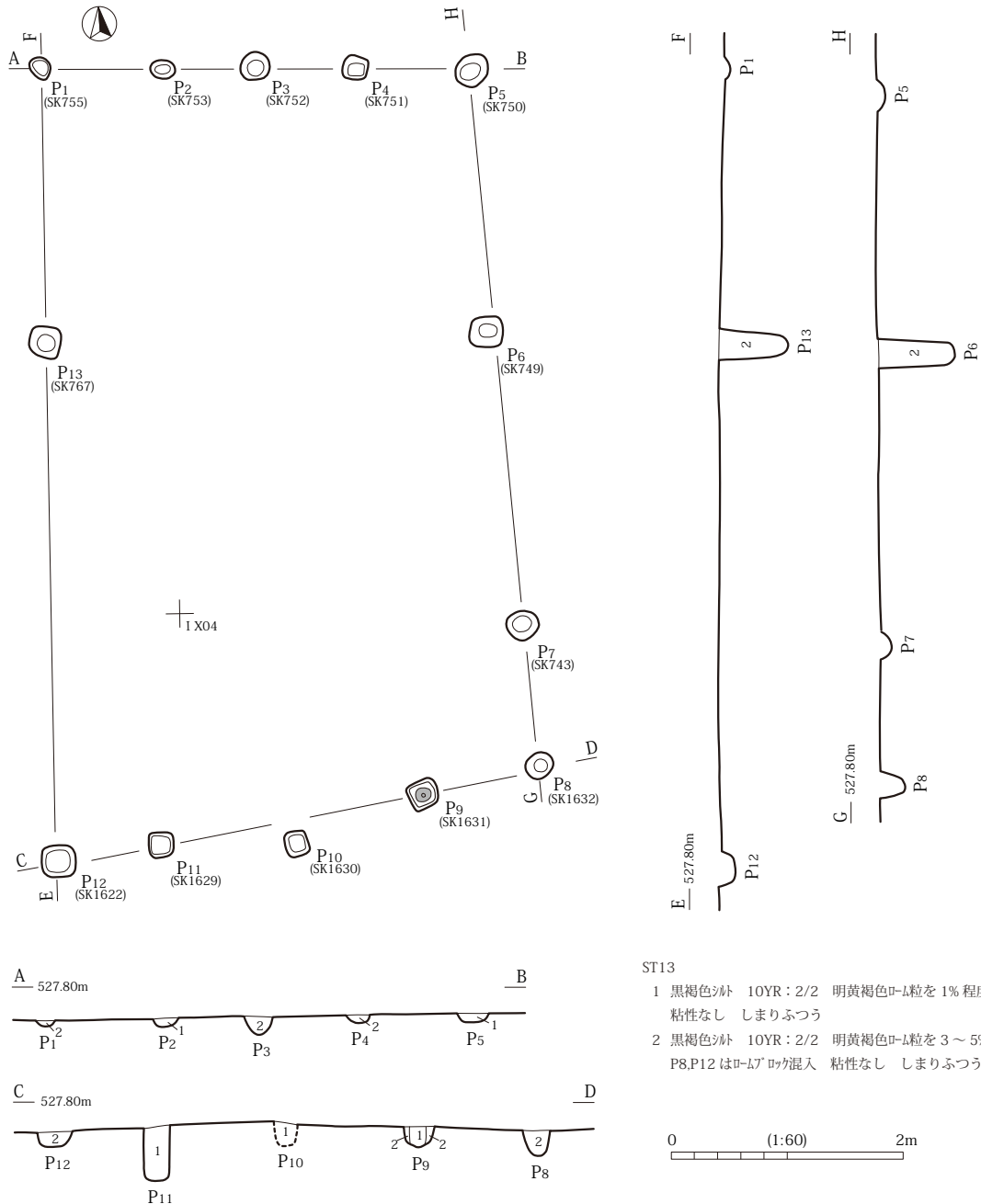
- 1 黒褐色沙 10YR:2/2 0-1の混入なし 粘性なし しまりふつつ
- 2 黒褐色沙 10YR:2/2 明黄褐色0-4粒を1%程度混入 P4は砂質強く、しまりわるい 粘性なし しまりふつつ
- 3 黒褐色沙 10YR:2/2 明黄褐色0-4粒を3~5%混入 粘性なし しまりふつつ
- 4 黒褐色沙と明黄褐色0-7の混合層 粘性なし しまりふつつ

第90図 11号掘立柱建物跡



第91図 15号掘立柱建物跡

ST13

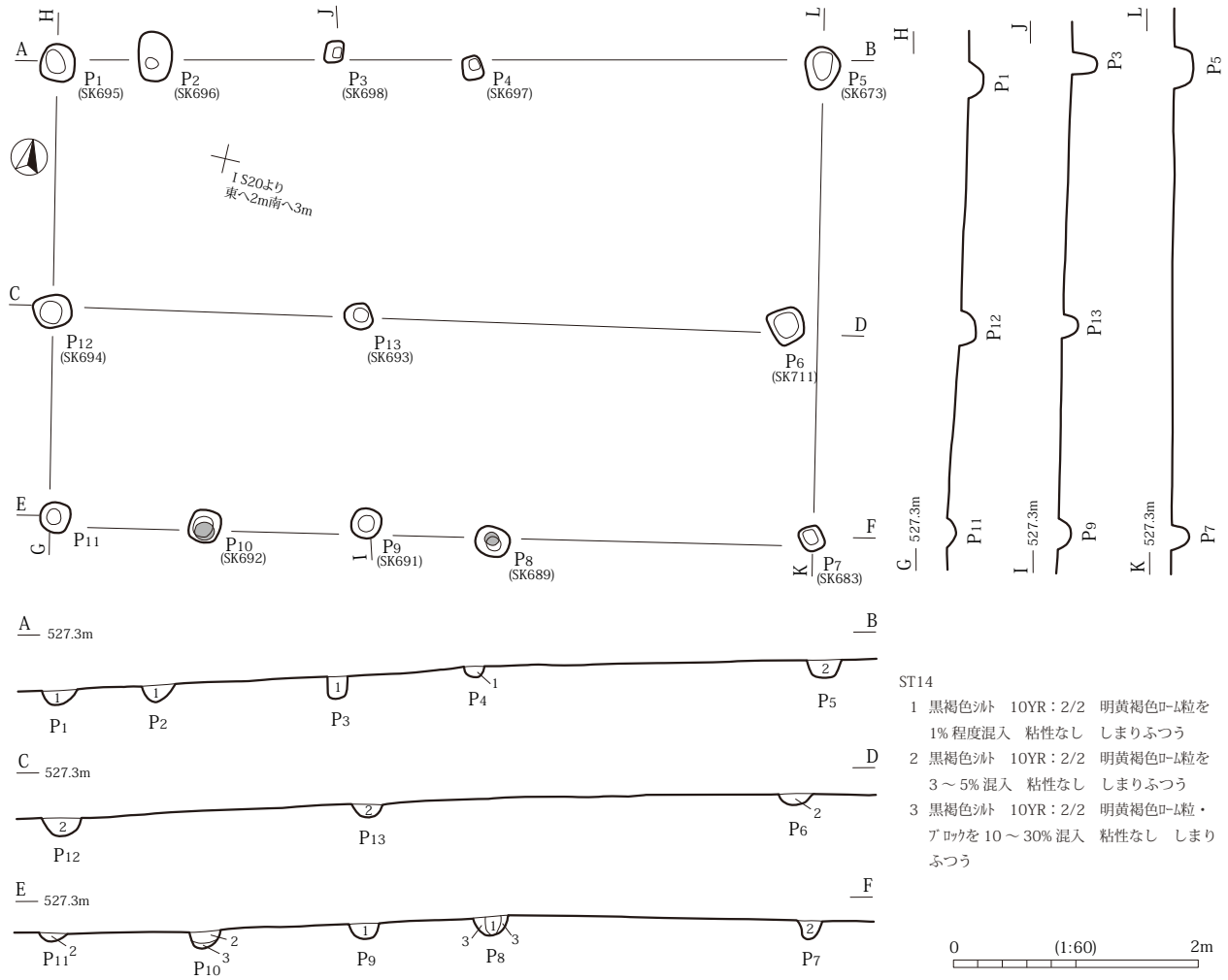


第92図 13号掘立柱建物跡

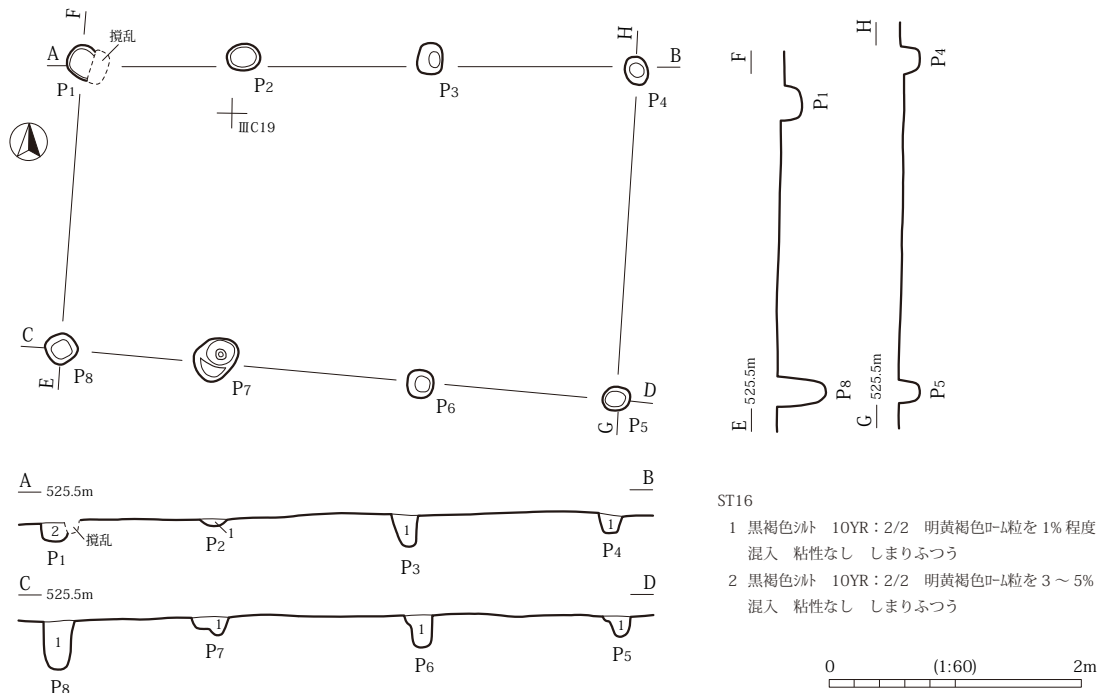
ST14 (第93図 PL4) 【5区 I S20グリッド】

位置：5区丘陵部のほぼ頂部にあり、周囲は平坦である。重複：なし。検出：VI層上面。構造的特徴：桁行6.28m、梁行3.84mの側柱建物。柱間数は、桁行4間、梁行は2間。梁行は柱間距離が狭く、P2・4・8・9は補助柱の可能性がある。P6・12・13については、P6が建物壁より内側に入っていることから棟持柱と考えた。ただP13が、P3－P9の線上にあるため、総柱建物となる可能性もある。主軸：N77°E、ほぼ東西方向である。面積：24.12㎡。柱穴：円形を呈するものが多く、大きさは16～40cmを測る。柱間距離は0.79～2.84m、2基で柱痕が確認された。柱材なし。堆積状況：柱穴のほとんどが単一層であるが、P8・10は柱痕周囲にロームブロック状が多く混入し、人為的に埋められた様子がみられた。遺物出土状況：柱穴からの出土はない。検出面では内耳鍋の破片が出土している。時期：出土遺物がなく、この遺構だけでの時期決定は難しいが、周囲の溝跡・竪穴状遺構・掘立柱建物跡群との関連から、戦国時代と考えている。

ST 14

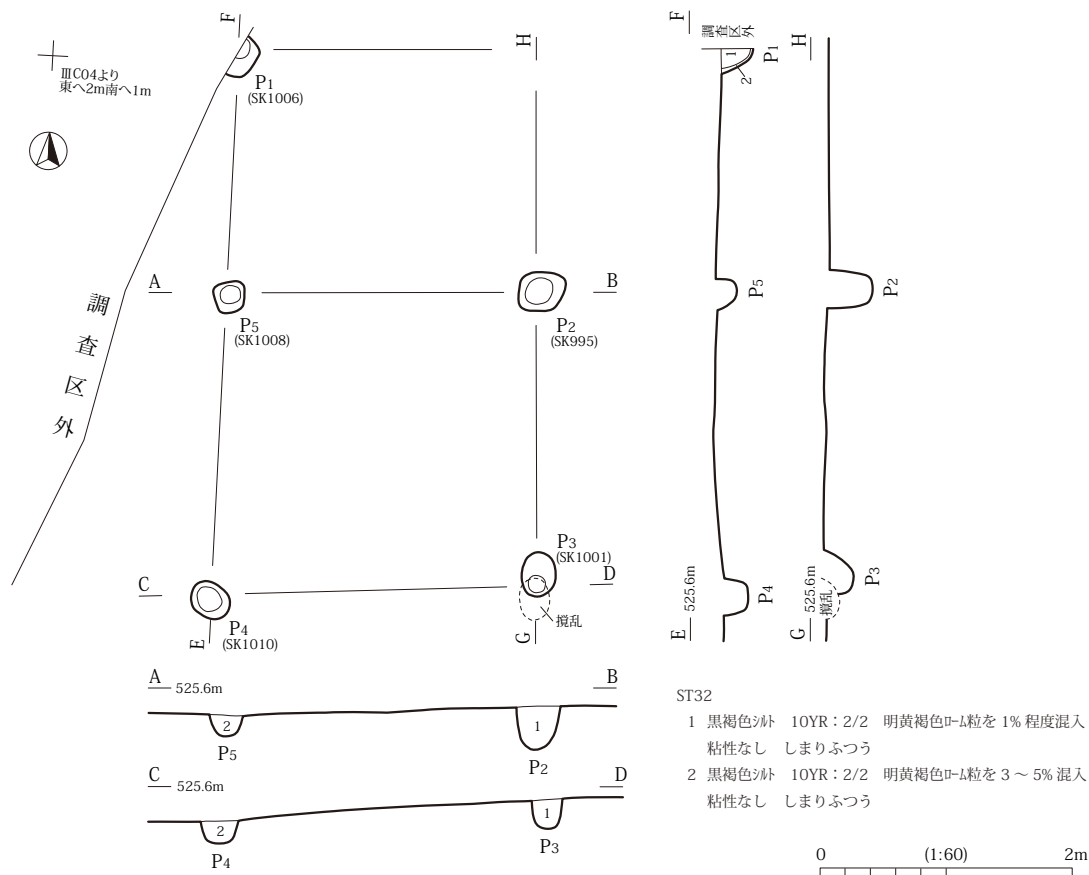


ST 16

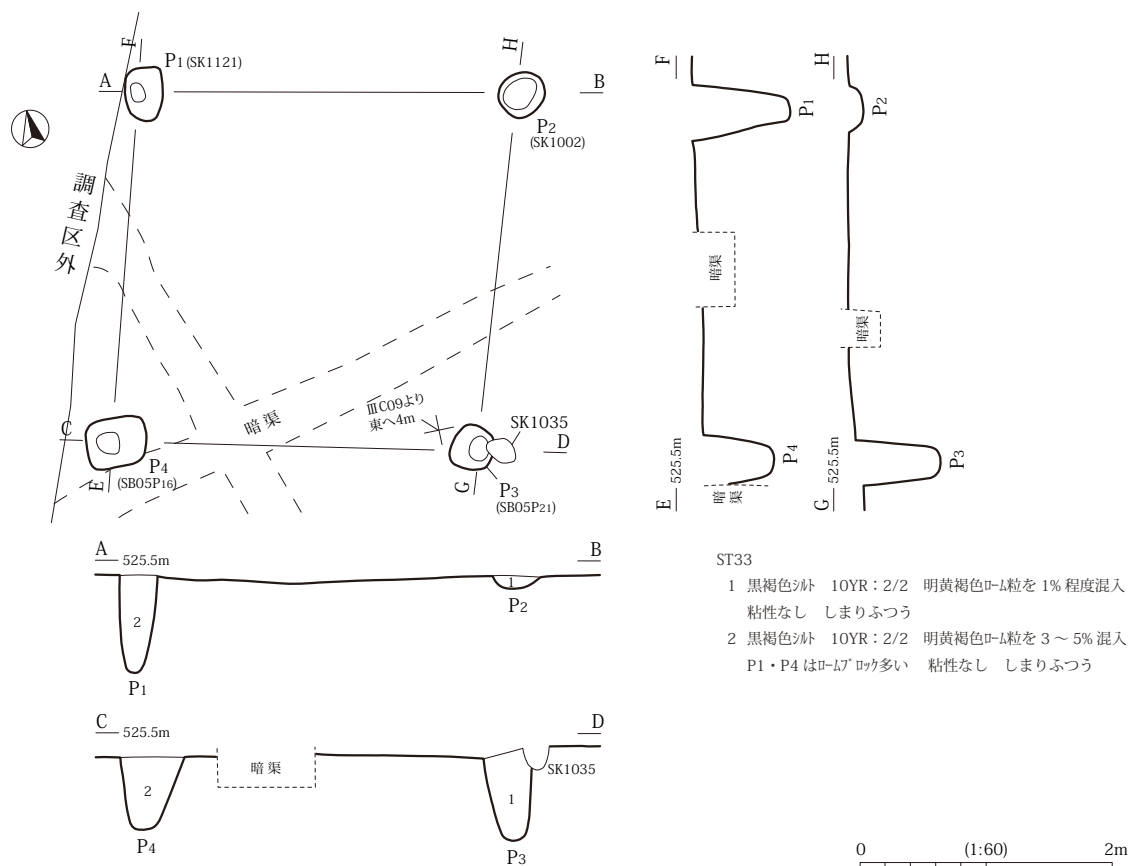


第93図 14号・16号掘立柱建物跡

ST32

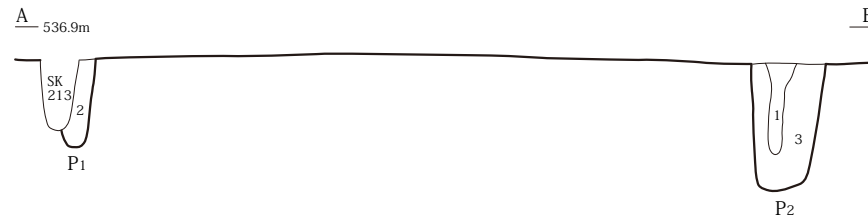
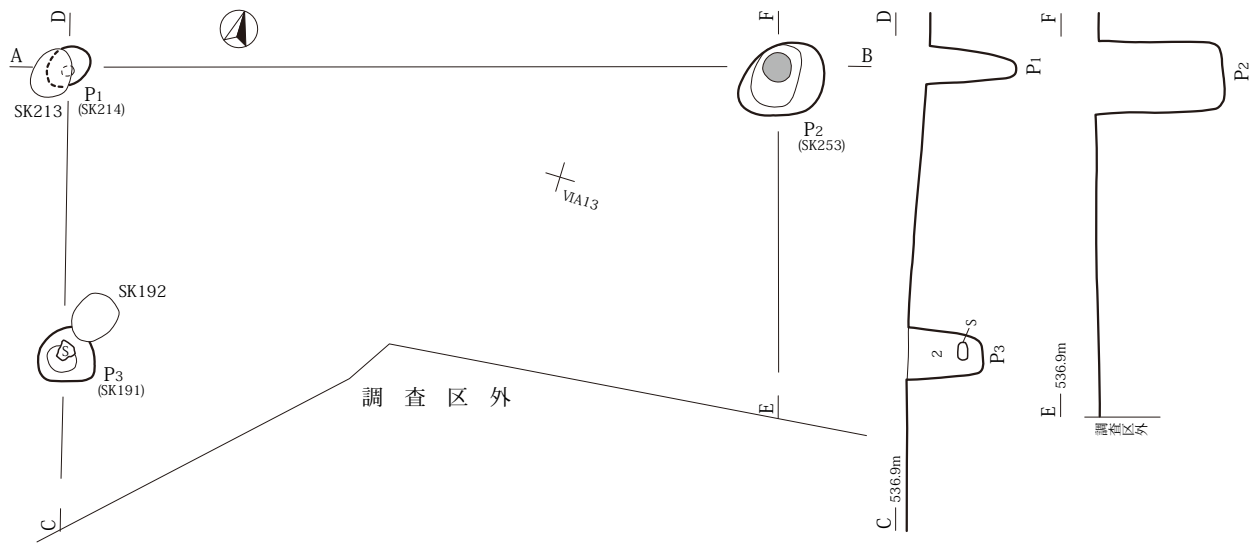


ST33



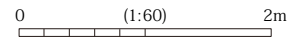
第94図 32号・33号掘立柱建物跡

ST34

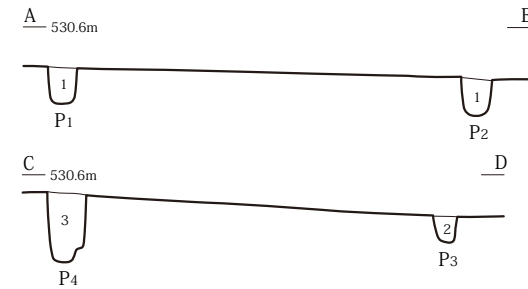
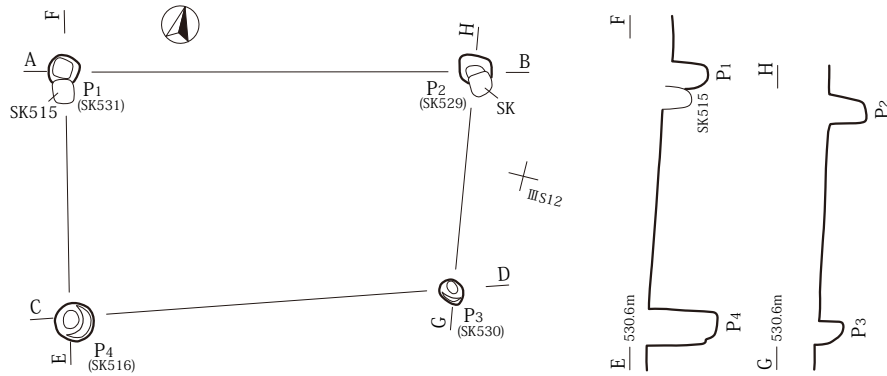


ST34

- 1 黒色シルト 10YR:2/1 黄褐色ローム粒を1%程度混入 粘性なし しまりややわるい
- 2 黒色シルト 10YR:2/1 黄褐色ローム粒を3~5%混入 粘性なし しまりふつつ
- 3 黒色シルトと黄褐色ロームブロックの混合層粘性なし しまりふつつ

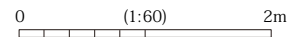


ST37



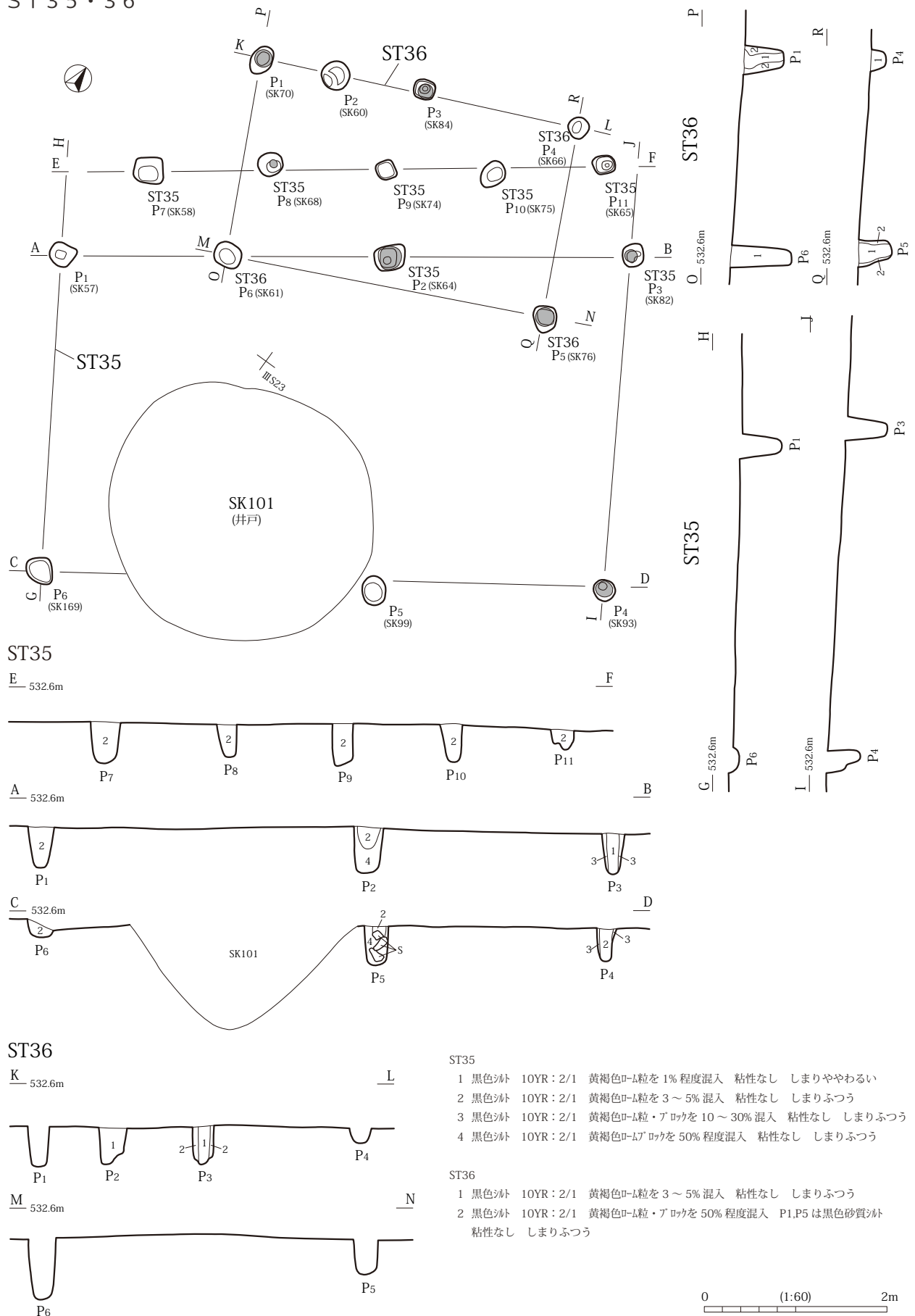
ST37

- 1 黒色シルト 10YR:1.7/1 黄褐色ローム粒を1%程度混入 粘性なし しまりふつつ
- 2 黒色シルト 10YR:1.7/1 黄褐色ローム粒を3~5%混入 粘性なし しまりふつつ
- 3 黒色シルト 10YR:2/1 黄褐色ローム粒を3~5%混入 粘性なし しまりふつつ



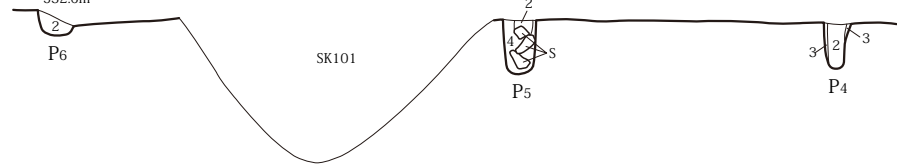
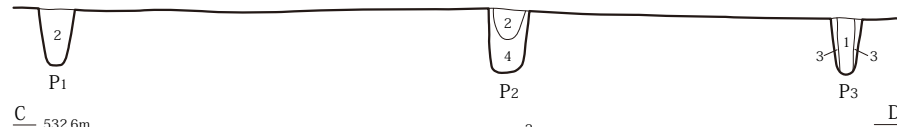
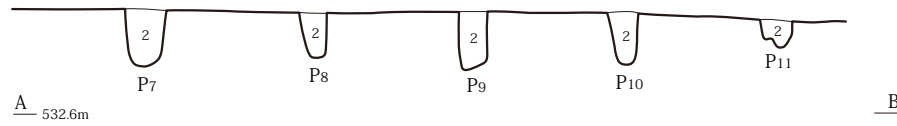
第95図 34号・37号掘立柱建物跡

ST35・36



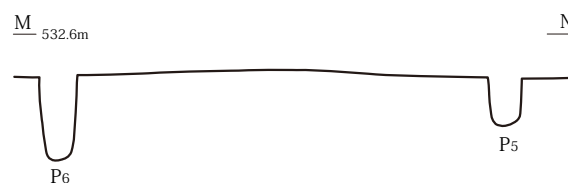
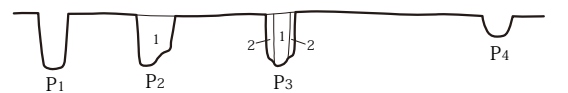
ST35

E 532.6m



ST36

K 532.6m



ST35

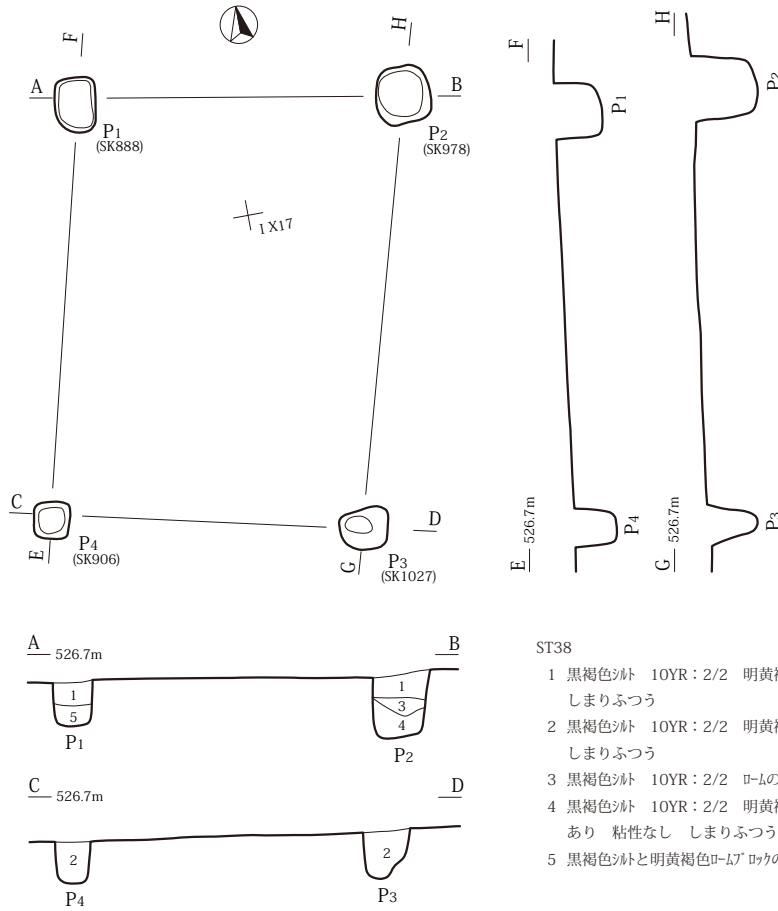
- 1 黒色シルト 10YR:2/1 黄褐色ロム粒を1%程度混入 粘性なし しまりややわるい
- 2 黒色シルト 10YR:2/1 黄褐色ロム粒を3~5%混入 粘性なし しまりふつう
- 3 黒色シルト 10YR:2/1 黄褐色ロム粒・ブロックを10~30%混入 粘性なし しまりふつう
- 4 黒色シルト 10YR:2/1 黄褐色ロム・ブロックを50%程度混入 粘性なし しまりふつう

ST36

- 1 黒色シルト 10YR:2/1 黄褐色ロム粒を3~5%混入 粘性なし しまりふつう
- 2 黒色シルト 10YR:2/1 黄褐色ロム粒・ブロックを50%程度混入 P1,P5は黒色砂質シルト 粘性なし しまりふつう

第96図 35号・36号掘立柱建物跡

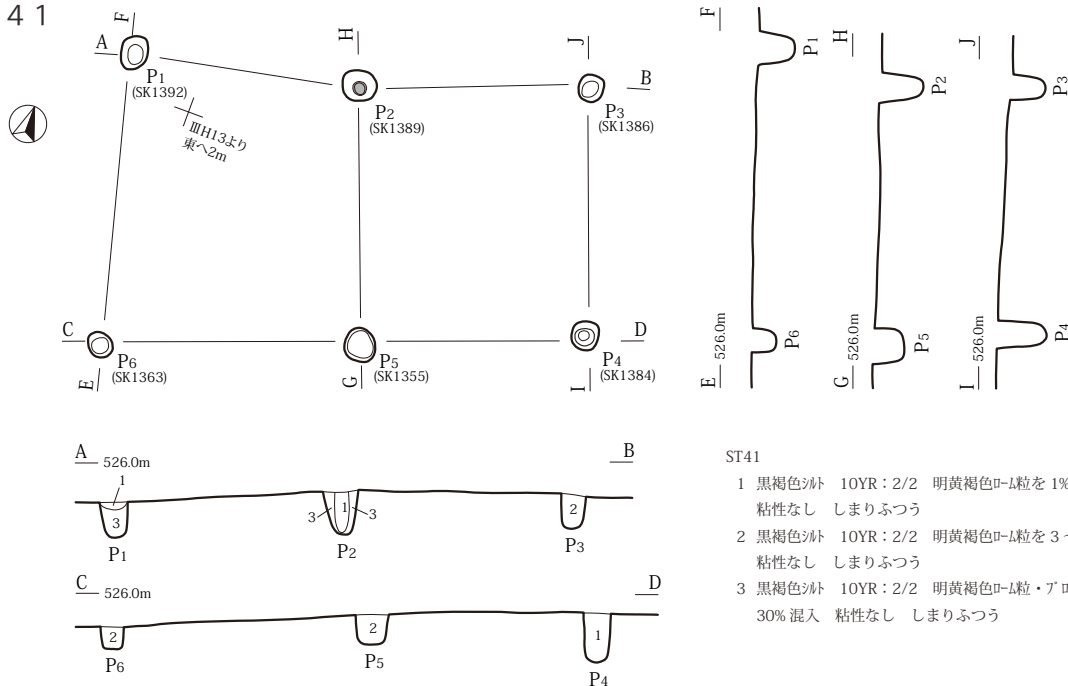
ST38



ST38

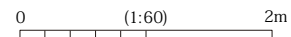
- 1 黒褐色シルト 10YR:2/2 明黄褐色ロ-M粒を3~5%混入 粘性なし しまりふつう
- 2 黒褐色シルト 10YR:2/2 明黄褐色ロ-M粒を1%程度混入 粘性なし しまりふつう
- 3 黒褐色シルト 10YR:2/2 ロ-Mの混入なし 粘性なし しまりふつう
- 4 黒褐色シルト 10YR:2/2 明黄褐色ロ-M粒を3~5%混入 ロ-M?ロツクあり 粘性なし しまりふつう
- 5 黒褐色シルトと明黄褐色ロ-M?ロツクの混合層粘性なし しまりふつう

ST41



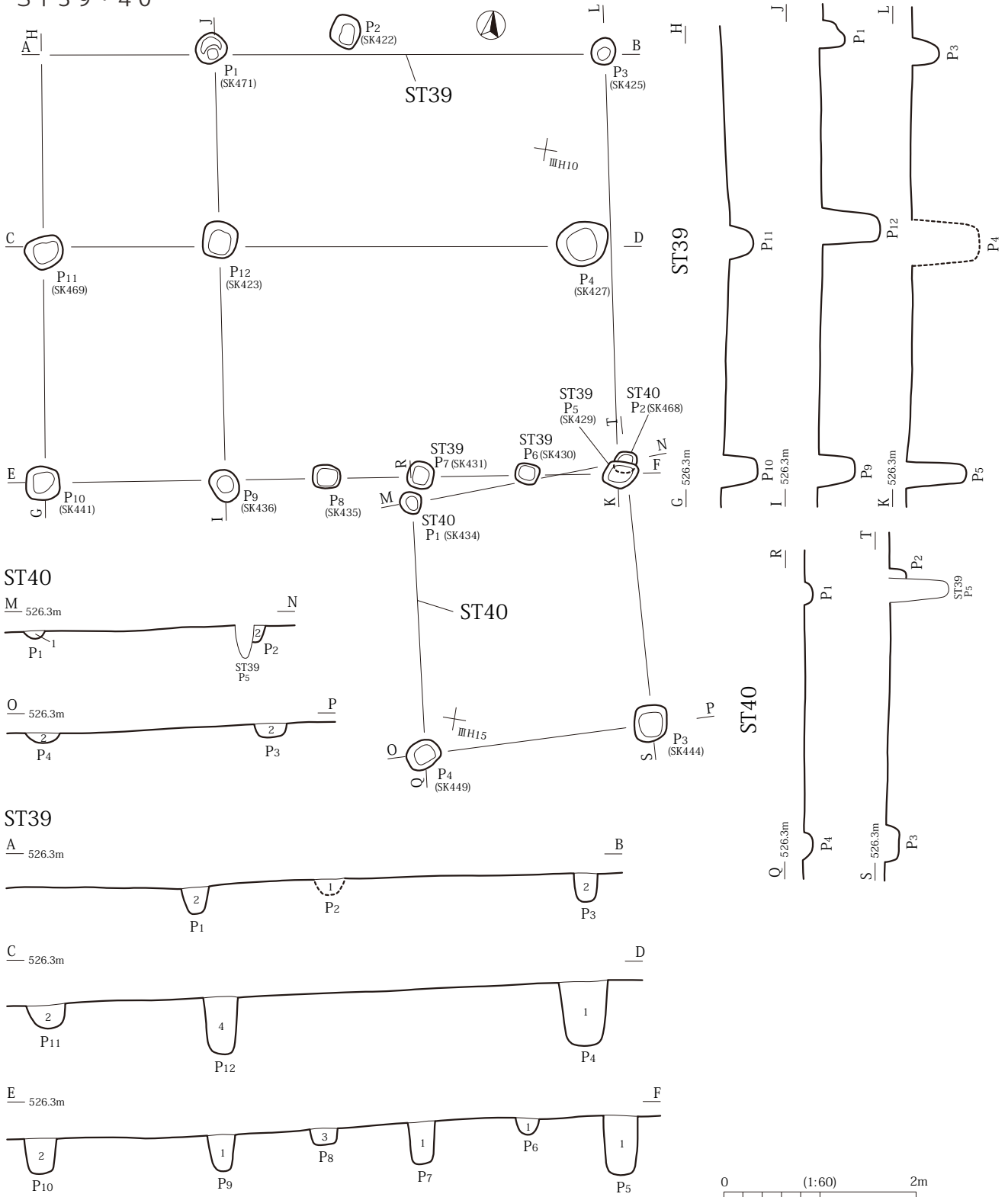
ST41

- 1 黒褐色シルト 10YR:2/2 明黄褐色ロ-M粒を1%程度混入 粘性なし しまりふつう
- 2 黒褐色シルト 10YR:2/2 明黄褐色ロ-M粒を3~5%混入 粘性なし しまりふつう
- 3 黒褐色シルト 10YR:2/2 明黄褐色ロ-M粒・ブ?ロツクを10~30%混入 粘性なし しまりふつう



第97図 38号・41号掘立柱建物跡

ST39・40



ST39

- 1 黒褐色シルト 10YR:2/2 明黄褐色ローム粒を1%程度混入 粘性なし しまりふつつ
- 2 黒褐色シルト 10YR:2/2 明黄褐色ローム粒を3~5%混入 粘性なし しまりふつつ
- 3 黒褐色シルト 10YR:2/2 明黄褐色ローム粒・ブロッカを10~30%混入 粘性なし しまりふつつ
- 4 黒色シルト 10YR:1.7/1 明黄褐色ローム粒を1%程度混入 粘性なし しまりふつつ

ST40

- 1 黒褐色シルト 10YR:2/2 明黄褐色ローム粒を1%程度混入 粘性なし しまりふつつ
- 2 黒褐色シルト 10YR:2/2 明黄褐色ローム粒を3~5%混入 粘性なし しまりふつつ

第98図 39号・40号掘立柱建物跡

第5表 戦国時代 掘立柱建物跡 (ST) 一覧表

STNo	位置		長軸方向	規模			構造				図版No				
	調査区	グリッド		柱間数	桁 (m)	梁 (m)	面積 (㎡) [含底]	柱穴掘方		柱間間隔		底			
		大地区						中地区	掘方平面形	掘方規模 (cm)			桁行 (m)	梁行 (m)	
1	ST01	2	III	S23・24 X3・4	N66°E	6×4	8.81	4.6	40.53	円・方・長方	18～46	1.0～2.47	1.02～2.04	-	84
2	ST02	2	III	S23	N57°E	1×1	4.13	1.65	6.81	円・楕円・長楕円	46～59	3.95～4.13	1.65～1.64	-	85
3	ST03	2	III	S18・19・23・24	N16°W	3×2	4.31	4.31	18.58	円・不整円・方	17～32	1.24～1.78	2.27～4.31	-	85
4	ST04	2	III	S22	N16°W	4×1	5.39	(2.44)	(13.15)	円・楕円・方	20～57	0.85～2.25	2.11	-	86
5	ST05	1	VI	C16・17	N57°E	3×1	4.67	(2.05)	(9.57)	円・方	19～32	1.40～1.69	1.25～1.38	-	86
6	ST06	1	VI	B15 C11	N26°S	3×1	6.34	4.09	25.93	方	27～39	1.86～2.78	4.11	-	87
7	ST07	2	V VI	E5・10 A1・6	N25°W	4×3	5.82	3.23	18.80	円・楕円・方	20～40	1.13～1.67	1.0～1.51	-	88
8	ST08	2	V VI	E10 A6	N26°S	2×2	4.28	3.35	14.34	円・長楕円・方	22～50	2.12～2.16	1.63～1.72	-	87
9	ST09	2	VI	A7・12	N31°W	2×1	(3.44)	(2.37)	(8.15) [15.49]	円・楕円・方・長方	20～40	1.28～1.53	1.37	○	89
10	ST10	2	VI	A7・8・12・13	N20°W	2×1	3.73	3.77	14.06	円・楕円・長方	24～60	1.74～1.98	3.58～3.77	-	89
11	ST11	4	I	X4・5・9・10	N83°E	7×2	7.4	3.68	27.23	円・楕円・方・長方	23～44	0.55～3.3	1.62～2.07	-	90
12	ST13	5	I	S23・24 X3・4	N0°	2×4	6.76	4.17	28.19	円・楕円・方	20～30	1.22～4.42	0.78～1.17	-	92
13	ST14	5	I	S20	N77°E	4×2	6.28	3.84	24.12	円・楕円・方・長方	16～40	0.79～2.84	1.68～2.13	-	93
14	ST15	5	I	S8・9・10・13・14	N75°E	6×3	11.29	4.39	49.56	円・楕円・方	20～40	1.34～4.17	1.19～2.50	-	91
15	ST16	4	III	C13・14・18・19	N86°W	3×1	4.45	2.60	11.57	円・方	22～45	1.27～1.63	2.25～2.60	-	93
16	ST32	4	III	C4	N0°	2×1	4.33	2.59	11.21	円・方	24～36	2.40～1.91	2.43～2.59	-	94
17	ST33	4	III	C4・9	N78°W	1×1	3.01	2.83	8.52	円・方・長方	32～47	2.91～3.01	2.77～2.83	-	94
18	ST34	2	VI	A7・8・12・13	N73°E	1×1	5.61	(3.68)	(20.64)	円・楕円・不整円	37～68	5.61	2.34	-	95
19	ST35	2	III	S17・18・22・23	N55°E	3×1	6.23	3.58	22.30 [28.47]	円・方	20～33	2.53～3.62	3.43～3.58	○	96
20	ST36	2	III	S17・18	N66°E	3×1	3.53	2.18	7.70	円・楕円・方	22～32	0.82～3.53	2.08～2.18	-	96
21	ST37	3	III	S6・11	N76°E	1×1	3.25	1.95	6.34	円・不整円	19～30	3.03～3.25	1.71～1.95	-	95
22	ST38	4	I	X11・12・16・17	N15°E	1×1	3.42	2.58	8.82	円・方・長方	29～51	3.32～3.42	2.44～2.58	-	97
23	ST39	3	III	H4・5・9・10	N80°E	5×2	6.03	4.42	26.65	円・方	24～54	0.98～3.80	1.96～2.45	-	98
24	ST40	3	III	H9・10	N15°W	1×1	2.75	2.38	6.55	円・方	22～38	2.62～2.75	2.25～2.38	-	98
25	ST41	3	III	H8・13	N70°E	2×1	3.84	2.30	8.83	円・方	20～26	1.31～2.05	1.97～2.30	-	97

ST15 (第91図)【5区 I S8・9・10・13・14グリッド】

位置：5区丘陵部のほぼ頂部にあり、周囲は平坦である。重複：なし。検出：VI層上面。構造的特徴：桁行11.29m、梁行4.39mの側柱建物である。P8－P9間および建物南西部分では、削平のため柱穴が確認できなかったが、建物構築時には建物構造上存在したものと思われる。その場合、柱間数は桁行では6間、梁行は3間である。P13～15は棟持柱と考えた。P16～P21については、それぞれ2基一對となって棟の両側にあることから、棟を支える補助柱と考えた。P8も、対となるものは確認されなかったが、同様の性格と思われる。主軸：N75°E、ほぼ東西方向である。面積：49.56㎡。柱穴：円形を呈するものが多く、大きさは20～40cmを測る。柱間距離1.19～4.17m、6基で柱痕が確認された。柱材なし。堆積状況：柱痕が確認された柱穴では、柱痕周囲の埋土にロームがブロック状に多く混入し、人為的に埋められた様子がみられた。遺物出土状況：P21からかわらけと思われる土師質土器小片が出土した。検出面では内耳鍋の破片が出土している。時期：出土遺物が少なく、この遺構だけでの時期決定は難しいが、周囲の溝跡・竪穴状遺構・掘立柱建物跡群との関連から、戦国時代と考えている。

ST35 (第96図 PL5)【2区 III S17・18・22・23グリッド】

位置：2区北側中央、ゆるやかな北斜面にある。重複：同じ戦国時代に比定される井戸跡(SK101)、ST36と位置的に重複する。遺構間の切り合いがないため、前後関係は不明。検出：VI層上面にて検出した。構造的特徴：P1～6が母屋部分、北側のP7～11が底部分を構成したものと考えられる。母屋部分は桁行6.23m、梁行3.58mの3間×1間の側柱建物である。底部分は北側に1mほどはりだしており、柱間は4間である。底部分も含めると梁行は4.57mを測る。母屋北面以外に底がつくられていた様子はみられない。主軸：N55°E。面積：母屋部分で22.30㎡、底部分も入れて28.47㎡。柱穴：3基で柱痕が確認された。柱材なし。堆積状況：柱痕が確認されたP3・P4では、柱痕周囲の埋土にロームがブロック状に多く混入し、人為的に埋められた様子がみられた。P5からは、20cmほどの礫が数個みつかった。配石した様子はないが、他の柱穴にはみられず、人為的に入れられた可能性がある。遺物出土状況：P1・P6よりかわらけ片、P8より土師質小破片が出土している。時期：遺物から戦国時代に比定される。井戸跡との関連：重複する井戸跡(SK101)とは、遺構間の切り合いはなく前後関係は不明だが、井戸を覆う上屋建物の可能性がある。ただ、一般的にそのような施設がつくられることは少なかったとされ(鐘方正樹2003)、断定はできない。

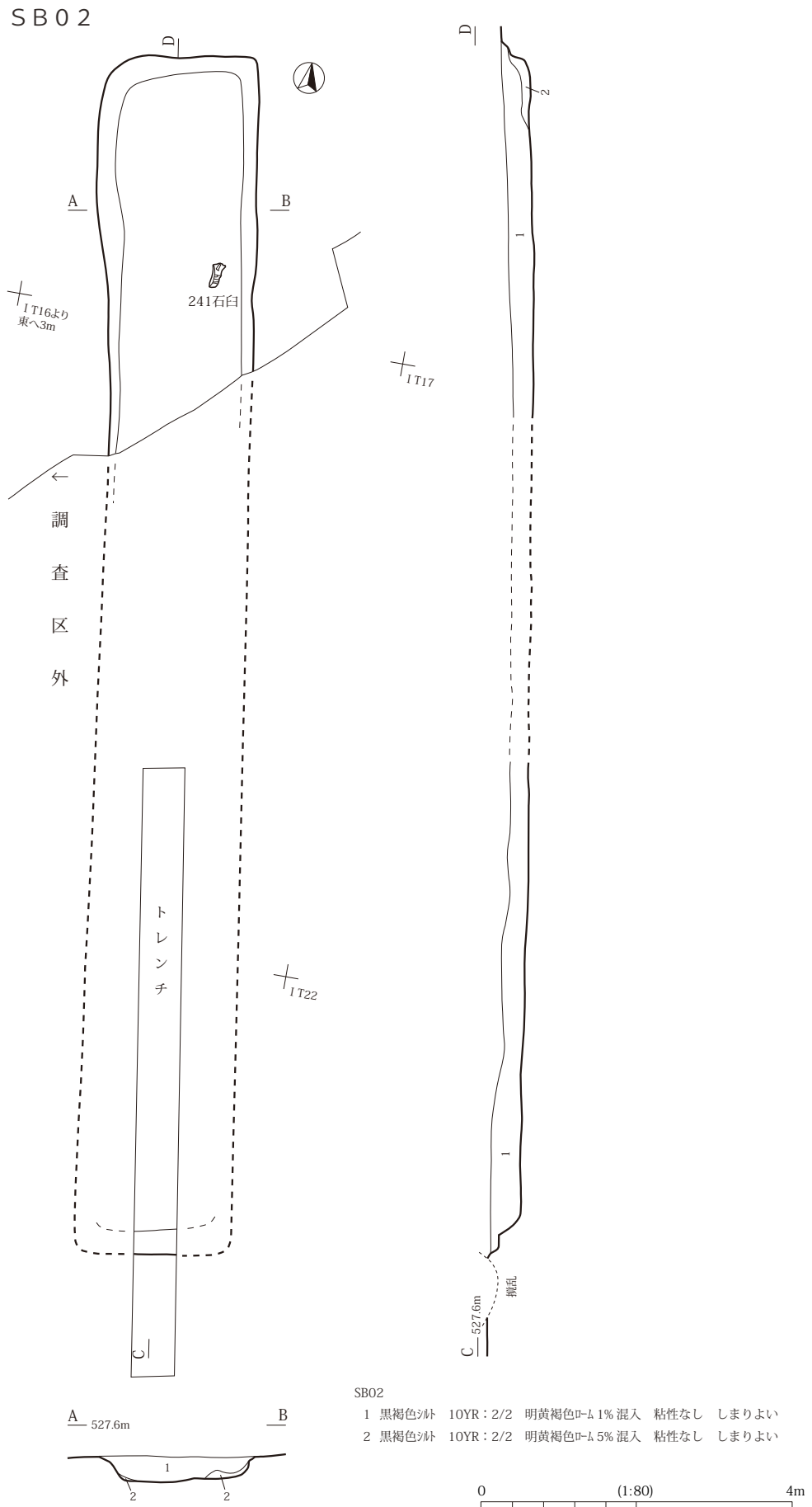
規模や軸などからみられる建物跡の傾向や、分布などから考えられる戦国時代集落の様相については、本章小結に記述した。

ロ 竪穴状遺構

戦国時代の竪穴状遺構は、1基確認された。

SB02 (第99・109図 PL8・24)【5区 III T11・16・21グリッド】

位置：5区南部東寄り、丘陵部の頂部にあり、周囲は平坦である。重複：なし。検出：Ⅲa層(黒色土)下部～VI層上面で検出。VI層近くの、地山がやや黄色がかったところで、長方形となるプランが東側調査区外に続く形で検出された。遺構の規模を確認するため、調査区に隣接する地権者の了解を得て、人力によるトレンチを入れた。その結果、調査区内での確認部分と同レベルの床面を確認。さらに調査区境から南約10mの地点で、南壁の立ち上がりを確認、遺構の規模が判明した。規模・形状：南北15.34m、東西2.04m



第99図 2号竪穴状遺構

の長方形を呈する。床面積は、約 23 m²と推定される。主軸：N 10° W、ほぼ南北方向である。床面・壁：床面は平坦である。壁は斜めに立ち上がり、断面は逆台形を呈する。その他の施設：なし。床面に炉跡や焼土、ピットはみられない。周囲にも関連すると思われるピットはみられない。堆積状況：2層に分層された。ともに黒褐色シルト主体で、2層にやや明黄褐色ロームが多く混入している。ブロック状の混入はみられず、人為的に埋め戻した様子はない。遺物出土状況：床面近くから石臼（上臼・241）が出土した。また、1層中から、底以外はほぼ完形の内耳鍋が、小破片で散乱する形でみつかった（162）。時期：遺物から戦国時代（16世紀前半頃）に比定される。性格：使用時には上屋がかかっていたものと思われる（宮本氏指導）。ただ、簡素なつくりであれば垂木痕なども浅く、削平の激しい本遺跡などでは、残らなかったと思われる。炉跡がないことや幅 2m ほどしかないことを考えれば、住居として使った可能性は低い。ただ、内耳鍋や石臼が出土したことから、生活に伴う作業場といった性格が考えられるが、決定づける遺物・特徴がみられず、断定できない。

ハ 井戸跡

本遺跡の戦国時代集落において、特徴的な遺構が井戸跡である。本遺跡周辺は水利の便が悪く、現在でも至るところに溜め池や井戸がみられる。戦国時代においてもその状況は同様だったようで、27基の井戸跡が確認された。このうち3区最北部の谷状部分でみつかった6基は、水溜めを目的にしたと想定される大型土坑である。これを除いた21基は井戸と判断した。石組みは1基もなくすべて素掘りである。分布は、1区4基、2区10基、3区2基、4区3基、5区2基と調査区全体にわたっている。

ほとんどの井戸跡は、掘立柱建物跡や柱穴跡とともにみつかったが、5区最北部でみつかったSK605とSK613（第101図 P L 7）については、周囲に建物跡が全くみつからず、井戸底部まで掘っても水の出る様子がみられなかった。集落域の拡大にあたって、井戸を先行して掘削し、水のない所には建物を建てなかったとも考えられる。

遺物では、数多くの木製品が出土した。空気に触れないことで腐植せず現在まで残っていたものである。鍬、そり、臼など生活用具が多い。詳細は後述の遺物の項にて記述する。

以下に特徴的な井戸跡5基について記述する。SK20は鍬、SK101は臼など貴重な木製品が出土した。SK544・593はともに木製品が出土したほか、2基は切り合っており掘り替えが考えられる。SK1400は溜め池的使用が想定される遺構である。

記述した以外の井戸跡については、位置・規模・形状・遺物などを記載した遺構一覧表を作成し掲載した（第6表）。また、個別遺構図についてはすべての井戸跡について掲載してある（第100図～第103図）。

第6表-1 戦国時代 井戸跡一覧表

() は残存値・推定値を示す

遺構番号	調査区	位置		規模						平面形		主な出土遺物	性格	備考	図版No.
		グリッド		検出面		底面		深さ(m)	底面標高(m)	検出面	底面				
		大々地区	中地区	長軸(m)	短軸(m)	長軸(m)	短軸(m)								
1	SK14	2	Ⅲ Y25	1.67	1.50	0.80	0.77	3.05	531.92	円	方		井戸跡		100
2	SK20	1	Ⅵ B8	1.70	1.30	0.78	0.62	1.25	535.68	楕円	楕円	内耳、かわらけ、手馬鍬、石臼、茶臼、砥石	井戸跡	埋土全体に人頭大礫多数混入。詳細記述。	100
3	SK101	2	Ⅲ S22・23	2.95	2.70	0.90	0.73	3.03	529.42	円	長方	内耳、かわらけ、青磁、木臼、石臼、茶臼	井戸跡	埋土上層に拳～人頭大礫多数混入。詳細記述。	100
4	SK179	1	Ⅵ C16	1.26	1.12	0.54	0.48	1.34	536.10	方	方		井戸跡	西壁際に長さ 60 cm の礫 1 個	100
5	SK184	2	Ⅵ A3・8	1.76	1.50	1.09	1.02	0.59	535.24	円	楕円	内耳、羽口、	井戸跡		100
6	SK185	2	Ⅵ A8	0.92	0.92	0.43	0.42	1.32	534.47	方	方	内耳、杭、石鉢、砥石	井戸跡	埋土全体に人頭大礫十数個混入。	100
7	SK186	2	Ⅵ A8	0.79	0.71	0.46	0.44	1.09	534.88	方	方		井戸跡	海土全体に人頭大礫数個混入。	100
8	SK188	2	Ⅵ A9	1.83	(1.70)	1.10	0.92	1.54	534.31	円	方	内耳、石鉢、多孔石	井戸跡	西壁際に径 60 cm の礫 1 個	100
9	SK264	2	Ⅵ A7	1.46	1.42	0.90	0.73	2.04	533.77	方	長方		井戸跡	埋土上層に人頭大礫十数個混入。	100
10	SK362	2	Ⅵ A7	0.98	0.85	0.79	0.68	2.20	533.80	方	方	石臼	井戸跡	埋土上層に人頭大礫数個混入。	101

第6表-2 戦国時代 井戸跡一覧表

()は残存値・推定値を示す

遺構番号	調査区	位置		規模						平面形		主な出土遺物	性格	備考	図版No.	
		大々地区	中地区	検出面		底面		深さ(m)	底面標高(m)	検出面	底面					
				長軸(m)	短軸(m)	長軸(m)	短軸(m)									
11	SK365	2	VI	A7・12	2.62	2.15	0.82	0.80	2.52	534.18	不整形	方	内耳、かわらけ、曲物底板、石臼、石鉢	井戸跡	埋土上層に人頭大礫数個混入。	100
12	SK372	2	VI	A6	1.90	1.85	1.07	0.91	2.93	533.38	円	長方	内耳、かわらけ、石臼、茶臼、砥石	井戸跡	現代の集石上部にあり。埋土中にも人頭大礫十数個混入。	101
13	SK513	3	III	R10	2.04	1.95	0.96	0.71	3.11	526.99	円	長方	内耳、曲物底板	井戸跡		101
14	SK537	3	III	R5	1.64	1.63	1.02	0.81	3.10	525.65	円	長方	内耳	井戸跡		101
15	SK544	1	VI	C21	3.75	3.68	0.91	0.80	2.28	536.32	円	方	内耳、漆椀、そり、石臼等詳細記述。	井戸跡	埋土上層に拳〜人頭大礫多数混入。詳細記述。	101
16	SK593	1	VI	C16・21	2.05	1.90	1.12	0.91	2.28	536.25	円	長方	曲物	井戸跡		101
17	SK605	5	II	K6	1.53	1.47	0.71	0.69	2.12	524.38	円	方	かわらけ	井戸跡	底部にブロック状堆積。出水の様子みられず。	101
18	SK613	5	I	O14・19	1.71	1.50	1.01	0.79	2.56	523.95	円	長方	内耳、かわらけ、茶臼、石鉢	井戸跡	底部近くにブロック状混合層。出水の様子みられず。	101
19	SK816	4	I	X9	1.36	0.92	1.03	0.68	4.37	522.84	長方	長方	内耳、珠洲、凹石	井戸跡		102
20	SK828	4	I	X9・14	2.05	1.97	0.73	0.72	3.07	524.23	円	方	内耳	井戸跡	埋土上層に人頭大礫数個混入。	102
21	SK982	4	I	W24	1.90	1.79	0.71	0.67	4.61	520.90	円	方	かわらけ	井戸跡	埋土上層に人頭大礫数個混入。	102
22	SK1400	3	III	H13	2.48	2.26	1.58	1.35	1.86	523.91	円	円	かわらけ	水溜め	底部凹凸あり。	102
23	SK1475	3	III	H12	3.36	(1.64)	(0.82)	0.79	2.00	523.85	円	不整形	かわらけ、石鉢	水溜め	底部凹凸あり。	102
24	SK1476	3	III	H12・13	1.56	1.39	0.91	0.76	0.95	524.74	円	円		水溜め	浅い。中央部ブロック状堆積。	102
25	SK1477	3	III	H7・12	2.98	(2.12)	1.38	1.22	1.20	524.37	不整形	不整形	かわらけ	水溜め	浅い。	102
26	SK1478	3	III	H7	3.05	(1.17)	0.63	(0.50)	0.93	524.49	楕円	不整形		水溜め	浅い。底部凹凸あり。	103
27	SK1480	3	III	H2	2.50	(0.70)	0.64	(0.16)	1.25	523.95	楕円	不整形	かわらけ	水溜め	浅い。底部凹凸あり。	103

SK20 (第100・109図 PL6・24)【1区 VI B8グリッド】

位置：1区北側東寄り、ゆるやかな北斜面にある。重複：同じ戦国時代に比定される溝跡SD02に切られる。検出：VI層上面にて検出した。規模・形状：検出面では、長軸1.70m、短軸1.30mの楕円形を呈する。北東部分にみられる楕円形の落ち込みは、井戸内部から広がる礫が入り込んでおり、廃棄時などに壊された部分と考えられる。底部は直径1.1mの円形で、平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、上部がやや開く断面形を呈する。深度：検出面から1.25m。この付近は、近年まで続いていた水田耕作に伴い、棚田状に造成されている。このため、上部はかなり削平されていると思われる。堆積状況：3層に分層された。1層は黒褐色シルトで、多量の人頭大礫が含まれていた。2・3層はいずれも粘性が強く、これらの層にも人頭大の礫がみられた。ブロック状の混入はみられず、一気に埋められたような様子はみえない。遺物出土状況：埋土中からは内耳鍋(165～169)の破片が多く出土した。埋土内の礫に混じって、石臼(240・250・251)や茶臼(260・268)、砥石(279・280)がみられた。また3層内、底部から20cmほど浮いた状態で、木製農具の手馬鍬(304)の頭部が完形でみつかった。時期：遺物から戦国時代(16世紀前半頃)に比定される。重複しているSD02とも遺物の様相は似ており、大きな時間差はないものと考えられる。

SK101 (第100・109図 PL6・24)【2区 III S22・23グリッド】

位置：2区北側中央、ゆるやかな北斜面にある。重複：縄文時代の陥し穴SK162を切る。検出：VI層上面にて検出。規模・形状：検出面では、長軸2.95m、短軸2.70mのほぼ円形を呈する。底部は一辺0.8mの方形で、平坦である。上半分が漏斗状に開く断面形を呈する。深度：検出面から3.03m。堆積状況：7層に分層された。2層下部から3層、4層上部にかけて、多量の人頭大礫が含まれていた。礫は中央部に集まっていた。井戸跡が4層上部まで埋まり、中央部が凹んだ状態の時に投げ込まれた礫とみられる。礫が大量に入っていた3層は、埋土内にロームの大きなブロック状混入があり、一気に埋めたものと思われる。4層～7層は、ブロック状の混入はみられず、一気に埋められた様子はみられない。5層～7層は非常に粘性が強い。遺物出土状況：埋土内の礫に混じって、石臼(244・252)や茶臼(261)がみられた。

土器類は、内耳鍋（170）、かわらけ、青磁碗などの破片が埋土中から出土したが、量は少ない。また検出面から2.5m下、5層中から木製臼（307）が、横位の状態でみつかった。時期：遺物から戦国時代（16世紀前半頃）に比定される。

SK544（第101・110図 PL7・24）【1区 VI C21グリッド】

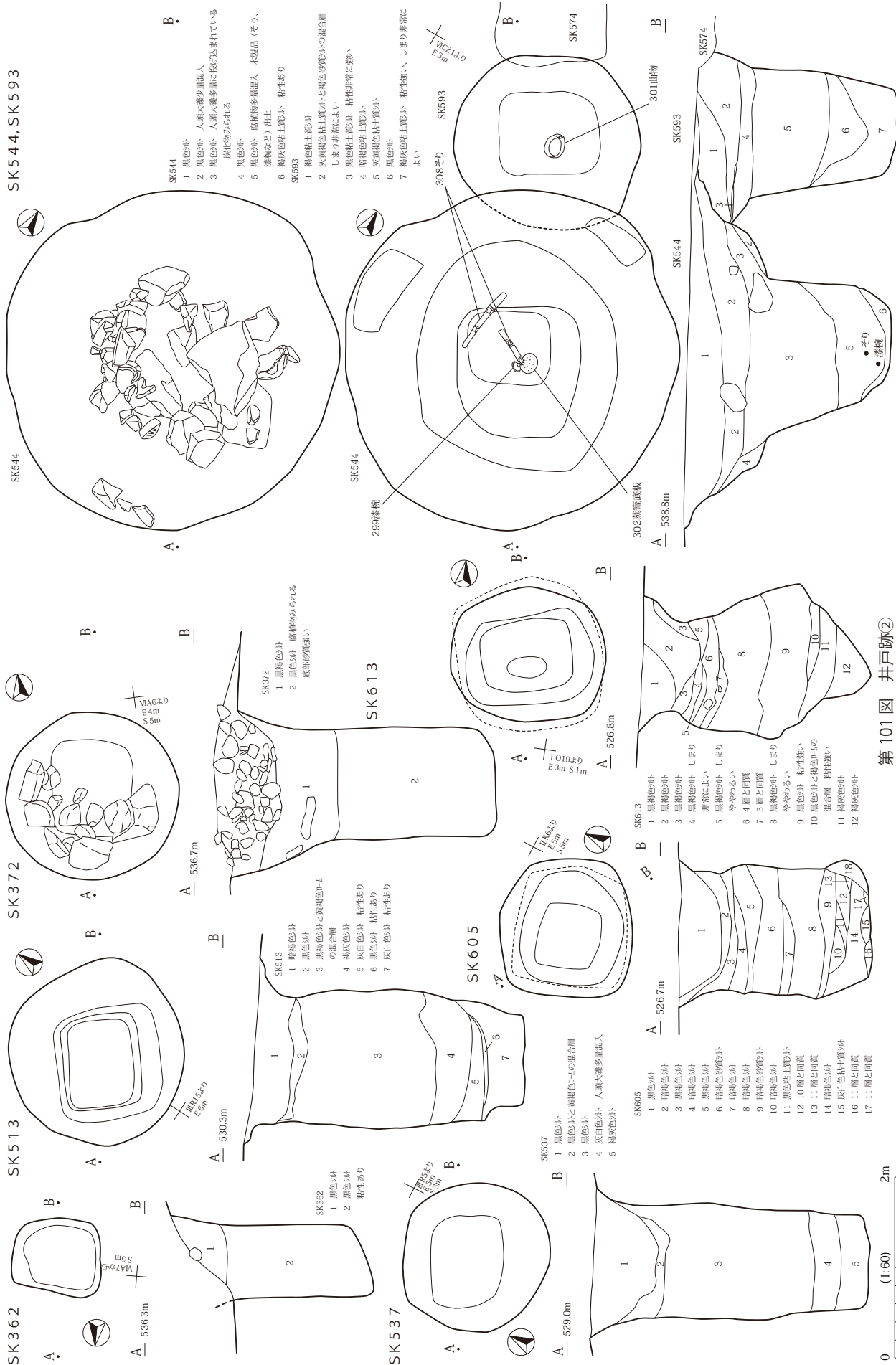
位置：1区南側中央、ゆるやかな北斜面にある。重複：井戸跡SK593を切る。検出：VI層上面。この付近は、近年まで続いていた水田耕作に伴い、柵田状に造成されている。このため、上部はかなり削平されていると思われる。規模・形状：検出面では、長軸3.75m、短軸3.68mのほぼ円形を呈する。底部は0.91m×0.80mの方形で、平坦である。上半分が漏斗状に開く断面形を呈する。深度：検出面から2.28m。堆積状況：6層に分層された。3層の黒色シルトには、人頭大の礫が多量に含まれており、中には1mを越す巨石もみられた。5層には腐植物が多く含まれていた。いずれの層もブロック状の混入はみられず、一気に埋められたような様子はみえない。遺物出土状況：埋土中からはかわらけ（175～178）、白磁皿（179）、内耳鍋（180～184）の破片が出土した。出土礫に混じって、石臼（259）や石鉢（276）、砥石（282）もみられた。また5層内、底部から10～25cmほど浮いた状態で、漆椀（308）、蒸籠底板（302）、そり一対（308）がみつかった。時期：遺物から戦国時代（16世紀前半頃）に比定される。

SK593（第101・120図 PL7）【1区 VI C16・21グリッド】

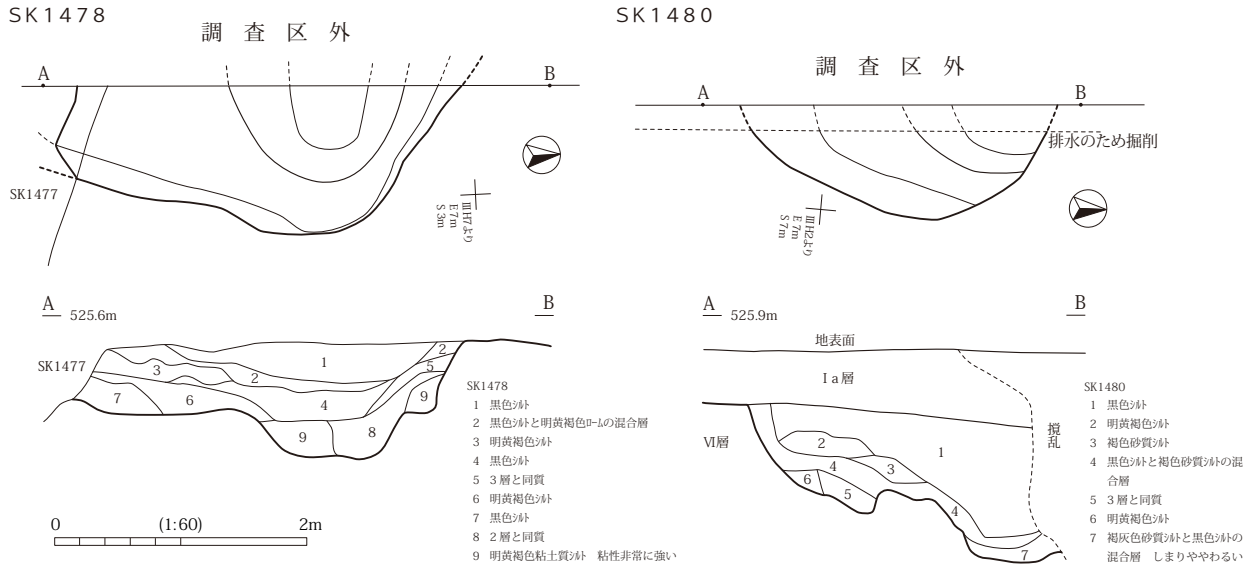
位置・検出：SK544と同じ。重複：同じ戦国時代の井戸跡SK544、竪穴状遺構SK574に切られている。規模・形状：検出面では、長軸2.05m、短軸1.90mのほぼ円形を呈する。底部1.12m×0.91mの方形で、ほぼ平坦である。壁は急な角度で落ちており、上部がやや開く断面形である。深度：検出面から2.28m。底面標高はSK544と7cmしか変わらない。堆積状況：7層に分層された。1～5層は、ブロック状のローム主体層で、一気に埋めたような様子がみられる。礫は全くない。6層は黒色シルトで砂質が強い。7層は非常に粘性が強く、他の井戸跡の底部でもみられた埋土である。すぐ南側には、底部形状や底部標高をほぼ同じくするSK544がある。本遺構が一気に埋められているような状況から、SK544掘削にあたり、以前に使用していた本遺構を埋めたのではないかと考えている。遺物出土状況：井戸中央部の6層内、底部から45cmほど浮いた状態で、ほぼ完形の曲物（301）が正位でみつかった。他に土器・石製品など遺物は、1点も出土しなかった。時期：遺物は曲物のみで、この遺構だけでの時期決定は難しいが、隣接するSK544との関連から、戦国時代と考えられる。

SK1475（第102図 PL8）【3区 III H12グリッド】

位置：3区北側西寄り、谷状地形の底部にある。重複：なし。検出：VI層上面。規模・形状：西半分は調査区外である。直径3.36mのほぼ円形を呈する。底部は凹凸があり、特に北側底部には直径0.7mほどの窪みがある。深度：最も深い北側の窪みで検出面から2.0m。堆積状況：5層に分層された。1層は黒色シルトでブロック状の混入はみられず、一気に埋められたような様子はみえない。2～4層は、VI層ロームの混入がみられ、崩れた壁などと思われる。5層は礫主体層である。遺物出土状況：埋土中から、かわらけ、石鉢、平安時代土器の破片が出土した。時期：遺物から戦国時代と思われる。性格：断面形が他の井戸跡と明らかに違い、またこの付近は谷状地形で、地下水位が高く、あまり掘らなくても出水することから、水確保のために掘られた水溜めと考えた。5層中の礫（PL8）は、水を汲む際砂が巻き上がらないように入れられた浄水施設の可能性がある。



第101図 井戸跡②



第103図 井戸跡④

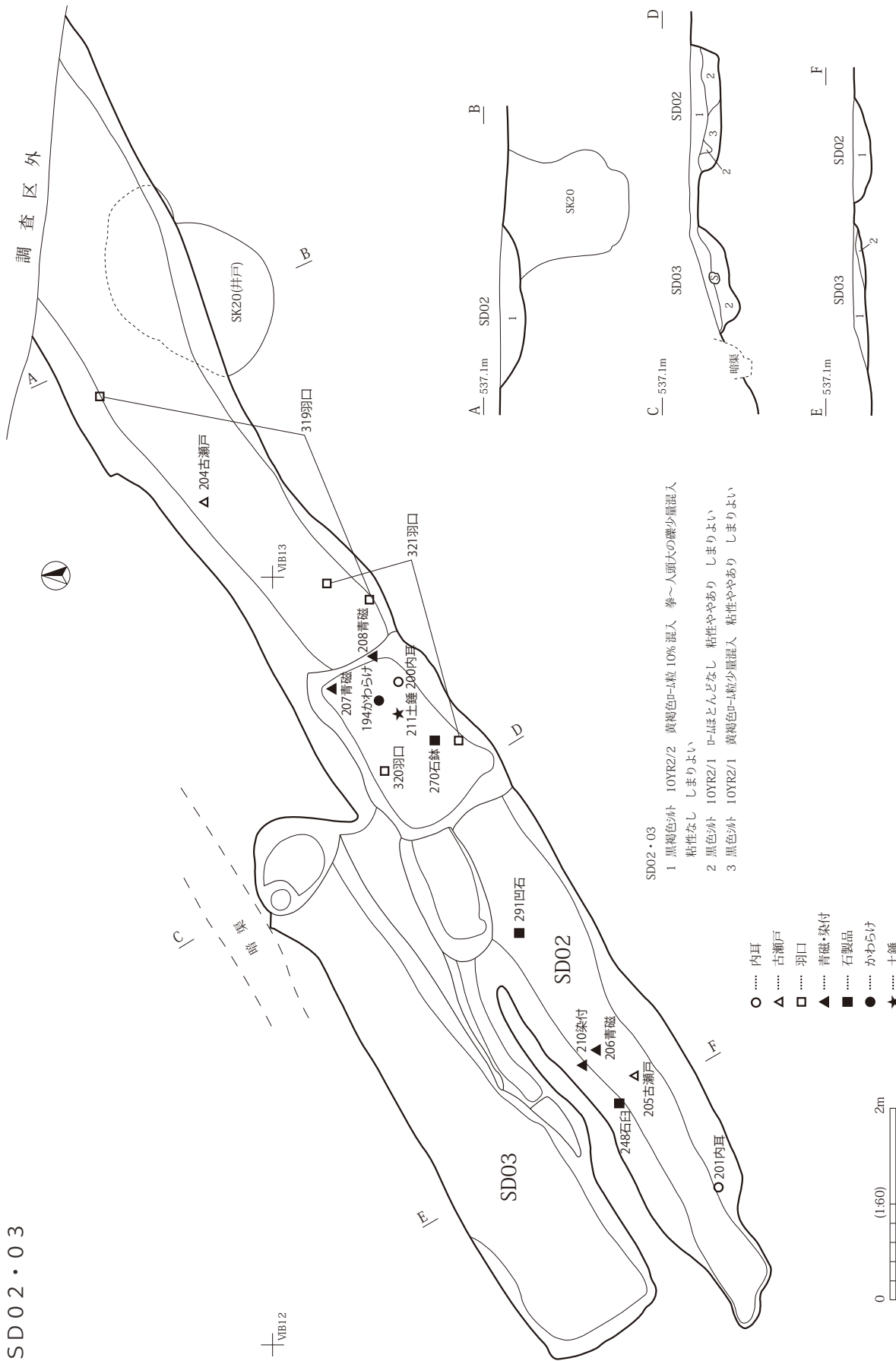
二 溝 跡

戦国時代の溝跡と認定したのは、9条である。分布は、1区に2条、2区に4条、3区に1条、4区に1条、5区に1条と戦国時代遺構の分布にあわせて調査区全体に広がっている。(第79図～第83図)

9条のうち、5条(SD08～11、13)は、屋敷地内における建物周囲の雨水排水溝などと思われる小さな溝である。SD02、03の2条は、遺構内から石製品や国内外の中世陶磁器、羽口・鍛冶滓など鍛冶関連遺物といった多種多様な遺物がみつき、近くに作業場などの存在を想定させる遺構である。SD21、23の2条は、建物軸と同じくほぼ東西方向に長く続く溝で、集落内における区画溝と想定されるものである。

以下にSD02、03、21、23の溝跡4条について記述する。記述した以外の溝跡については、位置・規模・遺物などを記載した遺構一覧表を作成し付属CDに収録した。

SD02・03 (第104・111・112図 PL15・25・26) 【1区 IV B7・8・11・12・13グリッド】
 位置：1区南側、ゆるやかな北斜面にある。重複：戦国時代井戸跡SK20を切る。検出：VI層上面で検出。この付近は、近年まで続いていた水田耕作に伴い棚田状に造成されており、上部はかなり削平されている。検出段階では2条としたが、調査途上で、二つの溝に埋土・出土遺物などの違いはみられず、同時代で同性格をもつ一体の遺構と判断した。規模・形状：SD02とした部分は、北側調査区外まで続き、最大幅1.85mで、北東―南西方向に、傾斜に直交してつくられている。調査区内で長さ15.45m確認された。深さは最深で34cmである。底部には、2.0m×1.3m、1.4m×0.8m二つの方形の落ち込みがみられる。SD03とした部分は、長さ6.45m最大幅1.5mで、SD02に平行してつくられている。堆積状況：3層に分層された。1層は黒褐色シルトで、SD02・03全体を覆っている。2・3層は方形の落ち込み部分に堆積している。やや粘質である。遺物出土状況：他の遺構に比べ遺物量は多く、内耳鍋(200・201)、かわらけ(194)、古瀬戸(205)、青磁(206～208)、青花(210)の土器陶磁器類、石臼(248)など石製品、羽口(319～321)、鍛冶滓の鍛冶関連遺物など種類も多彩である。遺物の分布は、方形の落ち込み部分がやや多いが、埋土全体でみられた(第104図)。時期：遺物から戦国時代(16世紀前半頃)に比定される。性格：土器類はすべて破片で完形品はない。また、総計約10kgの鍛冶滓(PL33)や割れた羽口(319～321)がみつかったが、炉跡など鍛冶関連遺構は確認されなかった。これらのことから、集落内作業場近くの廃棄場的なものと考えている。なお、鍛冶関連遺物の詳細については、本節遺物の項で後述する。



第104図 2号・3号溝跡

SD21 (第105・112図 PL15・26)【5区 I S18～T7グリッド】

位置：5区南側西寄りに位置し、丘陵部の頂部からゆるやかな北西斜面にかけてある。重複：縄文時代の陥し穴3基(SK708、779、804)を切り、時期不明の小ピット4基に切られる。検出：VI層上面にて検出。規模・形状：東側調査区外まで続く。ほぼ東西方向に、傾斜に沿って直線的につくられている。調査区内で41.5m確認されている。西端で北に直角に屈曲し、そこで途切れている。構築時は、さらに続いていたと思われるが、削平され残っていない。深さは最大30cmを測る。幅は検出面で1.2～1.5m、底部で0.7～1.0mを測る。底部は平坦で、断面は逆台形を呈する。堆積状況：3層に分層された。1層は遺構全体を覆っている層で、周辺の掘立柱建物跡などと同様の埋土である。2・3層はVI層ロームを多く混入し、崩れた壁とみられる。遺物出土状況：量は少ないが、埋土中から内耳鍋(215)や珠洲焼甕(216)などの土器片が出土した。また、底部近くから石臼(243)や茶臼(269)の大きな破片もみつまっている。時期：遺物から戦国時代(16世紀前半頃)に比定される。性格：常時水が流れる場所ではなく、降雨時における排水などの役割をもつ溝と思われる。周囲の建物軸とほぼ同じ方向で、直線的につくられていることから、集落内において屋敷地の区画的性格をもたされたのではないかと考えている。建物配置(第105図)で見ると、溝の南側に広がる建物群(ST13、14、大型竪穴状遺構SB02)と、北側の大型建物ST15を区画しているようにも思われる。その場合、本遺跡における戦国時代集落内で最北・最大の建物であるST15が、特別な意味をもつ建物だった可能性も考えられる。

SD23 (第80図 戦国時代遺構全体図②参照)【4区 III C4・5、D1グリッド】

位置：4区南側に位置し、ゆるやかな南西斜面にある。重複：平安時代竪穴住居跡SB05を切る。同じ戦国時代としたST33と位置的に重複するが、埋土の切り合いがなく、前後関係は不明。検出：IV層上面で検出。規模・形状：幅最大0.68m、北東から南西方向に、傾斜にそってほぼ直線的に流れている。西側調査区外に続いており、削平のため途中途切れているが、調査区内で長さ16.3m確認された。深さは最深で13cmである。堆積状況：2層に分層された。砂や小礫などみられず、水の常時流れていた様子はない。遺物出土状況：内耳鍋、青磁碗のほか、灰釉陶器など平安土器も出土した。いずれも小破片である。時期：遺物から戦国時代(16世紀前半頃)に比定される。性格：SD21と同じく、ほぼ東西方向につくられた溝で、直線的に続いていることから、集落内における区画溝である可能性が考えられる。

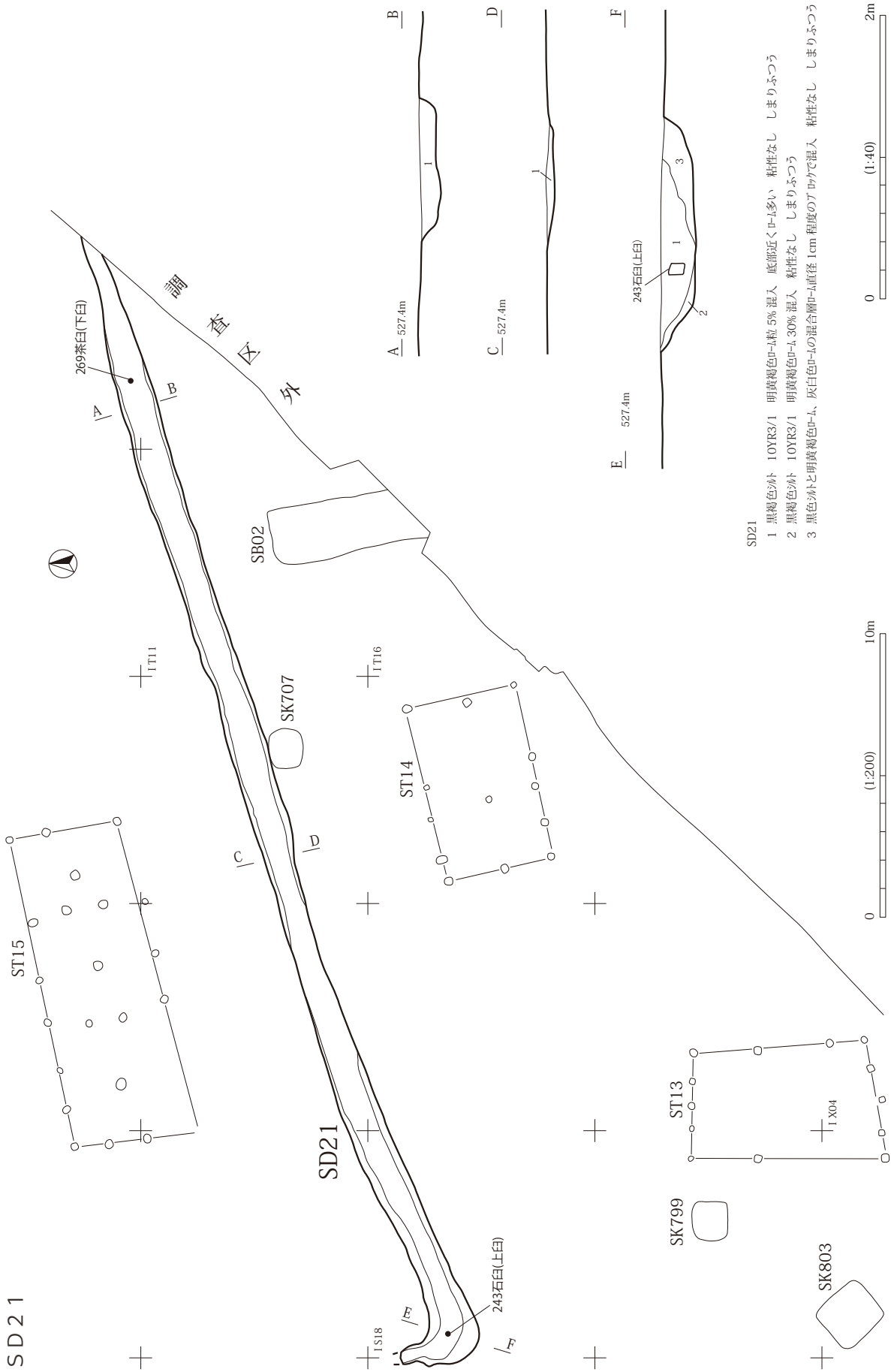
ホ 土 坑

本遺跡では調査段階で、1640基に土坑として遺構番号をつけた。そのうち、調査～整理段階で掘立柱建物跡の柱穴としたもの290基を除いた1350基を、縄文時代から近世までの土坑とした。

このうち時期決定できた土坑は、縄文時代陥し穴133基、平安時代103基、戦国時代井戸跡27基・土坑57基、後述する近世土坑2基の合計322基である。

その他1028基の土坑に関しては、出土土器が全くないこと、検出面が1面で掘りこみ面による区分ができないことから時期を推定する根拠がなく、時期決定は困難であった。埋土による区分も試みた。縄文時代遺構は黒色が強く区分できたが、それ以外の遺構は、色調に大きな違いがみられなかったため、ロームの混入度合などを根拠として区分した。しかし、出土遺物との間に相関関係はみられなかった。遺物が出土し、時代決定できた遺構間においても、明確な埋土の違いは見出せなかった。埋土の違いは、遺構の掘られている地山の状況が大きく関与しているようである。

戦国時代の土坑と判断したのは57基である。内訳は、建物としては組めなかったが柱穴と思われるものが40基、意図をもって掘られたと思われるものが13基で、その他4基は自然の落ち込みの可能性も



第 105 図 21 号溝跡

ありうる。時期決定の根拠は、出土遺物が戦国時代のみかそれ以前に限られること、または近くに関連が考えられる建物跡などの遺構があることである。

土坑の中に一辺 1m を越す大型の方形土坑があり、中には 2m を越すものもみられた。これらは、掘立柱建物跡や井戸跡などが集中する 2 区・4 区・5 区でみられた。性格としては、作業場や「むろ」など貯蔵施設の可能性が考えられる（第 107 図 P L 8・9）。中世の集落跡・城館跡などでは、掘立柱建物跡とともに、方形に地面を掘り込む堅穴が検出される。東北地方などでは、堅穴建物跡として扱われ、「堅穴遺構」、「方形土坑」などとも呼称されている（大野亨 2001）。ただ本遺跡では、周囲に柱穴がめぐるなど建物としての判断が困難であったため、土坑として扱った。

出土遺物からみると、全土坑 1350 基中、遺物出土した土坑は 230 基、わずか 17% にすぎない。このうち、戦国時代遺物が出土し、かつ近世以降の遺物がないものが 79 基あり、最新出土遺物を時期決定指標とした場合、計算上は遺物出土土坑の 34%、1/3 が戦国時代となる。また遺物出土土坑 230 基から、縄文時代陥し穴や平安時代土坑、戦国時代井戸跡など時期決定できたものを除く、主に柱穴状の土坑 67 基だけで見ると、戦国時代遺物を最新とする土坑は 52 基で、78% を占める。

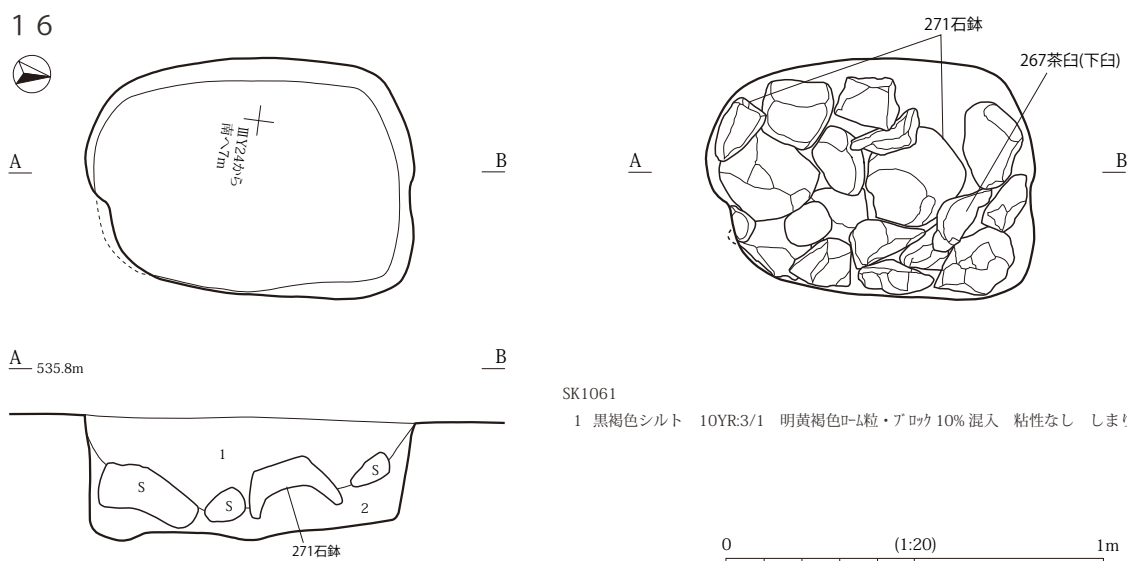
遺物出土がなく時期決定困難な土坑の多くは柱穴状で、遺物が出土し時期特定できた戦国時代土坑と、形状など類似したものが多い。またそれら土坑は、井戸跡など戦国時代遺構の集中する地区で数多くみられる。これらのことから、時期決定困難な土坑の多くは戦国時代のものと考えているが、断定はできず、本報告書においては、時期不明として扱った。

以下に特徴的な土坑 2 基について記述する。SK16 は、戦国時代遺構が集中する地区にあり、石製品を含む礫が、土坑底部一面に敷きつめるように出土した特異な土坑である。SK361 は、大型方形土坑の一つである。これ以外の戦国土坑の詳細については、位置・規模・形状・遺物などを記載した土坑一覧表を作成し、本書付録 CD に収録した。「時期」の欄に推定時期を記載してある。大型土坑は「遺構の性格」の欄に記載してある。

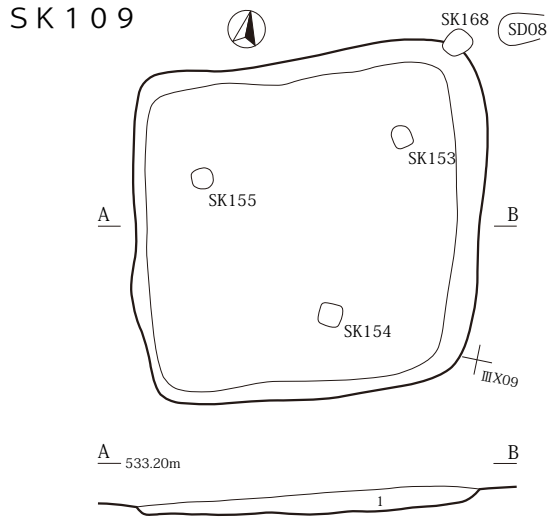
SK16 (第 106 図 P L 16) 【2 区 III Y 23・24 グリッド】

位置：2 区中央部に位置し、ゆるやかな北斜面にある。重複：なし。検出：VI 層上面にて検出。上部は近年までの水田耕作のため、かなり削平されていた。構造的特徴：長軸 86cm 短軸 63cm の隅丸方形で、深さは 38cm を測る。底部一面に礫がみられる。礫は 20 個ほどで、礫同士がほぼ重なることなく土坑底部

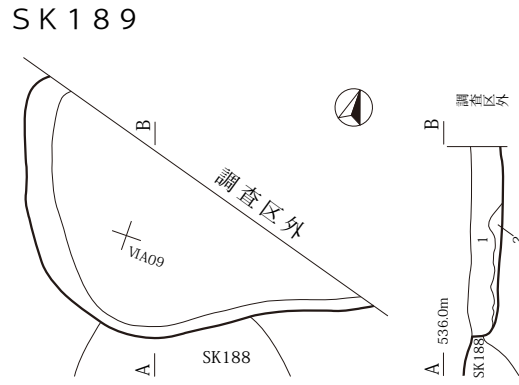
SK16



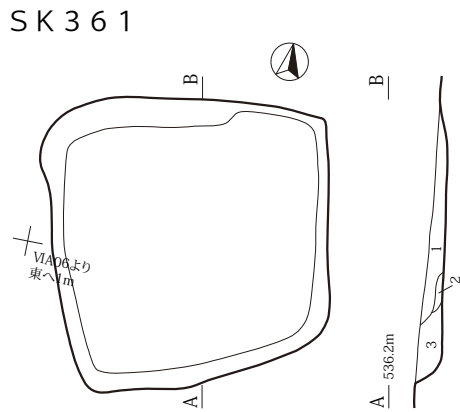
第 106 図 16 号土坑



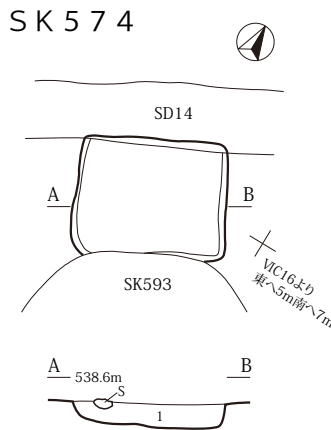
SK109
1 黒色シルト 10YR:2/1 黄褐色ローム1%混入 粘性なし しまりふつう



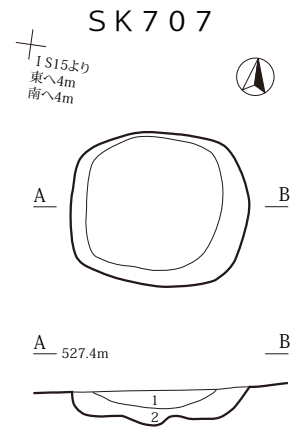
SK189
1 黒色シルト 10YR:2/1 黄褐色ローム粒10~20%混入 炭、焼土混入 粘性なし しまりふつう
2 黒色シルト 10YR:2/1 黄褐色ローム粒5%混入 粘性なし しまりふつう



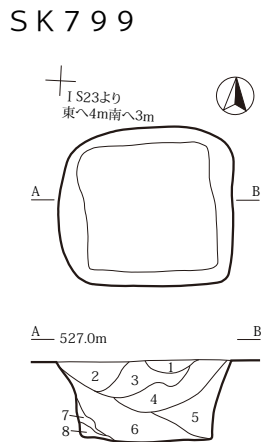
SK361
1 黒色シルト 10YR:1.7/1 黄褐色ローム粒10%混入 粘性なし しまりふつう
2 黒色シルト 10YR:1.7/1 黄褐色ローム粒5%混入 粘性なし しまりふつう
3 黒色シルトと黄褐色ロームの混合層粘性なし しまりややわるい



SK574
1 黒色シルト 10YR:2/1 黄褐色ローム粒5%混入 粘性なし しまりふつう

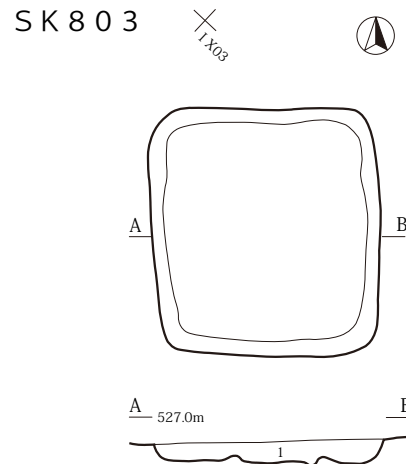


SK707
1 黒褐色シルト 10YR:3/1 黄褐色ローム粒・ブロック10%混入 粘性なし しまりよい
2 黒褐色シルト 10YR:3/1 黄褐色ローム粒3%混入 粘性なし しまりよい



SK799
1 黒褐色シルト 10YR:3/1 ロームほとんどなし 粘性なし しまりよい
2 黒褐色シルト 10YR:3/1 明黄褐色ローム3%混入 粘性なし しまりわるい
3 黒褐色シルトと明黄褐色ロームの混合層粘性なし しまりよい
4 黒褐色シルト 10YR:3/1 1層と同質
5 黒色シルト 10YR:2/1 ロームほとんどなし 粘性なし しまりややわるい
6 黒褐色シルト 10YR:3/1 2層と同質 粘性なし しまりややわるい
7 黒褐色シルトと明黄褐色ロームの混合層3層と同質
8 黒褐色シルト 10YR:3/1 2層と同質

0 (1:60) 2m



SK803
1 黒褐色シルト 10YR:3/1 明黄褐色ローム1%混入 粘性なし しまりふつう

第107図 戦国時代大型方形土坑

一面に出土したことから、配石した可能性が高いと思われる。壁はほぼ垂直に落ちている。主軸：N 10° W、ほぼ南北方向である。堆積状況：2層に分層された。礫の上に堆積していた1層は黒褐色シルトで、わずかにロームブロックが混入する。2層はブロック状のローム主体で、掘方と思われる。礫をおくため、礫の下にいたと考えられる。遺物出土状況：土器類は、埋土中から土師質土器片がわずかに出土しただけである。底部一面に置かれた礫中からは、完形に近い石鉢（271）と茶臼（267）が出土した。石鉢は土坑のほぼ中央に逆位でみつかった。時期：本遺跡において石製品が出土するのは戦国時代遺構のみであり、戦国時代と考えられる。性格：配石遺構とは考えられるが、その用途は不明である。底部に礫をおくのは、井戸跡で水を汲む際砂を巻き上げないようにする浄水施設としての例がある（鐘方 2003）。本遺構も井戸跡底部とも考えられる。しかし、周辺の井戸跡より底面レベルが2～3m高く、降雨時以外は水が溜まる様子がみられないことから可能性は低い。

SK361（第107図 PL9）【2区 VI A1・6グリッド】

位置：2区南部中央、ゆるやかな北斜面にある。重複：なし。検出：VI層上面。規模・形状：南北2.33m、東西2.26mの方形を呈する。床面積5.27㎡。主軸：N 11° W、ほぼ南北方向である。床面・壁：床面は平坦でやや堅い。壁は斜めに立ち上がり、断面は逆台形を呈する。その他の施設：なし。床面に炉跡や焼土、ピットはみられない。周囲にも関連すると思われるピットはみられない。堆積状況：3層に分層された。3層とも黒褐色シルト主体で、ロームの混入度合いに差はあるものの、大きなブロック状の混入はみられず、人為的に埋め戻した様子はない。遺物出土状況：埋土中から内耳鍋・かわらけ・青磁碗の破片が出土した。時期：遺物から戦国時代（16世紀前半頃）に比定される。性格：炉跡などが確認されず、住居跡とは断定できないが、ある程度の広さと堅い床面をもつことから、生活に伴う作業場などとして使用された可能性が考えられる。

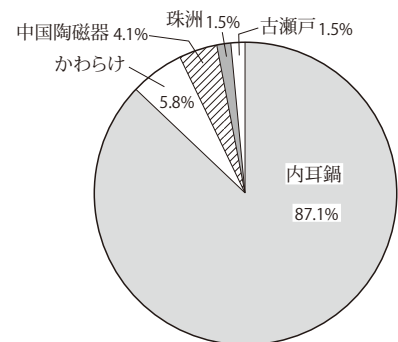
(2) 遺物

イ 土器・陶磁器・土製品

戦国時代の土器・陶磁器・土製品は876点、19,105g出土した。

土器・陶磁器の種別では、内耳鍋、かわらけ、古瀬戸、珠洲、中国陶磁器（青磁・白磁・青花）がみられた。土製品は、土錘と羽口が出土した。最も多いのは内耳鍋で、戦国時代土器・陶磁器総量の9割近く（重量比、以下すべて同）を占める（第108図）。内耳鍋に関しては、西四ツ屋・表町両遺跡を通して、「く」の字状の外反や内湾など、編年における鍵となる特徴をもつものは全くみられず、16世紀前半頃が中心とされる直立～ほぼ直立の特徴をもつものばかりであった。次に多いのはかわらけで総量の約6%である。古い技法とされる手づくね成形によるものは1点もなく、すべてロクロ成形によるものであった。

国内搬入陶器・中国陶磁器については、実測不可能な小破片であっても時期や産地が特定できることが多々あり、遺跡・遺構の時期推定に非常に有効な遺物である。国内からの搬入陶器は、珠洲と古瀬戸がみられそれ以外はみられなかった。珠洲は7点出土し、1点がすり鉢で残りは甕であった。古瀬戸は、13点出土した。器種では、碗・皿・香炉・瓶子・茶壺がみられた。中国陶磁器は総量の約4%である。内訳は、青磁が9割を占め、他に白磁、青花がわずかに出土した。いずれも小破片である。



第108図 戦国時代土器・陶磁器組成

以下遺物について、遺構ごとに記述する。平安時代同様遺物の残

存状態が悪いため、主な遺物についてのみ記述した。掲載した遺物の詳細な特徴（色調・胎土など）は、本書付属 CD に一覧表を収録した。

竪穴状遺構（第 109 図 P L 24）

S B 0 2 162 の内耳鍋は、底はないがそれ以外はほぼ完形である。周囲から底部の破片はみつからず、廃棄時には底がぬけていたと思われる。口縁部はほぼ直立しており、16 世紀前半頃の様相をみせている。

S K 1 8 9 163 は古瀬戸で大窯期の端反皿か丸皿である(註 5)。164 は 15 世紀(註 6)の白磁皿である。

井戸跡（第 109・110 図 P L 24）

S K 2 0 165～169 は内耳鍋である。このうち 167～169 の 3 点は、色調が他の内耳鍋に比べ白っぽく、屈曲する口縁部が短いタイプで、本遺跡においてこの遺構以外での出土はない。同タイプの内耳鍋は、北信地方北部で多い傾向にあり、飯綱町三水の芋川氏館跡(笹澤 2004)、信濃町仲町遺跡(県埋文 2004)などでみられる。

S K 1 0 1 図化できたのは 170 だけであったが、破片数で 27 点、535 g の内耳鍋片が出土した。他にもかわらけ、青磁などの破片がみられた。

S K 1 8 8 この遺構も 171～173 をはじめとする内耳鍋が多く出土した。171 は口縁部外側にロケ口成形のあとが浅い沈線状に残っている。174 は 15 世紀後半～16 世紀前半の線描蓮弁文が施された龍泉窯系青磁碗である。

S K 5 4 4 この遺構は他の井戸跡に比べ、175～178 などのかわらけが多く出土した。175 は、他のかわらけと同質の胎土で、大型である。179 は 15 世紀代の白磁皿である。この遺構も 180～184 をはじめとする内耳鍋が多く、破片数で 87 点、2188 g 出土した。

S K 8 1 6 186 は珠洲焼甕の胴部破片で、外面に叩き目、内部にあて具痕が残っている。珠洲は 15 世紀末には廃窯したが、16 世紀代でも越前朝倉一乗谷遺跡などで流通・使用が行われており(吉岡康暢 1980)、16 世紀前半頃とした本遺跡戦国時代集落の時期と、齟齬はないと思われる。

S K 8 2 8 187 の内耳鍋は耳部のみである。耳をつける際、胴部に穴をあけて差し込んでつけた様子がみえた。

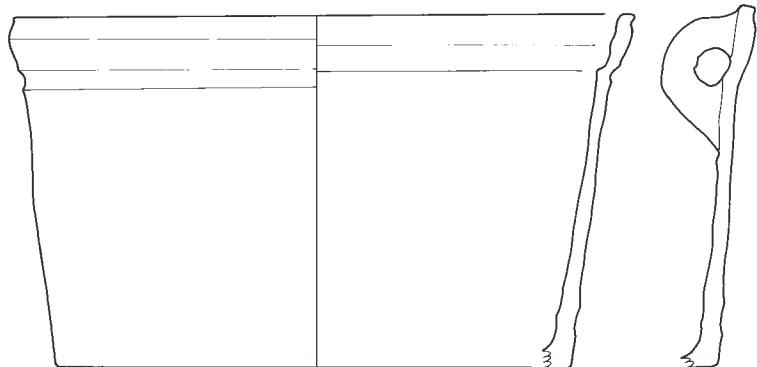
S K 9 8 2 188 のかわらけには体部に穿孔がみられる。このような例が本遺跡で他に 3 例みられる(192・195・213)。すべて焼成後の所産と思われる。用途は不明であるが、長野市北之脇遺跡では体部に 2 孔が並行してあけられており、紐を通して蓋として使ったとの想定がなされている(県埋文 1999)。

溝 跡（第 111・112 図 P L 25・26）

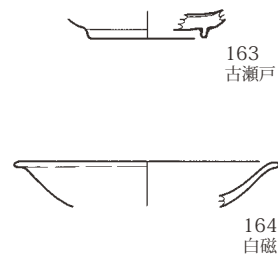
S D 0 1 189 は古瀬戸で大窯期の端反皿か丸皿の底部である。190 は 14 世紀後半～15 世紀前半の龍泉窯系青磁碗である。

豎穴状遺構

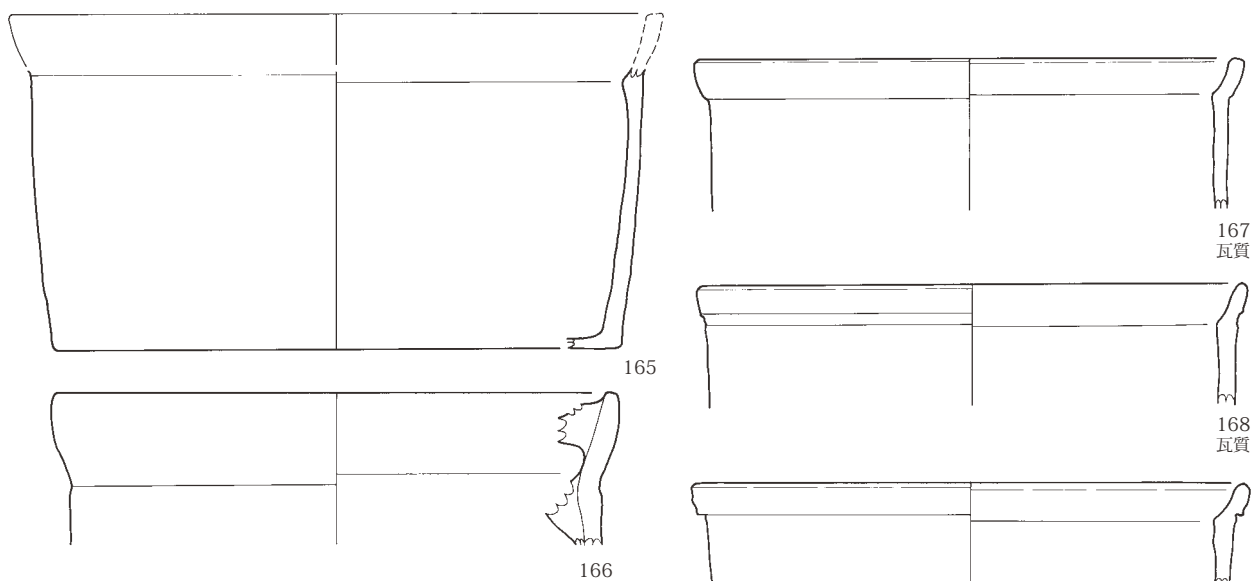
SB02



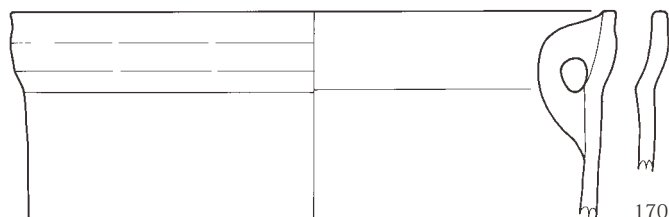
SK189



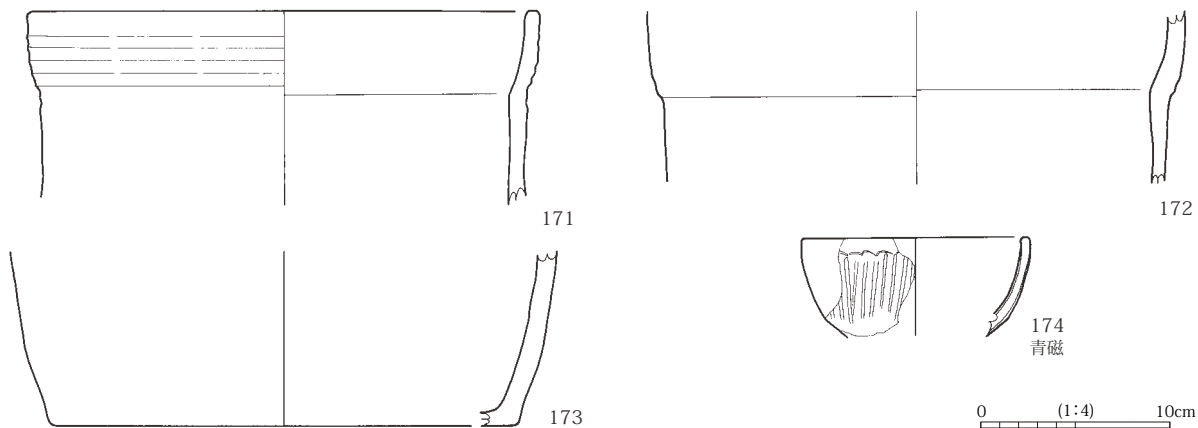
井戸跡
SK20



SK101



SK188

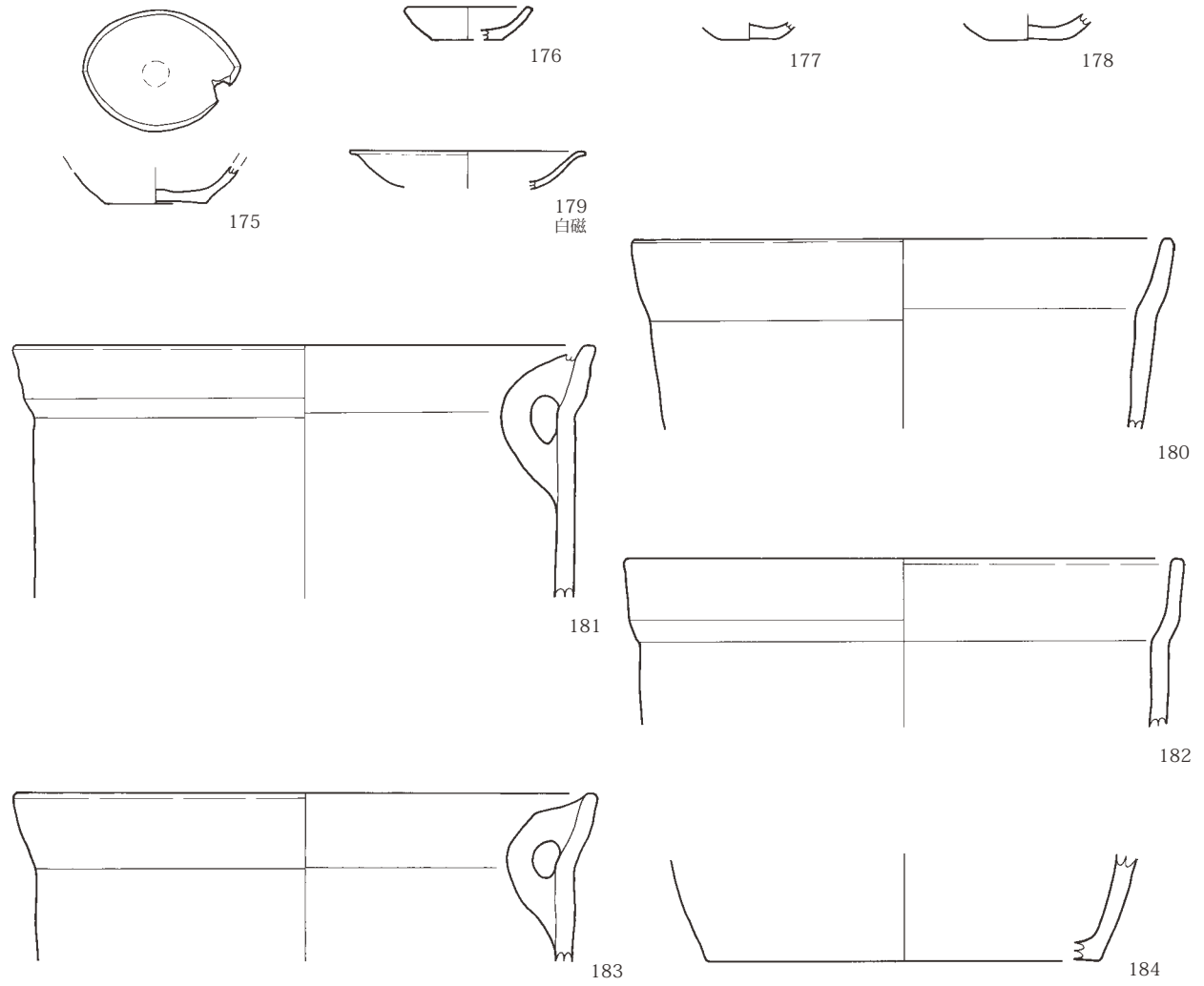


0 (1:4) 10cm

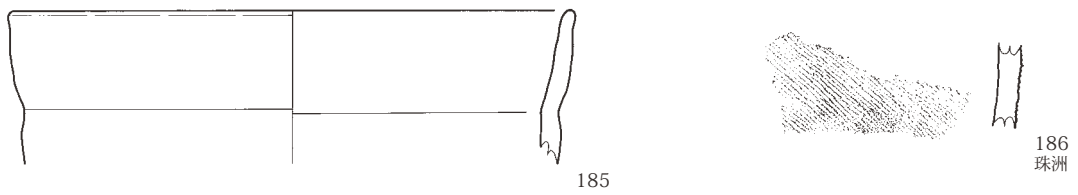
第109図 豎穴状遺構・大型方形土坑・井戸跡出土土器（戦国）

井戸跡

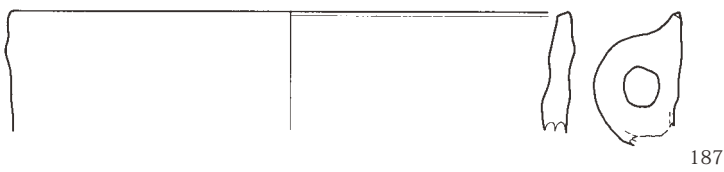
SK544



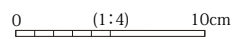
SK816



SK828

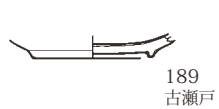


SK982

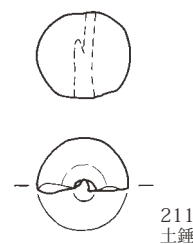
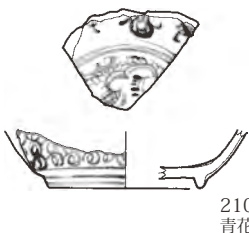
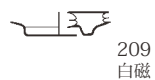
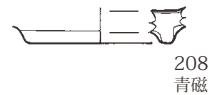
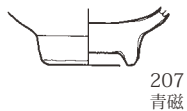
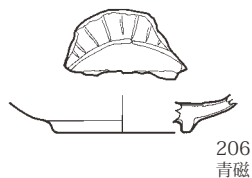
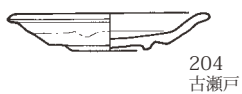
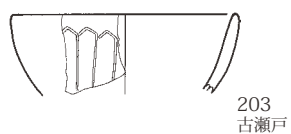
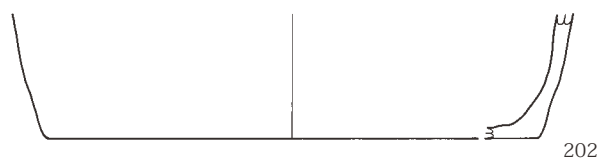
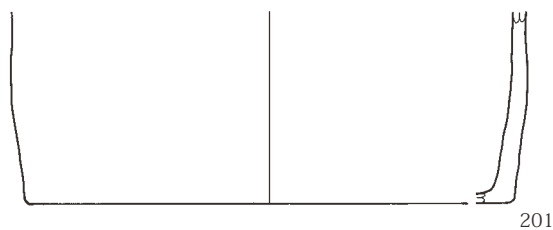
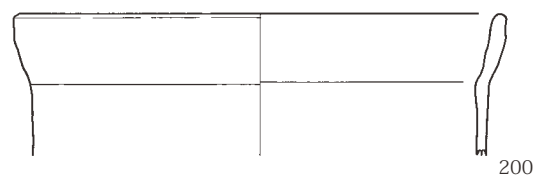
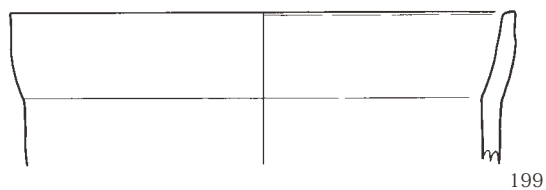
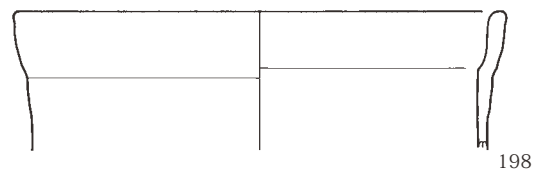
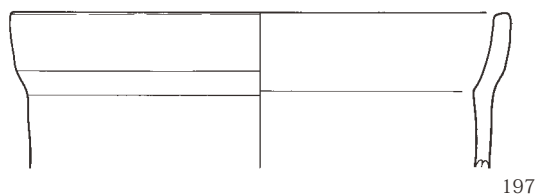
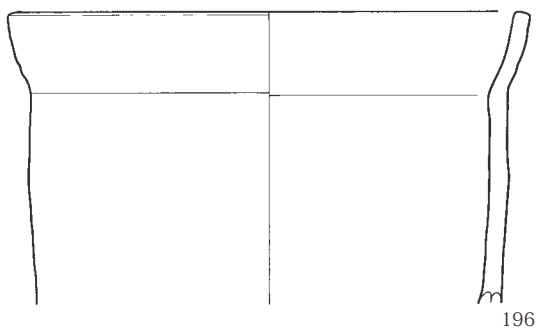
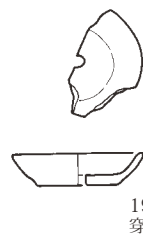
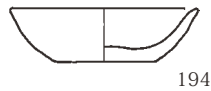
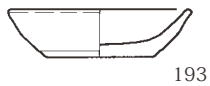
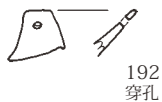
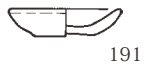


第110図 井戸跡出土土器（戦国）

SD01



SD02



0 (1:4) 10cm

第111図 溝跡出土土器(戦国)

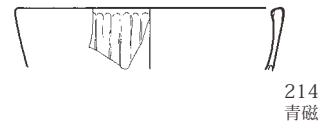
SD03



212

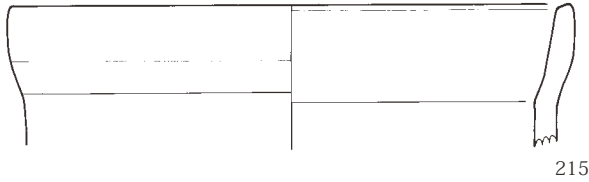


213
穿孔

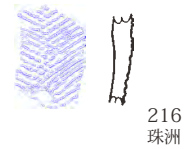


214
青磁

SD21

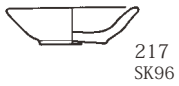


215



216
珠洲

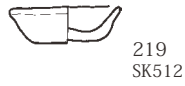
SK



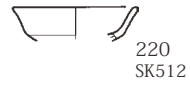
217
SK96



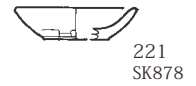
218
SK512



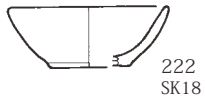
219
SK512



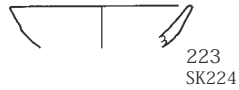
220
SK512



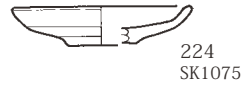
221
SK878



222
SK18



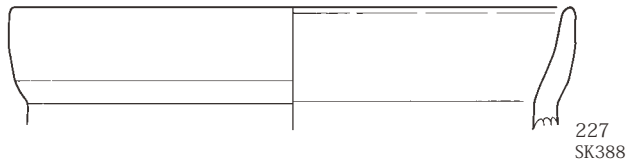
223
SK224



224
SK1075



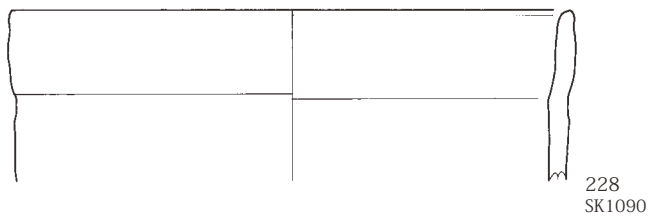
225
SK18



227
SK388



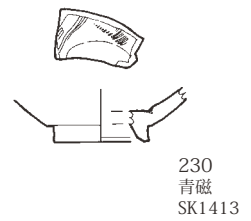
226
SK19



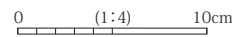
228
SK1090



229
珠洲
SK872

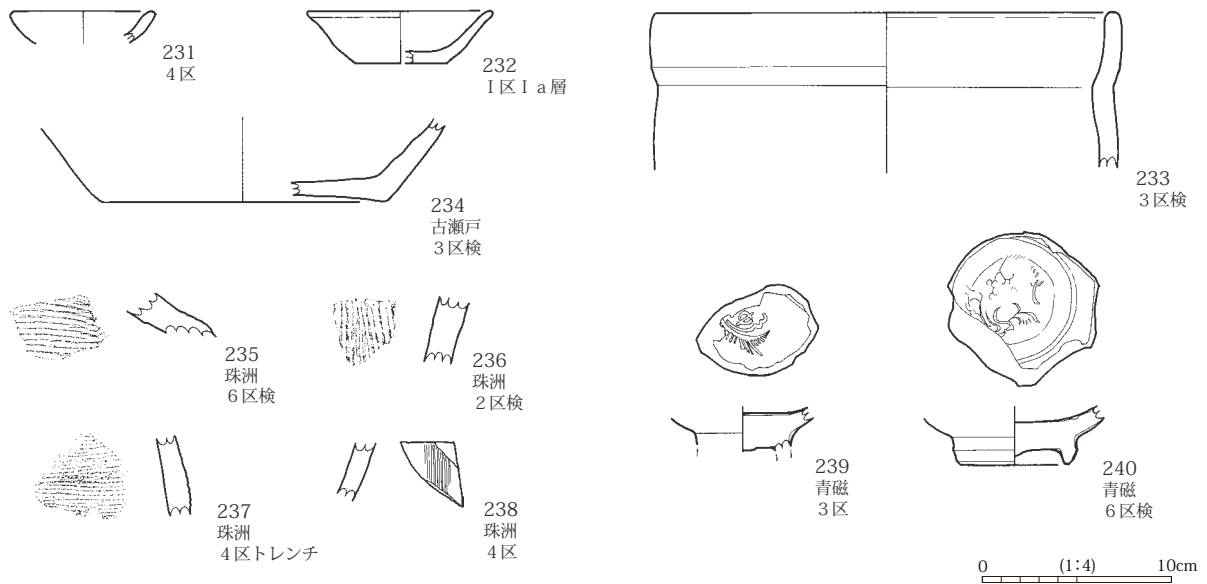


230
青磁
SK1413



第112図 溝跡・土坑出土土器（戦国）

遺構外



第113図 遺構外出土土器（戦国）

SD02・03 多種多彩な遺物が出土した遺構である。

かわらけには、193・194・213など口径9～10cmの大きいものと191・195・212など口径6～7cmの小型のもの二つの法量がみられる。かわらけの法量については、長野市小滝遺跡など分析がなされた（県埋文1999）。それによると口径7cm前後、10cm前にグループ化できることが報告されており、本遺跡でも同様の傾向がみられた。また192は体部、195は底部中央に穿孔されている。212の内面には、細い工具等で削った痕が残っている。

196～202の内耳鍋は、口縁部でみる限りすべて直立した同じ形をしている。

古瀬戸は3点出土した。203は大窯I期（16世紀前半）の丸碗である。204は古瀬戸後期（15世紀末）の腰折皿で、高台部は施釉されていない。205は大窯1期天目茶碗の高台部である。

206～208はいずれも龍泉窯系青磁で、206は14世紀代の盤、207は15世紀末～16世紀前半の碗、208は15世紀代の盤である。209は14～15世紀の白磁皿である。210は15世紀後半～16世紀の青花皿である。

211は本遺跡から唯一出土した土錘である。半分しか出土していない。断面でみる限り、孔は両側から掘ってあけたようである。

SD21 216は珠洲における叩き目の典型とされる綾杉文がはっきりとみえる。

土 坑（第112図 PL26）

217～224のかわらけは、217～221の小と222～224の大、二つの法量がわけられる。225～228の内耳鍋も口縁部の形状は直立している。特に228は体部から口縁までほぼ直線的に立ち上がっている。

229の珠洲甕は叩き目の溝が大きくて深い。230は本遺跡で1点のみ出土した同安窯系の青磁碗である。製作年代は12世紀後半頃と思われる。

遺構外（第113図 PL26）

231・232のかわらけ、233の内耳鍋については、これまで記述した本遺跡における特徴がみられる。

234 は古瀬戸後期の祖母懐茶壺である。祖母懐は現愛知県瀬戸市の地名で、ここの陶土は茶壺・茶入に適しているとされている（赤塚幹也 1969）。235～238 はいずれも珠洲である。235・237 は甕で、235 は胴上部肩の部分と思われる。236・238 はともにすり鉢である。236 は隣り合うすり目が重なっている。一単位あたりのすり目本数は不明である。238 は7本のすり目単位でかかっている。信楽における研究では、一単位あたりのすり目本数が増えるほど、時代が新しいとの報告がなされている（畑中英二 2006）。239・240 はともに龍泉窯系青磁碗である。239 は15世紀後半～16世紀前半、240 は14世紀代のものと思われる。二つとも内面見込に文様がスタンプされている。

（註5）古瀬戸の器種、時期については、藤沢良祐氏より指導を得た。

（註6）中国陶磁器の年代観については、白磁は上田秀夫氏（上田秀夫 1982）、青磁は森田勉氏（森田勉 1982）、青花は小野正敏氏（小野正敏 1982）の研究を参考にした。

ロ 石製品

戦国時代の石製品は91点、総重量にして191,673g出土した。

石製品の種別では、石臼（上・下）、茶臼（上・下）、石鉢、砥石、凹石、丸石、石錘、五輪塔が出土した。また時期不明としたが、多孔石が井戸跡から出土している。

以下石製品について、種別ごとに記述する。出土位置をはじめとする個々の諸属性については、本書付属CDに一覧表を収録した。

石臼（上臼・下臼）（第114・115図 P L 27・28）

石臼はすべて粉挽き臼で、上臼14点・下臼14点あわせて28点出土し、その内上臼9点・下臼10点を図示した。石材はすべて安山岩である。完形品は1点もなく、すべて割れている。割れ口は、強度面で弱いとされる軸孔と供給孔を結ぶラインで割れたものが多く見受けられる。磨り目の分割は、上臼241～243・下臼250～252など単位が読み取れるものをみる限り、いずれも一単位60°前後であることから6分割と思われる。ただ253の下臼は角度が90°近くあり異なる可能性がある。直径はほとんど30cm前後で、長野市前山田遺跡（県埋文 1999）などの出土例と同様であり、規格性が感じられる。厚さは上臼が7.4～14.9cm、下臼が6.8～14.9cmと差があり、すり減ると目立てをして、繰り返し使っていたと思われる。引手孔は241～243、246の4点でみられ、うち242は孔が二つあり、あけ直したとみられる。

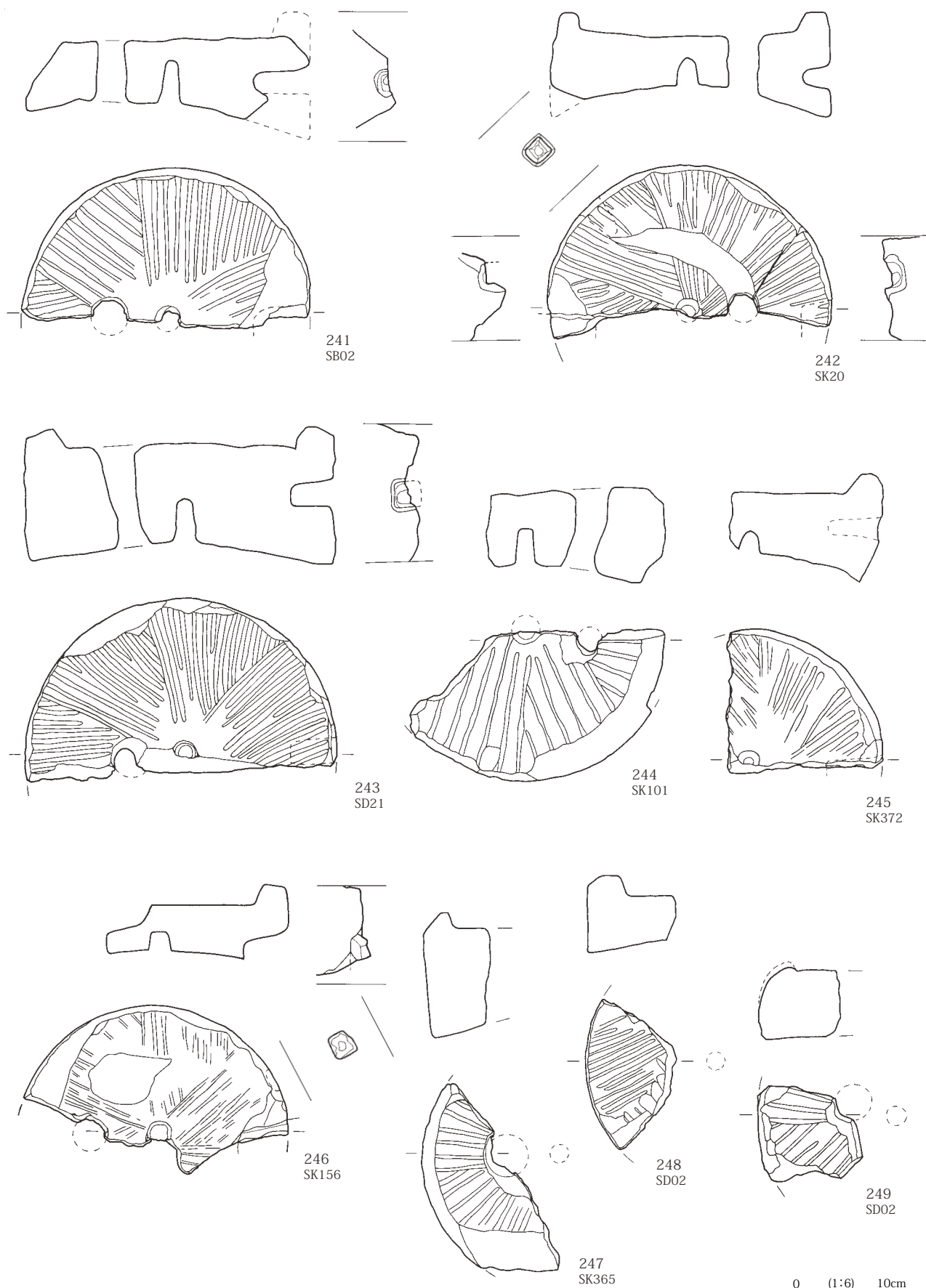
茶臼（上臼・下臼）（第116図 P L 28）

茶臼は、上臼7点・下臼5点あわせて12点出土し、その内上臼7点・下臼3点を図示した。石材は石臼同様すべて安山岩である。やはり完形品は一つもない。269の下臼はほぼ全体が残っているが、それ以外は1/2～1/4程度の残存率である。引手孔は上臼7点すべてでみられ、262・264・266は方形に削りだされている。特に262は3段に削りだされ、側面・磨り面も滑らかで、丁寧な造作がなされている。

石鉢（第117図 P L 29）

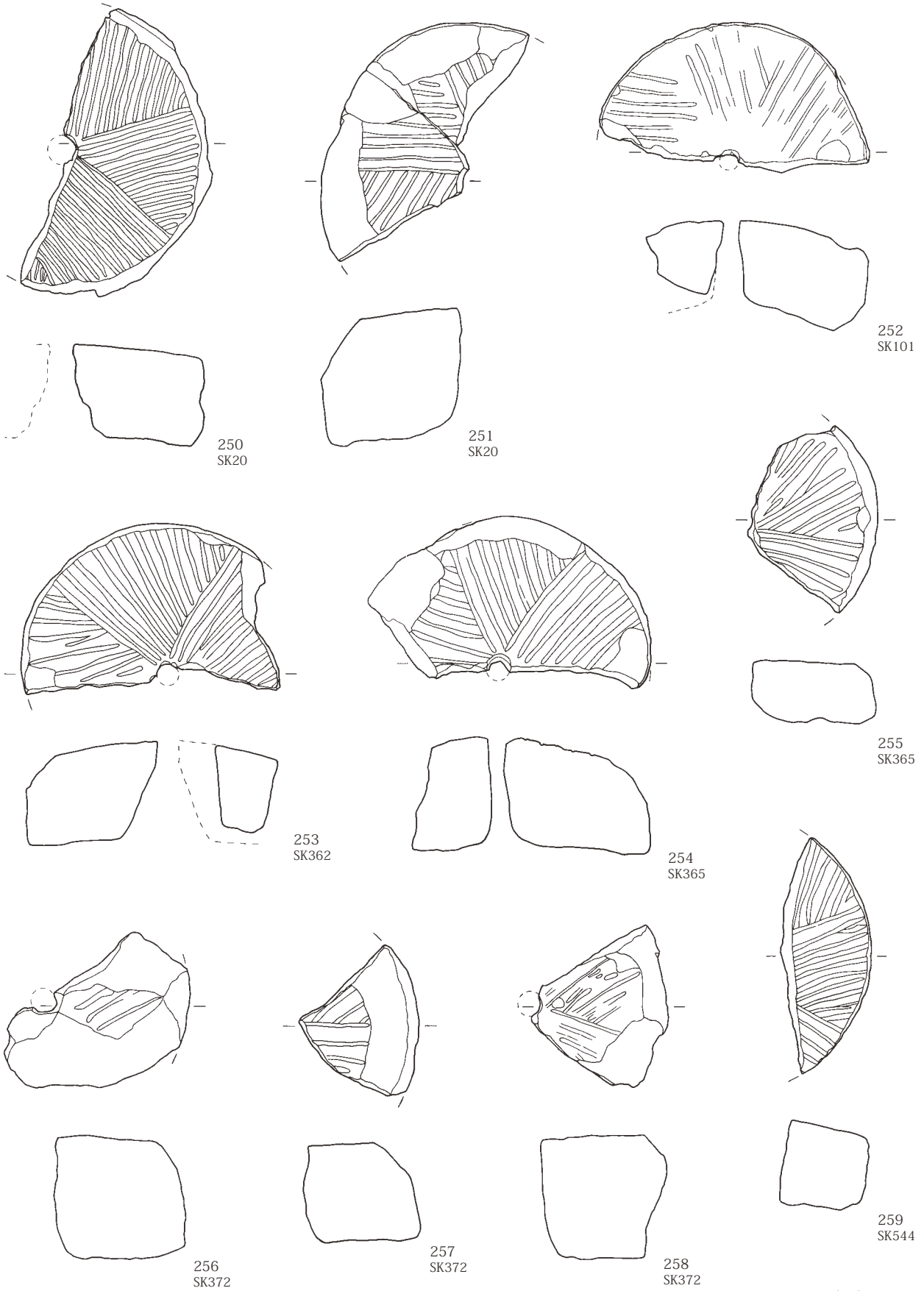
石鉢は26点出土し、その内口径・底径のわかるもの9点を図示した。石材はすべて安山岩である。271と275は内面にすり目が残っており、石すり鉢である。特に271は片口で、内面底部のすり目は摩滅して確認できないほど使われている。276は大型の片口鉢である。278は外面が自然石のままで、底面も成形しておらず自立できない。地面に穴を掘り固定して使ったものと思われる。276や278は、佐久

石臼 (上臼)



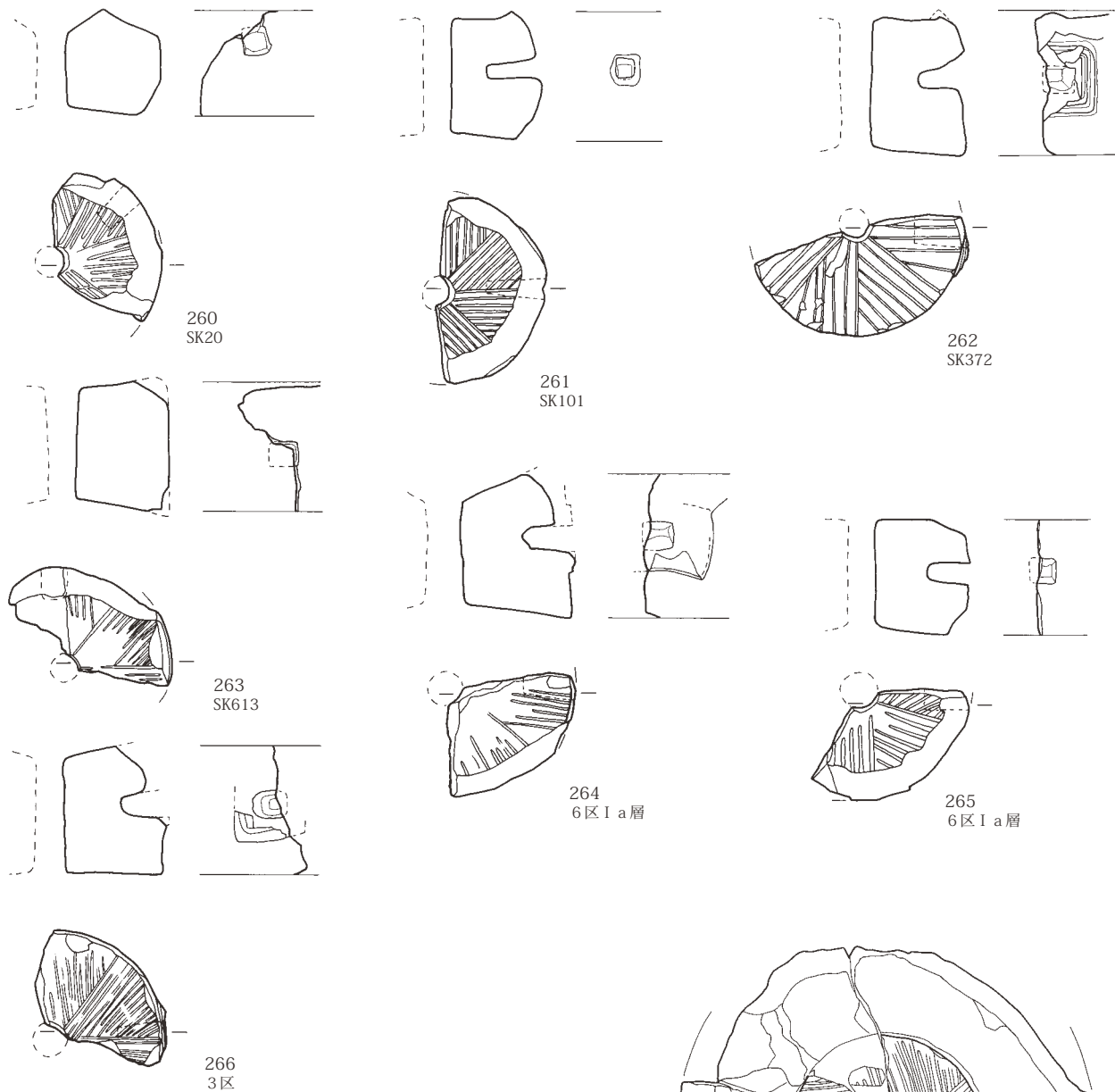
第114図 石製品① (戦国)

石臼 (下臼)

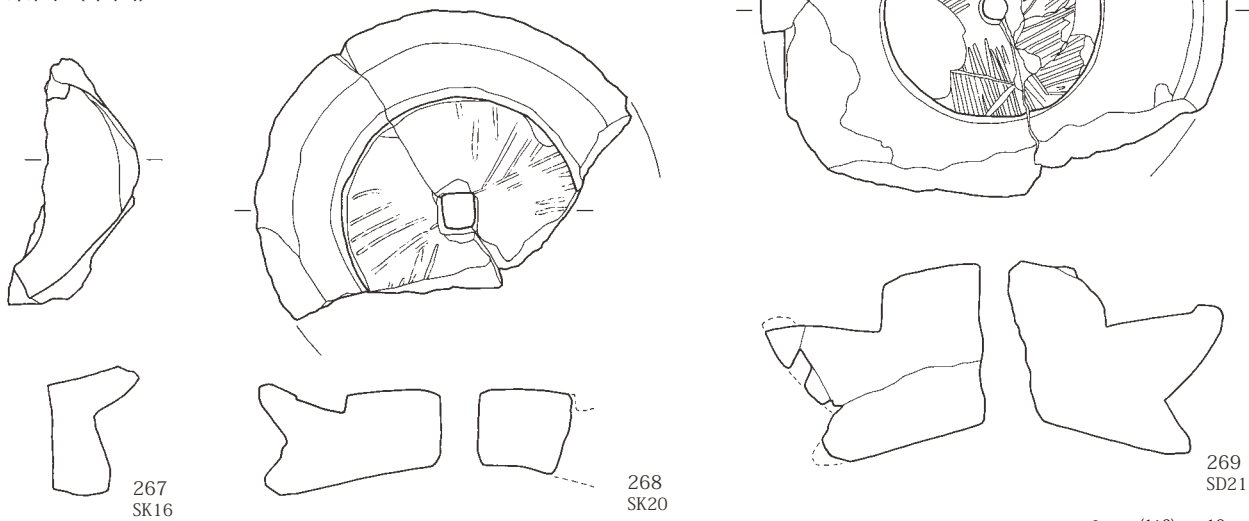


第115図 石製品② (戦国)

茶臼 (上臼)

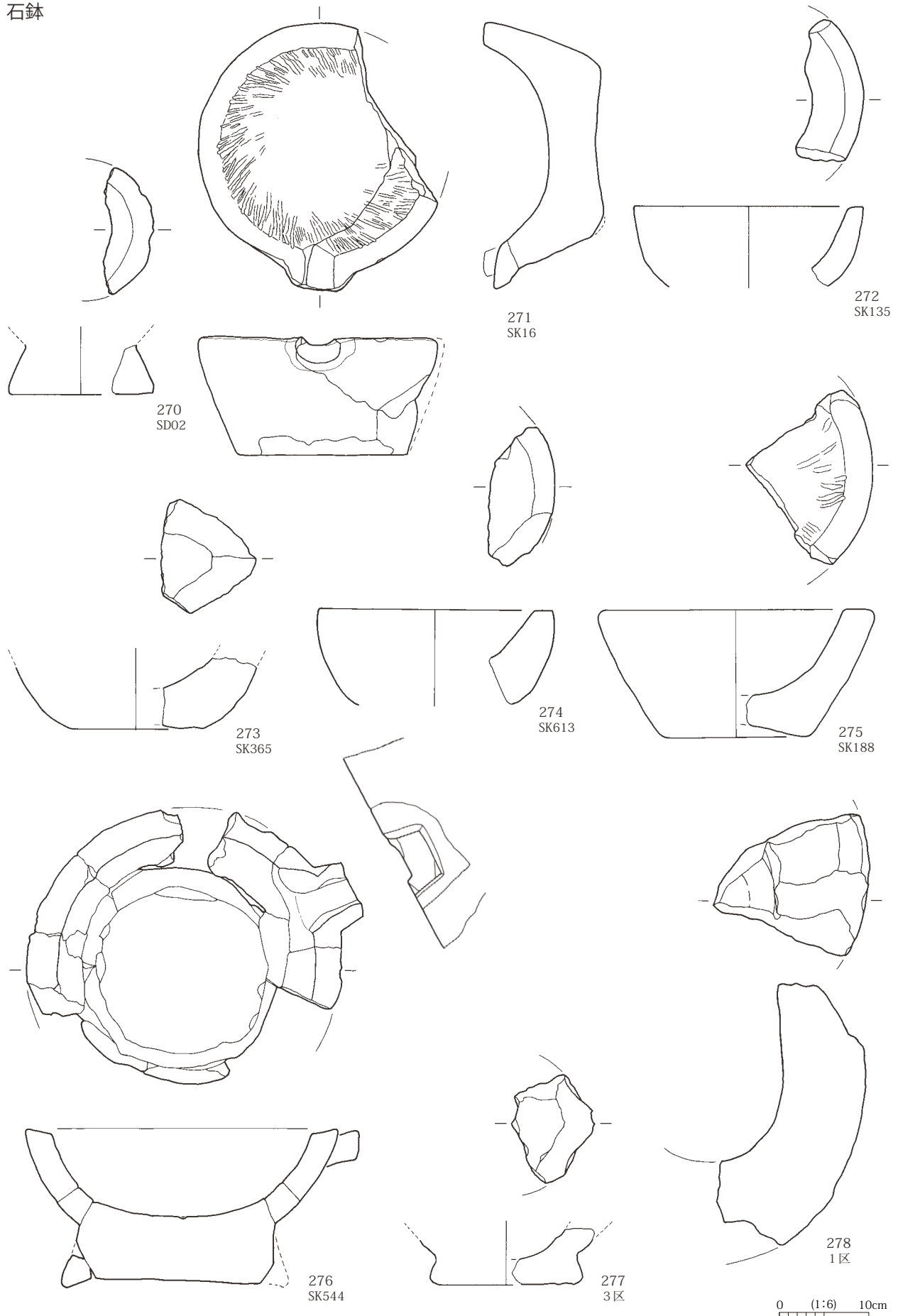


茶臼 (下臼)



第116図 石製品③ (戦国)

石鉢



第117図 石製品④ (戦国)

市金井城跡で同様のものが出土しており、搗く・擦る・捏ねるいずれか（あるいは全部）の役割が考えられている（小山岳夫他 1991）。本遺跡でも同様の使用が考えられる。

砥石（第 118 図 P L 29）

全部で 11 点出土し、10 点図示した。形態から大きく三つに分けられる。大型で平面・断面とも長方形となる 279～281、平面長方形で断面方形となる細長い柱状形態の 282～284・286、平面長方形で薄く扁平な板状形態の 285・287・288 である。石材はすべて凝灰岩と思われる。長野市前山田遺跡（県埋文 1999）では、石材は形態に対応して異なっているが、本遺跡ではその様子はない。飯綱山・黒姫山など火山が近く、手に入りやすい石材を用いたものと思われる。また同遺跡では出土した三角柱状砥石を、槍などを研ぐために手持ちで使用したと考えているが、本遺跡にその形状のものはなく、すべて固定使用と思われる。

用途別では、285～288 は表面が非常に滑らかで、仕上砥石である。その他の砥石も、使用面は滑らかで、荒砥石と思われるものはみられない。仕上砥石か中砥石と思われる。

凹石・丸石（第 119 図 P L 30）

凹石は 6 点出土した。289 は井戸跡から、291・294 は溝跡からの出土である。その他は検出面あるいは近代遺構の出土であるが、類似した安山岩製であることから一括して掲載した。293 は表裏とも凹んでおり、両面使用されたと思われる。294 は他の凹石と異なり、凹みが小さく細い。凹部の逆側は平坦になっており自立可能である。何かを差して立てた可能性も考えられる。295 の丸石も他の石製品と同様の安山岩製で、表面が磨耗により滑らかで、形も整っていることから掲載した。いずれも用途は不明である。

石錘（第 119 図 P L 30）

296 は長楕円形の安山岩で、短軸方向に二つの凹みがみられた。凹みの一つは細長く紐がすれたようになっていたことから、紐を巻きつけて錘の役目として使用したのではないかと考え、石錘とした。ただ出土したのはこれ 1 点のみである。

五輪塔（第 119 図 P L 30）

297 の 1 点のみである。形状から地輪と考えられる。直径 50cm ほどの柱穴状土坑からみつかった。据えた様子はみられなかった。石材は安山岩で、表面にノミ状タガネによる調整痕を残す。文字などは確認できなかった。

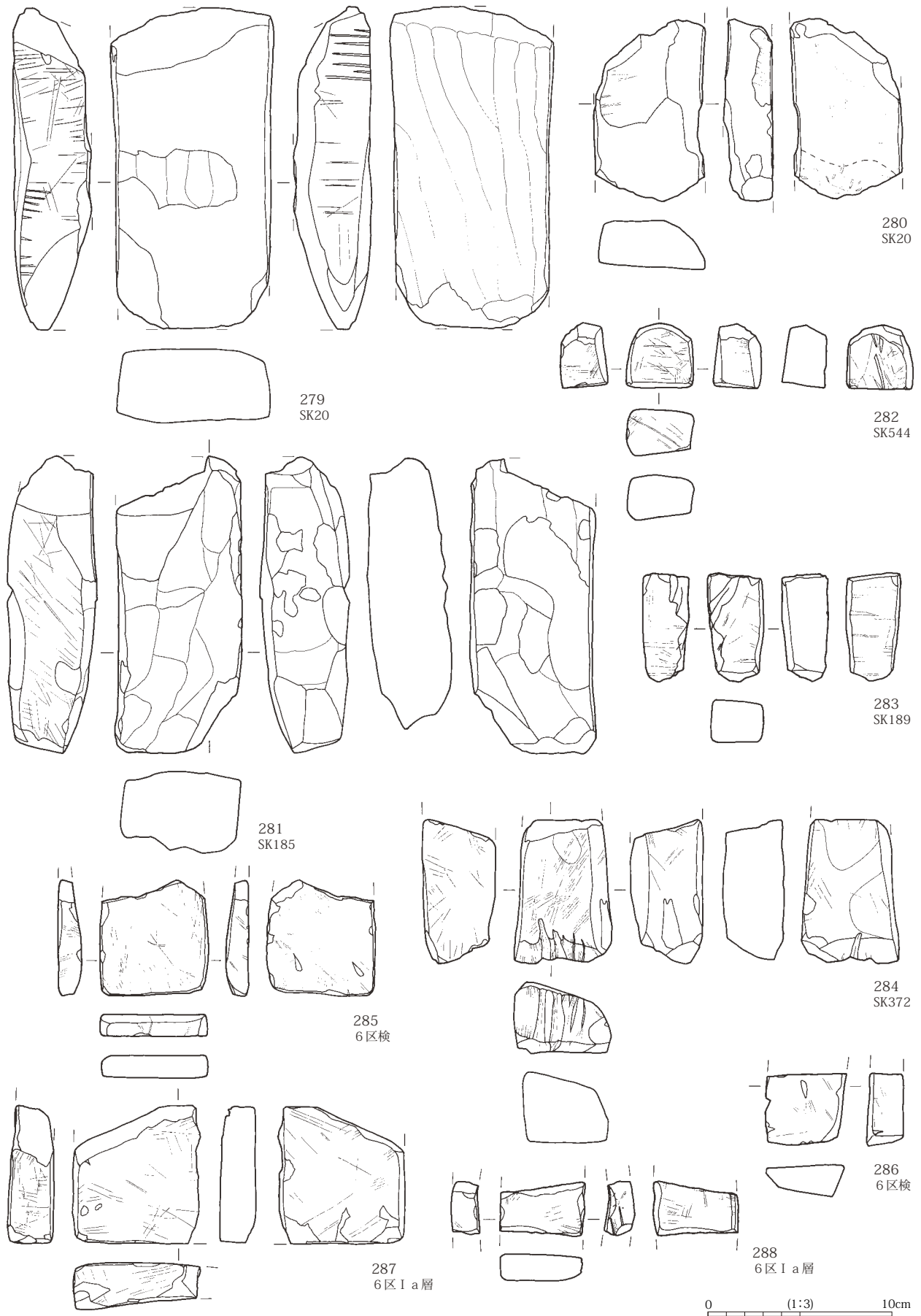
多孔石（第 119 図 P L 30）

298 は戦国時代井戸跡（SK188）からみつかった。両面で少なくとも 45 の小孔が確認できた。石材は安山岩である。多孔石は「蜂の巣石」ともよばれ、一般的には縄文時代遺物とされる。しかし本遺跡で確認された縄文時代遺構は陥し穴のみで、関連がつかめないため、時期不明遺物として掲載した。

ハ 木製品

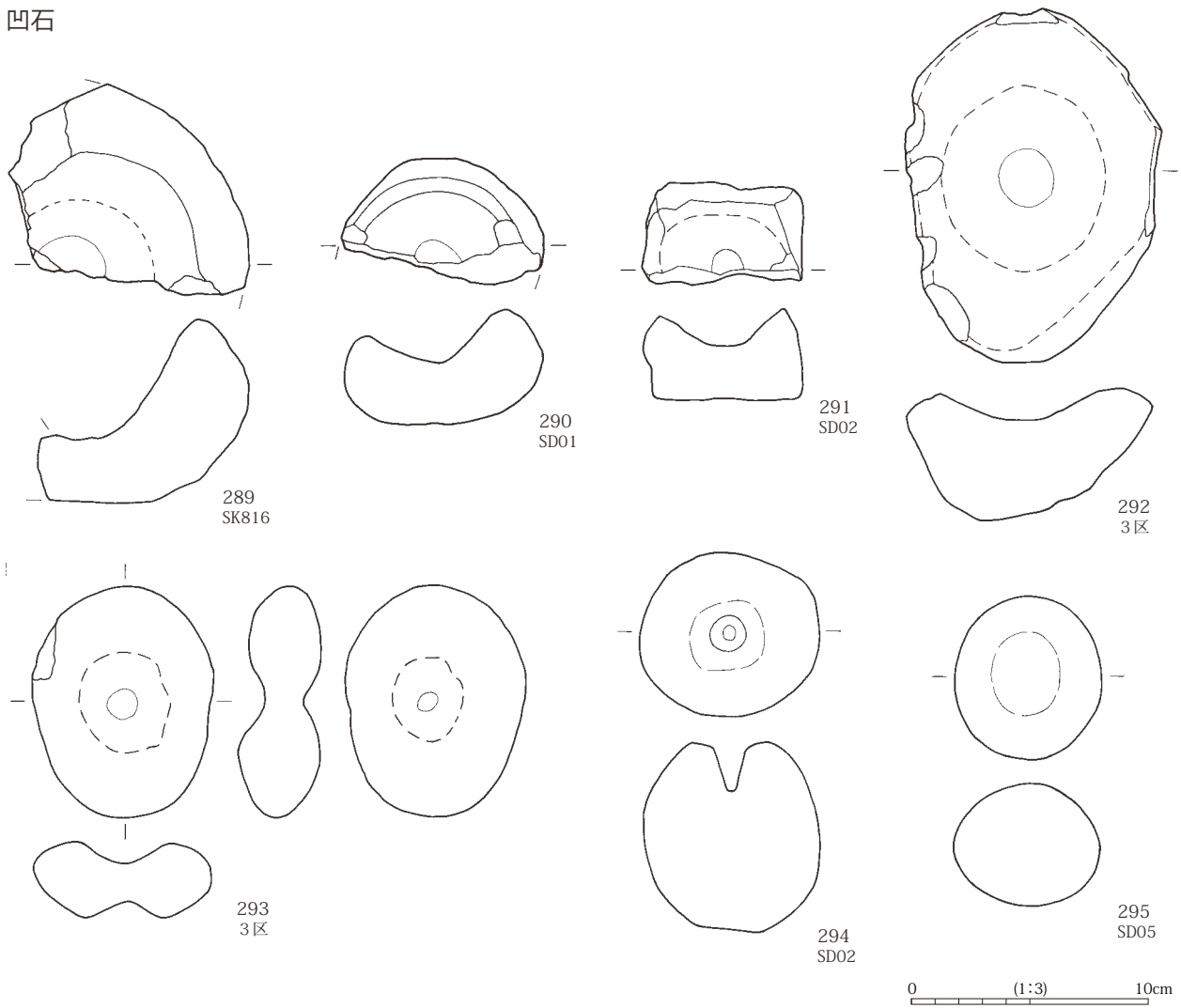
木製品は全部で 14 点出土し、その内 10 点を図示した。1 点（306）のみ土坑出土があるが、あとはすべて井戸跡からの出土である。木製品の種別では、漆椀、曲物、蒸籠底板、手馬鋤（てまんが）、臼、そり、杭、製材が出土した（註 7）。時期は、出土した遺構の共伴遺物から、すべて戦国時代と考えられる。

砥石

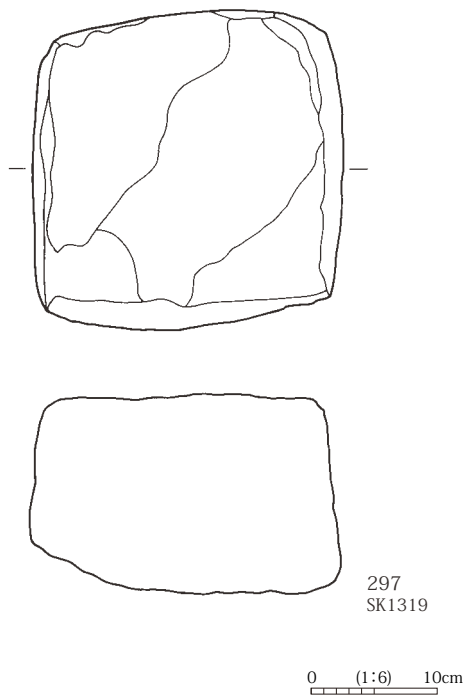


第118図 石製品⑤ (戦国)

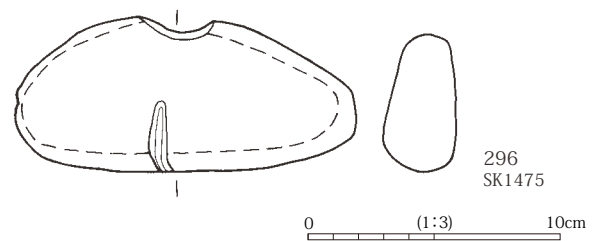
凹石



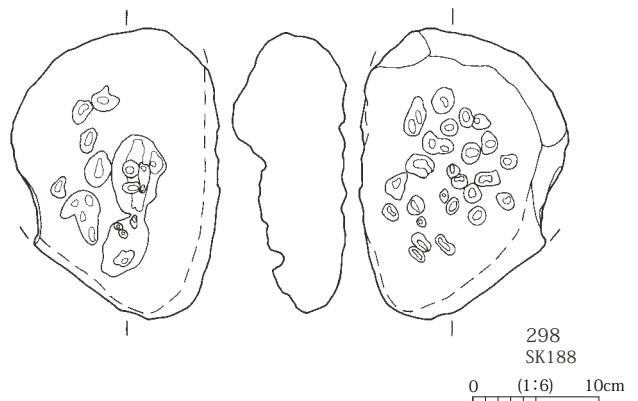
五輪塔



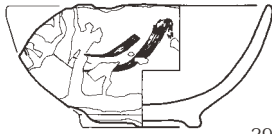
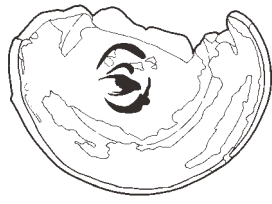
石錘



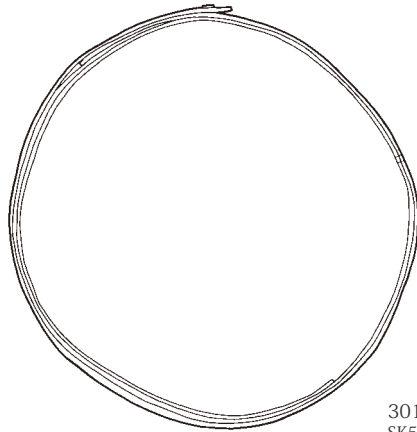
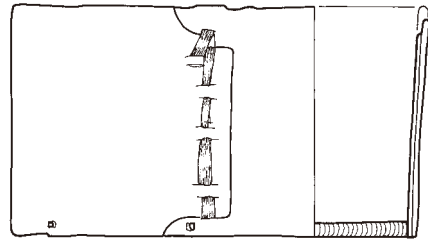
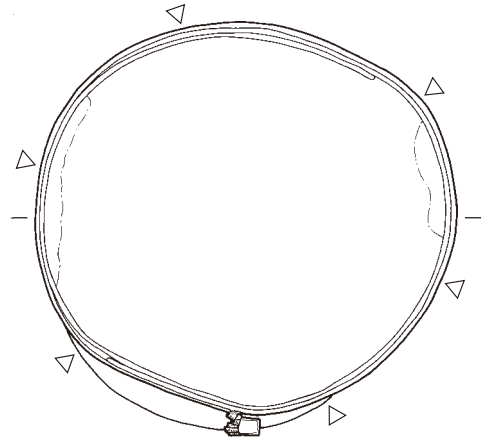
時期不明
多孔石



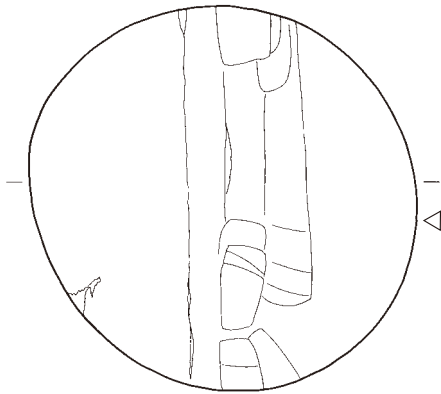
第119図 石製品⑥ (戦国・時期不明)



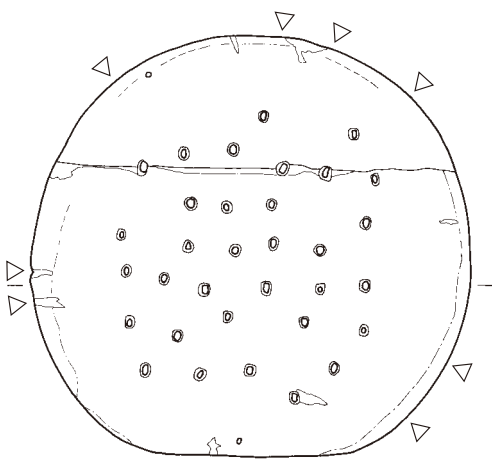
299
SK544



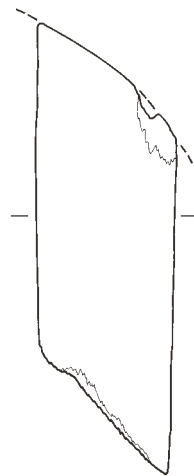
301
SK593



300
SK365



302
SK544



303
SK513

0 (1:4) 10cm

第120図 木製品① (戦国)

第4章 表町遺跡

以下木製品について、種別ごとに記述する。個々の諸属性については、本書付属 CD に一覧表を収録した。なお、本文中で用いた木製品の樹種については、5 章科学分析の項で樹種同定の概略を記述する。

漆椀（第 120 図 P L 31）

299 は高台付の椀で、器外面全体に黒漆、内面に赤漆が施されている。さらに外面は赤漆、内面は黒漆を用いて草木風の文様が描かれている。樹種はブナ属である。口径 13.6cm、器高 6.4cm を測る。

曲物（第 120 図 P L 31）

301 は丸型曲物で、側板・底板とも残っている。底板は半分はずれた状態で出土した。口径 22.7cm、器高 12.2cm を測る。側板は 2 枚使われており、それぞれほぼ一周と 1/5 ほどまわっており、樺で 1 ケ所留められている。側板・底板ともヒノキである。側板と底板の固定方法は、底板側面に沿って側板をまわすクレゾコを呈し、木釘で 6 ケ所底板側板を結合している。内面底部の側板近く 2 カ所で、もれを防ぐためのカキシブと思われるしみがみられた。側板の表面にケビキ線や刃物キズはみられなかった。300・303 は丸型曲物の底板である。直径は 300 が 20.3cm、303 は不明である。300 は、表面に加工痕がみられた。木釘痕は 300 で 1 カ所、303 は薄いためもあり全くない。1 ケ所で固定はできないので、300・301 とも、にかわや漆などで底板と側板は固定されたと考えられる。302 は曲物底板だが、多数の孔があげられていたため、蒸籠として使用したと判断した。二つに割れているが、全部残っている。直径は 23.2cm を測る。孔は 33 ケ所あげられている。特に規則的な配置はみられない。板の周縁部に 5～8 mm の幅で、変色が薄い部分がみられた。これは側板がのっていた跡と考えられ、この曲物は底板の上に側板を立てるカキゾコを呈していたと思われる。周辺部には 3 ケ所固定のための孔があげられていた。ただしこの孔はかなり小さいことから、カキゾコで一般的な樺ではなく、細い紐などで固定されていたと思われる。また、この底板は側面に 9 ケ所の木釘痕がみられた。作り直しや転用等の可能性が考えられる。

なお、小破片のため図示はできなかったが、SK101・365・544 の井戸跡から曲物側板が出土している。

手馬鍬（第 121 図 巻頭 2・P L 31）

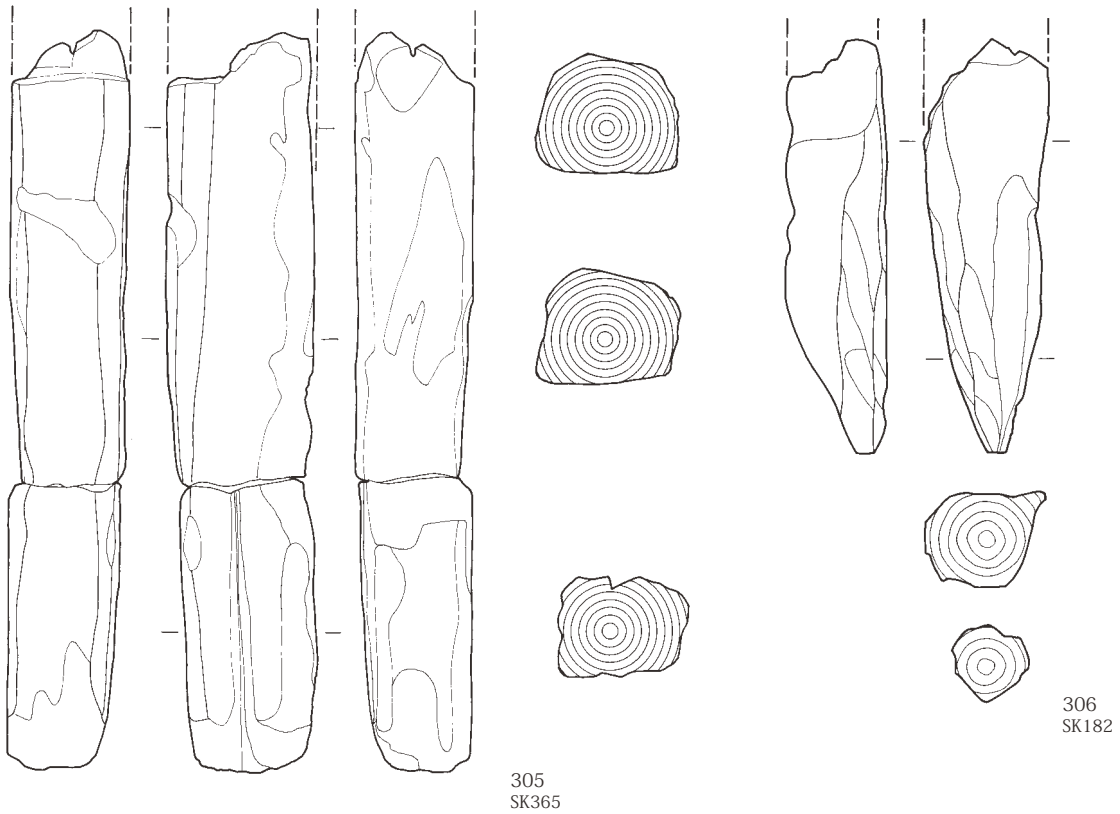
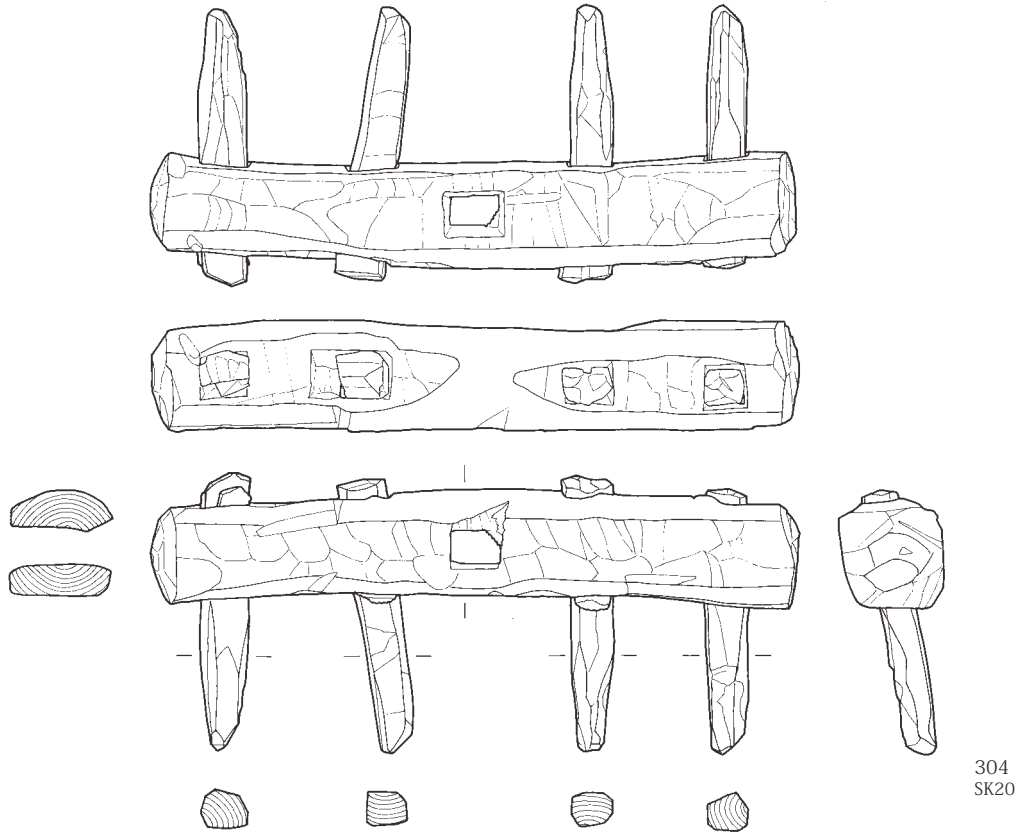
304 は農耕の際、耕土を破碎したりならしたりするための道具と思われる。牛馬に引かせる馬鍬と形状的に同じことから、手馬鍬（てまんが）とした。頭部のみ出土し、柄はなかった。歯は取替え可能で、楔で固定されている。頭部本体は幅 34.2cm で、歯の長さは 14.6cm を測る。本体・歯ともにサクラでつくられている。本体は直径約 6cm の木の四辺を削ってほぼ方形につくられており、一部サクラ独特の光沢のある樹皮が残っていた。本体・歯ともに加工痕がはっきりと残っており、未使用と思われる。使用前により強くするため水につけておいた可能性も考えられる。

杭・製材（第 121 図 P L 31）

305 は約 7 × 6cm の方形に加工されたブナ属の製材である。一方が折れており、残存している長さは 66.8cm を測る。用途は不明だが、井戸跡（SK365）から出土しており、井戸枠など井戸構築部材に利用していた可能性も考えられる。306 は杭先で、唯一土坑から出土した木製品である。杭先のみで上部はない。先端が焼けて一部炭化している。埋土中でみつきり、土坑の底や壁に刺さっていた様子はない。

臼（第 122 図 P L 32）

307 の臼は、高さ 44.7cm、直径 34.6cm で、重量は水を含んだ状態だが 26.9kg を測る。樹種はカバ



0 (1:4) 10cm

第121図 木製品② (戦国)

ノキ属である。底部が半周ほど欠損している。搗き部は8cmほど凹んでおり、表面は磨耗していることから、使用されていたものである。底部裏面は10cmほど中がえぐられており、ノミの跡などがはっきりと残っている。重量を軽くするためにえぐったのではないかと考えられる。

中世の臼の出土例は全国的にも少ないが、近年中世城館跡の調査などが増え、埼玉県大堀山館跡（川越市教委 未刊行）などで類例がみられ始めている。

そり（第122図 P L 32）

308は、左右一対の雪そりである。そりの左右については、そり底部の摩滅が外側ほどすり減った様子や尾部の内側への湾曲から判断した。右そりが二つ、左そりが三つに割れている。右そり先端部が一部欠損しているが、それ以外はある。乳（ち）は四つとも残っており、ヨチ（四乳）ゾリとよばれるものである。長さは、全部残っている左そりで69.8cm、幅5.2cm、底部から乳の高さは7.0cmを測る。樹種はアカマツである。乳にはそりの外側から内側にむけて孔があげられている。右そり前部の乳には、あけ損ねて途中で止まった孔もみられた。使用の際は乳の部分に横木を渡して縛りつけ、井桁状に組んだものと思われる。上部に箱をのせる場合もある。人力によってひく小型そりの出土例も少なく、管見では青森県朝日山（2）遺跡で平安時代（10世紀初頭頃）の雪そり一対が確認できた程度である（平山明寿他2002）。

（註7）木製品の名称、類例などについては、山田昌久氏より指導を得た。

ニ 金属製品（第123図 P L 33）

戦国時代と判断した金属製品は10点である。金属製品の種別では、銭貨2点、釘4点、用途不明品4点である。個々の諸属性については、本書付属CDに一覧表を収録した。

309の銭貨は元豊通宝で、戦国時代井戸跡（SK188）から出土した。1078年鑄造開始の北宋銭である。310は祥符通宝で、1009年鑄造開始の同じく北宋銭である。近世以降の溝跡から出土し流れ込みと考えられる。

311～314は、いずれも断面方形の角釘で、古代～近世まで一般的に使われてきたものである（田中琢他2002）。311・312・314は井戸跡出土で、313は土坑出土である。

315は当初釘と思われたが、X線撮影で先端に直径2mmほどの孔が確認され、用途不明とした。紐を通す道具などの可能性が考えられる。316は、井戸跡（SK101）から出土した用途不明の輪状製品である。X線撮影の結果切れ目はみられなかった。317は中がえぐれており、鉄斧の先端などが考えられる。X線撮影で直径3mmの孔が確認された。留め具孔などの可能性がある。318は当初刀子と思われたが、保存処理の結果、板状の鉄を2つに折り曲げてあることが判明した。鞘のような形状であるが、用途は不明である。

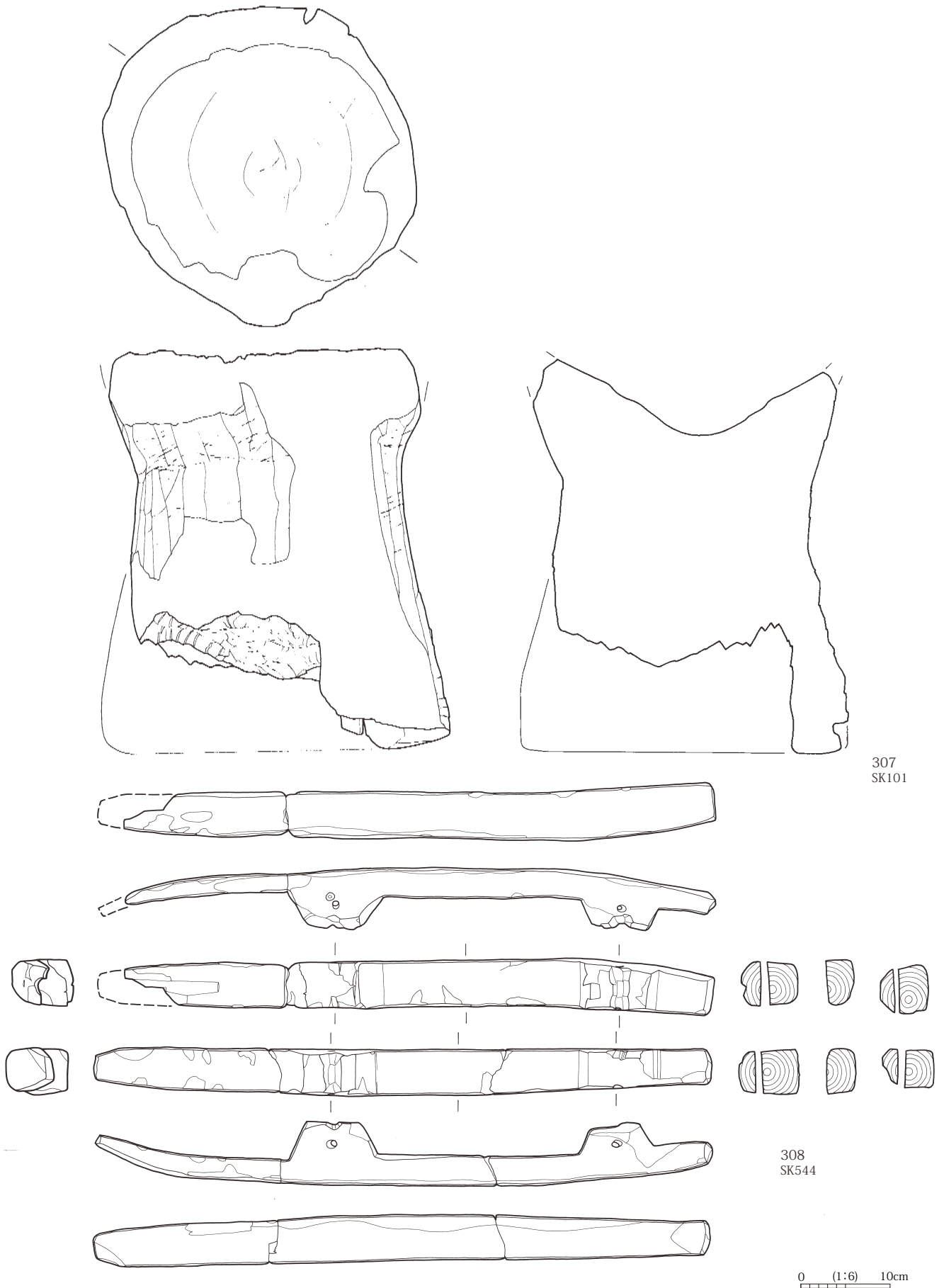
ホ 鍛冶関連遺物（第123図 P L 33）

鍛冶関連では、鍛冶滓と羽口の破片が出土している。遺構は確認されず、炉壁などもみつからなかった。

鍛冶滓は、遺跡全体で259点、10,257gが出土した。その内、1区S D 02・03及びその周辺から215点・7,994g出土し、総点数の83%、総重量の78%がこの付近に集中している。

鍛冶滓については、一点ごとの目視による観察と点数・重量の計測、同じくメタルチェッカーによる含鉄度合いの確認を行った。明確な鍛冶遺構の確認はされなかったため、科学分析は行わなかった。

観察の結果、すべてが精錬および鍛錬時につくられた鍛冶滓で、砂鉄などから鉄を取り出す際に発生する製錬滓は認められなかった。メタルチェッカーに反応したものは1点もなく、含鉄度合いの低いものばかりであった。念のため一部S D 02・03の埋土を採取し、ふるいにかける作業も行ったが、精錬鍛冶の



第 122 図 木製品③ (戦国)

中で発生する粒状滓は確認されなかった。

鍛冶滓中からは、典型的な椀形鍛冶滓（P L 33 前列）が、遺跡全体で 43 点・5139 g みつまっている。これは、鍛冶滓総重量の約 4 割を占める。その典型的椀形鍛冶滓の 8 割は、S D 02・03 からの出土である。

椀形鍛冶滓個々についての観察では、割れているものはなくほとんどが原形を留めており、残った鉄分を取り出すために小割して再利用しているような様子は見られない。

羽口は、破片 14 点が S D 02 中より出土し、径の判明した 3 点を図示した（319～321）。溶解部・還元部が明瞭で、実際に使用していた様子がみえる。

今回の調査では、鍛冶関連遺構は確認されなかったが、約 10kg の鍛冶滓と羽口がみつかった。鍛冶滓中には、精錬および鍛錬においてつくられる椀形鍛冶滓が高い割合を占めた。これらから、近くで鍛冶作業が行われていたことは間違いなく、それも 1・2 回の単発なものではなく、ある程度の期間繰り返し行われていたと考えられる。SD02・03 のある 1 区は、表町遺跡でみつかった戦国時代集落の南のはずれにあたる。火を用いる作業を集落のはずれで行うことは、火災よけの面からも合理的であり、SD02・03 から遠くない場所に、鍛冶作業場があった可能性は高いと考えられる。

5 近世

(1) 遺構

イ 掘立柱建物跡

近世の掘立柱建物跡と認定したのは 2 棟で、分布は 3 区に 1 棟、6 区に 1 棟である。

ST17 (第 124 図)【6区 I J 2 4 グリッド】

位置：6 区北側中央、ゆるやかな北西斜面にある。重複：なし。検出：VI 層上面にて検出した。構造的特徴：長いほうを桁方向と想定し桁行 3.17 m、梁行 2.98m でほぼ正方形の側柱建物である。柱間数は桁行 1 間梁行 2 間となる。主軸：N 69° E。面積：9.45 m²。柱穴：方形で、P6 のみ楕円形を呈する。柱間距離は 1.20～1.60m、深さは 17～25cm を測る。柱痕・柱材なし。堆積状況：黒色シルトの単一層である。人為的に埋められた様子はない。時期：柱穴からの遺物がなく断定はできないが、建物すぐ西側にある近世土坑（SK1599、後述）との関連が考えられることから、近世の可能性が高い。性格：近くの近世土坑からは、馬歯が出土しており、馬小屋などの可能性が考えられる。

ST42 (第 124 図)【3区 III M 3・4 グリッド】

位置：3 区北側中央、谷状地形の底部で、周囲はほぼ平坦である。重複：なし。検出：VI 層上面にて検出した。構造的特徴：桁行 3.98 m、梁行 3.77m でほぼ正方形の側柱建物である。柱間数は桁行 2 間梁行 1 間である。主軸：N 70° E。面積：15.0 m²。柱穴：いずれもほぼ円形である。柱間距離は 1.34～2.19m、深さは 17～25cm を測る。柱痕・柱材なし。堆積状況：P1～P4 は暗褐色シルト基調で、ロームの混入度合いが柱穴により異なる。P5・6 は灰褐色シルトである。すぐ近くでみられる戦国時代遺構とは明らかに違う埋土である。いずれの柱穴もブロック状の混入はみられず、人為的に埋められた様子はない。時期：柱穴からの遺物がなく断定はできないが、同様の暗褐色埋土は、同じ地区の近世土坑（SK1413、後述）でみられることから、近世の可能性が高い。

ロ 土坑

近世の土坑としたのは 2 基で、分布は 3 区に 1 基、6 区に 1 基である。

錢貨



元豊通宝



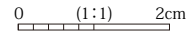
309
SK188



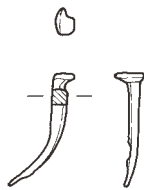
祥符通宝



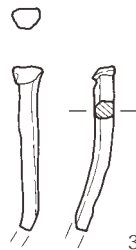
310
SD01



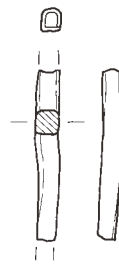
その他の金属製品



311
SK101



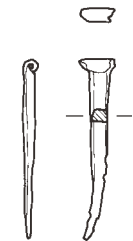
312
SK101



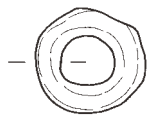
314
SK1477



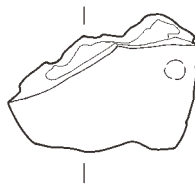
315
SK1477



313
SK100



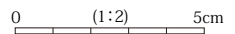
316
SK101



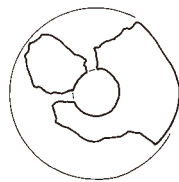
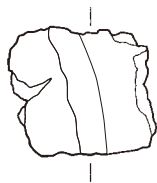
317
SK982



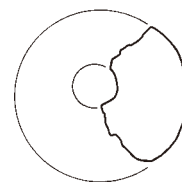
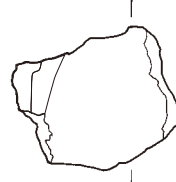
318
SK1169



羽口



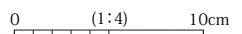
319
SD02



320
SD02

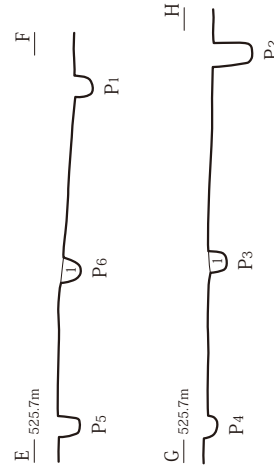
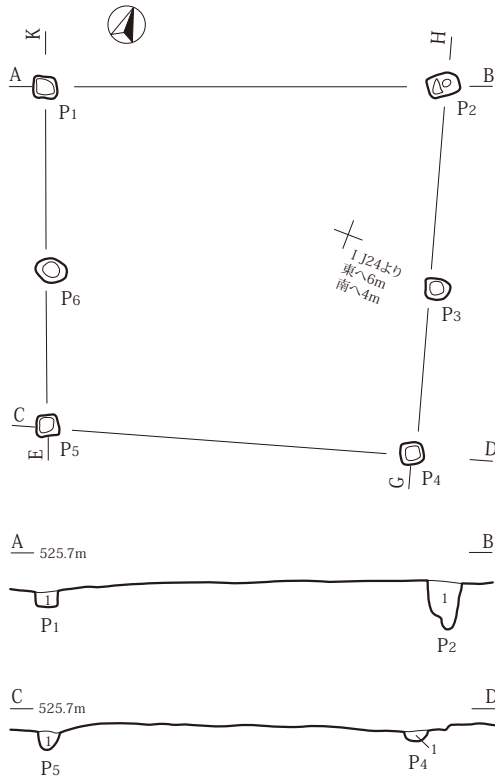


321
SD02



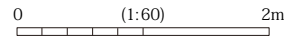
第123図 金属製品・羽口(戦国)

ST17

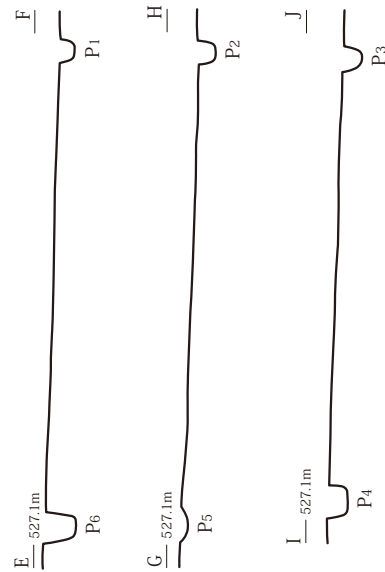
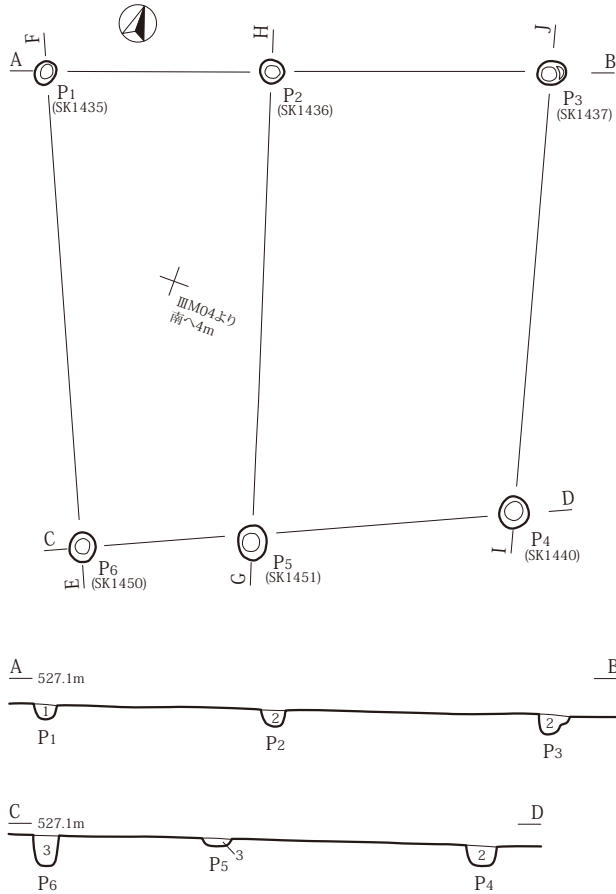


ST17

1 黒色シルト 10YR: 2/1 明黄褐色D-L粒を3~5%混入 粘性なし
しまりややわるい

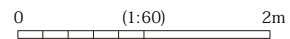


ST42



ST42

1 暗褐色シルト 10YR: 3/3 明黄褐色D-L粒を1%程度混入 粘性なし
しまりふつう
2 暗褐色シルト 10YR: 3/3 明黄褐色D-L粒を3~5%混入 粘性なし
しまりふつう
3 灰褐色シルト 10YR: 4/2 明黄褐色D-L粒を3~5%混入 粘性なし
しまりふつう



第124図 17号・42号掘立柱建物跡

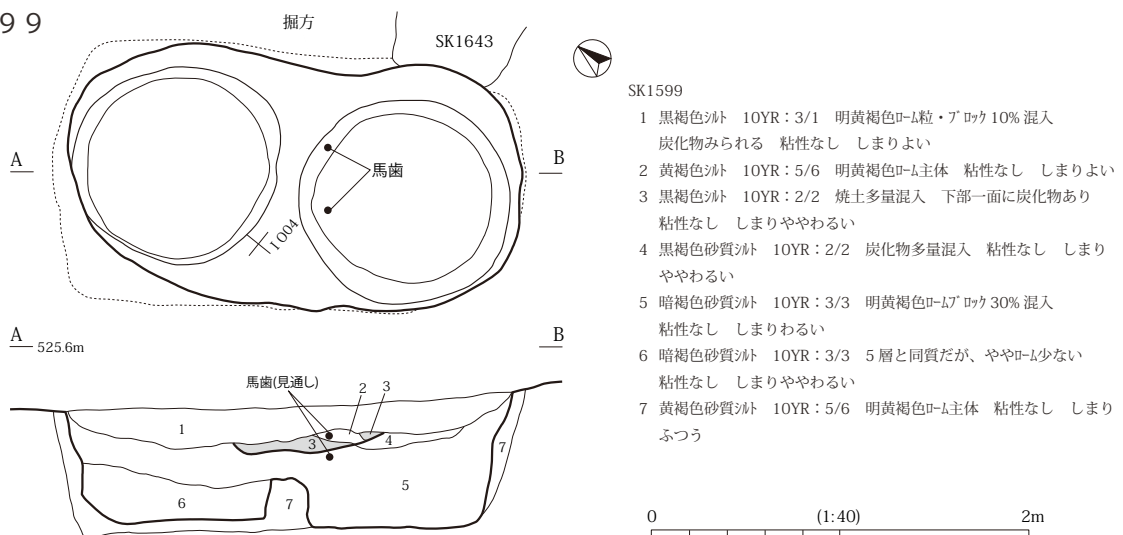
SK1413 【3区 III H22・23グリッド】

位置：3区北部西寄りに位置し、ゆるやかな北斜面にある。重複：なし。検出：VI層上面にて検出。上部は近年までの水田耕作のため、かなり削平されていた。規模・形状：西側が調査区外である。残存範囲で長軸1.87m 短軸0.95mの不整楕円形で、深さは0.26mを測る。底はほぼ平坦で、壁はなめらかに落ちている。主軸：N 28° W。堆積状況：3層に分層された。1層は暗褐色シルトで、わずかにロームブロックが混入する。2層は、VI層ロームとⅢa層黒褐色土の混入で壁の崩れと思われる。3層は暗褐色で砂質が強い。遺物出土状況：埋土中から唐津焼の皿・碗の破片が出土した。この遺構は他にも遺物が多く、平安土器や内耳、遺跡唯一の同安窯系青磁も出土した。炭化物・骨片などはみられなかった。時期：遺物から近世と考えられる。性格：壁も滑らかで埋土にもブロック状の混入はなく、人為的に掘りこんだり埋めたりした様子はみられない。自然の落ち込みの可能性も考えられる。

SK1599 (第125図 PL16) 【6区 I J23・24、O3・4グリッド】

位置：6区北部中央に位置し、ゆるやかな北斜面にある。重複：時期不明のSK1643を切る。検出：VI層上面にて検出。規模・形状：長軸2.50m 短軸1.35mの楕円形で、深さは0.72mを測る。土坑内部には北と南にそれぞれ直径約1mの円形の落ち込みがみられる。その外側に長方形の掘方がある。掘方の規模は、2.50×1.47mを測る。主軸：N 39° W。堆積状況：7層に分層された。1層は黒褐色シルトで遺構全体を覆っている。1層下部中央にロームブロック(2層)と焼土を多量に含む3層と炭化物を多く含む4層がみられた。3層下部は焼けてやや締まっていた。5・6層はロームがブロック状に多く混入しており、しまりも悪く、一気に埋められた様子がみられた。7層は土坑の底部および壁際にみられ、掘方と思われる。遺物出土状況：5層中から伊万里焼の碗破片、かんざしと思われる金属製品(328)、馬歯が出土した。馬歯は、5層中および5層・3層の境界付近の2ヶ所からみつまっている。骨などほかの部位は出土しなかった。時期：遺物から近世と考えられる。性格：馬の墓と推測される。馬の歯は底部から35～45cm浮いた状態でみつまっている。前足・後足をそれぞれ土坑底部の二つの落ち込みにいれ、頭を上にして埋めたものと考えられる。1層下部の焼土・炭化物は、時間差は不明であるが、馬を埋めたあとで火を焚いたものと思われる。本土坑東約2.6mに掘立柱建物跡(ST17)がある。関連が考えられる。

SK1599



第125図 1599号土坑

ハ オシャゴンジ跡の調査

本書2章2節の2でふれた、「オシャゴンジ」とよばれる神社は、近世まで表町にあったとされている。場所は6区南側である(第80図)。

発掘にあたっては、現表土を剥ぐ際から、何回かに分けて薄く剥ぎ、古銭その他遺物の発見に努めた。その結果、土師器片や中世陶磁器片など、ほかの調査部分と同様の遺物は少量みられたが、江戸時代古銭等オシャゴンジとの関連を示すような遺物は出土しなかった。

耕作土直下のVI層上面を検出面とした調査でも、縄文時代陥し穴や平安時代掘立柱建物跡は検出されたが、戦国時代および近世に比定される遺構はみられなかった。ただ何もないという事実が、我々が想像していた、石祠がおかれていただけの静かな雰囲気という当時の姿を、より確信させる調査結果となった。

また、この付近で集中して確認された戦国時代遺構がオシャゴンジ跡で全くみられなかったことや、戦国時代集落における区画性をもつ溝と考えたSD21が、オシャゴンジ跡を突き抜けず北へ屈曲したことは、戦国時代この地が何かに占地されていた可能性を考えさせる。表町に存在したオシャゴンジの始まりを考える上では、一つの材料となろう。

(2) 遺物

イ 陶磁器 (P L 34)

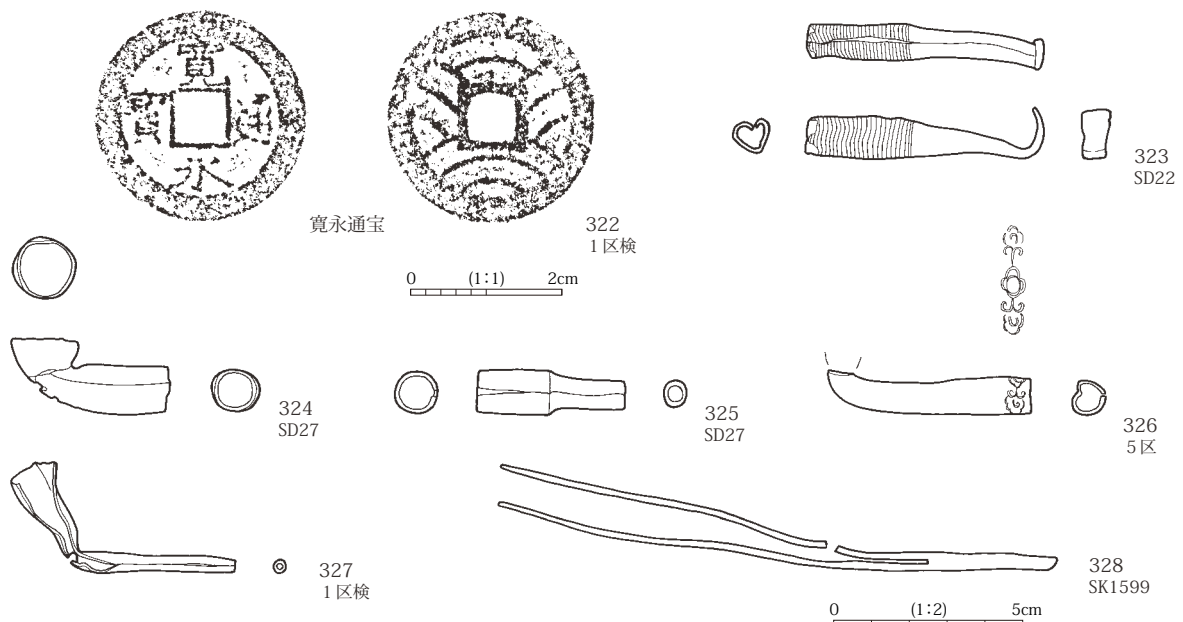
近世の陶磁器は、全部で145点、1246g出土した。すべて小破片で図示できるものはなく、写真で示した。ほとんどが耕作土内や攪乱からの出土で、遺構に伴うものと判断したのは、SK1413・1599出土の3点のみである。遺物の産地は、9割以上を唐津・伊万里産が占める。他には瀬戸美濃産がわずかで、在地と思われるものはすり鉢1点のみである。時期は、17世紀前半～18世紀後半まで近世を通じて広くみられる。

ロ 金属製品 (第126図 P L 34)

322の寛永通宝は、1区検出面からの出土である。裏に波の模様がある新寛永銭の一種で、江戸時代を通じて広く流通しており、時期特定は難しい。

本遺跡ではキセルが5点出土した。近世～近代以降まで続いていた溝跡からの出土(323～325)があり、近世遺物の可能性もあると考え掲載した。323は吸口がつぶされ加工されており、2次使用したものと思われる。326の雁首には、周囲に模様が施されている。328はかんざしと思われる。伊万里焼が出土した土坑(SK1599)から出土しており、近世と考えられる。キセル・かんざしとも真鍮製と思われる。

銭貨・その他の金属製品



第126図 金属製品 (近世)

第3節 小 結

表町遺跡では、縄文時代・平安時代・戦国時代・近世における人々の生活痕跡が確認された。

以下、本遺跡における調査成果について、その考察、残された課題について記述する。

1 縄文時代の陥し穴について

縄文時代で確認された生活痕跡は、133基の陥し穴のみであった。そのため、陥し穴の時期・配置について詳細に検討したい。

(1) 時 期

一般的に陥し穴は、土器など時期判断の手がかりとなる遺物の出土は少ない。本遺跡も同様である。また本遺跡は、検出面が1面のため、検出面・掘りこみ面に依拠する時期判断もできず、時期推定については困難が予想された。このため、当初より埋土中からの出土炭化物を使った放射性炭素年代測定を時期推定の参考とすることを考え、調査中は、土器とともに、炭化物の出土を注視した。

調査の結果、溝状陥し穴(I群)19基から縄文土器が出土し、検出面など遺構外からも縄文土器がみつかった。楕円形・円形陥し穴(II群)からの土器出土はなかった。また、I群4基、II群3基から炭化物が出土し、これを使ってAMS法による放射性炭素年代測定を実施した。

溝状(I群)から出土した縄文土器中、時期判断できたのは、A列SK1309で1点(30)・SK1321で2点(31・32)、B列SK990で1点(28)・SK622で1点(29)、C列SK1568で1点(33)あり、いずれも縄文時代後期に比定された。あと、D列SK1542で1点縄文時代中期に比定される土器(34)がみついている。

I群では4基で年代測定を実施した。A列SK708が1455BC \pm 45、SK797が1060BC \pm 90、C列SK604が1490BC \pm 50、D列SK804が1210BC \pm 90という測定値で、最新の研究成果(小林謙一2008)を参考にすると縄文時代後期～晩期との結果を得た。

楕円形・円形(II群)では、縄文土器の出土はなく、3基で年代測定を実施した。E列SK616は6160BC \pm 80で縄文時代早期、F列SK1583は4013BC \pm 33、G列SK715は3465BC \pm 45で、縄文時代前期～中期初との結果を得た。

以上のような縄文土器観察・年代測定の結果をふまえ、陥し穴の時期は、以下のように推定した。

I群(溝状)は、 ^{14}C 年代では1試料から晩期初頭の年代値がでていますが、すべてを縄文時代後期の可能性が高いと考えた。Dから縄文中期土器の出土が1点あるが、小破片であり、より古い時代の遺物出土については問題ないとする。

溝状陥し穴は、神奈川県霧が丘遺跡(今村啓爾1973)をはじめとして、北海道～中部地方の東日本を中心に数多く確認されている(今村啓爾1983、中村信博1998、澤谷昌英1997ほか多数)。その時期については、関東地方においては早期から(今村1973)、北海道・東北などでは、中期～後期にかけて多く見受けられる(森田知忠他1984、高橋信雄1978など)。

I群におけるA～D列の時間差については、4区南寄りの2カ所で切り合いが認められた。1カ所はB1列SK1308がD5列SK1336に切られていた。もう1カ所は、D6列SK1327がA1列SK1314に切られていた。このことから、溝状は、古いほうからB→D→Aの順でつくられていったと推定した。溝状については、時代が新しいほど大型化する傾向があるとされており(佐藤宏之1999)、推定した順序はこの説とも一致する。Cは、その配置形態などから、Dに近いものと思われるが、切り合い関係がなく不明である。

Ⅱ群（楕円形・円形）は、Eを縄文時代早期、F・Gを縄文時代前期末と推定した。ただ、主たる根拠が、年代測定結果なので、あくまでも参考である。H・Iについては、その類似した形状からF・Gと同様の縄文時代前期末と考えているが、不明である。

Ⅱ群について、年代測定以外の時期判断要素としては、溝状との切り合いが1カ所認められた。5区南寄り、Ⅱ群GのSK800がⅠ群AのSK801に切られていた（写真PL12）。このことからⅡ群のほうが、Ⅰ群より古いことは判断できた。また、検出面などから縄文時代前期土器4点（35～38）が出土している。これもⅡ群の多くを縄文時代前期と推定した要因である。

（2）配置

陥し穴は、単独設置では獲物獲得の確率が低くあまり意味がない。対象とする動物の行動パターンにあわせて、複数を同時につくるのが基本である。その配置は、直線状や三角形など、設置する場所に応じて様々である。設置にあたっては、隣の穴との間をふさぎ、陥し穴の部分を獲物が通るようにする。ふさぎ方については、柵なども考えられるが、立ち木や倒木を利用した簡単な方法でも十分ふさぐことは可能と考えられている（註8）。

溝状陥し穴のⅠ群A1列やⅠ群B1列は、いずれも数m間隔できれいに並んでいる（第20・21図）。しかし、列内のすべての穴を同時に使用したものは考えていない（註9）。ただこの際、列内における同時使用の穴を判別することは、穴の間隔に特に決まりがないこと、形状面でもほとんど違いがみられないこと、前に掘った穴の再利用も想定されること等から、不可能と思われる。関東地方でも東京都鈴木遺跡で3m程度に密接した列がみられる。これは繰返して陥し穴がしかけられたためとされている（中村1998）。

イ 楕円形・円形陥し穴（Ⅱ群）

縄文時代早期と推定したⅡ群Eは、列内に円形と隅丸方形の穴が混在しており、同一形状がセットで使用された穴と考えられる。円形は5基で、間隔は6m・12mなどまちまちである。同時列か複数列かは判断できない。また、SK619は、一つだけ22m離れている。周囲に同様の穴はなく、単独使用の可能性もある。隅丸方形も5基で、間隔は5.7～7.0mとほぼ揃っているが、同時列の場合は狭くても10m程度との考えからすると、やや狭く、複数列の可能性もある。円形と隅丸方形の列は、全く重なっている。あわせて、円形の穴間のほぼ真ん中に隅丸方形の穴があり、偶然このような状況になることは考えにくいことから、同時代と判断した。ただ、なぜ穴の形状が違うのかは不明である。この列は、坑底ピットの多いものが多く、存在しても直径20～30cmと規模が大きく、後述する直径約10～15cm程度のほかのⅡ群坑底ピットとは様相が異なっている。逆茂木痕でない可能性もある。

縄文時代前期と推定したF・Gについては、同一線上にあるが、Fでは15m、Gでは20mとかなり間隔が広がっている部分があり、列としての同時使用は難しいと思われる。よって、効率は悪いが穴の間をふさがずに点々と掘られた単独配置や、楕円形・円形タイプに多い2～3基程度の組配置（佐藤1999）などの可能性が考えられる。単独配置については、Ⅲ群としたSK1653など近くに組みそうな穴がなく、列をなさない例もみつまっている。

F・Gと類似した形状から縄文時代前期と考えたHは、列内に円形・楕円形の穴が混在している。円形は4基で、間隔は3.3～10.3mと差が大きく、同時列か複数列かは判断できない。楕円形2基は、ともに坑底ピットを一つもち、形状はよく似ているが、間隔が20.3mとかなり長く、列としての同時使用は難しいと思われる。同じく類似した形状から縄文時代前期と考えたIは、間隔は4.1～5.4mと狭いが、形状・規模が非常に似かよっており、同時使用が考えられる。また、列線状にないためⅢ群としたSK824

も似た形状・規模であり、Iとあわせて三角形に配置し使用した可能性もある。

坑底ピットについて、縄文時代早期とした穴では10基中3基しかもないのに対し、前期とした穴では28期中21基で確認された。径が小さく浅かった坑底ピットもみられ、見落とした可能性も完全には否定できない。しかし、前期末とした陥し穴に、坑底ピットをもつものが多いことは、傾向としてうかがえる。

楕円形・円形は、特に狙う獲物を決めずにあらゆる獲物を想定したものと考えられるが、イノシシとは密接な関係が考えられている(中村1998)。ただ、イノシシは深さ1.3m程度の穴では飛び出す例もあり(林良博1983)、その自由を奪うために逆茂木は必要と思われる。関東地方では溝状の底部に坑底ピットをもつものがみられるが、これについてはシカのみならずイノシシにも対応できる機能を備えたものと考えられている(中村1998)。楕円形・円形に坑底ピットをもつものが多いのは、当時の獲物の中心がイノシシであった可能性が考えられる。

ロ 溝状陥し穴 (I群)

縄文時代後期と推定した溝状のI群については、A1列・B1列において、約4～7mの狭い間隔で数多く並んでいる状況があり、同じ列線上で複数回陥し穴がつくられたと考えられる。A2・A3・B2～B4列は、検出された陥し穴の数が少なく、複数列の集合かどうかは判断できない。C列は8.4～22.3m、D列は8.5～24mの間隔で穴がみられ、同時使用の列がそのまま残っていると考えられる。ただし、D3列は、5.2mなどの狭い間隔の部分があり、複数列の可能性はある。

坑底ピットについて、設置されたものは1基も確認されなかった。溝状は主にシカをねらったものと考えられている(中村1998、大泰司紀之1983)。縄文時代のシカの生育量については、遺跡から出土したシカの骨の量から考えた研究成果がある(大泰司1983)。それによると、東北・関東など東日本の資料では、早期まではイノシシが多く、早期の中頃からシカが増える。前期末～前期の海進期には一時減少し、中期以後再び増えて後期中頃から晩期にかけてがシカのピークとされる。シカの捕獲にあたっては、細い溝状は前肢または後肢を骨折させて、幅広い大型の溝状は体全体が落ちて胴部を挟み込むことで、ともに動きを制限したものと考えられている(佐藤孝則1986)。この際、坑底ピットは必要不可欠の要素ではない。本遺跡の溝状においても、必要なかったことから設置されなかったものと思われる。

陥し穴の分類については、神奈川県霧が丘遺跡における分類(今村1973)を初めとして数々行われている。長野県内でも原村芝原尾根遺跡(澤谷1997)や八ヶ岳西南麓・霧が峰南麓における分類(守屋昌文2006)などがある。これら分類のほとんどは、平面形や長軸・短軸比、規模、坑底ピット数などに着目して行ったものである。本遺跡は、列をもとにしての報告であったが、先学の分類にあてはめた形での分類・分析については、後の課題としたい。

(註8) 陥し穴の時期・配置・使用など全般にわたって、佐藤宏之氏の指導をいただいた。

(註9) 佐藤宏之氏は、直線的に並ぶ陥し穴を設置する際、隣の穴との間隔は、狭くても10m程度、通常はそれ以上あけたと想定している。これは使用労力から導きだされた考えで、穴の数が増えても獲物の数が増えるわけではなく、掘るためにかなりの労力が必要な陥し穴に、そんなに労力をかけないとの考えによる。確認された数m間隔の列は、再設置にあたり、以前の穴の場所を避けながら掘った結果とされ、前の穴を確認しながらつくったとすれば、あまり時間差はなく、同じ列に関しては、同じ集団がつくったと思われるとされた。

2 平安時代前期の集落について

(1) 集落変遷

西四ツ屋・表町両遺跡で確認された竪穴住居跡10軒・掘立柱建物跡15棟は、出土遺物からいずれも

9世紀代を中心とし、大きな時期差はみられなかった。ただ、住居による出土遺物の組成や、掘立柱建物跡の構造には細かな違いがあり、それが時間差につながるのではないかと考えた。時間差をみる上で注目したのが、以下の3点である。

- ① 出土遺物における須恵器の有無。(ただし、これについては、本遺跡は削平が激しく、もともと土器の出土量が少ないことは、考慮しておく必要はある。)
- ② 出土遺物における土師器甕の口縁端部形状
- ③ 掘立柱建物跡における梁桁の歪みなど構造的特徴

このうち①について、北信地区善光寺平南部における土器編年が検討され、食膳具における須恵器の消滅は9世紀中期～後半とされている(鳥羽2000、上田2000)。確認された10軒の竪穴住居跡のうち、食膳具の須恵器が全く出土しなかったのは、表町SB09(第56図)と西四ツ屋SB01(第11図)の2軒である。この2軒には、周囲に他の住居跡や建物跡がみられず、単独あるいは2・3軒程度の小集落という共通の特徴がみられる。10軒の中では新しいグループと思われる。

②について、北信地方の土師器甕では、8世紀末から9世紀初めにかけて、口縁端部にはっきりとした面がみられ、9世紀末にはその面がみられなくなる(註10)。口縁端部に面をもつ土師器甕は、表町SB01(60・63～65)、SB03(73)、SB10(129)にある。これら3軒は、古いグループに属すると思われる。この観点で、①の新しいグループとした2軒をみると、面をもつ甕は全くみられない。

③について、本遺跡の平安時代掘立柱建物跡は、その構造的特徴から二大別できる。規模が大きく柱列が直線的で梁・桁がほぼ直角になるきちんとした建物跡群と、柱列がいびつで小規模な建物跡群である。前者にはST12(第58図)・ST30(第67図)が該当し、それ以外は全て後者である。後者のような建物跡は、平安時代集落において、竪穴住居跡とともに一般的にみられるものである。前者のような建物がよくみられるのは、古代の奈良～平安時代前半か、近世以降とされる(註11)。本遺跡の建物跡は、遺物から平安時代に比定されるので、平安時代の建物は2段階あると考えるのが妥当と思われる。その場合奈良時代からの流れをくむ、桁梁などがきちんとした建物群の方が古いと考えられる。

以上のことから、表町周辺の平安時代集落の流れを次のように想定した。

- 1段階(9世紀初頭) — しっかりとしたつくりの掘立柱建物が存在
- 2段階(9世紀前半～後半) — 竪穴住居跡と小規模な掘立柱建物跡が混在する集落の出現・展開
- 3段階(9世紀末) — 集落の分散・衰退(消滅?)

1段階の性格については不明である(註12)。この段階としたST12やST30に伴うと推定される竪穴住居跡は、調査区内では確認されていない。

2段階は、竪穴住居や掘立柱建物が混在し、平安時代集落の最盛期である。建物の切り合いや重複がみられることから、一定期間連続して住み続けていたと考えられる。

3段階については、分布状況からは集落域の拡大とみることもできるが、掘立柱建物の消滅などから、集落の分散あるいは衰退ととらえたい。だが、調査はあくまでも集落の一部にしか過ぎないことから、一概に言うことはできない。3段階以降については不明であるが、戦国時代集落出現までの遺構・遺物はみられず、調査の所見からは、集落は消滅したものと考えられる。

(2) 集落成立・変遷の背景

本遺跡における2～3段階にかけての集落変遷については、飯綱町の三水地区で調査された田中下土浮(たなかしもどぶ)遺跡でも似たような状況がみられる。田中下土浮遺跡では、I期(9世紀初頭～後半)、II期(9世紀末～10世紀)の二時期に集落が営まれ、II期の集落は分散傾向にある。これについては、住居や集落の計画性が薄らいで来たことを示すとされている(笹澤2004)。

平安時代前期は、律令制の解体期といわれている。奈良時代、743年の墾田永年私財法以来発達した初期荘園は、寺社・豪農層による大土地所有の進展を招き、律令制の根幹である班田制と律令租税体系をゆるがした(阿部猛他 2005)。中央国家は、財政収入を維持するため、地方有力者に新たな墾田開発や、地場産業の発達を奨励した。律令時代の集落から離れ、墾田開発などにあたったと思われる集落が、奈良～平安時代前期に全国的に増加している(阿部他 2005)。田中下土浮遺跡では、9世紀代の古代集落を、旧斑尾川右岸の微高地上に計画的につくられたものと考え、その背景に「芋川庄」との密接な関係を想定している(笹澤 2004)。本遺跡の2段階(9世紀前半～後半)における集落も、こうした流れの中で生まれたものと考えられる。

3段階(9世紀末)における単独住居か2・3軒程度の小集落とみられる状況については、律令制の解体と関連づけると前段階において展開した集落の分散・衰退という捉え方となる。また、3章3節で述べたように、平安期に県内各地で多くみられる、山中で炭焼きなどを生業とする人々が住んでいたとされる小集落(桐原 1967)と同様の性格とも考えられる。今後の検討課題である。

(註 10) 平安時代土器全般について、原氏から指導をいただいた。

(註 11) 建物の分類、時期推定については、宮本氏から指導をいただいた。

(註 12) 宮本氏から、建物規模・形状などからは、奈良から平安時代前期にかけての律令期中央の流れを引いているようなしっかりとした建物であり、この周辺の支配的役割をもっていた建物の可能性も考えられるとの示唆を頂いたが、その根拠となるような遺物などの出土はなかった。

3 戦国時代の集落について

(1) 時 期

遺跡名の由来となった「表町」は、中世矢筒城の表(南)にかつて集落があったとの伝承によるものである。今回の調査で伝承どおり、戦国時代に営まれた集落跡が確認された。

調査は道路幅という限られたものではあるが、確認された集落は、南北約 350m に及ぶ。部分的に遺構のまとまりが途切れたように見える場所は谷状部分で、上部斜面からの水の通り道になっている。降雨後などはかなりぬかるむ状況で、建物などを建てるには適さない。

出土遺物や放射性炭素年代測定の結果をみる限り、確認された遺構は、ほぼ同時期に展開していたと思われる。長野県内における戦国時代集落の調査例としては、松本平奈良井川西岸の遺跡群(県埋文 1990c)や、長野市小滝遺跡(県埋文 1999)、茅野市師岡平遺跡(柳川英司 1999)などがあるが、それらと比較してもかなり大きな規模をもつ集落である。

今回確認された遺構は、掘立柱建物跡や井戸跡など居住域を示すものばかりで、墓と思われる遺構は1基も確認されなかった。小滝遺跡や師岡平遺跡では、居住域の周辺につくられた墓域がみついている。表町集落でも居住域に伴う墓域の存在は当然想定され、その場合集落域はさらに広がることになる。

集落の時期については、出土遺物の観察結果から15世紀後半～16世紀前半と思われ、年代測定でも、ほぼ同じ測定値がえられている。最も多く出土した内耳鍋や青磁・白磁などの輸入陶磁器でも16世紀前半頃が中心であった。したがって、16世紀前半に栄えた集落と考えている。

(2) 集落内の様相

戦国時代集落内部に目を向けると、場所によって遺構のあり方などに違いがみられる(第79～83図)。

最も戦国時代遺構が集中していたのが、集落の最北部にあたる4区から5区にかけてである。ここには、大型掘立柱建物群(ST11・13・14・15)や、東西に走る溝跡(SD21)、超大型の竪穴状遺構(SB02)が存在する(第79図下～80図上)。いずれの遺構も軸が揃っていて、ほぼ東西あるいは南北を向いていた。茅

野市師岡平遺跡の戦国時代集落では、同じ軸線をもつ掘立柱建物跡と溝を同時存在と考え、溝は屋敷地を区画していると考えている(柳川1999)。本遺跡においても、東西に走るSD21はST14と15のほぼ真ん中を通り、直線的につくられていることから、区画性をもつものと考えており、溝も含めて周囲の建物群は、計画性をもってつくられたと思われる。

松本平における中世集落では、13～14世紀頃には、竪穴住居跡や竪穴状遺構がまだ多くみられるが、14世紀以降掘立柱建物に転換し、15世紀以降は、掘立柱建物1～3棟に竪穴が1基程度伴う形態が多くみられる(県埋文1990b)。本遺跡の建物も主流は掘立柱建物となっており、その周辺には一辺1mを越す大型方形土坑がいくつかみられる。集落内の建物構成的には松本平の15世紀以降の流れと同様といえる。

反面、個々の建物についてみると、大きな違いがある。一つは、建物内部に竪穴状遺構や土坑を伴う建物跡がないことである。内部に土坑などを伴う建物跡は、松本市北栗遺跡(県埋文1990c)、長野市小滝遺跡(県埋文1999)をはじめとする、長野県下多くの中世集落で見られる。本遺跡では、1例もみられなかった。もう一つは、方形の竪穴建物跡がないことである。この建物跡も、同じ戦国時代集落である小滝遺跡や千曲市小坂西遺跡(県埋文1994)、佐久市金井城跡(小山他1991)など県下各地で見られるが、本遺跡ではみられなかった。これらの建物は居住が主たる目的と思われるが、本遺跡で唯一確認された竪穴状遺構(SB02)は、15m×2mという極端な長方形を呈しており、居住に使ったとは考えられない。

これらのことから、表町戦国集落の最北部であるこの地区は、配置された大型建物群や、居住目的と思えない竪穴状遺構など、北栗遺跡や小滝遺跡などの中世集落とはやや違った性格をもっていたのではないかと思われる。この地区は、すぐ北に隣接する矢筒城館跡に最も近い位置にあり、そこ関係する施設や建物が集まっていた可能性も考えられる。ただ、それを裏付けるような出土遺物は得られなかった。

集落中央部の2区付近では、ST01のような大型建物も存在はするが、多くは小規模の建物である(第81図下～82図)。また、最北部の大型建物群近くからは一点も出土しなかった臼や曲物などの木製品が、この付近の井戸跡(SK101・365など)から出土している。出土遺物などからは、この付近から南の集落については、最北部と違って、生活・居住の場であったことがうかがえる。

調査区最南部の1区からは、そり・曲物・漆椀などが出土した井戸跡(SK544・593)や小規模の建物跡の他、鍛冶滓や羽口などの鍛冶関連遺物がみつかった溝跡(SD02・03)が確認された(第83図)。この地区では鍛冶関連遺物が集中して出土し、付近における鍛冶工房などの作業場の存在が想定された。戦国時代には、鍛冶工房の立地は、町の外縁部や、やや距離をおいた近郊に位置することわかってきている(五十川伸矢1992)。これは、「火」を取り扱う職種であることへの配慮もあったと考えられる。表町集落においても、立地の上ではこの様子がみてとれる。

これ以上南には集落が広がらないことは、県埋文センターが平成16年に行った確認調査で判明している(1章2節2 発掘作業の経過)。遺跡境ともなっている村道K1-4号線が集落の南端部である。この村道からさらに南約200mのところ、永正4(1507)年の銘が入った永正地藏尊(県宝)がある(第1図)。伝承では表町のまちはずれにあったとされている。発掘所見では、その手前で集落は途切れることとなり、伝承どおりの可能性もありうる。

以上のように、表町の戦国時代集落は、大型建物群や区画溝が計画的に配置されたと考えられる最北部、一般的な庶民の居住域とみられる中央部、鍛冶工房などの存在が考えられる最南部と、場所によって異なる土地利用が推定される。その中で、集落最北部が隣接する矢筒城館跡に一番近い場所にあることは興味深い。ただこれについては、矢筒城館跡、特に麓に位置したとされる館跡の様相がまだまだ明らかになっていないため、現時点でこれ以上論ずることはできない。

今後は、県外を含め、城館跡と城下集落の関係、他の中世集落における建物や集落形態との比較などが検討課題となる。